

# プロ調教師の日常 ～墮とされる彼女たち～

妻内人生

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

プロ調教師を生業にしている俺、京堂マサヤに、調教の依頼が舞い込んだ。

依頼人は結城京子。

京子は過去にマサヤの父親に調教されている過去を持っている。

最近反抗気味の娘を調教し、従順な女にしてほしい。それが京子の依頼内容だった。

娘の名は結城明日奈。

母親同様、立派な雌奴隷にしてやろうじゃないか。

## 目次

|                                 |     |
|---------------------------------|-----|
| プロローグ                           | 1   |
| 第1話 プロ調教師は初手から放置プレイを敢行する        | 8   |
| 第2話 プロ調教師は百発の弾を用意している           | 18  |
| 第3話 プロ調教師は教育現場でも仕事をする           | 27  |
| 第4話 プロ調教師は赤ちゃんプレイと女王様には弱い       | 40  |
| 第5話 プロ調教師の躰は古き良き時代のお尻叩き         | 57  |
| 第6話 プロ調教師はオークションで小遣い稼ぎをする       | 66  |
| 第7話 プロ調教師は『飴一つに鞭百発』を心がけている      | 82  |
| 第8話 見習い女王様は人の妹を白目を剥くまでイカせる      | 101 |
| 第9話 見習い女王様、初めての奴隷に歓喜            | 112 |
| 第10話 京子調教物語                     | 129 |
| 142                             |     |
| 第11話 バンダナ男、奴隷の母に主導権を握られ出世を誓う    |     |
| 第12話 バンダナ男、夢のトロピカル浣腸を実現         | 155 |
| 第13話 良い日朝勃ち                     | 168 |
| 第14話 プロ調教師、敵の本拠地へ突入             | 186 |
| 第15話 プロ調教師、雌奴隷のために感動(笑)の再会を演出する | 196 |
| 第16話 プロ調教師、笑いを堪えるのに必死になる        | 212 |
| 第17話 プロ調教師、トドメをさす               | 224 |
| エピソード1                          | 242 |
| エピソード2                          | 257 |

## プロローグ

「それで、俺に頼みって何、京子さん」

「あなたに、娘の調教を依頼したいの」

「娘の？」

意外な返答に、俺はどう答えていいやら分からず、ひとまず振舞われた紅茶に口をつけた。銘柄は分からないが味は悪くない。

それにしても大きい屋敷に住んでるな。

俺が通されたリビングも、間違いなく三十畳はある。まあ俺の家ほどじゃないけどね。

リビングには俺と京子さんがテーブルを挟んで向かい合って座っている。紅茶の香りがこの屋敷の優雅さを物語っているようだ。

さつきまで家政婦の女がいたが、席を外してもらった。

大事な話もあるし、たぶん大事なアレもあるしな。

京子さんの胸元に俺は目をやる。タイトなグレーのパンツスーツの上下にインナーに白いワイシャツを選択している。スタイルがいから何を着ても似合うだろうが、黒髪でキリツとした面差しの彼女には、やはり働く女の姿がよく似合う。

ここまではどこにでもいるキャリアウーマン風だが、彼女の場合はやや胸元のボタンを外しすぎている。

胸の大きさは大きくもないが小さいというわけでもない。

黒いブラがちらりとのぞいているのは、のぞかせているからだろう。

普段からこんなことをする女ではない。

俺の前だからだ。

「京子さんの娘って、たしか例の事件で……」

「ええ、そうよ。あの忌々しいゲームの中に閉じ込められたのよ、二年間も」

京子さんの言う忌々しいゲームとは、ソードアート・オンライン。

危うく俺も手を出しそうになったが、幸い俺はゲーム開始日に風邪を引いて寝込んでいた。

「それでなんで調教になるんだよ。俺には分からないな」

などと言いつつ、俺の頭の中ではすでに京子さんの娘を裸にして身体中を愛撫している様子を妄想していたが。ちなみに想像した京子さんの娘は、過去に調教した適当な女で補完しておいた。

「二年間も勉強が遅れたというのに、あの子はまるで危機感がないの。今も落ちこぼれ達が通う学校に行っているのよ」

「ああ、たしかSAOから生き残った子たちが行ってる学校だっけ」  
「そうよ」

「いいじゃん、学校に行ってるだけさ」

「良くないわ。あの子には、もっと相応しい場所がある。私の言うことを聞いていれば、将来は安泰だと言うのに」

「なるほどね。つまりこういうことか。娘さんにもっと従順になってほしい。だから俺に調教をしてくれってことかな?」

「そう、頼めるかしら」

「うーん、どうしよっかなあ」

「お金なら払うわ」

「お金だけ?」

「……何が望みよ」

「俺への従順な態度、絶対服従の誓いってとこかな」

「そんなこと、今に始まったことじゃないでしょ」

「そうかな。俺がガキの頃の京子さんは、俺にちゃんと敬語使ってたけど?」

「うっ……」

「大学の教授様になって調子に乗ってるのかなあ京子さあん」

「……も、申し訳ございません、マサヤ様」

「それだけ?」

「……………」

京子さんは無言で立ち上がり、テーブルの下をくぐった。

俺は待ってましたとばかりに脚を開く。

「うわあ、京子さんの顔が俺の股んところにあるよ。何年ぶりかなこの光景。いやあ懐かしいねえ」

京子さんかというと、俺のジーンズのベルトを外し、チャックを下ろしてトランクス越しに俺の男性器をサワサワと優しい手つきで撫でてくる。

さすがは京子さん。若い頃に俺の親父に調教されただけあって、良い腕してるぜ。

「ほら、京子さん。俺もう我慢できないよ」

「か、かしこまりました」

京子さんがトランクスを下ろした。

途端、

「すごい」

彼女は思わず感嘆の声をあげてしまった。

俺の男性器がピンツとそそり立ったからだ。

京子さん、トロロンとした目えしてるなあ。やっぱり大学教授になっても根は変態なんだな。

「失礼します」

京子さんはお辞儀をしてから、男性器を根元からゆっくりと舐めていく。

そうそう、フェラの前は必ず「失礼します」と言ってお辞儀をしてから舌をはわせていくんだ。

男と、そして男性器への礼儀だ。

女はチンポに平伏しなければならぬ。娘さんにもしつかり教えこまないとな。

「あむ、あむ」

ちろちろ、ペろペろ。

京子さんの舌が俺のペニスを撫で回していく。

れるーん、と根元からカリにかけてゆっくりと舌をはわせる技は見事なもの。

どれ、京子さんの濡れ具合はどうか？

「おら」

「ああんっ」

足で京子さんのアソコを軽く蹴ってみると、彼女は甘い声をあげた。

「ははっ、なんだよその喘ぎ声はっ。そんなんで娘の教育がどうか言ってるのかよ。笑えるねー」

「いふあふあいふえ（言わないで）」

「あーはいはい。とりあえずしっかりしゃぶれよ。休んでいいなんて言ってるねえし」

京子さんの頭をガシツと掴み、男性器を彼女の口の中に押し込んだ。

「おおおうぶっ！」

モゴモゴと苦しそうな京子さん。口から唾液を垂らしまくり、床に水滴を作っている。

ああ気持ちいいー。

カリに感じられる喉の奥に当たる感触が素晴らしい。

「よーしそろそろいいだろ。ほら、テーブルの上に乗っかって股を開けよ」

「はい……」

瞳を潤ませ、京子さんは静かに頷いた。もう完全に昔の——俺がガキの頃の京子さんに戻ったな。フェラだけで感じちやうとか、愛撫いらずで楽だなー。

京子さんは黒いショーツを脱いで、スカートをたくしあげた。

プリツとしたお尻が露になる。結構歳いつてるはずだけど、いつ男に抱かれてもいいようにスタイルには気をつけているんだろうな。雌豚はそういうところには気がつくから。

無性に叩きたくなったので思い切り平手打ちをお尻に見舞った。

「ああんっ」

ドMさも健在っつと。

京子さんが脚を開き、こちらが頼んでもいないのにビラビラを広げ

てスタンバっている。

「さてと……いや待てよ」

気が変わり、俺はソファへと移動しそこに腰掛けた。

「ほら京子さん。いつまで股おっぴろげてアへ顔晒してんだよ。アンタの大好きなチンポはこっちだ」

「はへえ？」

京子さんはのろのろと立ち上がり、それから俺の前に立った。

「誓え。娘共々俺の奴隷になると」

「誓い、ます……誓いますからあ、ちんぽお、ちんぽほしいいん」

京子さんはコクコクと頷き、俺のチンポを手にして腰をクネクネとさせている。

もうチンポのことしか頭にないようだ。

娘の調教の依頼のことさえも、俺とやるための口実じゃないのかと疑ってしまうほどに。

「いいよ、入れなよ」

「はいいいいんっ！」

ズブツ

勢い良く俺のチンポは京子さんのアソコに飲み込まれていった。

中は暖かく、それでいてぬめぬめとしていて気持ちが良い。

だが、

「締めりは昔のほうが良かったな。やっぱりガキ生むと緩むのかね……うおっ!？」

急に京子さんの腰使いに変化が現れた。

お尻をフリフリしたかと思えば上下運動を交え、さらにスピードも緩急をつけてと動きが複雑化している。

「どうかしら、マサヤくん。締めりの具合はテクニクでカバーしてるのよ」

「勝ち誇ってんじゃねえよ雌豚」

俺は思い切り京子さんのお尻を平手打ちした。



「ああんっ！」

ぺしっ、ぱしっ、ぱしっ。

「調子に乗るなよ。アンタは俺の奴隷なんだ。敬語を使え敬語を。出ないと娘の調教はしねえし、アンタの人生もやろうと思えば木っ端微塵にできるんだよ?。」

「も、申し訳ございませんっ、あんっ、マサあんっ、ヤ様ああ！」

京子は慌てつつアンアン言いながら俺に謝罪した。

本心から謝っているのだろうか。

分からないな。

後で鞭を百発お見舞いしておこう。

「それにしても……」

俺の股間に跨って上下運動している雌豚を眺めつつ、俺はこの豚の娘に思いを馳せた。

たしか名前は……なんだっけか。

ガキの頃に一回会ったような気もするけど、今はどんな娘なんだろう。

母親と同じで黒髪なんだろうか。ガキの頃のことなんで全く覚えてない。

親子丼するときどつちも黒髪だと見ていて飽きそうだから、どうせならブラウン系のお洒落な感じの髪色がいいな。

……んっ。

「そろそろ出るよ、京子さん。どこに出してほしい?。」

「おまんこおおっ、おまんこにいっぱい注いでえええんっ！」

そうして俺は、京子さんにどっぷりと精液を出してあげた。

なんだかこつちが奉仕してる気分だな。

「あのさ、京子さんの娘って何て名前だっけ?。」

ちなみに京子さんは床の上に大の字になって倒れ、アソコからは俺の白濁液をお漏らししている。

「あ、あす、な」

アスナか。

「そういやそんな名前だったな。」

# 第1話 プロ調教師は初手から放置プレイを敢行する

——午後四時。

結城明日奈は学校から帰ってきてくると、自室で勉強を始めた。

少しでも母に認めてもらうべく、成績を上げようとしているのだが、母の言うことを認めてしまうようで嫌なのだけれど、今の学校のレベルだと、アスナならそこそこに勉強していれば良い成績など取れてしまう。

今の自分の行いは母への「勉強頑張ってるよ！」アピールにしかない。

「はあ、キリトくんといっしょにいたいなあ」

ひとりごちてみたが、どのみち今日はキリトとはリアルでもALLOでも会えない。

『今日は頑張って勉強するわ』

『そうか。応援してるよ、アスナ』

なんてやり取りの末、キスをしたのだ。

今更勉強やめたわ、なんてバツが悪くて言い出せない。

「キリトくん……」

そつと唇に触れ、キリトとの口付けを思い出していると、

「明日奈、入るわよ」

ノックの音と共に母が部屋に入ってきた。

これじゃあノックの意味がないんだけど…とはもちろん言わない。言って聞いてくれる耳を母は持っていないので明日奈は諦めている。

「なに、母さ……」

明日奈は肩越しに母のほう見やり、絶句した。

母が、紅茶とクッキーの載った銀盆を持っていたからだ。

「これ、おやつよ」

「あ、ありがとう、母さん」

どういう風の吹き回しだろうと戸惑いつつ、明日奈は銀盆を受け取

る。普段の母は絶対におやつなど持つてきたりしないのに。紅茶の良い香りがふわりと鼻腔をくすぐる。

「あの、明代さんは……？」

明代とは家政婦の佐田明代のことである。

「明代さんなら私の書斎を掃除しているわ」

「そう、なの」

明代が掃除中で手が離せないから母が紅茶を入れた、ということなのだろうか。

そんなことで母がわざわざ手ずから紅茶をいれてくれるとは思えない明日奈だった。ここ最近では学校の件で揉めているし。

「いいから飲みなさい。冷めてしまうわ」

「うん……」

高圧的な態度はやっぱりいつもの母さんだなあ、と思いながら、明日奈は紅茶に口をつけた。

「美味しい」

飲んだ途端に体中が一瞬熱くなかったかと思うと、水の中を浮かぶような浮遊感が明日奈を包んだ。

——なんだろ、凄く気持ちいい。

視界が靄がかかったような具合になった。

母の姿もボヤけていてよく分からない。

「あれ、どうしちゃったんだろ、わた、し」

意識が朦朧として上手く喋ることもできない。

けれど、不快ではなかった。

むしろ——

「気持ちいいでしょ。これからもっと気持ちよくなれるわよ、明日奈」  
何かが頬に触れる。

暖かい。

これは、母の掌だ。

「最初は痛いかもしれないけど」

母のその言葉を最後に、明日奈の視界は完全に闇に閉ざされたのだった。



「ん……」

結城明日奈はゆっくりと瞼を開いた。最初こそ何も考えられなかったが、視界が徐々に明瞭になり、意識もはつきりしていくにつれて、自分が置かれている状況の異常さに気付いた。

「何よ、これ」

腕が、脚も、動かない。

明日奈の体はベッドの上に寝かされ、大の字の状態になるように手足が鎖で拘束されている。鎖の先にあるのはとてつもなく重そうな鉄球だ。

明日奈は引つ張ってみたが、まるでビクともしなかった。鉄球があまりに重いも重過ぎるのだ。

体を預けているベッドはかなりの大きさだ。四人で並んで寝てもまだ余りそうなほどに広い。キングサイズであることは間違いない。

部屋は暗いが、闇に目が慣れてきた。明日奈は目をこらして周囲を観察する。

清潔感のある部屋の様子や物の少ない内装、高い天井、品の良い調度、そして広々とした窓から察するに、ホテル——それも高級なホテルであると明日奈は見当をつけた。

カーテンが引かれていて窓の外の様子は窺えないが、もう夜であることは確かだろう。

「どうしてこんなことに……」

「おっと、お目覚めかな、アスナちゃん」

「誰っ!？」

部屋の明かりが付けられ、アスナは目を細めた。いきなり明るくなったものだから眩しくて仕方がない。

目を細めながらも、ベッドの横に立っている男の姿は視認できた。

明日奈の知らない男だった。

年頃は二十代後半ぐらいだろうか。

黒髪の短髪で少し面長、細身のようにできてポロシャツから延びる腕は筋肉質だった。心なしか胸板も厚いように見える。

薄いピンク色のポロシャツにカーキ色のハーフパンツと、服装は高級ホテルに似つかわしくないカジュアルさだった。

「久しぶりだね」

「だから、誰ですか、あなた」

「忘れちゃったのかい？ っつて、俺も君のことなんてすっかり忘れてたんだけどね。俺は京堂マサヤ。俺らって、小さい頃に会ってるっばいよ」

「覚えてません」

「俺も」

フフン、と京堂マサヤが鼻で笑った。

上から見下ろされる明日奈は不快で、そして不安だった。

「アスナちゃん、そんな格好してるからパンツ丸見えだよ。ピンク色なんだねえ」

「なっ——」

言われてようやく、明日奈は自分がスカートを穿いていたことに気付いた。しかも学校の制服である。

——あれ、でもなんでわたし制服着てるの？ 部屋着だったはずなのに……。

「まさかあなた……！」

「そんな恐い顔しないでよ。大丈夫、俺が着替えさせたわけじゃないから。アスナちゃんのお母さんが制服に着替えさせて、その鉄球に繋げてくれたんだよ」

「母さんが!?! なんて!?!」

「何でって、まあそれぐらいしてもらわないとねえ。俺も忙しい身だからさ。アスナちゃんの調教以外にもほかの女の子たちの調教が控えてるわけ。分かる？」

「ちようきよう？」

京堂が何を言っているのか理解できない明日奈。

そんな明日奈を嘲笑し、京堂は肩をすくめる。

「そう、調教。京子さんからの依頼だね。愚かな娘に世の中の厳しさを叩き込んで従順になるよう調教してくれってさ」

「だから、ちようきようって何？」

「あれ、分かってないみたいだねえ。調教っていうのはね、男が女を性奴隷にすることを言うんだよ」



「せいど……っ」

絶句してるアスナは、なかなかどうして見ていて楽しい。

自分の置かれている状況が少しは理解できたようだな。

必死になって下着を隠そうともがいている様が実に愉快だ。

俺は用意しておいたローターを手にし、ベッドに上がる。ミシツとスプリングが軋み、その音でアスナが「ヒツ」と短い悲鳴を上げた。「なっ、何する気よ」

「恐がらないでよアスナちゃん。俺は調教師ではあるけど、気持ちの良い思いをさせてあげようって気持ちでいっぱい優しい調教師なんだよ？ ほーら、気持ち良くなるろ？」

スカートをめくり、アスナのパンツが露となる。

「やあっ」

「暴れても無駄だよ。おやおや、ピンクのパンツだけどただのピンクじゃないんだねえ。ちよつと透けてるじゃないか」

「見ないでよお」

「いいねいいね、その泣きそうな顔。でも安心しな。これから気持ちよくなってトローンとした目になっちゃうからさ」

ようし、まずはローターからイッてみようか。

スイッチを押す。ブウウンとローターが振動した。それをアスナのアソコにパンツ越しに当ててあげる。すると、

「きやつ、えっああっんんううー！」

かなり戸惑っているようだった。ローターを使われるのは初めてらしい。

だが、

「あ……ああ……ああああああん……」

徐々に声音が甘くなってきた。さすがは京子さんの娘。

同じ雌豚の血を引いてるだけある。

「アスナちゃん、もうパンツに染みができてるよ。元々透けてるからあつという間にオマンコの形が分かるぐらいに透けちゃうだろうねえ」

「やめて！ お願いやめあああつ！」

止めるどころか振動をより強くする俺。

「やめて？ 嘘はいけないよアスナちゃん。気持ち良いでしょ？」

「気持ち良くなってるわ！」

アスナの怒鳴り声は、俺のS心に火を付けた。

この俺に怒鳴るとは、良い度胸をしている。

俺はローターをアスナのオマンコに押し当てた状態でビニールテープで固定した。

「やつ……何をやる気なの!? 外してよ！」

「外すわけないでしょ。俺を怒鳴ったりした罰だよアスナちゃん。このまま一時間放置ね」

「いちっ……」

みるみるうちに顔を青ざめさせていくアスナだが、オマンコに与え続けている刺激もあつてか表情がアヘツたり恐怖したりとコロコロ変わって面白い。

「うん、一時間。もちろん振動は最強にしておくね。ほら」

「きやううううん」

一際響くブウウウンという振動音。

アスナの喘ぎ声もそれに比例して跳ね上がった。

「それじゃ、一時間後にね〜」

「え、そんな、置いてかないでっ、置いてかないでええええ！」

もちろん、置いてった。

★

——二時間経過。

一時間じゃなかったのかった？

いや、俺もそのつもりだったんだけど、ゲームしてたらついハマッちやっつて。



さて、と。

ドアを開けて『アスナちゃん調教部屋』に入る。ちなみにここはうちの一族が経営しているホテルの一室で、アスナの調教のことは全従業員に知らせてある。

何を隠そう、この従業員は男は全員調教師、女は調教済みの雌豚（一部女王様有り）だ。ちなみに男女比は1：9。

客は調教済みの女従業員目当てで来る金持ちがほとんどなのは言うまでもない。たまに何も知らずにやって来る女性客なんかもいる。ルックス次第では強制調教して墮とすけど。

おっと、余談が長くなってしまったな。

「アスナちゃん……おお」

ベッドの上のアスナを見て、俺は感嘆した。

「あうん！ もうイキたくないイキたくないイクうううううううんっっっ！」

おー、痙攣してる痙攣してる。なんだ満喫してるじゃないか。

アスナは絶頂を迎えているところだった。たぶんもう幾度目かのね。

下着はもうぐっしより濡れていて、ベッドにも大きな染みができているほど。

「やほー、ただいまアスナちゃん。遅くなっちゃってごめんね」

「あ、あふして……（外して……）」

「はいはい、今外してあげるからね」

股間に固定されたローターを外してやる。

「ううん、こんな濡れた下着付けてるなんて可哀想だね。仕方ない、俺が脱がしてあげよう。はい、脱ぎ脱ぎしまちようねえ」

赤ん坊口調で言ってることでアスナの神経を逆撫でする。

案の定、アスナはギロツと俺を睨みつけてきた。いいねいいね、そうこなくちゃ。

「はーい、おまんこお披露目。わおっ、おパンツと同じきれいなピンク色だねえ」

テラテラとテカらせたアスナの秘部は、ヒクヒクとうごめき、これ

より先の行為を早くしてくれとせがんでいるようだ。

脱がしたパンツはぐつしよりと濡れていて、雌の匂いがぶんぶんする。パンツの股間の部分に俺は鼻をつけ、深呼吸して見せた。

「何してるのよっ、この変態！」

「俺にとつてはそれは褒め言葉だ。あと、君達親子ほど俺は変態じゃない」

「わたしと母さんは違うわ！」

「でも依頼したのは君のお母さん、京子さんだ」

「嘘よ！」

「本当だ。まあそれについてはおいおい話すさ。君の母さんが若い頃に俺の親父に調教されて、そのおかげで今の地位に付けた話とかね」

「何を、何を言っているのよ……嘘よ、そんなの！」

「細かいことは気にしないで、今は気持ちよくなるうよアスナちゃん。ほら、クリちゃんもピコーンって勃ってるね。ほらほら」

勃起したクリトリスを指先で軽く弾いてみせた。

瞳をギュツと閉じて、ビクビクツと反応するアスナ。

「きゃふ、あっあんっ……やつ、やめなさいっ」

「よかった、まだ元気みたいだね。それでこそ調教のしがいがあるよ。って、これだけお漏らししまくっちゃもう調教済みみたいなもんだけどさ」

「もっ……漏らしてなんかいないわよ！」

赤面しアスナは声を荒げた。

「本当に？」

「本当よ！」

「じゃあ確かめてみようか」

「えっ」

俺はサイドボードの上にあるリモコンを手に取り、天井に向けてスイッチを押す。

すると、天井からスルスルとスクリーンが下りてくる。さらにリモコンを操作し、プロジェクターから映像を映し出した。

「あ……ああ……」

「フフン、何の映像が分かったみたいだね。そう、この部屋の様子を撮影した映像だよ。ひとりのときのアスナちゃんがバツチリ録画されてるのさ。この部屋にはね、カメラがセットされてるんだ。それも十台もね。いろんなアングルから調教されるアスナちゃんを楽しめるんだよ」

「やめてっ、すぐに消して！」

もちろん無視して俺は映像を見続ける。

『ああダメっ、もうダメっ』

映像の中のアスナが両脚をジタバタさせてもがいている。

『もっもう……もれ、も……れ、る……』

「お、そろそろおしっこタイムかな？」

アスナに向かって言ってみるが、そのアスナは目をそむけている。けしからん。

「ほら、しっかりと自分がお漏らししてるところ見なきゃ」

アスナの首を無理やりスクリーンに向かせる。いやいやと首を振っているが構わない。首輪も付けといたほうがよかったな。後で付けとくか。

『漏れちゃううううくん！』

プシヤアアアアア！

映像の中のアスナは体をビクンビクンと海老反らせながら、股間からジャアアつとおしっこを垂らしている。

下着はみるみるうちにびしょ濡れになり、ベッドシートにも巨大な染みが描かれていく。

「おお、立派な世界地図の完成だ」

「やめてえ、見ないでよお……」

ぐすんぐすんとアスナは涙している。

オマンコからおしっこと愛液を垂れ流し、目から涙を垂れ流しで、体内の水分がかなり失われているのではと心配になってきた。優しい俺は。水分補給については考えておこう。もちろん、普通の水分

補給なんてさせないけどな。

ちなみにこの映像はこのホテル内の全室に配信している。お漏らしアスナを見ながらマスかいている客も多いことだろう。

「さあて、アスナちゃん。そろそろ本番行こうか。もう準備は整ってるしね」

## 第2話 プロ調教師は百発の弾を用意している

「い、いや……」

首を横に振って、アスナは股を閉じようともがいている。鎖で拘束されてるっていうのに、随分とあがくねえ。

「いや？ あ、ゴメンゴメン。まだ舐めてあげてなかったね。俺としたことが」

ワザとらしく言い、俺はアスナの股間に顔をうずめる。

目の前にはテカテカヌルヌルしたアワビちゃんがご開帳。

まずは匂いを嗅いでみる。

「すんすん」

「匂いなんて嗅がないですよ……」

「ふむ、悪くないな」

これは冗談でもお世辞でもなく本当に。

アスナのおまんこは新鮮なピンク色を保ち、母親と違ってビラビラがドス黒くなって垂れているなんてこともない。毛はうっすらと生えている程度で、手入れをするまでもなさそうだ。

まん毛に鼻を押し当て、すーっと鼻で息を吸ってみる。

ほのかに香る雌の匂いが、俺の男根を固くした。

「いったただきまーす」

れろーん、とアスナの秘部を、まるでソフトクリームを舐め取るようにする俺。

「ひゃふんっ」

アスナちゃん、良い声で鳴いてくれます。

れろれろぶちゅじゅるるる！

秘部から流れ出る汗を吸いながら俺は激しく舌で攻め立てる。

「あふあんっ、あふっ、はああんっ！」

激しいばかりではなく、時には優しくクリトリスをペロペロと愛撫してあげる。

「クリトリスがコリコリだよアスナちゃん」

「ひゃっ、ひゃはっ、あああん……」

ふとアスナの顔を見やると、だらしなく舌を出して目をとろんとさせていた。アヘツてる京子さんにそっくりだなあ。

「さてと、じゃあ入れてあげよつか。もうアスナちゃんも我慢できないもんね」

「あふう……」

気持ちよすぎてるくに返事もできないらしい。

俺はアスナの背に腕を回し、軽く持ち上げ、股間が良い具合の位置にくるようにする。

そして、

ぴと

「ひゃうー！」

俺の肉棒がアスナの秘部に触れた途端、アスナが悲鳴をあげた。何をされるのか今更気付いたようだ。

「やめてっ、それだけはやめてっ」

「お願いするのに敬語も無しなの？ 礼儀知らずだねえアスナちゃん。悪い子にはお仕置が必要かな？」

「お願いしますっ、入れないでください！ 何でもしますっ、何でもしますからあー！」

「何でもしてくれるの？ 本当に？」

「本当ですー！」

必死に懇願するアスナ。

言質は取った。

まあ、取らなくてもやっっちゃうけどね。

「ふうん、じゃあ……」

ズブツ

「ひゃあっ……な、なんで入れちやうの……！」

「なんでもしてくれるって言ったから」

「卑怯者っ！」

「それは褒め言葉として受け取っておくよ。そーら、動くぞ」

「あつ、あんっ、あぁうん！」

ぐっ、なんて気持ちの良いオマンコなんだ。

中は暖かく、それでいてぬめぬめとした感触が俺の肉棒を包み込んで離さない。締まりの具合も最高で、母親の比じゃない。

もしこれでテクニクを身につけたらと思うと、興奮せずにはいられない。

俺が仕込んでやる。

ズブツ、ズチュズブズブ。

チンポによるピストン運動がアスナの膣内を蹂躪する。

「ああつ、あんあんあああふううん」

出し入れを続けていく傍からアスナの秘部から愛液が溢れていく。

「ほらほら、気持ち良いだらアスナちゃん」

「あつあつあつあうっ……き、気持ち良くなんか………」

「これでも、か！」

子宮の奥にまで届くようにと、俺は一際深く突き入れる。

「ひゃあんー！」

たまらずアスナは甘い声をあげてしまう。それはそうか。

ただでさえこの女にはチンポ狂いの血が流れている上に、俺のペニスのサイズは二十センチを超えている。子宮にまで届くチンポに、アスナはもう虚ろな目をして涎を垂らし、「あつ、もう……あた、しい……」とご満悦の様子だ。

「気持ちよくなってくれてるようで何よりだよ、アスナちゃん」

「そん——あうんっ……そんなことっ、ないもんうふうん！」

チンポを突かれるたびにアスナは声を乱れさせ、いやいやと首を横に降る。

だが快樂は確実にアスナを雌豚への道へと誘い、そして支配している。

このグシヨグシヨに濡れたおまんこことシートが何よりの証拠だ。

「じゃあそろそろ出すぞ。しっかりと受け止めるんだぞ」

「えっ、出すって……もしかして……いや、ダメよ、それだけは……赤ちゃんができ——」

「できちゃっていいじゃない……か！」

ドプリユリユリユ！

俺は盛大にアスナの膣内で射精した。ドブドブと俺の子種汁がアスナの子宮に送り込まれていく。

「あふうふううんつつつ!!」

アスナもまた果てたようだ。受精アクメでもキメたのだろうか。幸せな女め。

ヌルツとチンポを抜くと、こぼお、とオマンコから精液が漏れ出てきた。

「はあはあ、はあ」

肩で息をするアスナが、俺のほうを睨んでいる。

「驚いたな、まだ堕ちてないとは……」

ならば。

「アスナちゃん、君のオマンコは名器だね。実に気持ちよかった。だがひとつだけ気に入らない点がある。それはね、君が処女じゃなかったことだ」

そう、アスナは処女ではなかった。まあ十七歳だと聞いていたからあまり期待はしていなかったが。

「ふんっ、初めてでなくて残念だったわね」

勝気な笑みを浮かべるアスナだが、その笑い、すぐに壊してあげよう。

「そんなわけなんで、君の初めてを奪わなくちゃ気がすまないんだよね、俺としてはさ」

そう言うと、俺はアスナの尻を持ち上げる。尻肉も良い手触りだなあ。

「やつ、ちよつと何を……」

「決まってるだろ」



俺はグイツと自分の肉棒を押し付けた。

アスナのアナルに。

「ウソっ、やだやめてっ。そっちは入れる場所じゃ——」

「はあ？ アナルも入れる場所だよ」

ズブリ。

「あがつー！」

おっと、これは本当に痛かったようだな。声に甘さが感じられないよアスナ。

けれどそういう思いも時には味わったほうがいい。調教とはそういうものだ。

「その反応から察するに、どうやら僕がアスナちゃんのお尻処女を頂いたみたいだね」

「鬼っ、鬼いー！」

「そうそう、僕は鬼だよん。そらっ」

「あつ、がつ……」

肛門に肉棒を抜き差しする。

締めりはかなりきつい。初物はやはり違う。母親のはもう緩くなってるんだろうなあ。

アスナの肛門は俺の肉棒サイズに強制拡張を余儀なくされ、ぷすっ、ぷすっとき折空気を漏れ出されている。

「うわ、アスナちゃんオナラしないですよー」

「いやいや聞かないでえ、あふっ」

お、ちよつと甘い声出ましたよっ、と。

ズブブチュツズブ！

腰の振りをさらに加速させ、アスナのアナル内部を破壊しにかかる俺。

「あふっ、ぐっ……あう、あうん……あふんっ」

徐々に気持ちよくなってきたようだ。初アナルで感じちゃうとか、これはかなりの逸材だ。

そしてアナルファックが始まって十分後。

「あんっあんっあっあっ……あふん、いやあん！」

アスナはすっかりアナルで感じちゃう女の子になってましとき。

……くっ、さすがに限界だ。

「出すぞアスナ。ミルク浣腸しっかり受け止めろよ」

「あうんっ」

「おらー！」

ドピユルルッ！

「ああああああんー！」

たっぷりと精液を腸内に放出してやった。

どぶっ、どぶっ。

俺の精液がたっぷりとアスナの中に注ぎ込まれていく。

「ふう」

アスナの肛門から肉棒を抜くと、ぷすっ、と可愛いエアー音が鳴った。

「気持ちよかったよ、アスナ」

「あふう……」



「どうだ、気持ちよかったか」

「ふんっ、全然気持ちよくなんかないわ」

「……………」

「おいおい、まだ墮ちてないのかよ。

大の字で拘束され、秘部と肛門から精液を垂れ流すアスナを見て、

俺は溜息をついた。並みの女ならアへ顔になってニツコリ笑ってる  
ところなんだが。

この意思の強さは想定外だな。  
素直じゃないとかそういう問題じゃなさそうだぞ。

俺はこれまでの調教の経験から、女の目を見ればそいつの心の強さを  
計ることができる。

その経験則から、アスナの心は強い、そう結論付けた。

瞳の色は未だ色褪せず輝き、俺に敵意を向けてさえいる。

問題は、いったい何がアスナをこうまで強くしているか、だ。

まあ、大抵は男なんだが。

「キリトくんが、きつと助けに来てくれるわ」

お、よかった。調べる手間が省けた。

「その人はアスナちゃんの彼氏かい？」

「そうよ」

「ふうん」

キリト、か。

どんな漢字を書くのだろうか。あるいは本名ではないのかもしれない。  
ない。

何せアスナは未だにVRMMOを続けてるって話だしな。ゲーム  
の中で知り合って恋人になったって可能性も十分に有り得る。

まあキリトのことはおいおい調べるとして、だ。

「アスナちゃん、正義の味方は必ず来てくれる、なんていうのは、ゲー  
ムと物語の世界だけだよ？」

「そんなことないわ」

「あるって。じゃあ現実を見せてあげるよ。おーい、入ってきて」

俺が呼びかけると、部屋のドアが開いて、ぞろぞろと覆面を被った  
男達が入ってきた。

ちなみに覆面以外は何も身につけてない。全員例外なく肉棒をそ  
そり立たせている。

「え、なに、なんなの……！」

「紹介しよう。こいつらはうちのホテルで働いてる従業員たちだ。安

心してよ、全員が一流の調教師だから。きつとアスナちゃんを気持ちよくしてくれと思うよ」

「そんな、そんなのって……」

「ちなみにここにいるのは二十人だけど、まだあともう八十人が部屋の外まで行列作ってアスナちゃんとオマンコするために待っていてるよん。百人がアスナちゃんのおまんこを便器として使ってくれるんだ、有り難い話だねえ」

「嫌だあ！ そんなの嫌だよおおっ！ ううつ、うつ、うつ」

ボロボロと涙をこぼすアスナ。俺はアスナの瞳を伝った涙を舐め取ってあげた。

「大丈夫だよアスナちゃん、きつと君は一流の奴隷になれる」

「なりたくないわっ」

「君に選択権はないんだよ。さ、みんな、始めちゃって」

俺はアツサリと言うと、服を着始めた。

俺が着替えている間、アスナは男達に囲まれて口を肉棒でふさがれていた。

「ふがあん、あふ、うほっ」

アスナは苦しそうに鼻で息をしつつも喘いでいる。

「マサヤ様、拘束はもう解いても？」

「好きにしろ。どうせもう抵抗できないだろ」

「かしこまりました」

男達はホテルマンだけあって口調こそ丁寧だが、中身は調教師なのでやってることは極Sだ。

案の定……

「おら、これで手も使えるようになったろ。しっかりとチンポしごけよ」

「いやあっ」

「おいおい、右手だけじゃなくて左手も使うんだよ」

「あううつー！」

「ほら口がお留守になってんぞ。奥まで啜えろっの」

「おほうつ」

「前と後ろの具合もかなりいいぞこの女。おらっ気持ちいいか」

「はふっあふううん！」

怒涛の勢いで大勢の男達に穴という穴全てを犯されるアスナ。

涙をぼろぼろこぼしつつ、アソコからもしっかりとポタポタと愛液を垂らして喜んでいる。体はもう完全にこっちの物になりつつあるな。

完全に墜ちるまであともう一步なんだが……。

「そうそう、アスナちゃんはここ数時間ずっと水分補給してないんだ。精液だけじゃなくておしっこも飲ませてあげるんだぞ、みんな」

そう言い残し、俺は部屋を後にした。

その直後、ドアの向こうから大勢の男たちが一斉に放つ盛大なジョボボボボボという天然水がしたたる音と、アスナの悲鳴がとどろいた。

部屋の外では未だ大勢の男達が暴走直前の下半身を露にして、アスナを貫かんと待っているのだった。

調教は最初が肝心。

下らないプライドを粉碎し、従順になる以外の選択肢を思い浮かばせないのがコツ。

とはいえ、アスナの場合はそのコツが上手くいっていないんだけどな……。

ま、じっくり料理していくさ。

さーて。

調教はひとまずあいつらに任せるとして、俺はアスナちゃんの身辺調査を始めるか。

まずはキリトって男からだな。

### 第3話 プロ調教師は教育現場でも仕事をす

ようやく一日の全ての授業が終わり、篠崎里香はウーンと伸びをした。

窓の外を見やってみると、朝は晴れていた空が今では暗い雲に覆われていて、一雨来てもおかしくなさそうなほどだった。

「リズきーン」

呼ばれて里香は振り向く。友人のシリカが教室の入り口で手を振っていた。

「今行くー」

スクールバッグを肩に掛け、里香ことリズベッドはシリカのところへ小走りで向かう。

リズベッドとは、ALOでの里香のプレイヤーネームである。SAOからずっとこのネームを使い続けている。それはシリカも同様だし、アスナやキリトもそうだ。

「やほーシリカ。ねえ、あんた傘持ってきてる？ 今にも降りそうだよ」

「持ってきてないですよお、だって天気予報では雨だなんて言ってますんでしたもん」

「だよねえ」

「あの、キリトさんは？」

「キリトなら……って、もういないし」

リズベッドが教室を見渡してみると、すでにキリトの席は無人だった。

「今日もなんかの研究なんでしょうか」

「じゃないのお？ 部活なのか個人的にやってんのか知らないけど、フルダイブ技術を応用して云々かんぬんとかってワケの分かんないこと熱く語ってたからね。アスナがいないと本当に研究一筋になっちゃうわねキリトは」

「そんなキリトさんも素敵ですっ」

「まあねえ」

はあ、とりズベッドは小さくため息をついた。

キリトは未だにリズベッドの心の中に居座り、事あるごとにS A Oで初めて会ったときのことや、いっしょに武器の素材を探しに行った記憶を思い出させる。

そのたびに溢れそうになる暗い感情を、リズベッドはいつも抑えるのに苦労していた。

暗い感情を抑えるには、自慰行為に耽って頭を真っ白にするに限る。

以前はずっと指でクリトリスをさすって気持ちよくなっていたけど、最近ではそれだけでは物足りなくて、ネット通販でローターを購入してみた。

(あれはヤバイ。マジヤバイよお)

初めてローターを使ったとき、リズベッドはあまりの気持ちよさに思わず失禁して大変な目にあった。

バイブの震えなんてスマホのマナーモードで慣れているから余裕でしょ。

などと思っていたリズベッドだったがとんでもない。

ローターをクリトリスに触れさせたときに全身に駆けめぐった快感は、まるでジェットコースターが急降下していくかのような感覚だった。

そんなパラダイムシフトとも言えるローターでのオナニーだったのだが、代償も大きかった。

(シートと布団を家族に知られずに干すのは苦労したわあ……)

その失敗以来、ローターでオナニーをするときは風呂でやることにした。風呂場ならどんなに尿を漏らしても問題ない。

喘ぎ声は、どうにか口を手にとって抑えているけど、どうしても漏れてしまう。

「……うっ、うううん、あうっ、あふっ」

というような具合で。

(アスナはキリトにどんなふうな気持ちよくしてもらってんのかなあ……なんか、ズルいな……)

「リズさん？」

「えっ、あつ……ゴメン、ボーつとしてた。あはは……」

「ならよかったです。体の調子が悪いのかと思って心配しましたよ。顔赤いですよ？」

「顔赤い？ あははっ、暑いからかなー？」

陽気に振る舞ってパタパタと手のひらで自分をあおぐリズベッド。陽気なフリをして自分のキャラクターを演じるというのも大変だ。

暗い感情を隠さなくてはいけないから。

「アスナさんの親戚さんは大丈夫なのかなあ」

「大丈夫っぽいよ。アスナからメール来たけど、無事に退院したってさ。せっかくだからニューヨークをしばらく見物してから帰ってくるってメールに書いてあったよ」

「それってただのサボリじゃないですかあ」

「だよねえ。ちゃんとお土産買ってきてくれるんでしようねえアスナ」

アスナはニューヨークに住んでいる親戚の体調が思わしくないので、今は看病のため母親と共に日本を離れ、ニューヨークに飛んでいる。

ニューヨークに親戚がいるとか、いったいどんな家なのよ……とリズベッドは感嘆した。

「さーて、今日はどうしよつか。アスナはニューヨークでキリトは研究、じゃああたしらは？」

「うーん……シノンさん誘ってALOってどこですかねえ」

「無難な選択だけどそれで……」

いこうか。

そう続けようとしたリズベッドだったが、

『二年B組篠崎里香、繰り返す、二年B組篠崎里香、至急、生徒指導室に来るように』

「ええっ、何よ今の校内放送！ あたし？ あたしのこと？ あたしなんもやってないよお？ 同姓同名ってことはない？」

「二年B組の篠崎里香さんって、リズさんしかいませんよ……」



シリカが呆れていた。



「失礼しまーす」

ドアをノックし生徒指導室に入ってみると、担任の男性教諭と、なぜ校長までもがソファに座っていた。

もうひとり、女性が校長と教諭に挟まれる形で腰を下ろしているが、こちらの女性はリズベットの知らない人だった。年齢は三十代後半から四十代前半ぐらいだろうか。

少しきつめの顔立ちだけどとてもきれいな女性だった。真ん中で分けたセミロングの黒髪は艶やかでサラサラだ。

真紅のパンツスーツをビシッと着こなしているので、どっかの会社の敏腕キャリアウーマンなのかなあ、などとリズベッドは思った。

「まあかけたまえ、篠崎さん」

担任の教諭に促され、リズベッドはガラステーブルを挟んで向かい側のソファに腰を下ろした。

（何かしたかなああたし……あつ、この前のテストの点結構悪かったからそれかあ？）

色々と後ろ暗いことが多いリズベッドだった。

が、彼女の心配とは裏腹に、向かい側の三人の大人たちは笑みを浮かべている。これから説教を垂れる人間の顔とは思えない。

口火を切ったのは校長だった。

「生徒指導室などに呼び出されて緊張しているとは思いますが、我々は別に君を叱るつもりで呼んだわけではないのだよ」

「は、はあ」

緊張するなど言われても無理な話だった。校長なんて何かの行事で壇上に立つ姿しか見ないのが普通である。

その校長はというと、暢気にガラステーブルの上に置かれているティーカップを手に取り口をつけていた。

「うむ、我ながら素晴らしい味だ。冷めないうちに君も飲みたまえ、篠崎さん。このハーブティーは私が栽培したハーブを使った自信作なんだよ」

「え、そうなんですかつ」

それはスゴい、とリズベッドは思わず前のめりになる。

ハーブティーはALOの中でも登場し、アスナがよくいれてくれるから身近に感じられる。リアルで栽培となったら手間も大変だろうし、何より校長がハーブ栽培をしていたのが意外だった。

「いただきますっ」

リズベッドもティーカップを手にし、一口飲んだ。

気のせいだろうか。向かいに座る女性が一瞬、ニヤリと口角をつり上げたような……。

「どうかな、味のほうは」

「美味しいですっ。香りもいいですし、とても落ち着き、ます……」

落ち着く、というよりは、眠くなると言った方が正しかった。

それでいて体の内側から熱が広がっていくようで、背中がじんわりと汗ばんでいる。

「あれ、あた……し、なんか  
変。」

そう感じた瞬間に、リズベッドの視界はブラックアウトした。



久々に『学校』つてやつに来てみたけど、なかなかどうして、悪くない。美味そうな女子生徒がうようよいるじゃないか。

SAOサイババーたちが通う学校とやらに来て敷地内を軽く散歩しているんだけど、調教したい女が放し飼いにされている。もったいないな。

「リズさん大丈夫かなあ」

すれ違った娘が独り言をつぶやきながら歩いていった。背は低く、薄茶色の髪を二房に結っていた。

ああいうロリはかなり需要がある割に入手しづらいため、結構値が張る。俺の元にもロリ奴隷を売ってくれというオーダーがもう十件以上入っているのだが、あいにくと在庫がなくてほとほと困っていた。ちなみに依頼主はほとんどがソープ店。ソープ店もまた客の需要があるのだろう。

……いいな、あの娘。

奴隷として調教され、ソープに買い取られ、会ったばかりの客の股間に三つ指立てて平伏し、洗ってもいないチンポをしゃぶって即挿入して下のお口でミルクを飲むボランティア、なんて素晴らしい進路を俺は提示できるんだがどうだろう。世のため男のため。

そんな誘い文句はもちろん言わずに心に留めておき（ついでにあの小さい娘の顔も覚えておいた）、俺は学校敷地内の散歩を続けた。しばらくして電話がかかってきた。

『いやあ京藤のお坊ちゃん、お、おふう！ お、お待ちせしましたねえっうっ。やっと生徒が眠ってくれましたよ。はうっ』

「わかったからお坊ちゃんはやめろよ校長。今すぐそっちに行く」

あと野郎の喘ぎ声なんて聞きたくないんだけど。

★

生徒指導室に行ってみると、まず俺の目に飛び込んできたのは二本のペニスだった。どっちもそり立ってはいるが、大したサイズではない。

校長と男性教諭が下半身だけ生まれたままの姿となっている様は実にシュールだ。教育現場のリアルがこれかあ。俺が通ってた高校はどうだったんだろうなあ。

そしてその二本のチンポを交互にしゃぶっているのが、

「ちゅぱっじゅぼっじゅちゅうう、ぷはっ……あ、マサヤ様、いらしたんですね」

京子さんが口から唾液だかカウパーを垂らしながら言った。彼女もまた下半身だけ全てを晒している。三人の地位ある大人がチンコとマンコを露わにしてハアハア言ってる姿は目眩を覚えるな。

世の学生諸君、世間的に地位のある大人連中も実はこんな感じですよ。京子さんなんてフェラしてるだけなのに股間から愛液垂らして床に水たまり作ってるし。

「そこで眠りこけてる女子がアスナの友達か？」

「はい、名前は篠崎里香。ゲーム内ではリズベッドと名乗っていて、アスナたちもそう呼んでいるそうです」

「ふうん」

ソファの上でスヤスヤと寝息を立てている娘は、なかなかのスタイルの持ち主だった。制服越しに軽く胸を揉んでみると、大きさはさほどではないが弾力はあった。悪くない。

★

この状況を作るのはいささか面倒だった。

手元にあった駒で使ったのは『京子さん』『アスナのスマホ』、そして『親父』だった。

まず個人情報の固まりである『アスナのスマホ』から調べた。さすがは十代というべきか。

あるわあるわ、感情を吐露したメールのやり取りが。

キリトという男との甘い言葉の囁き合いなんてもう読んでいられたなかった。これはアスナの調教が完了したときに、彼女自身に消させよう。

ほかに頻繁にメールのやり取りを交わしていたのが『リズベット』『リーファ』『シリカ』の三人、あと最近は『シノン』という名前も散見された。

とりわけリズベットとのやり取りはメールだけでなく電話でも頻繁に行われていた。友人関係の中ではリズベットが特に親しいと俺は睨んだ。

当初の予定ではアスナのスマホからキリトの個人情報を入手し、ヤツにアスナが百人にやられている映像を送りつけてNTR完了とする予定だったのだが、リズベットの存在が明らかになり、方針を変えることにした。

どうもキリトという男にはヒーロー気質があるようなのだ。

京子さんによると、ALOに囚われていたアスナを助け出したのはキリトだという。もしアスナのあんな映像を送りつけたりしたら、彼は助け出すために何らかの行動に出るだろう。

彼の執念は警戒すべきだ。

ならまず、アスナとキリトの周囲から瓦解させ、最終的には彼らの関係を空中分解させればいいのでは、と俺は思いついた。

というわけでリズベットをこちら側に引き込むことにした。

方針が決まればあとは簡単だった。

まず最初にリズベットとキリトにアスナのスマホからメールをし、しばらく海外に行くから学校は休むと伝えておいた。いつまでも連絡が取れず不在では怪しまれるからな。不在の理由は海外の親戚がうんたらかんたら（適当）。

それからうちの一族御用達の興信所にアスナのスマホを渡し、リズベットの本名から住所氏名家族構成などあらゆる情報を調べさせた。

その仮定でリズベットの父親が風俗通いをしていて、しかもそれが俺が調教した女たちが働いている店だったことが分かった。

もちろん証拠映像はバッチリだ。しかし赤ちゃんプレイが好きだなんて、マニアックな父親を持ったものだな、リズベット。

『ほーら篠崎ちゃあん、パイパイでちゅよお』

『ふんぎゃあ、ママーン、ぱいぱーいだいちゅきくっ』

なんて言いながら自分より年下の女の乳首をチュパチュパしてる父親の姿を見たら、リズベットはどう思うだろう。

それはさておき。

学校は最初から明らかになっていたので、本名さえ分かれば個人の特定は容易だった。あとは適当にリズベットの学校帰りにでも後を付けて人気のないところで……という強硬手段を考えていたのだが、嬉しい誤算があった。

ここで登場するのが『親父』という駒だ。

簡単に説明しておく、うちの親父は京子さんが教授をしている大学の学長を務めつつ、裏の世界では風俗業界で知らない人のいない敏腕経営者でもある。とあるソープ街の全てがうちの一族の傘下であることは裏世界では有名である。

話を戻そう。

SAOサイババーたちが通う学校の校長は、俺の知っている人物だったのである。

校長は俺の親父の大学時代の後輩で、よく子供の頃に俺は彼に挨拶されたもんだ。

『坊ちゃん、今日もお元気そうで〜』

なんてニヤニヤ笑いながらね。でも俺には分かっていた。

あいつは俺に挨拶するのを口実に、京子さんを見に来ていたんだってな。だって校長、いつも俺が京子さんをヤツてるときに限って挨拶してたからね。

校長は京子さんが欲しくて欲しくて仕方なかったんだ。

ここで『京子さん』という駒の使い時だ。

俺は今回の件で、校長に京子さんを貸し出すことにした。期間は一週間。期間が短いのと、そもそも京子さんが昔に比べて劣化しているので拒否されるかもしれない、と俺は危惧していたが校長は、

『それは本当ですか!!』

と有頂天になっていた。

まあ拒否られた場合は親父の名前だして無理矢理従わせる気満々だったけどね。

そんなこんなで京子さんを校長にレンタルし、その見返りに校長がリズベツトを呼び出し、“ハーブティ”を彼女に飲ませてダウンさせるに至った。もちろんハーブは俺が事前に渡しておいたものである。

「あんっ、あうっ、ひゃふんっ」

京子さんが立ちバググで校長に突かれていた。

ずちゅっ、ぶちゅる、ずちゅるるっ。

ぱんぱんぱんっ。

卑猥な音が生徒指導室に響き渡っている。

校長は脂ぎった顔をニタアとゲスな笑みで染めて、京子さんの尻をナデながら腰を振っている。

「結城教授、ぼ、僕のも……」

「んふ、分かっているわ」

妖艶な笑みを浮かべ、京子さんは眼前にある肉棒をじゅぼっとくわえて、

「んうっ、じゅるるるっ、じゅぼ、じゅちゅるるっ!」

激しいディープスロートを披露していた。ちなみに肉棒の持ち主はリズベツトやキリト、アスナの担任教師である。

気持ち良さそうな顔してるねえ。

ちなみにこの模様も隠しカメラでバッチリ撮影してます。これをネタにすれば、校長と男性教師を駒として使用できる。教育現場に駒を持つておくと、何かと役に立つんだよね。

それにしても校長が京子さんをほかの男にシェアさせてやるとは意外だった。レンタル期間中ずっと独り占めしてセックスの限りを尽くすかと思っていたのだが。

まあ、いざというときに責任逃れのための駒として使うのだろうけどな。

教育現場の腐敗を尻目に、俺はソファの上で寝息を立てているリズベツトに目を向けた。

「んじゃまあ、サクツと洗脳しちゃいますか。ハーブの力、見せてもらうぜ」



リズベツトは霧の中を歩いていた。

視界は不明瞭で、自分のつま先すら見えない。

ここはどこだろう。

そんな当然の疑問さえも、今の彼女には浮かばない。

ただ、呼ばれるままに歩くだけ。

呼ばれてる。

誰かに、呼ばれてる。

自分を必要としてくれる誰かの声。

『リズベツト』

(誰なの?)

『リズベツト、俺だよ』

(もしかして、キリト?)

『彼は君を呼んだりしない』

(そんなこと……!)

『なぜなら彼はアスナの所有物だからね』

(うつ……)

『その反応から察するに、君はキリトのことが好きなんだね?』

(そんなのアンタに関係……)

『俺の言うとおりにすれば、キリトをリズベットに振り向かせることも可能なんだけどなあ』

(えっ……!)

『そもそもおかしいと思わないかい? なぜアスナはキリトを独り占めにしているんだい? 彼女がキリトを“みんなの所有物”として共有すれば、誰も傷つかずに済んだのに』

(何も知らないくせに知ったようなこと言わないで!)

『分かるよ。キリトの周囲にはあまりにも女の子が多すぎるからね。大方、みんながキリトのことを好きなんじゃない?』

(……っ!)

『凶星だったみたいだね。でも勘違いしないで欲しい。僕は君を、いや、君たちを責めているわけじゃないんだ。ただ、アスナがキリトを独占しているからこそ、君たちの関係はとても歪んだものになっていくんじゃないか、と問題提起し、その解決策を示そうとしてるんだよ』

(……解決、するの?)

リズベットは今でもキリトのことが好きだ。

そしてそれはほかの子も同じだろう。特にあの子はキリトと幼い頃からいっしょにいただけに人一倍……。

見えない誰かの言うとおりに、キリトとアスナ、そして二人を囲む周囲の関係は歪んでいる。

アスナだつてきつと気づいているのだ。

リズベットがキリトのことを好きだということに。

ほかのみんなもまた、キリトに好意を寄せているということに。

なのに、アスナは……。

もし。

もしも。

このいびつな関係性を変えられるとしたら、解決できるなら……。見えない誰かの声は、リズベットにこう答えた。



『解決できるよ』

霧が少しずつ晴れてきた。

次第に、見えない誰かの顔が、見えてきた。知らない男だった。

けれど不思議と、リズベツトはその男を信じていた。

★

リズベツトが虚ろな瞳を俺に向けている。

どうやら洗脳には成功したようだ。

「京子さん、凄いや。京子さんの開発したハーブ。あつという間にリズベツトちゃんを洗脳できちゃったよ」

「……っ、ぶふっ、ふううんっ……！」

あー、ごめん。空気読めてなかったわ、俺。

京子さんは今まさに、上の口と下の口でチンポミルクを注いでもらうところだった。雌豚にとってはごく褒美タイムだもんな。いわば餌だ。

「いぐうー！」

と校長が顔を真っ赤にしたかと思えば、

「校長、僕も……！」

と教師もまた絶頂を迎える直前に。

次の瞬間、

びゅるるっ。

どびゅっ！

「……うううむむ」

京子さんが獣のように呻いている。苦しいのと気持ちいいのがないまぜになって、アタマ真っ白なんだろうな。

やがて校長と教師の射精が止まり、二人は京子さんから肉棒を抜く。

「あふううん……」

切なそうな表情を浮かべる京子さん。京子さんの口元と教師のチンポのカリの間に、でろーんと精液の架け橋がかかっていた。

みんな楽しそうに何よりだ。全員が教育者名乗っちゃってるのが

痛すぎて笑える。

リズベツトはというと、教育者3Pが展開しているというのに、まるで見えていないかのようにはんやりとしていた。良い調子だ。

それにしても、アスナとキリトの周囲の人間関係が、ここまで俺の思った通りだとは思わなかった。

彼らの関係性を調べていく仮定で、キリトの周囲にはやけに女の子が多くいるように思えた。俺が言うのもなんだがハーレム状態である。

しかし付き合っているのはアスナ。

そしてその周囲をまるで囲むようにしてリズベツトを始めほかの女子が固めているように俺には感じられた。

(コイツら全員、キリトのこと好きなんじゃないのかあ?)

だとすると内部崩壊させやすい。

そう睨んで、俺はリズベツトを洗脳し、本音を聞きだした。案の定、リズベツトはキリトに好意を抱いていた。ほかの女子連中も同様だと言う。

ようし、ここからが腕の見せ所だぜ。

「じゃあ校長、俺はこれで失礼するよ。京子さんのことはレンタル期間なら自由に使っちゃっていいから。前の穴だけじゃなくて後ろも調教済みだし、鞭も浣腸もいけるよ。なんなら上の口を小便器として使っちゃってもいいぜ」

「ありがとうございます坊ちやまー!」

「ごっこ校長つ、僕は前々からアナルセックスをやってみたくて!」「ワシは鞭だつ。鞭で叩きたくて仕方ないわい!」

教育現場ってストレス溜まるんだらうな……。

「立てるか、リズベツト」

「立て、ます……」

ややふらつきながら、リズベツトは立ち上がった。

盛り上がる校長と教師に同情しつつ、俺はリズベツトと手をつなぎ、その場を後にしたのだった。

## 第4話 プロ調教師は赤ちゃんプレイと女王様には弱い

「うわー！ すっごいキレイな夕日っ！」

部屋に入った途端、リズベットが窓まで駆けて両腕をいっぱい広げ歓声をあげた。感動するのも無理はない。

ここは地上八十階、うちの一族が経営するホテルのスウィートルームだからな。眺めもそこいらのホテルの比ではない。

時刻は午後五時。学校を出て直でここにやって来た。夕焼けが地上を照らし、橙色の海のような風景が眼下に広がっている。

何の疑問も持たず俺の言うとおりにホテルに連れてこられたあたり、リズベットの洗脳は大成功だと言っていいだろう。

ちなみに絶賛調教中のアスナもこのホテルにいる。従業員（調教師）によると、今はフェラの練習をしているとかで『十人の男を十分にイカせる』という課題をこなしているそうだ。もしできなければきつーいお仕置きが待っているという。

すでに課題がお仕置きだって？

ふふふ。

「それに部屋もすごーく広いねっ」

「スイートだからね。この部屋の中だけで七部屋あるよ」

「部屋の中にまた部屋がそんなにあんのぉ!？」

表情がコロコロと変わって面白い娘だ。

アスナに比べると上品さでは欠けるが、性格はなかなか良いように俺には思える。いっしょにいて楽しいと素直に感じてしまう。

が、それ故なんだろうな。

男からすれば、リズベットのようなタイプは恋人と言うよりは友達として見られがち。そしてアスナのような綺麗どころは恋人として意識されやすい。

だが、

「あ、でもスイートってことはめっちゃお金かかるんじや……」

リズベットの言葉は最後まで続かなかつた。俺が後ろから抱きしめたからだ。抱きしめて分かったが、リズベットの体はとても暖かく、太っているわけでもないのになぜか程良い弾力が感じられる。なんだこの抱き心地は。まさかの逸材だな。

「あの、マサヤさん……？」

「逆転しよう、リズベット。アスナからキリトを奪い返すんだ」

俺はそつと耳元でささいた。

逆転こそ価値ある物語だ。俺はリズベットを応援する！

つて、まあ単純にネトラレ展開が好きただけだが。

リズベットの体から力が抜けていくのが伝わってくる。しっかりと洗脳されているようで何より。

「でも、やっぱりそのー、エッチなこととして寝取るっていうのはちよつと……」

「ん？ エッチなことは嫌いかい？」

「……………」

リズベットは頬を紅潮させうつむいてしまった。

俺はできるだけ紳士的に見えるように優しい声音を出しているのだが、上手くいつているだろうか。俺にしては珍しく不安な思いにかられていた。

何せ今回は調教ではない。

あくまでもレクチャーだ。奴隷化させるのではなく、テクニクだけを上手く教えなくてはならない。

なぜなら奴隷化してしまうと、溢れ出すビッチ臭を抑えることができなくなるからだ。京子さんを思い出してみれば分かるだろう。あの雌豚はテクニクにかけては一流だが、恋人プレイは不可能だ。アスナもじきにそうなるだろう。

キリトを寝取るにあたっては、恋人プレイでなければならぬ。そうすることで、キリトの心を掌握し、アスナを裏切らせるのだ。

そのためにも、リズベットを奴隷にするわけにはいかない。

今は、ね。

「エッチなことって……なんか、抵抗あるっていうか」

「抵抗か」

その割にこの娘、夜な夜なローターで独り寂しくアヘツてるって話なんだが。ソースは興信所の人間が隠し撮りした写真と動画。お漏らしを恐れてなのか風呂場でオナツているのが可愛らしかったな。

「でも、みんなエツチなことしてるよ?」

「そうなのかなあ……」

洗脳されているとはいえ、俺の言動全てに従順というわけではないのか。仕方ない。アレを出すか。用意しておいて正解だったぜ。

俺はサイドボードの上にあるリモコンを手に取り、スイッチを押した。

テレビの電源が付き、同時に『おぎやあおぎやあ』と赤ちゃんの泣き声が……

「えっ、パパ!」

リズベットが驚愕のあまり目を見開いている。

そう、赤ちゃんではなくリズベットの親父さんが『おぎやあおぎやあ』と泣いているのだ。

上半身は裸、首から涎かけを付け、口でおしやぶりをくわえ、極めつけとばかりに下半身には紙オムツを付けてな。

リズベット父御用達の赤ちゃんプレイ専門のヘルス店である。

リズベットは絶句したまま画面を凝視している。

映像の中ではトップレスに赤いTバックという格好の若い女が、リズベット父のオムツ替えをしようとしている。

『はい、篠崎ちゃん、オムツ替えまちようねえ?』

『ふああい、ママーん』

『あらあ? 篠崎ちゃんっ、これはなあに? おちんちんがとーっでもおつきくなってるわよお?』

『ピュッピュしたあいつ、ふぎやあんふぎやあんっ』

『よちよちい、泣かないのお。じゃあ、ピュッピュしよつかあ? 白いおしっこピュッピューってね? ほーら、しーこしーこう♪』

それから三分ぐらいの手コキの末、リズベット父は『ぴゅっぴゅっ!』などと泣いて否、鳴いて果てた。

やべえ。俺にとつても未体験ゾーンだったぜ……。

リズベツトと二人して言葉を失ってしまった。リズベツトなんて  
実の父親なもんだから相当な衝撃を受けているに違いない。

しかし、赤ちゃんプレイの需要も結構あるのだろうか。あるなら商  
売として成り立たせたいところ……だが俺にこのプレイを女に指導  
するのは無理……いやマジで無理だからね？

「あれが、パパなの……？」

「そう、君の父親だよ。赤ちゃんプレイが大好きらしいね」

「あんなエッチなことをパパが……」

「リズベツト、みんなエッチなことが好きなんだよ？ 君だってそう  
なんじゃないのかな？」

「えっ、その、えつと……」

思い当たる節（ローターオナニー）があるからか、リズベツトは顔  
を真っ赤にした。

「エッチなことに抵抗なんて無意味だよ。みんなエッチなんだから」  
「本当に？」

「本当だとも。君が惚れているキリトだって、アスナとエッチなこと  
をしているに違いない。だからリズベツトは、アスナよりもっと  
エッチなテクニクを磨かないと」

「……うん、そうだよ。アスナよりも上手くエッチできるようにな  
らないと」

リズベツトは決心がついたらしく、コクリと頷いた。

「それじゃあ、エッチの練習を始めようか」

「う、うん……」

「安心して。俺が優しくちようきよ……レクチャーしてあげるよ」  
あぶねえ、調教って言いそうになつたぜ。

額に浮いた冷や汗をぬぐい、俺はリズベツトをお姫様抱っこして  
ベツトの上に優しく横たえた。

……イマラチオぐらいは……ダメか。ダメだよな。はあ。



「あつ、んう……ふああ」

リズベツトが甘さと戸惑いをないませにしたような声を漏らした。慣れてない様子から、男に愛撫されるのが初めてなのはすぐに分かった。

俺はリズベツトに覆い被さり、左耳をねっとりとなめ回しつつ、右耳にはフェザータッチを加えている。

左右から同時に、そして左右で異質の刺激がなされ、リズベツトは早くも息を荒くして感じ始めていた。

左耳ではクチュクチュと。

右耳はサワサワと。

異なる刺激と音が愛撫となって、女の股間を濡らしパンツに染みを作る。

すでにリズベツトは下着姿になっている。ミントグリーンの色をしたブラとパンツはやや光沢のある質感で、触れるとツルツルとしていた。

「いいかいリズベツト、こうして耳を刺激するときは左右で同時に刺激するんだ、わかるかい？」

「はいいいいい……」

「難しいのはフェザータッチかな。一歩間違えるとただくすぐったいだけになってしまう」

「ええ、そんなんじや笑つちやうじやアンツ」

「そう、笑ってしまう。でも上手くやれば、今のリズベツトのように感じてもらえるんだ」

そう言つて、俺はリズベツトの右耳を指先でスーッと撫でてやる。少し強弱をつけ、耳たぶを軽くつまんだかと思えば穴の周りに指を周回させる。リズベツトの耳元ではシユルシユルと音が聞こえていることだろう。

耳に与えられる感触だけでなく、音もまた気持ちが悪かったりする。

もちろん左耳の耳舐めも続行中である。

「こんな感じかな。わかったかい？」

「はあはあはあ……はい」

肩で息をしながらリズベツトは答えた。もう頃合いだな。十分にやらしい気分になったことだろう。雌は気分がいやらしくなれば色々ときかせてくれるものだ。ハードなプレイとなると調教が必要だ  
がな。

俺はリズベツトの隣に横になった。

「じゃあここからはリズベツトに責めてもらおうか」

「ええ!? あたしがあ?」

「そうだよ。リズベツト、君はキリトを寝取るんだよ? 寝取る側が

責めるに決まってるじゃないか」

「そっか……そうだよ。わかったわ、あたし、頑張るよ」

緊張の面もちでリズベツトが俺に覆い被さってきた。それから俺  
がやっていたように耳に刺激を加えてくる。

「んちゅ……じゅるっ、くちゅう、ちゅぱっ、じゅるるるうつつ」

リズベツトの舌が俺の耳の穴に差し込まれ、チュウチュウと蜜を吸  
うかのような愛撫をしてきた。唾液をたっぷりと含んだ舌技が、俺の  
左耳を襲う。

俺が教えたテクニクよりかなり刺激が強いが、寝取るならこれぐ  
らい強引なほうがいい。

「リズベツト、右耳が寂しいんだけど」

「あ、ごめんなさい」

慌ててリズベツトは俺の右耳をサワサワと触れるが、焦っているせ  
いか刺激がやや強すぎて痛い。まあ初めてだし仕方ないか。

「リズベツト……ブラを、ブラを……自分で外してくれ」

「あ、うん……そっか、あたしが責めなきゃだもんね」

「そうだ」

くっそー……本来なら俺がブラを強引に外して匂いを嗅いだ末に  
持ち帰るところなんだが!

断腸の思いでリズに命じた俺を誰か褒めてくれ……。

「は、恥ずかしい、な……」

ゆつくりとした動作でリズがホックを外し、ブラを胸から落とすよ  
うに取った。小ぶりながらも張りのありそうなオツパイが露わと



なった。

乳輪は小さく桃色、その桃色が地続きになっているかのように乳首もまた桃色だった。

「リズベツト、もう乳首立ってるよ」

「それはマサヤさんが耳を責めたからでしょ、もうっ」

頬を朱に染めてリズベツトはそっぽを向いた。お仕置きしてえ。

「わかってるね、リズベツト。君が俺を気持ちよくするんだ。キリトにするようにイメージして」

「イメージ、イメージね……」

「そう、アスナよりも自分の方がキリトを気持ちよくできる、と」

「アスナよりあたしのほうがキリトを気持ちよくできる……」

アスナよりもあたしのほうが……。

アスナよりもあたしのほうが……。

そうそう、それでいい。自己暗示は大事だ。洗脳とも言うが。

「じゃあ……その、責める、ね？」

「全身を舐めるんだぞ。キスはもちろん、首筋から乳首、チンポもな」  
「うん……」

リズベツトは頷き、責めを再開する。チンポも舐めろと言われて首肯してしまうあたり、奴隷ではないにせよリズベツトはもう俺の手駒として数えてもよさそうだ。

「ちゅっ……ちゅる……」

首筋に走る生暖かくヌルヌルした感触。リズベツトの舌だ。

動きは案の定おぼつかないが、経験の浅いキリト相手ならこれで十分だろう。

首筋からいったん舌を離し、今度は俺の唇にそれが密着した。リズベツトの舌が俺の口内をクチュクチュと蹂躪していく。

「んちゅう、ちゅっ、ぺちやつ……ちゅるう、んひっ!？」

リズベツトが甘い声音で鳴いた。

責められてばかりでうずうずし、ついリズベツトの乳首をつまんでしまったのだ。すでにピコツと勃っていて、自分はいやらしい女だと自己主張している。

「あうっ、んふう……はあんっあつ！」

「気持ちいいか？」

「気持ちいいよおっ」

素直でよろしい。調教のしがないはないが。

「リズベツト、男も乳首は感じるんだぞ」

「そっあうっ……そう、なの？」

「ああ、俺がやったようにつまんでもいいし、舐めてやってもいい。どちらのときも強弱、緩急をつけることを忘れるな」

「分かったわ」

リズベツトが体の位置を下方にずらし、俺の乳首を言われたとおりに愛撫する。

ぴちゅ、ちゆるるっ。

リズベツトが俺の乳首の周囲を舌でぐるりと一周させ、乳首にむさぼりついた。

じゆるるうっ！

思いのほか激しい刺激に、危うく声をあげそうになってしまった。こんな小娘の愛撫で鳴いてしまうなど、プロ調教師からすれば失態以外の何物でもない。

じゅちゅっ、ちゆるるっ。

リズベツトは赤子になったかのように俺の乳首に夢中で吸いついている。だが赤子と違ってリズベツトの口内では俺の乳首が彼女の舌で激しく責め立てられている。

チロチロと弱めの刺激を与えたかと思えば、バキュームのようにちゅーっと吸引してくる。

「んっんっんふう」

息を荒くしつっつもリズベツトの愛撫の手は緩まない。

「……………ッ」

しまった。あまりの気持ちよさについて俺はわずかに声を……。

聞こえていなければいいが

祈るような気持ちでリズベツトの顔を見やると、彼女はニヤツと口角を釣り上げていた。

「あはっ、気持ちよくなってくれたみたいだね、マサヤさん」

「……別に」

「またまたあ、あたしのテクニクにメロメロなくせにい。ちろっ」  
「ぐっ……」

ダメだ。もはやリズムベツトは乳首舐めに関してだけはかなりの技量を得たようだ。長時間の舐め技のせいで俺の乳首は敏感になってしまい、ちよつとの刺激でも声を漏らさずにはいられな……！

「んっ」

「あはっ、舐めてるだけじゃつまんないでしょう？ ほーら」  
クイクイツと乳首をつまみ上げ軽くひねるリズムベツト。

もう俺は彼女のされるがままになりつつあった。

悔しいという気持ちはあった。普段なら拘束して百倍にやり返すかの如く責め立てて、イカせまくったあげく失神させてしまう。

だが、そんな悔しさよりも、俺はリズムベツトの才能に目を見張っていた。

リズムベツトの顔を見やると、彼女は実に楽しそうに微笑していた。いっそ嗜虐的であるとさえ言える。男を責め、感じさせることに快感を得ているのだ。

間違いない。

この女は痴女だ。上手くいけば女王様にだって育てることができらるだろう。

うちのホテルには女王様が不足している。これは思わぬ発見だな。

「リズムベツト、次はフェエラを試してみろ」

「分かってるわ、うふ」

瞳を爛々と輝かせているリズムベツト。エッチなことはちよつと……などと躊躇っていた少女は、もうどこにもいない。

「うわあ、すっごいおっきい！」

俺のズボンとトランクスを脱がし、リズムベツトが目を丸くしている。

「男の人のってこんなに大きいんだあ……」

カリをおそるおそる指先でさわったり、玉袋をフェザータッチして

くるりズベツト。教えてもないことを実践している。アスナよりよっぽど見込みがあるかもしれない。

「皆が俺のように大きいわけじゃない。君の父親のはどうだった？」

「あ、たしかに。パパのは赤ちゃんサイズだったね」

辛辣な評価に俺は笑いをこらえるのに苦労した。まあ赤ちゃんプレイが好きならちようどいいのかもしれないな。

「最初はゆっくりと丹念に、舌を使って舐めていくんだ。手を使ったりするなよ。それと根本からカリにかけて唾液でベトベトになるぐらいにな」

本当はフェラの作法をきちんと教えてあげたいんだがなあ。チンポの前で頭を下げないなんて、男に対して失礼にもほどがある。

まあ「今だけ」は勘弁してやるか。

「うん」

俺の言うことに何の抵抗もなく、リズベツトは言われたとおりにピンク色の舌をカリの先にちよこんとつけ、そこを起点にゆっくりと舌を動かしていく。

ちろ……ちゆるっ、ちゆび、れろん。

まるで赤ん坊がほ乳瓶を持つかのように両手でそっと包み込むように肉棒を持ち、カリを舐めるリズベツト。恍惚とした表情を浮かべ、にじみ出るカウパーを時折ズズツとすすり、「しよっぱーい」と言いながらもまたすすっていた。すっかりガマン汁が好きな女になったようだ。

次にリズベツトは両手を離し、今度は舌をチンポ全体へと滑らせていく。

れろっ、ちゆるりっ……あむう、ちゆっ……ぶちゆる……。

卑猥な音が部屋に響いている。もつとも、ここは完璧な防音なのでどんなにクチュクチュ言わせようが隣の部屋に漏れ聞こえることなどない。ほら、アスナの悲鳴も聞こえないだろ？

「じゃあそろそろくわえようか。根本までね」

「根本まで……口に入るかなあ」

思わずリズベツトの頭をガシツとつかんでチンポを口に押し込ん

でやりたい衝動にかられたが、どうにか抑えた。調教じゃない、これは調教じゃない……苛々してきたな。この後はアスナを苛めに行くか。

アスナにイマラチオしている想像をしていたそのとき、股間が急激に暖かさに包まれた。

……こいつは驚いた。

「ああむっ、うむっ……ぢゆるっ、じゆるるるっ……うむふう……」

リズベツトが俺のチンポをしっかりと根本までくわえ、ディープスロートまで始めていたのだ。

たしかに根本までくわえろとは命令したが、ディープスロートまでは教えていない。さてはこの女……。

「リズベツト、もしかして日頃からAVか何か見てる？」

「うおっ!？」

「おっと、凶星を指されてもチンポはくわえたままだよ」

「んうむうっっ」

俺はリズベツトの頭を撫でつつ少し力を入れて肉棒を押し込んだ。調教か否かギリギリのラインだけど、世のリア充たちもこれぐらいはやってるだろう。たぶん。

「そうか、リズベツトはAV見てたのかあ」

「ううう……」

リズベツトは頬を赤くしつつも、しっかりとチンポを頬張っている。口いっぱいチンポをしゃぶる彼女の姿は、アスナにだって負けやしないほどに魅力的だ。

キリトの見る目の無さには呆れるね。

「勉強熱心なのは良いことだよリズベツト。女の子はそういう勉強こそもつと熱心にやるべきなんだよ」

職業体験と称してヘルスやピンサロ、ソープを体験させるというのもいいな。男を悦ばせるために女は存在するということを、若いうちから分かせたほうがいい。

「あむっ、ぢゅぼぼっじゅちゆるるるっ、ちゅぼっ、じゅぼるるー!」

リズベツトのディープスロートが激しさを増していく。

快感が俺の下半身を支配していく。腰のあたりだけ宙に浮いているような感覚に、俺は夢心地になりつつあった。

……白状しよう。

俺は完全にリズベットのテクニクスの虜になっている。悔しいが認めざるおえない。

リズベットは逸材だ。俺が教えたことはほんのさわりの部分にすぎない。あとは彼女が独学で得た知識を動員させている。

とはいえ、ただ単に経験者だった、というだけの可能性も捨てきれない。それを確かめなくては。

「よし、リズベット……そろそろ」

「んぷっ」

リズベットが俺の肉棒を口から出した。彼女の唇と俺のチンポが唾液とカウパーの混ざり汁で繋がっている。

「んふ、我慢できなくなっちゃったの？」

妖艶な笑みを浮かべ、リズベットは俺の頬にそっと掌を触れさせた。すでに理性は飛び、リズベットの本性がむき出しになっている。

「頼むよ、リズベット」

「……ん、わかったわ」

リズベットはそう言うのと、いったん立ち上がってパンツをするすると脱いだ。リズベットのおまんこが剥露目した瞬間だった。

「マサヤさん、興味津々だねえ。ほらあ、これでよく見えるよお……」  
くぱあ、とリズベットが自らオマンコを開いて見せた。つつーっと

愛液の糸を垂らし、桃色の秘部が美味しそうに口を開けてんんう!?

「えへっ、どうマサヤさん？　これで味見できるでしょ？」

リズベットがおまんこを俺の顔に押しつけてきた。いわゆる顔面騎乗というプレイである。グイグイと股間を押しつけ、上下にグラインドさせる。

俺の顔は瞬く間にリズベットの愛液にまみれる。舌を出して必死にリズベットのおまんこの味を確かめようとしてしまうのは、男の悲しい性だな……。

リズベットのおまんこは、塩気は控えめでわずかだが甘みが感じら

れた。まさに蜜と言える。

すすつていると幸せになれるようだ。

「うふっ、気につてくれたいたいだねえ、マサヤさん?」

とどめとばかりにおまんこを押しつけてくるリズベツト。

……これはもう、S確定。下手したら女王様確定だな。

「リズベツト、そろそろ……」

「うん、いいよ」

いつの間にか上から目線のリズベツトである。業腹ではあるのは言うまでもないけど、ここは耐えるしかないか。

リズベツトが俺の体の上で移動、股間と股間が位置を同じくした。彼女は手を俺の肉棒にそえて、自らの秘部にあてがう。

ぬるぬるとした感触がカリに伝わってくる。俺が今舐めたときについた唾液と、リズベツト自身の愛液だろう。

「ん……」

まずカリが。

それから少しずつ、少しずつ、ペニスがりズベツトのおまんこに埋没していく。

そして、

ズブリッ

「んはああああああっ!!」

ついにリズベツトが全てを飲み込んだ。

おっと、どうやら初物だったみたいだな。血液がアソコから俺のを伝って流れている。締めりはさすが初物、最高だぜ。

それにしても洗脳とは恐ろしい。自分から腰を下ろしてろくに知りもしない男相手に処女を散らしてしまうんだからな。ふふふ。

「んふう……」

リズベツトは腰を落として俺の肉棒を飲み込んだまま動かない。というより動けないのかもしれない。

「あう……あ、ああ……あううん……」

ピクピクと小刻みに身体を痙攣させている。一度の突きでイッたなこの女。瞳は虚ろ、口は半開きにして涎を垂らしているが気づきも

していない。

まあ無理もないな。俺のはサイズが半端ではない。初めて入れるモノとしては規格外だろう。

感触で分かる。

俺は今、リズベットのの中の子宮を思い切り突いたんだ。

しかし初体験と同時に初絶頂とは、本当に希に見る逸材だなりズベット。

「あうう……マサヤさんのおちんちん、おつき過ぎるよお」

「辛いか？」

「ううん」

リズベットは愛おしそうに自分のおまんこに納まっているチンポの根本に触れる。

「とても気持ちいいのお……身体がどっか遠くに飛んでっちやいそうなぐらいにいい」

「それはよかった。だが君はキリトを寝取るんだろ？ だったら自分で腰を振らなきゃダメだぞ」

「わ、分かってるわよ。でもこんな大きいおちんちんを自分で出し入れなんてできるのかな……」

言葉だけ聞くと不安がつているように思えるだろうが、実際は逆で、リズベットは瞳を輝かせ唇をニヤリとさせている。これから自らを沈ませる快樂の海を前に、歓喜を抑えることができないでいるのだ。

「いくわよ……んーっ……」

ぬちゆうう……。

俺のペニスがリズベットのおまんこから引き抜かれていく。

「んほおおおおうっっ！」

ぶちゅっ！

リズベットが腰をおろし、ちんぽは再び愛液の海の中に浸った。

「あふんっ、ああん！ うほっ、んほあんっ、ふっ、はっ、はっっはうん……あああんっっ、あんっあんっあはんっ！」

腰を上下に動かし、リズベットは幾度となく俺のチンポを吐き出し



ては飲み込んでを繰り返す。

額から汗を飛ばし、舌をだらしなく出して恍惚とした表情を浮かべる様は、完全に快樂の虜である。

「どっ、どうっ？ んはっ……気持ち、良い？ マサヤさあんっ！」  
「ああ、なかなかのもだよ。初めてにしては上出来だな」

「よかつ……あんっ、ああんっ！」

リズベットの言葉は最後まで続かなかった。

俺が下から腰を突き上げたからだ。そのまま俺はズンズンとチンポを子宮の奥へ突撃させる。

もう腰の振り方まで覚えただろうし、あとは俺の好きに責めてもいいだろう。というかもう我慢できねえ。

大丈夫、今のリズベットならキリトを寝取るなんて余裕だろう。並の野郎ならとつくにリズベットの腰使いでイッてるはずだぜ。キリトも例外ではあるまい。下手したらフェラでイクんじゃないか？

「ンヒッ!? はうんっつ、あへあっ……!!」

俺が突き上げるたびにリズベットの喘ぎ声が部屋に響きわたる。彼女は息も絶え絶え、全身を汗でびっしょり濡らし、窓から差し込む夕日に照らされ身体が艶やかだ。

おまんこは愛液でぐっしょりで、俺の股間周りまで湿っているほど。

「なんっで……んひっ、マサヤさんっが……あへあっ！ 責めてるのお!？」

「リズベットにも気持ちよくなってもらおうと思ってさ」

「あたしならアンツ……とつくに気持ち良いのにいん、んほう!？」

そんなのは当たり前だ。俺のチンポをなんだと思ってるんだ。

お仕置きしたくてしたくてしょうがないな。ったく。これが終わったら絶対にアスナを調教しに行くぞ。あいつ相手なら遠慮なく極Sの限りを尽くせるからな。

「そらイクぞリズベット。しっかりと精液を受け止めろよ！」

「んひああん！」

ずちゅっ・ちゅっぶちゅっ！

腰を最高のスピードで動かし、リズベットのおまんこを破壊するかの勢いで俺はチンポを突き入れる。

「覚えておくんだリズベット。これが最高のチンポだってことをな。わかったな?」

「はひいいいんっつ!」

「良い子だつ!」

ぶびゆるるるっ!!

「んひああああああんっつっ!!」

リズベットの絶頂と俺の絶頂が重なった。

どぶっどぶ……どぶりっ。

俺の精液がリズベットのおまんこに注がれていく。

そうだ、しつかり全部飲み干せ。

そして覚えるんだ。俺のチンポの固さを、大きさを。

お前のおまんこは、もう俺のチンポの形に変形してるんだ。

ほかのチンポを入れたところで……。

★

「はあはあはあ……」

リズベットは肩で息をし、俺の胸元に頭を預けてぐったりと身を預けていた。

俺は彼女の頭を優しく撫でてやる。

おまんこからは俺の精液がコポオ……と泡を立てて流れ出ていた。

「リズベット、これでキリトを寝取れるぞ」

「……ねえ、そのことなただけど」

「なんだ」

「あたしだけじゃなくて、みんなでキリトを共有するんでしょ?」

「だったらあたしだけで寝取るんじゃないかって、ほかの子もいたほうがいなくなつてあたしは思うんだ」

「なんだ、そんなことか。それなら俺も考えてたよ」

「ホントに!」

「ああ。まあ、リズベット次第だけだな。どうする、ほかの女の子もこちら側に引き入れるか」

「もちろんよ。アスナにキリトを奪ったところを見せつけてやるんだから」

「そうか」

ふふふ、リズベットの目が怒りの炎で染まってるよ。親友のはずのアスナをこうも敵視できちやうぐらいに、リズベットは俺に染められたってことだな。

奴隷になってないのは業腹だけど、これはこれで良い駒になってくれそうだな。

「あ、そうだな。言おうと思ってたんだけどさ。あたしのはリズって呼んでね。そのほうが、その……親しみがあるっていうかさ」

「わかったよ、リズ。俺のことは……」

様付け、ないしご主人様と呼べ。

と言いそうになるのを抑え、俺は「何でもない」と誤魔化しておいたのだった。

## 第5話 プロ調教師の躰は古き良き時代のお尻叩き

「わざわざタクシーまで呼んでくれなくてもよかったのに」

「いや、もう夜だし、女の子の一人歩きは物騒だろ」

もし夜道で無理矢理襲われて調教された挙げ句ソープに売り飛ばされたりしたらどうするんだ。俺だったらもつとスマートに事を運んでソープに売るけどね。

俺とリズはホテルの前にいる。呼んだタクシーがハザードを点滅させて待っていた。すでに日は落ち、辺りは街灯の明かりをメインの光源にする時間となっている。

俺はリズベットの頭を撫でてやる。淡い茶色の髪をすいて、サラサラとさせた。

「はふう……」

リズが吐息を漏らした。今や頭を撫でることさえ愛撫だと感じてしまう身体になっているようだ。パンツもきつと濡れているだろうな。

俺は耳元でそつとつぶやく。

「じゃあ、もうひとりの件、頼んだぞ」

「任せてよ。細かいことが決まったら連絡するわね」

「ああ。リズならアスナに勝てるよ」

「あんなビッチに負けるつもりないし」

ふふん、と得意げに鼻を鳴らし、リズはタクシーに乗って帰った。凄いな洗脳。親友のアスナが今やビッチ扱いですよ。というかりズも相当なビッチだけだな。

「あー疲れた」

調教師の顔を隠し恋人ごっこなんぞやっていたせいだ。

頭を撫でるだあ？

女の頭部に触れるときなんてイマラチオの時か土下座させて頭を踏みつけるときはいずれかしかかないだろうが。

「ストレスは発散しないと。健康のために」

けけけつ、と笑い、俺は踵を返しホテルに戻った。

アスナはどうしてるかなーっと。



『アスナちゃん調教部屋』に行ってみると、アスナは仏頂面で俺を出迎えた。相変わらず制服姿で、今は右足首と鉄球が鎖によって繋がれ、ベッドの上にぺたりと座っている。

部屋は清潔に保たれていた。もちろん、事が終わった後に清掃員が隅々まできれいにしているからだ。

ちなみに清掃員は全員が中年のオッサンである。事を終えてすっぽんぽんの大股開き女を見ながら仕事ができるということとで、うちの清掃仕事は知る人ぞ知る人気職業だったりする。

アスナもいろんなオッサンにおまんこやらアナルを見られたんだろうな。

「何の用よ」

アスナが挑戦的な目を向けてきた。おいおい、今まで調教されてたんじゃないのかよ。鉄の心の持ち主かアスナは？

「言っておくけど、わたしはあなたなんか屈したり……」

「身の程を知れよ」

「えっ」

アスナがビクツと身体を震わせた。俺の声音があまりにも低く発せられたせいで、恐怖心が芽生えたのだろう。もちろん狙ってやっている。

「うちの調教師たちから男が部屋に入ってきたときの礼儀を教わったはずだろう。知らないとは言わせないぞ、アスナ」

これまで『アスナちゃん』と呼んでいたのを呼び捨てにした。これもまた狙っている。

何かが違う。もっと、怖くなった。

そうアスナに思わせることが俺の狙いだ。そしてアスナは狙い通り勝ち気さを失い、怯えた表情を露わにしている。

「だっ、誰があんなこと……す、するもんですか……」

「口を慎めこの雌豚が」

俺はアスナへと近づく。アスナは「い、いやあ……」と胸元を腕で

隠し、涙目になっている。

ベッドにあがった俺はアスナの転がし、無理矢理四つん這いの格好にさせた。さあ、お仕置きの時間だ。

「もつと尻を突き出せっ」

「あうう」

哀れな声をあげてアスナは言われたとおり尻をより高く持ち上げた。ピンク色のパンツが垣間見える。俺がすぐにスカートをペろんとめくったから丸見えになったけどな。

「アスナ、主人が帰ってきたらまず何をするか言ってみろ。調教師が教えたとおりにな」

「……………」

「喋りたくないか」

アスナの尻を揉みながら俺は言った。パンツ越しに触る尻肉というのも実に良い。布の質感と尻の肉感が合わさって、男を幸福感で満たしてくれる。アスナも「んっ…………んふう」と声を漏らしていた。

「雌豚が。感じてんじゃねえよ」

パンツ！

「きゃふんっ!?!」

何をしたかって？

もちろんスパンキングさ。アスナみたいな反抗期のガキや調教中の女にはこれしかない。古き良き時代はお尻叩きで躰をしたって言うしな。今は俺のストレス発散っていう意味合いが強いけどね。けけけっ。

「おら言えよ。男が部屋に入ってきたら女はどうするんだ、ああ?」

「だっ、誰が、きゃあんっ!」

ぱんっ、ぱんっ!

俺の平手打ちがアスナの尻肉に炸裂する。もつとも、パンツ越しじゃまだ痛みは軽減されてるか。

「まだ言わねえか。じゃあ直接尻に叩き込んでやる」

「いやあ! 言いますっ、言いますからこれ以上お尻を叩くのはやめてえ!」

涙を流し懇願するアスナ。嗚咽を漏らし、ぐすつぐすんつと鼻をすすっている。少し苛めすぎたかな。少しは優しくしてやるか。

「大丈夫だよアスナ。そのうち尻叩きも気持ちよくなるから」

そう言っつて、俺はアスナのパンツをずり下ろした。これが俺の優しさです★

「お願いします……っ、ちゃんと教えられたこと言いますから！ 男の人が部屋に入ってきたら三つ指をキヤアん!？」

パアンツ！

渾身の力を込めた一撃が、アスナの尻肉を直撃した。右のお尻に俺の手形が赤く残った。

「言うのが遅いんだよ」

「あうっ、くはっ！ んあああっ！」

パンツパンツパアンツ！

アスナの悲鳴が部屋にとどろく。だが……

「んふっ、あはう、んひいんっ……」

徐々に声が甘くなってきた。スパンキングされて感じ始めているんだ。ためしにおまんこをいじってみると、ぬちよりと俺の指がアスナの膣内へ埋没していく。

「んはあ……」

「へっ、嫌だっつて言ってる割には俺の言うとおりにスパンキングでも感じるようになったな、アスナ」

「ハッ……ち、違うわよっ。わたしは別に！」

「いいから言えよ。男が入ってきたらどうするんだ？ 言わないと今度は流腸の刑にするぞ」

「かっ……言いますっ、言いますからあ！」

嫌々と首を振り、アスナは調教師に教わったことをそらんじてみせる。

「ま、まず……男の人がキヤツ!？」

パンツ。

俺はアスナの尻をまた叩いた。最近のガキは言葉を知らないな、まったく。

「男の人、じゃないだろ。殿方、だ。それに奴隷は敬語だろう」

「は、はい……。殿方がお部屋に来ましたら、まず三つ指をつけてお出迎えをして……。そ、それから」

「それから?」

アスナは逡巡するも、俺が平手の構えを見せると慌てて続ける。

「それからつ、ご挨拶をしてすぐにズボンとパンツをおろし、おち……おちんちんを舌で洗って差し上げます」

「で?」

「おちんちんが大きくなったら、口内で射精するか膣内で……。その、するかでキャアンツツ!」

パンパンパンツ!

アスナの尻は今や猿の尻みたいに赤くなっている。

「一番大事なところを誤魔化すんじゃない。罰はこの後しつかり受けてもらうからな」

「うう……。酷いよお……。ぐすつアアンツツ!」

パンツ!

「言いますう! ……口内で射精するか、膣内で種付けセックスするかをお聞きます。口内射精をご希望なら、そのままフェラを続けて射精していただき、精子は……。飲み干します」

「膣内の場合は?」

「膣内をご希望の場合は……。じ、自分からショーツを脱ぎ、殿方が所望なさったらそのショーツは殿方のお、お顔に……。お顔に、穿かせてさしあげます、パンツの股間の部分が鼻のところにくるように……。それから壁に手を付いてお尻を突き出し……」

「突き出し?」

「おま……。おまんこに、種を植え付けて……。いただき、ます。射精が終わったら感謝の意を述べ、おちんちんを舌でお掃除いたします……」

「まだあるだろ?」

「うう……。射精の後は尿意を感じやすいので、おトイレをご希望するか伺います。もしおトイレを所望された場合、は……。場合は……。その、あの」



「アスナ、牛乳浣腸って知ってる？ 俺はいつも二リットルはブチ込むんだ。そうすると女は妊婦みたいに腹がふくらんで……」

「おっ！ おトイレを……希望の場合はあ！」

アスナちゃん、牛乳浣腸を恐れて大慌てで続きを再開しましたとさ。

「……わたしのお口を便器代わりに使っていたいただきます。殿方の尿は、もちろん飲み干し……ます。うう……うっ……すん」

身体を震わせながら、アスナはどうか言い終えた。もちろんこの模様は撮影してあるぞ。

「ふふん、よく言えたぞ、アスナ。後で俺相手に実践してもらうからな。もしできなかつたらまた百人ファックを……」

「し、しますっ、しますからあそれだけは……！」

アスナが泣きじやくりながら俺に抱きついてきた。よしよしと頭をなで……るわけがないだろ。そんなのはリズ相手だけでたくさんだ。

ではここで、俺本来の優しさをお見せしよう。

俺はアスナの首に、赤い首輪をつけてあげた。首輪にはもちろんリードがついていて、俺が握っている。

「こ、これは……？」

「首輪だよ。俺からのプレゼントだ」

ね？ 優しいでしょ？

ほら、アスナも涙を流して喜んでるよ。

人によつてはただ泣いてるだけにしか見えないかもしれないけどな。



「アスナ、トイレ行くか？」

「行くっ、行きますっ！」

俺の提案にアスナは首をブンブンと縦に振った。

やはりな。スパンキングしてるときから股をもじもじとさせていたからすぐに分かったよ。トイレに行こうにも脚は鉄球に繋がってるし、そもそもこの部屋にトイレはないわで、アスナは我慢するしか

なかったのだ。

差し入れとして実は携帯用トイレをいくつかやっていたが、すでに全て使い果たしてしまったようだし。

何せここは調教部屋だ。奴隷用のトイレは別の場所にある。奴隷用トイレは何種類かあるが、今回はあそこにしよう。

「よし、じゃあ連れてってやる。行くぞ」

足首から鎖を外してやり、俺はリードを引っ張った。

「あうっ」

アスナは引きずられるようにベッドからおりて、立ち上がるうとした。が……

「おい、何いつちよまえに人間やってんだよ。アスナは今ペットだろうが。首輪つけてるときは四つん這いで移動するんだよ」

「そんな馬鹿なことできるわけが……!」

「牛乳浣腸二リットル」

「ひい!」

アスナはすぐに床に手をつき四つん這いになり、散歩する犬のように俺にリードを引っ張られて部屋を出た。あまり厳しすぎてアスナが壊れてもいけないな。たまには優しくしないと。

「アスナ、もしおしっこを我慢できなくなったら、そこらへんで適当に脚をあげてシャツとして構わないぞ」

俺ってばどうしてこんなに優しいんだろ。

「ふんっ」

アスナはそっぽを向いた。まだ元気そうで何よりだ。

★

アスナを散歩するのは実に愉快だった。何せここはホテルだ。当然のことながらほかの客もいる。もともと、事情を知った客ばかりなので問題はないが、アスナにしてみれば好機とゲスな目で見られまくるわけで、しかも誰も助けてくれないとあつては絶望するしかない。「どうして誰も助けてくれないの……!」

廊下で犬歩きをしながら、アスナはきよろきよると辺りに視線をやっては戸惑い、そして恥ずかしがり、希望を失いつつあった。キリ

トさえどうにかすれば陥落なんだがなあ。

「おや、京藤さんではありませんか」

俺たちが行く少し先に、禿頭のでっぷり太った中年の男がニタアと脂ぎった笑みを浮かべていた。

「あ、どうも、太居（ふとい）さん」

太居さんは俺の顧客の一人で、都内の某所でソープ店を構えている社長さんだ。よく奴隷を買ってもらっている上客である。

「今日は宿泊ですか？」

「ええ。久々に一週間も休みが取れましたな。ゆっくり羽を伸ばしながらうちの店で働けるような上玉の女の子がいないか品定めをしているところです」

「はははっ、休み中も仕事しちゃってるじゃないですかー」

「はっはっは、確かに。京藤さんはお散歩ですか。いやあ微笑ましいですなあ」

太居さんがアスナを品定めした。アスナはビクビクツと怯えている。

「なあに、ただの調教ですよ」

「それはそれは、仕事熱心ですな」

俺たちの会話を耳にしたアスナの顔色が、さーっと青ざめていくのが分かった。このホテルが従業員だけでなく客も変態ばかりだということを理解したようだな。

「それにしてもこの娘、かなりの上玉ではありませんかっ。ほーら、おじさんが可愛がってあげるよお」

太居さんの手がアスナのスカートの中へのび、尻をナデナデとする。さすが太居さん、ペットの可愛がり方をよく知ってるな。犬でたとえるなら頭を撫でてやるのと同じ。女は尻を撫でてやる。これ基本ね。

「ヒイイツ」

アスナはビクツと身体を震わせ立ち上がろうとするが、そこを俺が頭から押さえつけた。

「アスナ、太居さんはお前を可愛がってくれているんだ。ありがたく

「思え」

「は、はい……」

アスナは歯を食いしばり、太居さんのされるがままになっていた。その太居さんとはいうと、尻をなでるだけじゃ飽きたらず、顔ごとスカートの中にもぐって尻をクンカクンカとしている。

「すはーっ、すはーっ！」

「んっ、んふうっ……」

三分ほどして太居さんは気が済んだのかスカートから顔を出した。顔を油でテカテカとさせて、ハアハアと息を荒くしている。

「これは素晴らしいお尻ですな！ そうです、調教が済み次第私に売却しては？ 高く買いますよ」

「えっ……」

アスナが絶句し、俺を見上げた。売らないでっ、とでも願っているんだろうな。

「いやあ、申し訳ございません。この雌豚は売り物じゃないんですよ」「それは残念ですなあ」

横目でアスナを窺うと、ヤツはホツとしているようだった。甘い。「最終的には公衆便所として無料で開放しようかと考えているんです。壁に穴空けて尻だけ出させてね」

「なるほどっ、ボランティアというわけですな。世のため男のため、なるほどお。奉仕の精神をもお持ちになっているとは、さすがは京藤家のご子息だ」

「いやあ、褒めても何も出ませんよ」

俺と太居さんは声をあげて笑った。

え、アスナ？

アスナは大喜びで号泣してたさ。

## 第6話 プロ調教師はオークションで小遣い稼ぎをする

「これのどこがトイレなのよ！」

俺が連れてきたトイレに入ると、開口一番アスナが吠えた。吠えるだなんて、躰がまだ足りないようだな。

「いやトイレじゃないか。見ろ、ちゃんと便器が口を開けて待ってるだろ」

「あれが……便器ですって？」

アスナの顔色が驚愕に染まる。

ここは地下にある奴隷用トイレ。広さは体育館ほどで、その広大でサッパリと何も無いスペースの中央に、中年のオッサンが仰向けに寝て口を開けている。

「そうだ。あのオッサンの顔面の上でウンチングスタイルの格好で用を足すんだ。簡単だろ？」

「ウンツイ……ッ」

カアツとアスナの頬が赤くなった。

「そもそも誰なのよあのやつ」

「このホテルの清掃員さ。アスナがあの人みたいに便器になって百人におしっこかけられたときに掃除したのがあのオジさんだ。百人に犯されて放心状態だったアスナに惚れちゃったらしいぜ。けけけっ」

「じゃ、じゃああの人……わたしの裸を……っ」

「もちろん見てるだろ。ていうか、おまんこから精液ダラダラ垂れ流しておしっこで全身びしょ濡れになったアスナに、あのオジさんは惚れたんだよ。分かってないなーアスナは」

「分からないわよ！……じゃあほかの人たちは何なの？」

アスナが言う『ほかの人たち』とは、便器男がいるスペースをぐるりと囲むギャラリー席である。二階席もちろん完備している。ギャラリー席は満員で、若いやつから年寄りまで幅広い年齢層の男たちがいた。ざっと見て五百人はいるかな。

要は、体育館の真ん中でオッサンがアスナのおしっこ飲むためにスタンバツていて、その光景を見たくて客がたくさん来ているということだ。

客の目当てはほかにもあるがな。くくくつ。

「ほら行くぞ」

「嫌よっキヤアンツ!」

はい、お約束のспанキングです。

「助けてえ……助けてキリトくん……」

アスナが涙声で訴えた。やれやれ、またキリトか。あんな線の細い男の何がいいんだか。

しくしくと涙をこぼしつつ、アスナは俺にリードを引っ張られて便器男のところへ。

「ほ、本当にするの?」

「ここではないとアスナはどこかでおもらしする事になるが?」

「それも嫌あ……うっ」

あわてた様子でアスナは内股になり股間を両手で押さえた。ははは、漏れそうになったな。もう膀胱は限界なんだろ。

案の定、アスナは恥も外聞も捨てて男の顔の上に立ち、

「く……っ」

顔を真っ赤にしながら、ピンク色のパンツを下ろした。スカートをたくしあげ、プリツとした形のいいお尻を露わにし、中年男の顔の上でウンコ座りをする。

「うわあアスナ超恥ずかしいカツコしてるなあ。アナルが丸見えなんだけど」

わざと大きな声で俺が言うと、会場がにわかに盛り上がる。

「マジかよっ」「おいもつと尻突き出せよ!」「アナルペろペろしてえ」

「そのままウンコも出しちまえよっ!」「ヒヤハハハッ! そりゃあいいなっ!」

歓声なんだか野次なんだか分からない声が客席からアスナに向けて飛ばされる。

アスナはあまりの羞恥にギュツと目をつむり、ウンコ座りの態勢の

まま固まっていた。アナルもキュツとすぼまっているのが可愛いね。便器のオジさんはというと、

「はあはあはあ……」

興奮しきりで口を開け、アスナの放尿を待ちかまえている。

「皆さーんっ、お静かに願いまーす。あまりうるさくするとアスナがおしつこに集中できないのでー」

俺がアナウンスすると、会場がシーンと静まり返った。先ほどまでの喧噪が嘘のようである。アスナの息づかいと、便器男の荒い呼吸だけが響いている。

「静かなほうがしずらいよお……」

アスナがカアッと耳まで赤くしている。そりやそうだろうな。それが狙いで静かにさせたんだから。

「……うっ、出したくない……出したくないいん……っ」

ここに至ってまだ我慢しているらしい。アスナは太股とお尻をプルプルと震わせ、アナルをヒクヒクとさせながらも尿意に耐えているようだ。

俺はしゃがみ、アスナの尻をサワサワと撫でてやる。

「ひゃあんっ!？」

「撫でられるだけで感じちゃってるし。ったく、こんだけ尻とアナルとマンコを丸見えにして、しかも大勢の男たちに見られてさあ、お前にもう失うものなんてないだろ」

冷酷に俺は言ったのだが、アスナはなぜかキツと俺を睨みつけた。

おいおい、ここは泣くところじゃないのかよ。

「わたしには、彼が……キリトくんが……いるんだからあつ」

「ふうん」

そのキリトも近々アスナの元から離れていくだろうけどね。リズのやつ、うまくやつてるだろうか。

「オジさん、ちよつとだけアスナのおまんこ舐めていいぜ。クリをペロツとやればそれでもうオーケーだと思うよ」

「ありがとうございますうー!」

オジさんが瞳を輝かせて喜んだ。俺って本当に良いことしてるわ。

「そんなっ、ダメ！　ダメなのお！　今舐められたらわたし……っつ」  
焦るアスナになどもちろん構うことなく、便器男は長い舌で、れろーんとアスナのおまんこを舐めた。

「ひゃいひゃいひんっっっ！」

ビクビクビクッ！

アスナがお尻を思わず持ち上げようとするが、俺がそこをスパンキング、「キャンッ!？」

あえなくアスナは元のウンチングスタイルに戻る羽目に。

「ら、らめえ……もう、ぎやまんできにゃいよお……」

涙をボロボロ流しつつもアスナは賢明に尿意を封じている。ポタポタ落ちる涙は便器男の顔に降りかかり、それをヤツは旨そうに舐め取っている。

さあ、フィニッシュだ。

便器男がアスナのクリトリスに舌をはわし、チロチロツつと愛撫してやる。すると……

「アアンツ！　らめらめえツ！　でじやうううっ……出ぢやうのおおおおん!!!」

シヤアアアアアアアア!!

アスナの股間からおしっこがほとぼしった。

静謐な空間に突如起こった大洪水。その恥ずかしい音が響かないはずがなかった。これもまた俺の演出である。

黄金色の天然水は、放物線を描いて見事に便器男の開いた口に注がれていく。

「んぐっ、んぶっ、ぐっふう！」

オジさん、アスナの聖水を美味しそうに飲んでおります。

「アスナ、狙いもばつちりじゃないか」

俺にしては珍しく褒めてやったのだが、アスナはそれどころではなかった。

シヨオオオオオオオ……!!

「いやあああ……止まらないよ……。おしっこ止まらないのおおおん！」



シヨオオオオという耳に心地よい音を立てて、アスナのおしっこはおまんこから放出され続けている。

観客はもちろん興奮しきり。

「うほう！ おしっこきたーっ!!」「めっちゃ美味そうなんだけどー!」「おしっこついでいくくらで販売されるんだ!?」「ワシがトイレットペーパーの代わりに舐めてやってもいいぞお!」「おまんこお、おまんこお!」

盛り上がっているようで何より。

「ずっと我慢してたせいだろ。やれやれ」

「あつ、あなたがトイレに行かせてくれないからあ!」

「だから俺はここに来る前に言っただろ。したくなったら足上げてシャーツと壁に向かってやってもいいってさ」

「酷いよお……」

悔しさと羞恥、そして快感が混じった複雑な表情を見せるアスナ。

俺はアスナの尻をさすりながら話しかける。

「おしっこするのが気持ちいいんだよなあ? 我慢して我慢してやっ  
と出せたんだもんなあ?」

「ううう……」

赤面しうつむくアスナ。ここで睨みつけなかったということは、調教が少しは進んだと思っ  
ていいのかな?

ちろちろちろお……ちよろ、ちよろっ。

無限にわき出る泉のようだったアスナの黄金水も、徐々に勢いを失い水滴だけとなった。

オジさんが名残惜しそうに「ハッハッハッ!」と最後の一滴まで飲むと舌を突きだして頑張っている。いつも働いてくれている清掃員にサービスしてやるか。

「いつも掃除ご苦労様。雌豚どものおしっこや愛液が染みたシートなんか洗うの大変だよねえ」

「いえいえそんなつ、私は好きでやっております……」

だろうな。まあそれは置いて。

「今日はあなたに特別ボーナスを与えますよ」

「ボーナス、ですか？」

「そう、ボーナス。これはささやかながら、俺からの特別……」  
ぐちゆるるるっ！

「あひゃうん!？」

アスナが喘ぎ声をあげる。

俺がアスナのおまんこに人差し指と中指を突き入れたのだ。そして膣内で指を暴れさせ、アスナマンコを壊しにかかる。

「ボーナスです」

くちゅじゅじゅくちゅじゅくちゅるるう！

今やアスナの股間は大音響のスピーカーカーとなっていた。卑猥な音をこれでもかというほどに響かせて、観客の男たちを魅了している。

おまんこは時として楽器にもなる。京子さんと親子丼させた暁には、二重奏にして奏でよう。

「あっあっあんっあうっひゃ！ あひいん！ やめ……やめてえん……！ 壊れちやうう！ おまんこがあ、わたしのおまんこ壊れちやうよおおツツツ！」

アスナが喘ぎ声と悲鳴、涙と笑顔をない混ぜにして訴えた。迫り来る快感が理性を崩しにかかり、彼女は今にも堕ちそうになっている。ていうか、もうほとんど壊れてるけどね、アスナ。自分から『おまんこ』とか言っちゃやう辺り、相当奴隷根性が叩き込まれてる。あともうちよつと、もうちよつとだ。

キリトさえどうにかすれば……。

「さあ、アスナ。清掃員の方にボーナスをあげようぜ」

「イクイクイグウウウツ！ イツちやうのおおおんつつっ！」

ぷしやあああああああああ!!

「あはあああああん!!」

噴水の如く潮を吹くアスナのおまんこ。清掃員のオジさんはその天使の潮を顔中に浴びて、幸せそうに笑っていた。

★

「さて、じゃあ次はオークションの時間だぞ、アスナ」

「オークションって、まさか……！」

アスナが顔色を恐怖に染める。

用を足し終え、再び四つん這いのポーズになった彼女は、潤んだ瞳で俺を見上げている。これは勘違いしてるな。

「いや、アスナをオークションにかけようってわけじゃない」

「よかったあ」

「かけるのはアスナが着ている制服と下着だよ」

「えっ……」

きよとんとした後、カアツと頬を朱に染めるアスナ。

「特別に今だけは立つことを許す。アスナ、立って服を一枚一枚脱ぐんだ」

「で、でも、制服がないと学校に……」

「安心しろ、もう退学の手続きは済ませてあるから」

「そんなんっ！ 嘘よ……嘘よお!!」

アスナが俺に体当たりをしてきた。が、とても弱々しく、まるで俺に抱きついてるような具合だった。ポカポカと俺の胸板を叩いているが、マッサージとしか思えない。

「嘘じゃないさ。京子さんがもう退学の手続きを済ませたってさ。アスナの居場所ももうあの学校にはないんだ」

「うそ……うそよ……」

ちなみに嘘である。へえ、そんなにあの学校にいたいのかアスナは。京子さんが手こずるわけだぜ。

これは絶対退学させないとな。校長が俺の側についてるから簡単だろうけど、やはりアスナ自身に退学させないとつまらない。そういう状況は着実に構築されつつある。楽しみだ。

呆然とするアスナをよそに、俺は司会進行を務める。

「さあ皆さんお待ちせしましたー！ これより、こちらの雌奴隷が通う、学校の制服オークションを開催いたしまーすっ！」

うおおおおおと男たちの野太い歓声がこだまする。

「さあまずはこちらっ」

……って、おいおい。まだショック受けてるのかよ。

アスナは未だ衝撃から立ち直っていないらしく、半ば突っ立ったま

ま意識がない。

え？

退学は嘘だってバラせばいいって？

ふうむ、それも一考だが、アスナのためにならないだろう。どの道退学するんだから、シヨックを受けるなら早い方がいい。自分の優しさに感動すら覚えるよ俺は。

さてと、とりあえず尻でも叩いて目を覚ませるか。

いや、ただの尻叩きじゃダメだなこりゃ。

腰に備え付けていた奴隷用の鞭を手にし、俺はアスナの尻へ打ち込んだ。

ピシヤアッ！

「はうううん!?!」

アスナをシヨックから強制覚醒させることに成功した。

「ほらアスナ。もうオークションは始まってるんだ。さっさと制服を脱いで下着姿になれ」

「え、ええ？」

「また打ち込まれたいか？」

俺が鞭をチラつかせると、アスナは「はいいい！」と上擦った声で返事をし、上着を脱ぎ、シャツを取る。ピンクのブラが露わとなり、なかなか豊富な胸が納まっていることが明らかになった。

「おいおい意外とデケエじゃねえかよっ」「乳首は何色なんだ?」「パイズリしてもらいてえ!」

観客たちもアスナのおっぱいに注目している。

さらにアスナがスカートのホックを外し、すんとスカートを下ろした。上下ピンク色の下着を身にまとったアスナがお披露目される。

俺はリードを引き寄せアスナの体を自分の側へ持つてくる。

「きやつ」

「おっと」

危ない危ない。危うくアスナが転んでしまうところだった。女の子を助けるなんて、俺もキリト級にヒーロー気質があるかも。

アスナの肩を抱き、俺は床に落ちている制服のスカートを拾い上げ

る。

「まず最初に制服のオークションから！ 一万円から始めたいと思いますっ！」

「五万！」「十万！」「二十万っ！」「くっ、二十一万！」「せこいことしてんじゃねえっ、二十五万！」「ワシは三十万じゃ！」

観客席から次々と入札額が提示されていく。さすがは美少女の制服。一体どこまで値が上がるのか。

「ほらアスナ、みんなが君の制服を欲しがってくれてるぞ。よかったな」

「気持ち悪いだけよっ」

おっと、まだ元気が残ってたのかよ。

と、思ったが、アスナは消沈した様子で事の成り行きを眺めていた。

「キリトくん……」とつぶやきながら。

またキリトかよ。

結局制服は四十五万の値が付けられて落札された。

「続いてはブラとパンツのセット、いつてみましょう！」

俺の声に、観客席が総立ちとなる。

「そっ、そんなっ……売らないわよ！ 絶対に売らないんだから！」

アスナは胸元を両腕で隠し、俺を睨みつけている。

「だいたい、ここで下着を売ったら部屋に戻るときどうするのよっ。裸で戻れって言うの!？」

「そうだ」

平然と言う俺に、アスナは言葉を失ったのか口を酸欠の金魚のようにパクパクとさせている。

「お前はまだ自分の身の程を分かっていないようだな。いいか、お前はもう奴隷なんだ。雌豚なんだ。俺に前も後も犯されて、百人にファックされおしっこブツかけられ、挙げ句にこんな大勢の前でおしっこしたんだぞ？ もういい加減分かれよ、今の状況をさ」

「そんなあ……そんなのって……でも、き、キリトくんが……」

「キリトねえ、ふふふ」

俺の笑みが意味深に映ったのだろう。アスナはハツとして俺に

くっつかかる。

「あなた……っ、まさかキリトくんにも何かしたの!？」

「してないしてない。俺が手を出すのは女だけだし。誰が野郎なんかに手を出すかよ」

「ならいいけど」

分かりやすいなあアスナ。ホツとか胸をなで下ろしてるし。

期待してるぜ、リズ。

「じゃあこうしよう。ここにいるおよそ五百人に種付けファックされるか、それとも下着を脱いでオークションにかけるか、どちらかを選ばせてやる」

「そ、そんな……!」

「優しいだろ、俺は」

「鬼い！ 地獄に落ちればいいんだわっ!」

「はははっ、そうだねー、地獄に落ちちゃうかもねー」

嘲笑しながら、俺はアスナの顎をつかみ、グイッと持ち上げ、そして笑みを消して睨みつけた。アスナは急に変わった俺の態度に恐怖を感じたらしく、瞳を大きく見開き、その身を震わせる。

「だったら、なおのこと今を楽しまないと」

「お、お願い……酷いことはもう……」

「そうだな、酷いことはもうたくさんだよな？ で、どっちにする？」

五百人に種付けされるか、下着をオークションに出すか」

「……………オークション」

かすれた声でアスナは答えた。それからおもむろにブラを外し、パンツを脱ぎ始める。それはそうだな。

アスナが生まれたままの姿を晒した。おっぱいとアソコを手で隠しているが、もちろんそんなことを俺が許すはずがない。

「アスナあ？」

俺が睨みを利かせると、「は、はいい!」と良い返事をして隠していた部位もオーブンにした。ピンク色の乳首とうっすらと生えたマン毛に客が拍手喝采する。

「アスナ、ブラとパンツを持って掲げろ」

「は、はい」

右手にブラ、左手にパンツを手にし、それを掲げてみせた。五百人フアックを恐れてか、はたまた俺を恐がっているのか判然としないが、アスナは従順になっている。良い傾向だ。

「それではブラとパンツの競りに移ります。こちらはセットとなりますのでご了承ください。それでは十万から！」

「五十万！」「八十万！」「百万だっ！」

さすがは美少女の脱ぎたてほやほやのパンティとブラだ。値の上がり方が尋常ではない。男たちが目を血走らせて入札額を叫ぶ。

「百二十万」「ぐぬう……ひゃ、百五十万！」「二百でどうだあ!!」

オークションはヒートアップの一途を辿っている。俺は満足気に観客達を見渡す。ん？

観客の中に、ひとりだけ冴えない表情を浮かべている男がいた。興奮する客の中にいるせいかな、その男の盛り上がりには欠ける面構えは、白いYシャツに垂れた醤油の染みのように目立った。

年齢は二十代半ばぐらいだろうか。やや面長の顔立ち、頭に赤いバンドナを巻いているのが特徴的だった。

いや、バンドナの彼は興奮はしているようだが、どこか戸惑っている感じなのだ。アスナのほうを見ては目を反らし、またちらりと盗み見ては恥ずかしそうに俯いている。

もしかするとこういう場が初めてなのかもしれないな。そりゃ戸惑って当然か。

オークションはというと、三百万を突破し、なおも落札されずに値が上がり続けている。だが上がり方が鈍くなっている。こちらで誰かが落札か、と思ったそのとき、

「五百でいかがかな？」

落ち着いた声音で誰かが言った。入札額が跳ね上がった。客たちが驚愕し、そして沈黙する。ここまですな。

「はいっ、ブラとパンツは五百万で落札されましたーっ。落札者の方はどうぞこちらへっ」

俺に促され客席から現れたのは、俺の予想通りの人物だった。あん

な金額提示できるのはこの人ぐらいだよね。

「太居さん、落札おめでとうございます」

「いやいや、京藤さん、感謝するのはこちらのほうですよ」

そう言って、太居さんは太くてゴツゴツした五指でアスナの尻を撫で回す。

「ひゃっ、ひゃん……」

アスナは恥ずかしそうにしつつも、切なそうな声を上げた。なんだからだで気持ちよくなっているようだ。この後たつぷりと可愛がってやる。

「こんな美少女はそうめったにありませんからな。この娘のおっぱいとお尻が包まれていた下着とあつては、たとえ一億払ってでも買いますとも」

「それはオーバーですよお、はははっ。さあアスナ、太居さんにパンツとブラを渡して」

「ど、どうぞ……」

恥ずかしそうに目を伏せ、アスナはブラとパンツを太居さんに手渡した。むっ、パンツの渡し方がなっていないな。後でしつかりと躡ておかないと。

太居さんはいとうと、アスナの礼儀知らずなところなど気にすることなく、脂ぎった満面の笑みを浮かべてブラをクンカクンカしている。

「うほおっ、素晴らしい匂いだ。これだっ、これだよ！ お次は……」

じゅるりと涎をしたたらせて、太居さんはアスナのパンティの股間部分へ顔をうずめる。それからスー、ハーと深呼吸。

その様子を呆然と眺めるアスナがなかなかどうして見物です。

「アスナ、男はみんなこういうことをしたいんだぞ。キリトだってそうだ」

「きっ、キリトくんは違うもんっ」

へえ。キリトは違う、か。それはどうだろうか。

「おおっ！ これは当たり前じゃないか！」

突如、太居さんが歓声を上げた。アスナはいとうと、「え、当たり？



何なの……」と戸惑っている。

「おめでとうございます、太居さん」

「感謝したいのはこちらですよ、京藤さん。いやあ、実に見事。股間のところにしつかりとウンチのあとがこびり付いてますよお」

「いやあつ、見ないでえー!」

アスナが慌てて太居さんからパンツを奪おうとするも、俺がグイツとリードを引いたのでそれまで。

太居さんというのアスナウンチおパンティに大興奮し、観客たちにパンツの股間、その茶色い部分を見せつけて叫ぶ。

「ご覧くださいみなさん! アスナちゃんのおパンツに茶色いものが付いてますよーっ!!」

うおおおおお! と歓声を上げる男たち。

「マジかよハハハッ!」「あんな可愛い顔してて茶色ってwww」「匂いかぎてえ!」「浣腸しちゃってくださいよマサヤさん!」

おっと、浣腸の声がかかったか。

しまったな、ここまで盛り上がるとは思ってなくて浣腸は持ってこなかった。

「申し訳ございません、本日は浣腸を切らしておりました」

ええええええ、と観客席からブーイングが。

「お詫びと言ってはなんですがお客様方に、こちらにおりますアスナにクンニをしていたかどうかと思うのですがいかがでしょう? もちろん、無料で」

最後の「無料で」の一言で、男たちは満月を見て狼になったかのようについた。言うまでもないが歓喜だね。

「え、そんな……あんなにたくさんの方が、わたしのアソコを……」

「ぶっ込まれるわけじゃないんだからいいだろ。気持ちよくヨガれてお前も嬉しいよな」

「嬉しいわけがキャツ!」

アスナを無視し、俺は彼女を後ろから抱え、脚を開かせた。アスナのおまんこが約五百人の男達の前で解放される。

パツクリと開いた秘部からは、すでに涎が垂れてる。

「いやあ！ 見ないでえっつ！」

「さあどうぞー。順番に並んでペロペロしてくださいー」

男達が殺到したのは語るまでもないだろう。

じゅるるるっ。

「あああああんっ！」

ぬちよ、ペちゆ、ちゆるっ。

「はふっ……んあっ、ひゃっ」

れるれるれるるーん。

「んふああああ……」

クンニと一言で言っても、その舌使いは十人十色。しゃぶりつくような勢いで吸いつく男もいれば、ゆつくりと堪能するように舐める奴もいる。

アスナも舐め方によって反応が変わり、なかなかどうして面白い。

どうでもいいけど腕が疲れた。途中で従業員（調教師）にアスナを抱えるのを代わってもらい、俺は観客達を眺めた。みんなテカテカした良い面構えになってるねえ。女の子の愛液は百薬の長だ。お？

ひとりだけ、列に並ばずにアスナがクンニされている様子をおっかなびつくり見ている男がいた。

さっきのバンダナ男だ。

この場にとけ込めてないみたいだな。初めてだと確かに異様な雰囲気驚くよな。でもせっかく来たんだから楽しんでいただかないと。

持ち前のエンターテイナー精神に突き動かされ、俺はバンダナ男に近づく。

そこで俺は聞いた。

男が、彼の名をつぶやくのを。

「キリトよお、俺あどーすりやいいんだあ……？」  
キリト。

バンダナ男は、たしかに『キリト』と口走った。

何者だ、こいつは……。

いや、分かる。バンダナ男がキリトの側にいるということぐらい

は。そしてアスナとも知り合いなし友人なのだろう。

彼は今、この問題をどうやって解決するべきなのか思考しているのだ。まずはキリトに報告して……などと考えているのかもしれない。マズいな。

これではすべての計画が水泡に帰してしまう。いつそ奴を捕まえて……。

だがここでバンダナ男を捕獲してしまっただけでは騒ぎになって、今後のイベント運営に支障をきたしてしまう。この奴隷トイレ&オークションイベントは、知る人ぞ知る裏世界の人気イベントであり、俺の大事な収入源でもある。

さて、どうしたものか……おやあ。

俺は見逃さなかった。

バンダナ男の股間が、テントを張っているのを。

ズボン越しでこれだけ勃起してるのが分かるんだ。間違いないだろう。

バンダナ男は問題をどうやって解決しようか、などと考えてなどいないのかもしれない。

アスナの痴態を前にし、興奮を抑えられないでいるんだ。さしずめ、「クンニしちやおうかどうかしようか」などと悩んでいるのだろう。しかしアスナに姿を見られては自分のことがバレてしまう。さあどうしようよ、てな感じかな。

……試してみるか。

俺はアスナの元へ戻り、アイマスクを彼女につけた。

「やあつ、何も見えないよお！」

「そのほうが気持ちいいんだよ。これは調教の一環なんだ、アスナ」

嘘は言っていない。いずれはアイマスクをつけてのプレイも考えていたからね。

アイマスクをアスナに付けた途端、バンダナ男がクンニの列に並んだ。分かりやすいなあ。

そしてついにバンダナ男の番が回ってきた。

アスナのおまんこを前にし、彼は緊張の面持ちでゴクリと唾を飲み

込んだ。

「お客様、遠慮することはございません。お好きに味わってください」  
俺がそう促すと、男は恐る恐る舌を出し、ピトツ、と舌先をアスナのクリトリスに付けた。

「あひあっー！」

アスナの喘ぎ声が合図であつたかのように、男はその後猛然とクンニを続ける。ジュルルルツとアスナの汁をすすり、勃起したクリトリスを丹念に舐め上げ、鼻をおまんこに押しつけて香りを堪能していた。

その様子を俺はスマホで普通に撮影していた。何かに使えるかもしれないからね。バンダナ男はというと、堂々と撮影する俺になど気づくことなくクンニを続けていたのだった。

バンダナ男を調べるよう従業員（調教師）に指示を出し、俺は一端  
奴隷用トイレから退出した。

それから三時間後、俺が戻ってくると、アスナが広い空間にひとり、ぐったりした様子で床に放り出されていた。もちろん全裸です。

あれからずっとクンニをされ続け、おまんこもふやけているに違いない。

「はふう……」

吐息をつくアスナ。彼女の瞳はとろんとしていて、口元から涎がつつーっと垂れている。いったい何度イッたことやら。良い顔になつてきたな。

「さあアスナ、部屋に戻って男の出迎え方を復習するぞ」

「……はい」

## 第7話 プロ調教師は『飴一つに鞭百発』を心がけている

裸のままアスナを犬のように散歩させながら、『アスナちゃん調教部屋』へ戻ってきた。その間、ホテルの宿泊客がアスナを品定めしていたのは語るまでもない。

何人かは今夜の相手をさせてほしいと金額を提示してきたが、もちろん断った。この雌豚に仕事をさせるのはいささか早すぎる。何をしでかすかまだ分かったもんじやないからな。

「ほらっ、一分だけ外で待ってやるから準備しろ」  
「きやうっ」

アスナの尻をひっぱたいで部屋の中へ入るよう促す。

「あの、準備って……？」

「部屋の中に着替えがある。それを着て俺を出迎えろ。調教の成果をテストしてやる」

「わかり、ました……」

ドアを閉じて、俺は一分間、ではなく、結局十分ほど待つことになった。

リズからメールが来たので返信したり、オークシヨンのときにいたバンダナ男の情報が従業員（調教師）からメールで送られてきたからだ。

リズは上手く立ち回っているようで、キリトを寝取るもうひとりの候補と会う約束を取り付けたとのこと。

そして気になるのがバンダナ男だ。

あのオークシヨン、参加には住所氏名年齢から電話番号、さらには身分証の提示まで求めている。身分証に至ってはこちらでコピーを取っている。

もしも外で情報が漏らされたりしたら大変だからな。あなたの情報はすべて握っていますよ？ と分かせておかないとね。

で、バンダナ男だが、もちろん彼もオークシヨンに参加するために

個人情報をおープンにしている。

バンダナ男の名は壺井遼太郎となっている。アスナのスマホにはなかった名前だが、『シノン』やら『エギル』やらとプレイヤーネームらしき名前も多く散見されたアスナのスマホだ。

壺井氏とはゲーム内で知り合い、プレイヤーネームで登録してあってもおかしくはない。

絶対に壺井はアスナたちと何らかの関係を持っている。アスナを見ていたあの目は知り合い以上の者を見て戸惑っていた具合だった。何より『キリト』の名を口にしていたので。

絶対に何かある……何かが……って、そうか。

俺には『リズ』という駒があるじゃないか。

『話が変わるけど、壺井遼太郎という名前に心当たりはない？』

という文面でメールを送信する。

返事はすぐに来た。

『えーっ、なんでマサヤさんがクラインの本名知ってるのー？ あたしやアスナ、キリトの仲間で、SAO時代からの友達だよ。今はいっしょにALOプレイしてるの』

俺は笑った。笑わずにはいられないか。

夢中でアスナにクンニしてたぞ彼。

とんだ仲間もいたもんだ。



クラインが加わったことで今後の予定に修正が必要になった。さでどうしようか……と考えていたら、いつのまにか時間が十分も経ってしまっていた。まあ、奴隷だしいくら待たせてもいいんだけどね。さてと、男の出迎え方ができるかテストしないと。

ノックもせずに俺はドアを開けた。すると、  
「お、お帰りなさいませ、マサヤ、さま……」

アスナが玄関先で三指をついて低頭していた。サラサラとした髪の毛が背中に、そして床にまで垂れかかっている。

垂れているのは髪だけではない。

おっぱいもまた床に垂れていて、乳首が床についていた。

アスナは今、透き通った白いショーツを身につけただけの、トップレスの格好でいる。首輪はリードを外した状態で未だ装着している。従順な様子から判断し、俺があらかじめリードを外しておいたのだ。「ふむ」

よく出来ている。足下で女が三つ指をついてる姿はいつ見ても良い眺めだ。これが本来、女が会得すべき礼儀なのだが、昨今の雌豚どもは分かっていない者が多い。

「良い格好だぞアスナ」

「ううう……」

うめくアスナ。プライドが崩れていく様は見物だね。

アスナは察して、俺のズボンへと手をかける。慣れない手つきでベルトを外しズボンをおろした。その直後、アスナは「キャツ」と短く悲鳴をあげた。

俺のトランクスのテントの張り方に驚いたのだ。まあ、モノが大きいからねえ。

「ぱ、パンツをおろさせていただきます」

そう言つて、アスナは赤面しつつトランクスを下ろした。途端、ビインツと俺の巨根がそそり立った。

あまりの大きさに目を見張るアスナ。おいおい、初めて見たわけじゃないだろうに。君のマンコもアナルもコイツを飲み込んだじゃないか。

恐る恐る両手で俺の肉棒を包み、アスナは言う。

「し、失礼、します……」

アスナの舌が俺の力りにちよこんとつけられた。それからレロレロと舌でチンポを洗っていく。

「レロツ……ちゅっ、ちゅぶう、ぴちゅちゅ……ああむっ」

口を大きく開け、俺の肉棒をくわえたアスナ。

その様子はまるで、赤ん坊が母乳を飲むかのようにも見える。口をすばませてチンポをチュウチュウと吸う姿は実に愛らしい。

アスナの口内はたっぷりの唾液で満たされていて、チンポがとろけてしまいそうなほどの快感が股間に集中する。

「ぶはっ」

一端肉棒から口を放し、今度は竿全体を舌で洗っていくアスナ。暖かい舌が裏筋をなぞり、片や右手は玉袋をサワサワと撫でて愛撫を忘れない。奴隷として以前に、これは女として生まれたら必須の作法だ。

「ちろっちゆるっ……レロッ、あむっ」

またもアスナが俺の肉棒をくわえ、今度はバキュームフェラを披露する。

「ジュボジュボウ！ ジュボボボツジュルルウ〜ツ！」

卑猥な音を立て、涎を口元から垂らし、アスナは一心不乱にチンポをむさぼる。瞳は潤んでいるが、泣いているわけではない。

この輝きは、期待だ。

これからこのチンポを入れてもらえるという素晴らしい未来に、期待に胸を弾ませているのだ。それも無意識に。こうして雌奴隷は性欲に支配されていく。

男に奉仕する喜びを得て、奉仕すらも自身への愛撫へと変えてしま

う。  
雌奴隷の理想型だ。アスナはまさに、その境地へと達しようとしている。

ただひとつ、キリトという汚点が邪魔をしているが……。

「アスナ、そろそろイキそうなんだが」

「じゅるるう……ぶはっ。は、はい、かしこまりました。いかがしましょうか。口内射精と種付けセックスがございますが……」

「両方で」

「えっ……!?!」

俺の答にアスナが目を見開いた。想定外の答に驚いているらしい。

「あ、あの、両方ってングウ?!」

アスナの頭を掴んで引き寄せ、ペニスを口にねじこんだ。根本まで、しっかりと……お、喉の奥に当たった。

「ングウん！ んぐグッ!!」

苦しいらしく俺の太股をパンパンと叩いてくるアスナ。口は顎が



はずれそうなほどに強制的に開かされ、太く長いちんぽが喉の奥まで突き刺さっているんだからムリはない。

アスナは目からポロポロと涙を流している。

そうかそうか、泣くほど嬉しいか。

「アスナ、減点だぞ。言われたとおりには口内射精と種付けセックスを受け入れればよかったんだ。男がみんなどちらか片方を選ぶと思つたら大間違いだ。減点した分はこの後ベッドでお仕置きしてやるからな」

イマラチオ状態から解放してやる。

「ごふああ！ けほつけほうっ」

「ほら、むせてないで続ける。まずは口内射精だ。最後の一滴まで精液を飲むんだぞ。飲み方はわかっているだろうな？」

「はいい……」

潤む瞳でチンポを見つめ、それから再びアスナはフェラチオを再開する。

「ああむう……ちゅぶつ、ちゅぶぶぶつ……じゅるっじゅるぶちゅるるっ！」

頭を引いては押し、引いては押し。

額に汗を浮かべ、髪を振り乱し。

口元からは唾液と我慢汁が混ざった汁をしたたらせ。

絶え間なく続くディープスロート。

雌奴隷アスナは俺のチンポを射精に導かんとする。

「そろそろイクぞアスナ。しっかり口の中でチンポミルク受け止めるんだぞ。精液は貴重なんだ。もし一滴もこぼしたら、罰として俺の拳をおまんこにブチ込むからな。くくくっ」

「んうう!!? うううん!!?」

嫌々と首を振り、俺の尻を両手で抱え込みにかかるアスナ。精液を一滴もこぼすまいと必死になっている。ふむ、良い姿勢だ。その状態で俺の尻をフェザータッチできれば完璧なのだが、それは京子さんクラスにまで堕ちた雌豚でないと無理だ。

「グツツ……出るッ！」

ドピユルルルツツ!!

「んぶうツツ!」

アスナの口内に俺の精液が放たれた。アスナは肉棒をしつかりとくわえ、俺の尻を抱え込んでホールド。体制を整えてゴツクンに臨んでいる。

ブピユツ、ドピユルルツ、どぶつどぶつどぶりっ……!

「んぶうツ、んぶううっ……」

どぶつ、とぶつ……。

最後の一滴までアスナに放出し、俺は肉棒をアスナの口から引き抜いた。ぬるーんと唾液と我慢汁が混じった汁が、アスナの舌先とペニスのカ리를繋げている。

「さあアスナ、まずは口の中のチンポミルクを味わうんだ」

「んっ……くちゅつくちゅるる、クチュクチュ」

口をムグムグとさせ、アスナは精液のテイステイングをする。舌にからまり口の中に行き渡る精液の味は、しっかりとアスナの記憶に残ったことだろう。

「飲め」

「んっ……んぐっんぐっ……こくっごくっごくっ……ゴクリ……けぶっ。飲み、干しました、マサヤ様」

「ふむ、よくやったぞアスナ」

「え? あ、はい」

褒められたことを意外に思ったのか、最初こそ戸惑いの表情を浮かべたアスナだが、すぐに照れて赤面、顔を俯かせた。ちよろい。

飴と鞭って大切なんだよね。俺の場合は鞭百発に飴一個ぐらいの割合だけど。そのたまに与えられる飴にコロツときてしまう雌は多い。

アスナもそのひとりだったようだ。

こちらが教えてもないのにお掃除フェラに取りかかっている。

「ちゅぶっちろっちゅるるっ、ぷはあ。……マサヤ様、おトイレはいかがいたしましたでしょうか。射精したので尿意を感じているのではないかと……」

「そうだな、頼む」

「かしこまりました……」

アーン、と口を開けて人間便器となったアスナ。飴の効果は絶大な。すっかり俺の言いなりになってる。しかもどこか嬉しそうに。

今のアスナの頭の中に、キリトの姿は欠片も浮かんではいまい。行為が一通り終わればまた思い出すだろうが、そのとき感じるのはキリトへの罪悪感だろう。『どうしてわたしはキリトくんのことを忘れてしまったの……』と。忘れていいんだよ、アスナ。

「ほうほっ（どうぞ）」

キリトのことを忘却した便器アスナが言った。

「うむ」

俺は狙いを定め、アスナの口元に……

シヨボボボツ

用を足した。

「んううううツツ！」

ジョロロロツと音を立ててアスナの口内へ尿が注がれていく。

「ゴクツゴキュツんぐふう……ツ」

喉を鳴らし、アスナは俺の尿を飲んでる。雌奴隷の喉の渴きを潤すにはやはりコレ。いつそホテル内のトイレ全てをこのタイプのトイレにしてもいいな、んつ。

チンポをふり、最後の一滴までアスナの口の中に入れてあげた。

「あの、汚れを拭いてさしあげますね」

そう言つて、アスナはカ리를チロイロと舌で舐め取る。それからチンポをくわえこんで、尿道に残っている尿を吸い取ろうと頑張っている。

なかなかやるじゃないか。

あえて何も言わずにアスナに任せていると、アスナは再び俺のチンポを勃起させた。

「そ、それでは……」

アスナはおもむろに立ち上がる。いやらしい自分がどんな体をしているのか鑑賞してもらうために。調教の成果である。

ふむ、いいね、アスナの立ち姿。

トップレスなので当然のことながらおっぱいは晒している。なかなか大きな胸で、乳首も乳輪も薄ピンク色。言うまでもないが乳首はピコツと立っている。この雌豚が。

胸が大きい割にウエストはくびれていて、腹周りに無駄な肉は一切付いていない。

視線をヘソの下へと移し、下半身へとやる。

透き通ったショーツは、あまりに透き通りすぎて肌の色と混ざり合っている。局部の毛がどのように生え揃っているかが分かるほどである。

そしてアスナのおまんこは、今やビショビショに塗れているためその形がくつきりと露わになり、割れ目もショーツ越しに認識できるぐらいだ。アスナはというと、頬を上気させてうっとりとした表情を浮かべている。「今だけは快楽に身を任せよう」なんて腹なのだろう。奴隷になる女の初期段階だ。やりまくっているうちに「今だけは」の部分が無くなるけどね。

そして今日は俺が手ずからやりまくってやる。けけけっ。

俺はアスナのおっぱいを驚掴みにする。

「あふんっ」

甘い声をあげるアスナ。良い顔をしている。

よく考えてみるとアスナの胸を揉んでやるのは初めてだな。そんなわけで俺は丹念にもみほぐしていく。乳首の周囲をフェザータッチし、ツンツと乳首を刺激してやると、

「ひゃんっ」

アスナ、喘ぎ声を我慢出さず。唇から涎を垂らしてる始末だ。

乳首をつまみあげてギューツと引っ張って遊んで、それから俺は右側の乳首に吸い付いた。

「んふうっ、あふっ、あんっ！」

ちゅるっちゅるるるっ。

口の中の乳首を舌で転がし愛撫する。アスナの乳首はより固さを増していく。

その後もおっぱいの間に顔を挟んで柔らかさを堪能したり、アスナの尻をショーツ越しにたっぷりねっとりと撫で回した。また良い尻してるんだよねえこの娘。

「パアンツ！」

「キャンッ!? な、なんで……言いつけを守ってるのにい」

アスナちゃん涙目です。

いやあ、良い形の尻なんदैついね。俺がつい叩きたくなっっちゃうのも仕方ないでしょ。でもアスナもなんだかんだでスパキンキングで感じちやってるから結果的には愛撫になっっている。

「何痛そうなのフリしてんだよ。悲鳴の中に甘さが入ってたよアスナ」

俺はアスナの股間をさすりながら言った。案の定、アスナのおまんこはさつき見たときよりも濡れ方が進み、股間の周囲の透けてる範囲が広くなっている。

「なんだよこれ。お漏らし状態じゃないか」

「言わないでえ……」

「恥ずかしがることなんてない。お前は雌奴隷なんだ。おまんこを濡らし、いつチンポを入れてもいいようにしておくのがアスナの役目なんだ。わかるな？」

「……はい」

「それじゃあそろそろ」

「かし、こまりました……。では、種付けセックスを……」

アスナが恥ずかしそうにショーツを脱いでいく。太股から足へと、透けたショーツが下ろされ、アスナはそれを手に取り俺に訊く。

「しよ、ショーツは、お持ち帰りなさいますか？」

「そうだな、頼む」

「うっ……か、し、こまり、ました……」

カアッと頬を染めるアスナ。自分が今まで穿いていたパンツを男にあげるといふ行為に対し、未だ抵抗があるようだ。しかも、

「そ、それでは……それではっ、失礼しますう……」

うう、と涙目になりながら、アスナは俺の顔にパンツを穿かせてい

く。もちろん、俺の鼻梁にはアスナのおまんこが触れていた部分がしっかりと密着している。

すーっと鼻で呼吸してみると、かぐわしい雌の香りで鼻腔が満たされた。

「また大きくなってる……」

アスナがさらに大きく勃起した俺のチンポを見て驚いている。

「アスナ、おまんこの香りはチンポに活力を与えるんだ。もしお前が客を相手にしているときに客のチンポが勃起してなかったら、おまんこを使っていろいろしてみろ」

「いろいろ……?」

「パンツの匂いがかがせたり、顔にまたがって顔面騎乗したりな。女としての基本的なたしなみだ。覚えておけ」

「は、はい」

「じゃあ種付けしてやる。尻を向けろ」

「かしこまりました……」

俺の命令通り、アスナはこちらに尻を向け、壁に手を突いた。プリツとしたお尻を高く突きだして、アナルからおまんこまで丸見えである。ヒクヒクとおまんこをうごめかせ、アナルはキュツとすぼまっている。

「ど、どうぞ……その、わたしのおまんこ、好きに、使って、使って……ください、マサヤ様」

やや言いよどんではいるものの、最後まで男へ礼儀を尽くしたことは評価に値するね。調教前のアスナだったらこうはいかないよ。

さあ、本番の時間だ。

アスナの秘部にチンポをあてがい、ヌルヌルと縦に動かしてクリトリスを刺激してやる。

「ひゃふんっ、アンツ」

快感に酔った声をアスナが漏らした。プシュツと軽く潮まで吹いてるし。体も良い塩梅に調教されてるね。

「入れるぞ」

「お願いします……」

それじゃあお言葉に甘えて。

ずぶんツツツ!!

「はうううううんツツ!!」

アスナが獣のようによがった。

「アアツアアアあ……あウううウ……んっふうっ」

ビクビクツ、ビクンツ……。

ビクビクと尻と脚を痙攣させているアスナ。俺の一突きでイッてしまったみたいだな。一気に奥まで突いて子宮に達したからね。

それにアスナはここに来るまでに多くの男にクンニされまくってアソコはチンポを欲していたに違いない。そこでようやく待ちに待ったチンポを、それも特大のを挿入されたんだ。気持ち良くないはずがない。本人は認めないだろうけどな。

「おいおいアスナ、本当に気持ちいいのはこれからだぜ?」

「ほええ?」

ズチュツ!!

「うほうツ!!」

パンパンパンパンツ!!

「あんあんああんツ! あっあっあふ! あうっ!? アフツ、あああんっ!」

ズチュチュチュ!

クリクリクリ。

「ひゃああんっ!? くっ、クリトリスまで……ツ!? あふあん!」

そう、俺はピストンと同時に右手でアスナのクリトリスをつまみ上げている。二本の指で挟み、クリクリツと刺激を加えると……

「イクイクイクくんツ! またイツちやうのおおっ!」

はい、アスナちゃん、早くも二度目の絶頂を迎えました。まだまだこれからだけどな。

「アスナ、二回の絶頂程度じゃ俺の調教は終わらないぞ。二十回は最低でもイカせないとな。射精はそうだな、七発ぐらいかな」

「しよんにやあ……。じんじやううう……。わたし死んじやうよおお……」

そう言いつつも、アスナの唇がわずかにつり上がるのを俺は見逃さなかった。まだたくさん気持ち良くなれると分かって、自分でも気づかないうちに喜んでしまっているのだ。すっかりアへ顔になっちゃってまあ。

おまんこの締めりもそれに応えるかのようにキュウウつと締まってくる。

ちよつと現実を思い出させてみるか。これも調教の一環だ。

「キリト」

「……………ッ！」

俺が『キリト』の名を口にした途端、アへッていたアスナの表情がサーツと青くなった。

「キリトが今のアスナ見たらどう思うだろうなあ。愛想尽かせて別の女に乗り換えちゃうんじゃないのかあ？」

例えばリズとか、と内心で付け加える俺。

「そつ……………そんなことはない。」

アスナはそう続けることができなかった。そうだろうねえ。

「まあ仕方ないよなあ。これだけアンアン喘いで」

パンパンパンツッ！

「アンアンツッ！」

「おまんこから愛液垂らしまくってさ」

クリトリスを刺激していた指を、チンポが入っている膣内に同時に入れて愛液をすくい取った。グチヨグチヨになった指先をアスナに見せつけてやると、彼女は「うう」と目を伏せた。

俺は続ける。

「しかもアナルまで貫通済み」

ズブツと愛液で濡れた指をアナルに挿入。楽に入っていくし。

「うほっ！」

「その上飲尿までできるようになったし、中出しも何発されたことかねえ」

パンパンパンツッ！



「あうっ、そっ、れは……あはん！　あなたが、あなたがああんツ！」  
「違うだろ、アスナの体がチンポを求めてるんじゃないか」  
「そんなことはアンツ！　そんなことないですっ！」  
「ふうん」

俺は腰の動きをピタリと止めた。

「ふえ……っ？」

突然止まったピストン運動に、アスナは戸惑っている。

「ど、どうして、止まっちゃうの……ですか？」

くくくっ、慌てて敬語に直してやがる。いや良い傾向だよ。

「そりゃあアスナがチンポなんていらないうって言ったからだろ」

「それは、その……あのう……」

脚を内股にしてモジモジとするアスナ。おまんこが急激に締め付けを強くし、このまま精液を搾り取らんとうごめいている。

もう雌の体だな、アスナ。

「アスナのおまんこは俺のちんぽを欲しがってるみたいだぞ？」

「ちっ、ちが……！」

「違うのか。じゃあ抜くか」

ぬるううう……。

徐々に引き抜かれていく肉棒。だが、

「待ってくださいっ！」

「ん？　どうしたアスナ。チンポがいららないんだろ。今抜いてやるから」

「……………いで」

「聞こえないんだが」

パアンツ。

はい、お馬鹿な娘にはお尻叩きです。だがそれすらもアスナは「あはっ」と嬉しそうに受け止めている。

「……………抜かないで、ください」

「まだ何か言うことがあるんじゃないのか？　嘘をついたら何て言うんだっけ？　こんなこと子供だって知ってるぜ？」

「ご、ごめんなさいっ。わたし、嘘をついてました……。ほ、本当は、

本当は……」

アスナは言いづらそうにしていたが、ついに……

「本当は、マサヤ様のおちんちんが欲しいんですう！ おまんこがうずいて仕方がないんですっ！ お願ひしますっ、いっぱいセックスしてくださいいいい！ このままじゃ変になっちゃうよおお……ぐすっ」

自分が今どうして泣いてるのか分かってるのだろうかこの女は。セックスしてもらえなくて涙流してるんだぞ？

笑いを堪えるのに苦労するよ。

でも、ついにここまで堕ちたか、アスナ。だが完全ではないだろうな。

「キリトのことは忘れるか？」

「……………はい」

嘘だな。俺は一瞬で看破した。わずかにうかんだ戸惑いの表情を、俺は見逃さなかった。やはり完全ではなかったか。想定内だけどね。

まあ、いい。今だけでも快樂の海に沈めてやろう。

キリトのことを、一瞬たりとも思い出させないほどの淫欲にまみれた世界へ。

ずぷりツツツ!!!

「くはツツツ!!」

肉棒を再びアスナの膣内に挿入する。奥まで突き入れ子宮にカリが到達した。

「あふうううん……」

アスナはうつとりとした表情を浮かべ、目は虚ろだ。俺が指をアスナの口元に持つて行くと、彼女はチンポと勘違いしたのかペロペロと舐め始めた。奴隷根性が骨の髄まで染み込んでいるようで何より。

パンパンパンッパン！

「あっあっあっあんッあふつくはッ！」

ピストン運動を激しくし、俺はアスナを責め立てる。アスナはどうかまだ立ちバックの姿勢を保っているようだが、脚はガクガクと震え、今にも崩れ落ちそうだった。

そろそろだな。

「アスナ、出すぞ」

「はひいんツ、おまんこ種付けお願いしますう！」

ドピユルルツ!!

「あはああああんツツツ!!」

ドプツビユクツビユルル!

「あふツあんツ……えっ、そんなにやあ、まだビクビクして出てりゆううよお」

ビユルツビユルツビユル!

「あうっ、あふツ、あふううん……」

どぶっ……びゆる……とぶ……。

射精が止まった。ふう、なんて気持ちいいマンコなんだ。不覚にもたくさん精子出しちまつたぜ。

親子揃って名器だなあ。太居さんがアスナを欲しがっていたけど、これは絶対に売れないね。手元で飼育しておきたいよ。

俺がチンポを抜くと、途端に、

ピユツピユツ!

アスナのおまんこから精液がピユツピユと勢いよく放たれた。

「凄いな。これじゃあまるでアスナが射精してるみたいじゃないか」

「あうう、だってえマサヤ様がたくさん出すからあん……」

アスナの言うとおり、彼女の膣からクポオ……と精液がとめどなく流れ出ている。

自分のおまんこが気になるらしく、アスナはしきりにクチュクチュと指でおまんこをいじり、精液がどれぐらい注がれたか確認している。

だが、

「あふっ、あんツ、はふう……」

確認しているつもりが自分で自分を愛撫し、吐息をついてうっとりしている。オナニーじゃないか。

「アスナ、子宮をザーメンタンクとして使ってもらったんだぞ。何か言うことがあるんじゃないのか？」

「あつ……」

オナニーアスナは慌てた様子で立ちバックの姿勢から俺に向き直り、正座をする。全身をしつとりと汗で濡らし、床にはポタツポタツとおまんこから垂れる精液が早くも水たまりを作り始めている。

アスナは三つ指をつけて頭を下げる。

「おまんこのご利用、あつ……ありがとう、ございました……」

「おいおい、尿意は訊かないのか？ 射精するたびに便器が必要か訊ねるんだぞ？」

「も、申し訳ございません……っ」

「まあいい。許してやる」

俺はアスナの頭を優しく撫でてやった。数少ない飴を与えたのだ。

案の定、アスナは潤んだ瞳で俺を見つめ、うっとりとした表情を浮かべていた。頬を朱に染めてな。

もちろん便器にはなってもらったけどね。スッキリしたー。

それから俺とアスナはベッドに移動し……

「アンアンツあふうんっ!!」

M字開脚させたアスナを容赦なくピストン運動で責め立てたり。

ブウウウウウン。

ずちゅずちゅずちゅうう！

「あああああツしゅごいよおお！」

「この振動がたまらないだろ？」

「たままないのおおおん！ いやあイクイクイクううう！」

極太バイブをおまんこに入れて膣内をシェイク。愛液が泡立ってジュルジュルと卑猥な音が響いたり。

「んちゅっ、んあつ！ あうっ!!」

「ちゅるるっ、ほら、クンニされてるだけじゃなくてアスナも舐めろ」  
「でもお」

パアンツ！

「あうう！ 舐めますっ、舐めさせていただきますう！ ……じゆるじゆぼっじゆぼっ」

アスナがチンポを深くくわえ込むたびに、俺の眼前でアスナのおまんこが迫ってきたり離れたたり、尻をフリフリしたりと実に良い眺めだ。

何をしているかって？

もちろん69さ。

アナルもおまんこも堪能できて、しかもチンポは女の口の中で洗われる。互いに気持ち良くなれるし、これほど素晴らしいテクニクはないな。

「じゆぶぶぶうじゆるっ……あふん！ アンツ……アツアツ、クリはあツ、クリトリスばかり舐めたらあイツちやううん！」

ビクビクツと痙攣し、アスナは果てた。ばたりと倒れたせいで彼女の局部が俺の顔に押しつけられた。舐めてやると、

「ぎやふうううツ」

とあえぎ声を盛大に響かせ、またイツてしまった。

なんて具合に69をたっぷり楽しんだかと思えば。

「ほらもつと腰を動かせっ」

「んっんっ……」

「遅いっ」

「ごめんなさあああいい。でも気持ち良すぎて腰が溶けちやいそうで……」

てな具合にアスナに騎乗位させたりと、俺はアスナを思う存分楽しんだ。もちろんこの雌豚がどれだけ成長しているかのテストも兼ねている。これでつまらなかつたら京子さんには悪いが見込みがないということ、太居さんにでも売却していただろう。

だが、

「くはツ、アンツ、はふうううん！」

腰を上下させてチンポを自ら下のお口でジユボジユボさせているアスナを見るに、このテストは合格としていいだろう。

まあ、どうにも腰使いがなっちゃんないけどね。これは経験不足だ

なあ。これから何千回と騎乗位をやらせれば上手くなるだろ。

「お前は奴隷なんだよ、アスナ。あらゆる体位に対応できなくてどうする。これからしつかり覚えていくんだぞ」

「はいいいいん」

「仕方ないな、今回は特別に俺がイカせてやるよ」

「え、それって……アアンツ！ アツアツアツ！」

下から突き上げまくる俺。アスナはプルツプルツとおっぱいを揺らし、頭をガクガクと振って快感に支配されていた。

ぱちやつ、ぷちゆつ、ぢゅちゅう！

「あっあはっ、あひあ!!」

トドメとばかりに俺はアスナのおっぱいを揉みしだき、おっ勃てている乳首をコリコリと指で転がしてやる。

おっぱいとおまんこの二点責めに、アスナは頭を抱えて気が狂ったように首を振る。いや、実際にもう狂ってるねこれは。

快樂狂いだ。

素晴らしいねえ、うん。

「もうらめえツツ！ イツぢやうう……！ うほっ!? あっあっ……  
またイクイクなのおツツ！ くるくる来ちやうよおお！ ぎ持ち良  
しゆぎて変になっじやううううよお！」

ビクビクビクツツと痙攣し、アスナは俺の胸板の上に倒れかかる。

もうかれこれ二十回は絶頂を迎え、アスナはもうダウン寸前だった。

「はあ、はあ、はあ……」

おっぱいを俺の胸におしつけ、アスナは肩で息をしている。すっかり快樂に支配されたかな？

と思ったら、

「き……り、と……くん」

虚ろな瞳で、アスナはヤツの名を呟いた。

惜しいな。完全支配まであと一歩ってところか。もうほとんど堕ちたようなもんだけどね。

「アスナ、俺の肉棒入れたまんまダウンしないでくれないか。ダウン

するなら俺をイカせてからにしろ」

「きゃふううん!?!」

俺は再びチンポの突き入れを再開。それから俺が射精するまでの間に、アスナはさらに五回も絶頂を迎えたのだった。

## 第8話 見習い女王様は人の妹を白日を剥くまでイカせる

放課後。

本当は剣道部の活動があったのだけれど、桐ヶ谷直葉は部活には参加せずに学校を後にした。彼女はいつもの帰宅コースではなく、普段は行かない方角へと向かう。駅前だ。

直葉の足取りは自然と早くなる。

心臓が早鐘を打つのが自分でも分かる。

体が、熱くなってる。

ついついスクールバッグの中に意識がいつてしまうのを、直葉は止められないでいる。

バッグの中には、ピンクローターが入っている。

それは先日、リズベットがくれたものだった。

(ううう……リズさんなんて物をくれたのよお。でも……)

気持ち良かった。

これまで感じたことのないほどに。

直葉の脳裏に、ベッドの中で何度も絶頂に達した昨日の夜のことによぎる。

昨日の夜のことだ。

「んうううッ、んっ、んっ……はふっ……」

(気持ち良いよおおお……ッ)

オナニーをやめられない自分を恥じながらも、直葉はローターをクリトリスから離すことができずにいた。クリトリスはコリコリに固くなり、愛液がとめどなく溢れてくる。

隣の部屋には兄のキリトがいるというのに……。

『人によって感じるポイントは違うけど、クリトリスにローターをあててみるとまずイッチャうと思うよ』



そのリズベットの言葉通りしてみると、まるで体に電気が走ったような感じになり、直葉は体をビクンビクンツと震わせた。

つまり、イツたのだ。

それからはもう病みつきだった。

これまでもオナニーはたまにしていたけど、こんな快感を得たことはなかった。最初はパンツの中にローターを潜り込ませていた直葉だったが、気がつくとい糸まとわぬ姿となつて自分の豊満な乳房を揉みながら、

「んっ、んふっ、ひゃん……あっ、あううう……あひんっ！」

つい大きなあえぎ声も漏らしてしまう直葉。案の定、

「スグー？ どうした、体の具合でも悪いのかあ？」

隣の部屋からキリトが声をかけてきた。

「な、なんでもないよー？」

「そうか。もう遅いから早く寝るんだぞ」

「はあああいんうう……ッ」

返事をしながらローターでイッてしまう直葉だった。どうやらバレないで済んだようだ。

直葉は布団を噛みながら喘ぎ声を我慢し、何度も果てたのだった。

直葉とリズベットは互いの気持ちを知っていた。キリトのことが好き、という。

けれど直葉の場合はキリトの妹という立場もあつて、リズベットやシリカと違いあからさまな態度は取らないようにしていた。でないキリトが変に思われたりしてしまうと思つたからだ。

だが、気持ちを抑えていたつもりの直葉だったが、リズベットの目は誤魔化せなかった。

アスナやキリト、そしてリズベットたちがALOを始めてしばらく経つたある日のこと……

『リーファってさ、キリトのこと好きなんじゃない？』

唐突に、リズベットにそう指摘され、直葉ことリーファは度肝を抜

かれた。隠してたつもりだったのに……、と焦った。

それは休日の朝、ALO内でのことだ。

まだリーファしかログインしてなくて、誰かログインしてこないかなーと待っていたらリズベットが来た。そうしたら唐突に言われたのである。

(どどどどうしよ！ あたし妹なのに好きだなんて変に思われちゃうよお！)

厳密に言えば、リーファとキリトの関係は妹ではなく義妹で、血縁上は従妹。キリトに恋をしようとは問題はないのだけれど、周囲にはそういうふうには映らないだろうと思って直葉は自重していた。

が、リズベットには看破されてしまった。

でもリズベットは、そんなリーファを優しく受け入れていた。

『あたしもキリトのこと好きなんだよねー、アハハハ』

実にあっけらかんとしたものだ。それからふたりは、キリトたちがログインしてくるまでの間、互いの気持ちを語り合い、絆を深めたのだ。

その日以降、ちよくちよくメールのやり取りもするようになり、リーファとリズベットは日に日に仲良くなっていく。

リーファにとってリズベットは友達、というよりは先輩だった。単純に年が上、というのものもあるけれど、リズベットは明るく振る舞っているようでいてしっかりと周囲を見ている、そんなふうによりリーファの目には映った。

その姿はリーファに、リズベットを姉のように慕うようになるのに十分な材料となった。

時にはちよつとエッチなことを話したりすることもあった。何を隠そう、リーファにオナニーを教えたのはリズベットなのだ。

キリトのことを想うと辛い、そう打ち明けたリーファにリズベットが処方箋として出したのが、オナニーだったのである。

たしかにオナニーは気持ち良かったけれど、なんだか余計に切なくなるような気がして、リーファはそこまでのめりこまなかったが。

しかし、

『ふふーん、お姉さんがリーファに良い物をあげるよお』

昨日、リズベットが唐突に会いたいと言ってきて、会いに行ってみたら、ピンクローターをくれたのだ。

喫茶店で会っていたのでさすがに剥き出しではなく箱に入れられプレゼントのように包装されていたけど。

その日の夜、怖い物見たさで使ってみたりリーファだったが、ピンクローターは怖い物だったと痛感した。

この快感には抗えない…。

切なさなど感じる暇もない。アソコを中心に瞬く間に全身に広がる快樂に、リーファは完全に支配された。

自分の体が見す反応に説明ができなかった。

あたしの体なのに。

あたしの…：体なのにツ。

もしかして、もっと気持ち良くなれたりするのかな…。

そんなことを思っていたら、リズベットからメールが来たのだ。

『ローターは使ってくれた？ もし気に入ったら、もっと良いこと教えてあげるから明日会わない？』

リーファはすぐに『会いますっ！』と返信を送り、その後、明け方までオナニーに耽っていたのだった。

\*

「ゴメンゴメン、待った？」

「いえ、今来たところですよ」

手を振ってやって来たリズベットに、リーファは答えた。

ふたりは駅前のロータリーで待ち合わせをしていた。夕刻とあって、リーファと同じように学校帰りの制服姿の者が多く散見された。リズベットも制服である。

「じゃあ行くっか」

「え、あ、はい」

リーファの手を引き、リズベットがずんずんと歩き始める。

どこに行くんだろ、と疑問に思っていると、リズベットは駅前からどンドン離れていき、人の姿がほとんど見られない裏路地へと入って

いく。路地を抜けた先は寂しげな団地が広がっていた。

「あの、リズさん…どこに向かつてるんですか？」

「良いところよ。あ、いたいた。おーい」

リズが腕を振った先を見れば、一台の車がこちらに向かつてきていた。黒塗りの乗用車で、ろくに車の知識のないリーファにも、それが高級車であることが分かった。

リーファとリズの立っている横に車が停車する。

「さあ乗って乗って〜」

リズベットが後部座席のドアを開け、リーファに車内に入るよう促す。

「え、でも……」

「いいからいいからあ」

リズベットに背中を押され、リーファはあえなく車内へ納まった。リズベットが後に続き、ドアは閉ざされる。

「出していいよー」

リズベットがそう言うや否や、車はスーッと発進、団地を離れていく。



「ちよつとリズさんっ、どういうことか説明してくださいよっ」

いくらリズベットと仲が良いと言っても、ちよつと強引だし状況が全く読めない。いきなり車に乗せられて不安でたまらないリーファだった。

「大丈夫よ、リーファ」

「えっ……」

リズベットの指が、そつとリーファの右耳に触れた。指先がサワサワと皮膚の表面を撫でる。

「ひゃ……ッ」

思わずリーファは声をあげてしまった。それが喘ぎ声だとはまだ自分でも気づいていない。

「言ったでしょ、もっと良いこと教えてあげるって。だからね、これからその【良いこと】をしに行くの。でも、その前にい……」

ニヤアとリズベットが口角をつり上げる。瞳は怪しく光り、雰囲気も妖艶な感じに……。

彼女の指先はリーファの耳の表面を踊り、愛撫し続けている。サワサワ、サワサワア……。

「あふ、あつ……やつ、やめてリズさあん、運転してる人に……」

そう、誰が運転しているのかは分からないが、後ろ姿から判断するに男であることはたしかだ。

「見られちゃうよお……」

「気にすることはないわよ。ほら見て、後ろの席と前の席の間に透明なアクリル板みたいなので仕切りがあるでしょ。あれね、マジックミラーなのよ。こっち側から向こうが見えるけど、運転手からだところちが見えないの。しかも完全防音になってるからこつちの声は運転手には聞こえてないわ」

リズベットの言うとおり、透明の板が前と後ろを断絶するように取り付けられている。

(これなら平気……)

と、一瞬思ってしまった自分を、リーファは恥じた。

(何考えてんのよあたし!? リズさんとエッチなことするなんてあり得な……)

リーファの理性はそこまでだった。

「ぎゃふんっ!?!」

股間に何かが触れて、リーファは思わずのけぞってしまった。

リズベットのもう一方の手が、リーファの局部……それもクリトリスを、パンツの上から正確に触れ当てたのだ。

自分ではない誰かに性器を触れられるなどもちろん初めてのリーファ。自分で触るのはまるで違う感覚だった。

(リズさんのほうが、気持ちの良いやり方をよく知ってる……ッ)

リズベットの手がパンツの中に入ってきて、もぞもぞと動き出す。クリトリスを人差し指が探り当てた。

「あ……!」

「あはっ、クリちゃん元気になったみたいだね。こんなに固くなって

るよお」

耳元でささやくリズベツト。息遣いがリーファの耳に当たり、それすらも愛撫となる。そして、

コリコリッ。

「ああうッあふあんー！」

リズベツトの右手人差し指が、リーファのクリトリスを優しく撫でる。勃起したクリトリスはまるで喜んでいてるかのよう、指が走るたびに反動でピンツと勃つ。

「リーファのクリッて結構大きいんだね。こんなこともしやすいよ。ほーら」

「はうっー！」

指二本でクリトリスを挟み、リズベツトがクリをしごき始めた。大きいとはいえ男性器に比べればはるかに小さいクリトリスを、リズベツトは器用にしごいている。

シュツ、シュツ、シュツ。

「あつ、あうつ、あふん……ッ」

(車の中で何てことをしているんだろ、あたし……)

リーファはそう思うも、繰り返されるクリトリスへの愛撫、それと同時に展開される右耳へのフェザータッチ。その二点責めによって、冷静な思考は快感に上書きされる。

くちゅ、くちゅ、ぷちゅっ。

「りっ……リズさん、あたし、あたし……っ」

(もう、イツちやうよおお……！)

そんなリーファの心の叫びを読んだかのように、リズベツトがリーファを抱きしめる。

間近で感じられるリズベツトからふわりと漂う花のような香り。

耳を撫でるフェザータッチ。

クリトリスをつまんだりしごいたり、未だ続く局部への愛撫。頬をリズベツトの舌がチロチロと舐める。

体の各所から責め立てられ、リーファは快樂の海へと沈んでいく。そして、リズベツトが微笑みながら言った。

「いいよ、イツちやいな。思いつきりねっ」

「あああああ……ッ!」

「じゃあこれでトドメ」

リズベットがリーファのアソコの前に顔を移動させパンツをずらし、

ペロントツ。

舌でクリトリスを舐めあげた。途端、

「あふうふうふうんツツツ!! イクのイツちやうのおおお!!」

ビクビクビクツツビクツツビク!!

リズベットに抱きとめられながら、リーファは果てた。

「んふふ、可愛いよ、リーファ」

「あふう……」

チュツ。

リーファの唇にリズベットのそれが重なる。ちゆるちゆるとリズベットの舌が口内へ侵入していく。無意識のうちに、リズベットはそれに応えてティープキスをしていた。

「まだ到着まで時間があるわね。あと三回ぐらいはイケるかな」

「ほえええ?」

「さんかい? ……えっ、三回!?!」

「無理ですよリズさんあたしそんなにされたら死あふうふうん!?!」

その後、指に加えてローターまで使われ、リーファはきっかり三回イカされ、意識を失ったのだった。

★

……リズ、お前はいつからそんなテクニシャンになったんだよ。

元からか? そういえば随分とオナニーに励んでいた過去もある。自分で愛撫して自分でテク磨いたのか。

ハンドルをさばきながらずっと、俺は後部座席でキリトの妹、リーファがイカされる様子をルームミラーでチラチラと窺っていた。

リーファもリズも制服姿で、リズはピンク色のサマーセーターにスカート。リーファは黄色いリボンが印象的なセーラー服を着ている。リーファの制服のほうはずっとスカートが短くて、太股の半ばまで露

わになっている。

それに対してリズの制服のスカートはやや長めだった。今度校長に命令してもっと短いのに変えさせるか。

それにしてもリズ、いやらしいセリフ吐いてたなあ。

もちろんリーファの喘ぎ声から絶頂時の甲高い声音までバツチリ聞こえている。

え？

マジックミラーで防音じゃないのかって？

はい、もちろん嘘です。

リズベツトもそれを知っていて嘘をついている。

全てはキリトを寝取るため。

リズベツトはその目的のためなら、リーファを騙すことにも躊躇がなかった。

何を隠そう、この計画はリズベツト立案なのだ。

俺を運転手として使うと言い出したときはさすがにムカツときたけどね。でもリズベツトがリーファをイカせるというのは見物なので、俺は二つ返事で運転手をやることを引き受けた。

リーファは今、ぐったりとした様子でリズベツトに抱かれている。意識がないようだな。リズベツトの指テクには目を見張るものがある。

そのとき、俺のスマホが着信を知らせた。ハンズフリーのマイクで俺は応対する。

「もしもし」

『お疲れさまです、マサヤ様』

ホテルの調教師からだった。俺は続きを促す。

『壺井良太郎の件ですが、彼の住む自宅アパートに【特別招待券】を郵送しておきました。明後日には着くかと』

「ご苦労様。アスナはどうしてる」

『あの雌豚なら今、画面に釘付けですよ。よほど【映画】が面白いのでしよう。しかも命令してもいないのにオナニーしてます』

電話の向こうで調教師が笑っていた。



「それは見物だな。あと急で悪いが、これからそつちへ向かう。部屋をひとつ用意しておいてくれ」

『かしこまりました。タイプはいかがでしたでしょうか』

「そうだなあ」

俺はルームミラーでリーファの様子を窺う。

おっぱいはやたら発育がいいとはいえ、まだ若い未経験の女子だ。いいとこオナニー止まりで、ろくに快楽の世界を知らないだろう。最初にパンチの利いた経験をさせておくのが良いだろうな。女王様氣質のあるリズもいることだし……よし、決めた。

『『女王の間』で頼む』

『じよ、女王の間でございますか!?!』

調教師が驚愕しているが無理もない。彼はたぶん、俺が女王様に調教されるのだと勘違いしているのだろう。俺は調教する側だってば。

「言っておくけど、俺が調教されるわけじゃないぞ。女王様の素質がある娘がいるから、その娘にほかの娘を調教させてみるんだ」

プロ調教師の沽券に関わるので訂正しておいた。

『なるほど、そういうことですか。かしこまりました。本日は女王の間が使われる予定はございませんので、ホテルに着き次第そのまま直行されてくださって構いません』

「わかった」

通話を終え、俺はまた後部座席の様子を見やった。

リズベットと目が合った。

「電話終わった?」

「ああ」

なんでリズが俺にタメ口なんだよ……。

釈然としないが、ろくに調教もしないで放置していた俺にも責任があるか。キリトを寝取るなんてミッシヨンが無ければ、アスナとダブルで調教していたところなんだが。まあ、女王様の素質があることが分かったからいいけど。

「リーファ、白目剥いて気絶しちゃったよ。これからもっと気持ちよくなれるのにい」

「……………」

リズが舌なめずりする姿に、俺は戦慄した。

末恐ろしい女だな……。俺はもしかしてとんでもないヤツをこちら側の世界に迎え入れてしまったのかもしれない。

「じゃあホテルに行こうっ。ホテル♪ ホテル♪ あたしラブホって初めてなんだよねえ。楽しみっ」

リズベットの要望で、この車はこのまま適当なラブホへ向かうことになっている。だが、そんな適当なホテルなんぞではつまらない。

ん、そろそろだな。

ウインカーを右に出し、俺は交差点を右折した。

やはり勝手知ったる俺のホテルでないかね。調教道具も揃ってるし。

間違ってもアスナと会ったりしないよう注意しよう。

……って、そんな心配いらないか。ちゃんと飼育小屋（アスナちゃん調教部屋）に入れてあるし、調教師が【映画】見てるって言ったしな。

うちの親父が制作した『京子調教物語』を。

## 第9話 見習い女王様、初めての奴隷に歓喜

「あれえ……」

リーファは少しずつ目を開けていく。またベッドの上で寝落ちしちゃったのかなあ、などと暢気に思いながら。

だが、視界を埋める赤い照明に照らされた空間が、自分の部屋であるわけがないことに気付いた。

「えっ……ええ!?!」

そこはリーファの知らない場所だった。

広さは学校の教室と同じかそれよりも広く感じられる。窓は閉ざされ外の様子は窺えない。

部屋の光源はなぜか血のように赤々とした色の照明で、それだけでも異様なのに、照らされる調度の数々も常軌を逸していた。

壁に備え付けられている数種類の鞭。

巨大なベッドもまた赤々としたシートと枕が。ベッドの上には手錠、足枷、ボールギャグ、ロープ、首輪、ロウソク、ペニスバンドがきれいに並べられている。

ガラステーブルの上には、リーファも使ったことのあるピンクローター、さらにバイブが細いものから突起がゴツゴツついた極太の物まで各種揃って置かれている。

そのテーブルから少し離れたところには、分娩台のようなものが設置されている。普通の分娩台と違うのは、色が真っ赤なことだ。

ろくに知識のないリーファでも、ここがとてもいやらしいことをする場所だということは一目で分かった。それもかなり特殊な趣味だ。(よく分かんないけど逃げなきゃ……ってあれ!?)

リーファはここにきてようやく拘束されている自分に気付いた。しかも立っているではないか。

両手両足を広げ、離れてみると『×』の文字になるような姿だ。実際、リーファを拘束しているのは×の形をした十字架のようなもので、両手首、両足首がしっかりと枷で拘束され、全く動けない。

「どうなってんのよ……」

そのとき、部屋のドアがガチャツと開けられる音と共に話し声が……。

「あはははっ、マサヤさんも試してみればいいのにい。案外気持ちいいかもよ」

「だからな、俺にそんな趣味はないっつーの……おっ」

「どしたのマサヤさん？ あっ、目が覚めたんだね、リーファ」

「リズ、さん……？」

リーファは目丸くした。

知らない男がいたことにも驚いたけれど、それよりも何よりもリズベットの格好だ。さつきまで制服姿だったのに今は……

「そ、その格好は……？」

声を震わせ訊ねるリーファに、リズベットは笑みを深くして応える。

「フッフツ、どう、リーファ？ 似合ってる？」

リズベットがその場でクルツと回って見せた。

彼女は黒いブラに黒のTバック、同じく黒のガーターベルトを着用。ヒールの高いエナメル素材の黒いブーツを履いている。

お尻がほとんど丸出しのTバックにも驚いたけど、正面からよく見るとそのTバックは股間の部分に穴が空いていることが分かり、重ねて驚愕するリーファ。リズの大切な部分が丸見えである。

「な、に……どうな、って……」

混乱の極みに達してしまいうリーファに、リズベットが優しい、けれどどこか恐ろしさも感じさせる声音で言う。

「安心してリーファ。これからあたしたち二人で、ローターなんかやりももつと気持ちよくしてあげるから」

「ふた、り……？」

リーファの視線がリズから男に移り、そして目が釘付けになった。

男は上半身裸になったかと思ったら、躊躇無くズボンとトランクスもおろして裸になったのだ。そそり立った男性器に、リーファの視線は固定されてしまった。



興味津々だなあ。

リーファの目は俺のチンポを見つめてやめなかった。無理もないか、こんなデカイブツ、見たことないだろうし。キリトのは小ささそうだしね。

「リーファ、おちんちんが欲しい気持ちは分かるけど、あれはこの後のお楽しみだよ」

そう言っつて、リズはリーファの前に立った。

「リズさんお願いっつ、こんなことやめンウ!?!」

リーファの言葉は、リズの口づけによって封じられた。

「んちゅ、くちゅ、ちゅるる……」

「んふっ、あふ、ちゅっ……ぷはっ」

リズが唇を離し、リーファの髪の毛を優しくすいた。

「ねえリーファ、これはね、必要な練習なの」

「練習……?」

「そう、練習。アスナからキリトを奪い返すためのね」

「アスナさんからお兄ちゃんを……!?!」

「あたしたちで、キリトを寝取るのよ」

「寝取……ッ」

言葉を失うリーファ。

予想もしなかった展開に頭がついていってないようだな。無理もないか。SM部屋に連れ込まれて兄貴を寝取るうぜ、なんて持ちかけられたんじゃないか。

「リーファはキリトのこと好きなんですよ?」

「……す、好きだけど、好きだけとお! でも、そんな寝取るだなんて」

「アスナはキリトとエツチなことしてるよ。ベッドの中で、ふたりで、あんなことや、そんなことを。アスナはキリトを独占して、自分だけで楽しんでるの。あたしらの気持ちを知った上でね」

「でも、それ……は、仕方……」  
ない。

そうは続かなかった。リーファにも色々思うところがあるのだろう。

調べた限りじゃ、キリトとリーファの関係って結構複雑なのな。一応は兄妹で通ってるけど、その実血縁関係的にリーファはキリトの従妹だとか。別に俺は近親相姦上等だったからどうでもいいんだけどね。

その複雑な家庭環境ゆえに、リーファはずっと自分の想いを隠さなといけなかったようだ。それはたぶん、リズよりもずっと長く、長期間にもおよぶ恋だったのだろう。

いや、現在進行形でリーファはキリトに恋をしている。

でなければ、ここで言葉選びに躊躇するはずがないんだ。

「仕方なくなんかないよ、リーファ。キリトをみんなで共有すればいいのに、独占してるアスナが悪いの」

俺がリズを洗脳したときと同じことを、今はリズがリーファにやっている。こんなふうにして組織ってデカくなるのかなあと感慨深い思いにかられていた俺だったが、そう上手くはいかないらしい。

「やつぱり……やつぱりおかしいよりリズさん！ どうしちやつたのりズさんっ、なんか変だよっ！」

「変なんかじゃないんだけどなあ」

リズは困っていた。

俺は笑いそうになっていた。変なのは洗脳されてるリズなんだぜ、と。

それはまあともかく、やはりハーブ無しで『キリトを寝取ろうぜ』と迫っても同意してくれなかったか。

だからこそ、俺はこの場所『女王の間』を選んだ。

俺とリズでリーファを調教し、奴隷にし、こちら側に引き込む。

なあと、キリトのことが好き、という気持ちがある以上、快樂に飲み込まれたら嘘は付けまい。アスナことも少なからず恨んでいるはずだしな。負の感情があれば洗脳なんてハーブ無しでも余裕だ。

そうだな、二時間後には従順な奴隷に仕上がっていると思うよ。

「リズ、このままじゃ罅が明かないぞ」

「そうね。んふっ、じゃあ、やつちやおうかな」

そう言つて、リズはリーファのセーラー服の上着を無理矢理引き裂

いた。マジか……。

俺でも普通に脱がせるぞ。リズ、容赦ないねえ。

そのリズはというと、ニヤリと唇を歪ませ、目の前の獲物（リーファ）を料理しようとしている。裂いた制服になど興味がないとばかりにポイツと捨てて、制服の胸元にあつた黄色いリボンでリーファに目隠しをしよう。当たり前だがリーファは怯えに怯えていた。

……リズにちよつと任せてみるか。

俺はベッドに腰掛け、成り行きを静観することにした。

それはそうとだな。

リーファの豊富な胸が、ブラに包まれた状態で露わとなっている。ブラはピンク色の生地には赤いラインが斜めに入っていて、リーファの可愛らしい面差しにマツチしていた。

間違つてもブラを裂いたりするなよ、リズ。俺が持つて帰るんだからな。もちろん、パンツもだ。



「ああむっ、ちろちろっ、ちゆるう」

「や、やめてリズさあんっアツ……」

リズの責めに、リーファは嫌がりながらも声音を徐々に甘くしていた。デイトップキスで口内を蹂躪されたのを最初に、耳舐めから始まる濃厚な全身リップ。

額、頬に軽くタッチしたかのようにキスをしたかと思えばいきなり、

「じゅるるるうううー！」

「はうっ!？」

首筋を強烈に吸引してみせた。

強弱と緩急。リズベツトは俺が教えた責めの極意をしつかりとマスターし、それをリーファにぶつけている。

「んふっ、ちゅっ、ちゆるっ、ちろっ、ちろちろッ」

「あんっ、あっ、あふっ……」

「フッフ、良い声で鳴いてくれるねえリーファ。これもう邪魔だから取っちゃおうね」

リズはそう言つて、リーファのブラのホックに手を回して外す。それをどうするのかと思つたら、俺の方に投げて寄越した。

「それで我慢しててねっ、マ・サ・ヤ・さん♪」

「……………」

見透かされてるし。ありがたくブラを受け取つてすんすんと匂いをかいでる俺も俺だが。良い匂いだあ。

しかしリーファという女、年齢の割に発育いいな。アスナよりもさらに大きなおっぱいしてるぞ。

服の上からでも分かつてはいたが、脱がせてみるとその巨乳っぷりは目を見張るものがある。まさにパイズリ専用おっぱいだ。

今はリズが右の胸をもみしだき、左の乳首を舐めたり吸つたりと濃厚な愛撫を繰り返している。

「ちゅっ、ちゅるるるう……………」

「ああああ…………だ、ダメエ、そんなにしたら、あ、あたしい……………」

「そんなにしたらどうなつちやうのお？ あっ、もしかしてえ」

悪戯を思いついた子供ののように、リズは胸を揉んでいた手を下へ下へと移動させ、

「やっぱりねえ」

ニヤアつと怪しい笑みを浮かべるリズ。

「リーファのおまんこ、もうびっしり濡れてるよ。いやらしい子お」

「おっ…………おまん…………ツ」

頬を真っ赤にするリーファ。卑猥な言葉にすら免疫がない女子が、いきなりこんなところで責められたら、それはもう濡れるしかないね。

「あ、ダメツ、リズさん…………本当にもうっ、ダメなのっ。パンツの中だけ…………中だけわあ……………」

リーファの言うことになどもちろん耳を傾けるリズではない。パンツの中に手を入れ、おまんこをいじり始めている。

クチュツ、クチュクチュツ。

卑猥な音が俺の耳にまで届いた。ぐっしりだなこれは。

「ああんっ!？」





を漏らし、リーファの足元は水びだしである。パンツももちろんびつしより。ていうかびつしより過ぎてさすがに持つて帰る気にはなれない……。回収してオークションにでも出しておくか。

「どう、リーファ？ あたしといっしょにキリトを寝取る気になった？」

「……お、お兄ちゃんは、アス、ナ……さん、とつき合ってる、し……ダメ、だよ」

「言うこと聞かない子はおしおきね。リーファがイエスって言うまでイカせ続けるわよ、あたし」

「そんなアンツ!？」

宣言通り、リズはさらに電マを使い、リーファをイカせ続けた。それだけでは飽きたらず、ついには……

「マサヤさん、その鞭つて使つていいのかな」

「お、おう」

「えへへえ、楽しそう♪」

壁にかけている鞭の中からひとつを選び、リズは手始めにリーファの足元を打ちつける。

ピシイイイ!!

「ヒイ!？」

「……ツ！」

危ない危ない。俺までリーファみたいな悲鳴をあげるところだった。え、なに、リズのやつ、本当に初めての鞭なのか？ 乗馬でもやつてたんじやないのか？ 物凄く堂には入っているんだが……。

リズの乗馬経験の有無が謎のまま、リーファの調教は続いていく。

「あ、あの、リズさん……あ、あああたしやっぱりリズさんと一緒にお兄ちゃんを……!」

「お・そ・い♪」

満面の笑みと共に、リズは無情にも鞭を振り下ろした。

ピシイイイツ!

「キャンツ！」

鞭はリーファの太股に命中する。

ピシイイツピシイイツ！

「あうっ、アッ！ あんっ!?」

打ちつけられる鞭の音と、リーファの悲鳴が響きわたる。だが、ピシッピシッピシイイツツ!!

「あっ、あんっ、あふんっ！」

悲鳴が喘ぎ声に変わるのに、そう時間はかからなかった。

まあSM用の鞭だしな。ドMな女なら「痛気持ち良い」って感じられる。つまり、リーファがドMってことなんだがな。

ピシイ！ ピシイイツツ！

「きゃひいんっ！」

ブルブルと脚を内股にして震わせるリーファ。そして、

シヨボボボ……。

失禁した。

股間から太股を伝って、おしっこを垂らしている。

「あらあ、鞭で叩かれて感じちゃって、しかもおしっこ漏らしちゃうなんてねえ。変態過ぎでしょリーファ」

「あっ……あっ、あふうんう」

リズの言葉はリーファには届いていないだろうな。リーファは今や、恍惚とした表情を浮かべ、失禁に快樂を見出している。

口はだらしなく半開きになり、涎が垂れていることすらも気にしてない。

リズがリーファのあごをクイツと持ち上げる。

「あたしといっしょに、キリトを寝取るのね？ リーファ」

「ふあ、ふああい……」

「良い返事ね。あと、リーファはあたしの奴隷ってことでよろしくね。

一匹目の奴隷はリーファがいいなあーって思ってたのよ」

「わかり、ましたあ……」

「うふっ、可愛いわよ、リーファ……ちゅっ」

「あんっ！」

リズが頬にキスをするだけで、リーファは感じていた。体中が敏感になっっているに違いない。

そしてリズの手によって、リーファの首に赤い首輪が装着された。首輪にはリードが接続されていて、それはもちろんリズが握っている。

「あはっ、一匹目の奴隷ゲットしちやっ★」

……リズ、お前はもう立派な女王様だ。

「じゃあ最後に、リーファにご褒美をあげなくちゃね」

俺がリズの女王様っぷりに戦慄していると、リズが俺の方に目配せした。お、いよいよ俺の出番か。

「ご褒美……?」

「そうよお」

リズがリーファの拘束を解いていく。それからリーファのパンツを脱がせ、適当にひよいっとうっちゃった。あ、俺の資金源を……。

「め、目隠しも取って……」

「ダーメっ、ご褒美を受け取ってからね」

リズはリーファの手を取り、ベッドのほうへ誘導していく。感じすぎたせいでだろう。リーファの足取りは酔っぱらいのようにフラフラで、リズの助けがなければ立っているのもままならない状態である。

「り、リズさん……あたしもう、立ってられないよお」

「大丈夫よリーファ。もうすぐ【素敵な椅子】に座らせてあげるから」

素敵な椅子、ね。

たしかに極上の椅子だな、コレは。

「さあ座りなさいリーファ……そう、それでそのまま腰をゆっくり落として……ん、もうちよつと前かな……うん、これでよし」

「えっ、でもなんか……なんか当たって……」

「いいから、腰を下ろしてリーファ」

「……まさかコレって!?!」

気づいたか。

慌てて腰を浮かそうとしたリーファだったが、

「奴隷は女王様の言うこと聞かないとダメよ」

満面の笑みを浮かべ、リーファが言った。それから彼女はリーファの両肩をつかみ、浮きかけた腰をいつきに押し込む……

ズブリツツ!!

「ひぐうううううツツツ?!」

リーファが体を反らせ、悲鳴をあげた。

そうかそうか。そんなに俺のチンポ椅子が気に入ったか。

俺はベッドに腰掛けて、ただ待っていただけだ。そこへリズがリーファを誘導し、チンポが挿入されるような具合にリーファを座らせたのだ。

「どう、マサヤさん、リズのおまんこの具合は」

「締め付けが半端ないな」

「だって新品だもん。血い出てるし。あはっ、すごい。リーファのおまんこ、マサヤさんのチンポで思いっきり広がってるんだけどー」

「あ、あ……あ……」

リーファはというと、未だショックから立ち直っていない。処女を失ったショックなのか、それとも快樂なのか。

それとも両方がない混ぜになっているのか。

「そろそろ動くぞ」

「いいわよ。遠慮しないでガンガン突いちゃってね。そんなもってたらっぷりと白いおしっこ出しちゃってねっ。それと……」

「ん?」

さあ突きまくるぞっ、と思ったら、何やらリズが顔をうつむかせている。どうしたのだろうか。

「……そ、その、二回戦目でも三回戦目でもいいんだけど、あたしにも……してね」

もじもじと恥ずかしそうにしながら、リズはお願いしてきた。そこには女王様ではなく、ひとりのセックスに魅了された少女がいた。

なんだ、可愛いところあるじゃないか。

「いいぜ」

「やったー! ねえねえ、マサヤさんってロウソクはいけるクチ?」

「いけねえよー!」

前言撤回、やっぱ女王様だわ。



その後、俺はリーファ、リズの順にベッドの上で思う存分暴れた。「アッアッあアッ〜!」

座位の状態を下から突き上げるたびに、リーファの巨乳がプルンプルンツと大きく揺れる様が、俺の眼前で展開されている。

凄まじい体積を誇るふたつの肉塊が、縦に揺れる姿は圧巻。思わず俺が驚掴みにしてしまつても、仕方のないことだろう。

「だ、誰なんですかっ、あな、たは……!」

突き上げられながらもリーファは俺を睨んできた。

「俺? 俺はリズの……友達だよ」

本当は奴隷にしたかったんだけどな。

「そうそう、あたしとマサヤさんは友達なの。マサヤさん、リーファのおまんこ、もつと気持ちよくしてあげてね」

「リズさんツ、そんな酷いよアアン!」

パンパンパンパンツ!

「あっあっああ……っ! そっそっ……そんなにいい! 激し、くうん!?!」

リーファが息も絶え絶えに抗議してきた。

「激しく? おいおい、激しいってのはこういうことを言うんだぜ?」

俺はリーファの太股を抱え持ち上げ、そしてベッドから離れ立ち上がった。リーファが慌てて俺の首に腕をからませ、後ろに倒れないようにバランスを取る。

「キャツ、な、なんですかいきなり!」

「さあリーファ、駅弁ファックの時間だ」

「えきべ……あ」

ずちゅんツツツ!!

「アアアアアアアんツツ!!」

リーファが絶叫した。

無理もない。俺のチンポが子宮をゴツツと思ひ切り突いたんだからな。さっきまでの座位だとしても浅くしかチンポが入らなくてもどかしかったんだけど、これでようやくチンポ全体が気持ちよくなった。

「あ、あ……あふううん」  
ビクビクビクツ。

リーファの体が痙攣している。今の子宮突きでイッてしまったの  
だろう。この突きでイカない女はいないからね。

「きもち………いいよお」

とても小さな声だったが、俺は聞き逃さなかった。

リーファがこぼした快樂落ち宣言。

今日会ったばかりの男のチンポで処女を失い、しかもイッた挙げ句  
このアへ顔。アスナと同じでこの娘も奴隷の素質があるね。

「あはっ、よかったねえリーファ。チンポの気持ち良さ教えてもらえ  
てえ」

リズがリーファの尻をナデナデと触っている。

が、俺はそれよりもリズの股間に目が行ってしまふのを止められな  
かった。

「……リズ、お前それ」

「えへ、ペニバン付けてみましたあ★」

そう、リズの股間には今、黒光りする疑似チンポがそそり立ってい  
る。ペニスバンドだ。リズが着用しているのは下着と一体型のタイ  
プである。

「じゃあ、入れちやうよお」

「ほへええ……?」

リズがリーファのアナルにペニスバンドの先端をあてがう。そし  
て、

ズブズブズッ!

「ああああんうううッ!」

ペニバンが根本までリーファに挿入された。

痛がるかと思ったが、意外にもリーファは表情をトロけさせてい  
る。アスナでも初めてのアナルは痛がっていたんだが……これはス  
ゴいな。

「リズ、同時に腰を動かすぞ」

「うんっ、せーのっ」

ずちゆるるっ！

「はうツツツ!？」

俺のチンポとリズのペニバンが、同時にリーファの奥を壊しにかかった。

パンパンパンツ！

ズンズンズンツ！

「あツツあつアツツあああん！ あっだ、だ、メ……ダメえん！ まっしろ……頭真っ白になっちゃうよおおおっ！」

リーファが俺に抱きついて幸せいっぱいな声で鳴いている。

顔を見やれば涙と涎で顔はグシャグシャなのに、口元は笑みをたたえている。

素晴らしいアへ顔だ。

「んっんっ！ リーファどう？ あたしのおちんちんは気持ち良い？」

「気持ち良いのお！ リズさんのチンポお腹の奥に当たって最高なおおん！」

「俺のチンポはどうだリーファ」

「ああんっ！ マサヤさんチンポもおつきくて大しゆきいっ！」

あっ！ またイツぢやう!? またイクイクしちやうのおおおおお!!

「俺もイクぞリーファ。 たっぷり出してやるからな！ おらっ！」

ドピュルルルツツツ!!

「出てるうううう！ 精子どびゆどびゆ出てりゆうううツツ!!」

ガクガクと体を震わせるリーファ。 脚の指先がピーンと吊ったように不自然に真っ直ぐになっている。 痙攣も限界を超えると体の反応が凄まじいな。

「はふうう……もう……ダメ、腰から下が溶けちゃよおお」

ぐったりとするリーファ。 大きなおっぱいが俺の胸板に当たって心地良い。 今度じっくりとパイずりさせねば。

「リズ、リーファはもう使い物にならないぞ。 見ろよ、完全に気失ってるし」



「んふ、でも完全に堕ちたでしょ、この娘」

「まあな。……よつと」

リーファのおまんこからチンポを引き抜く。途端、コポオつと精液が溢れ出てきた。

「じゃあマサヤさん、次はあたしねっ」

「お、おう……っておい!？」

いきなり胸板を押され、俺はあえなくベッドに倒された。

リズが俺の股間の上にまたがる。

ペニバン付きの下着を脱ぎ捨てて、おまんこを露わにする。

彼女は俺を見下ろし、言う。

「おちんちんの扱い方、もっと教えて。でないとキリトを寝取れないよ」

「……分かった」

「えへへえ」

リズが嬉しそうに微笑み、チンポを自分のおまんこにあてる。ゆつくりと腰を下ろしていく。

ズブズブ……。

チンポがリズのおまんこに埋没していく。暖かい肉壁が俺の分身を包みこんでいく。

なんだかんだで女王様のおまんこもグツシヨリ濡れていた。調教しながら濡れるとか、ある意味奴隷より淫乱じゃないかと思うよ俺は。

「ああああ……」

目を細め、全身に行き渡る快楽をじつくりと味わうリズ。

そんなリズの姿を下から眺めながら、俺は口角をつり上げる。

分かっているぞ、リズ。お前はチンポの扱い方を教えてほしいんじゃないよ、単純に俺のチンポが欲しくなっただけなんだってな。

「リズ、一突きでイカせるから覚悟しろよ」

「ふふん、あたしはリーファと違って経験があるんだからあひいいいいんツツツ!？」

予告通りリズを一突きでイカせる俺だった。

リズの経験なんて、まだまだだ。



リーファは床に倒れた状態で、意識をわずかにだが戻していた。赤く毒々しい照明のせいもあってか、視界はとても不明瞭である。

(気持ちよかったあ……)

奥を突かれた瞬間の、電気が走ったようなあの感覚。ローターなんかじゃ絶対に味わえない。

そして……

(ああ、あつたかいよお……)

リーファの手は、つつい局部へと行ってしまふ。そこにある白濁とした液体を指ですくい、ペろりと舐めとる。

(美味しい……)

快楽の余韻に浸りながら、リーファはベッドの上に視線をやる。

「あんあんあんツ、あつ、あ！ あぶんんうううつつ」

リズベツトがマサヤという男に跨がって、激しく腰を振っていた。

「リズ、もっと腰を浮かせてそれから下ろせ。出ないと男は感じないぞ」

「んっんっ、こ、ここう？ んつくあああん！」

リーファの視点からだと、リズのお尻が丸見えだった。

上下に動くお尻。

いわゆるウンチングスタイルでリズが騎乗位をしているものだから、お尻はパツクリと開いてアナルも丸見えだった。

そしてリズベツトの尻肉の間から垣間見える、出ては入ってを繰り返す極太の肉棒。

ずちゅっずちゅっずちゅううう！

卑猥な音を響かせ、リズを快楽に染め上げているチンポ。

(あたしも、あのおちんちんが、欲しい……)

リーファは床を這ってベッドに近づく。

もっと、快楽を与えてもらうために。

そして同時に、兄の恋人への憎悪の火が灯る。

(アスナさんは、お兄ちゃんとおんなに気持ち良いことをしてたんだ、

自分だけ……)

許せない。

リーファが、兄を寝取る決意を固めた瞬間だった。

## 第10話 京子調教物語

『初めまして、米沢京子ですっ』

『君が京子くんだね。うんうん、きれいな娘が来てくれて私は嬉しいよ、グフフ』

『は、はい。あの、それでお話というのは……。私など一介の学生に過ぎないのに、どうして京藤学長に呼ばれたのが……。』

『ふむ、呼び出された理由が分からない、と』

『は、はい』

『なあに、そう固くなることはないよ、京子くん。呼び出しと言うと聞こえが悪いが、私は成績優秀者である君に、ちよつと提案をしたくて呼び出したんだよ』

『提案？』

『うむ。君は我が大学の経済学部が誇る成績優秀者だ。大学卒業後は院に進み、将来的には教授職としての道に進んでくれると私は期待している』

『……わたしとしても大学院に進みたいのですが、その』

『経済的な事情かな？』

『……はい』

『それだよ。私が提案したいというのは、京子くんの経済的事情の解決なんだ』

『え、それはいつたい……。』

『難しいことじゃない。二十歳の君ぐらいの体なら良い具合に育っているし、私としても相手がしやすい』

『え、体って、何を言ってる……。や、近づかないで！』

『グフフ、良い体をしているねえ。その胸、前々から揉んでみたいと思っていたのだよ私は。小振りだが張りがありそうだ』

『この変態っ！ タダで済むと思わないでよね！ このことはすぐ公にしてやるわっ！ そうすればアンタも学長じゃいられなくなるもの！』

『私を学長の座から引きずり下ろすのは勝手だが、そうすると損をす

るのは君だよ。京子くんが私の性奴隷になるなら、私は君が教授になるまでずつと学費全額を免除すると約束するよ』

『ぜ、全額!』

『うむ。学費だけではない。生活費も全て負担しよう』

『せ、生活費、も……ッ』

『君が学業とアルバイトで苦勞していることは調査済みだよ。毎日大変だねえ』

『でもあなたのでせ、せい……奴隷なんかになったら、バイトをしているのと一緒じゃないの……』

『そうかな? 君のアルバイトでは日々の生活費を補填するのでやつとだろう。親御さんに君を大学院まで行かせる余裕もないようだし』  
『くつ、そんなことまで調べて……』

『京子くん、これは良い話だよ。君は金の心配をせずに勉強もでき、日々の生活の心配をすることもなくなる。さらに』

『やつ、何を……やめて、腕が折れちゃうつ。乱暴はやめてあんっ!』  
『フッフ、乱暴なんてしないよ。僕は紳士だからね。ほら、ここがクリトリスかなあ。ほくれ』

『す、スカートの中に手なんか……あつあつあつ……!』

『下着の上からでも私には分かるよ。女という生き物は本当にここが弱いんだなあ。もうグツシヨリじゃないか』

『あああああッ!』

『脚をガクガクと震えさせて、なんだ、もうイキそうなのか?』

『うううう……』

『私の性奴隷になるのならイカせてあげてもいいのだがなあ。学費も生活費も出すんだがなあ』

『…………ます』

『聞こえないんだが』

『痛いっ! お尻を叩かないでくださいっ! ああまたあ!』

『君が素直にならないからだ、京子くん』

『ごめん、なさい……。わたしを、』

『わたしを?』

『学長の、性奴隷に……して、ください』

『良い返事だ。では約束通りイカせてあげるよ、京子』

『ああああイクうううううんつつつ!!』

★

(あれが……若い頃の母さん?)

アスナはひとり、ホテルの一室兼調教部屋で、母親の若い頃の映像を見せられていた。昔の映像だから画質は悪いけれど、その質感がかえって生々しさを物語っていた。

調教師がやって来て、今日は何をされるのだろうかと思ったら、意外にも『今日は映像教材だ』とのことだった。

そして再生したら『京子調教物語』というタイトルの後に、若い頃の母親と知らない中年の男が、応接間のような場所で話している映像が映し出されたのだ。

アスナには映像の女が母親だとすぐに分かった。

今よりも肌に張りがあるし目元は優しげ、髪の毛は長い黒髪という今とは随分と違うスタイルではあるけれど、意志の強さと声音ですぐに母だと認識した。

男の方は会ったことなどないはずなのに、なぜか初めて顔を見た気がしなかった。

(ああ、母さんが……)

母が男に陵辱されていく。

クリトリスを下着の上からいじられあつという間にイカされた母は、男と奴隷契約を結び、その場で裸にされて……

★

『これだよこれ! 私はこのおっぱいを揉みたかったのだよ!』

『あつ、学長、そんな乱暴にしないで!』

『やかましいつ、京子は私の奴隷だろう。言うことを聞け』

『そんなんつ、なんでもかんでも言うことなんて聞けませんっ』

『ほう、奴隷契約を結んでおいて逆らうとは。これはお仕置きが必要だな、京子』

『お、お仕置きつて……いったい何を』

『四つん這いになれ』

『で、でも……あんっ、乳首をつねらないでえ！ なりますっ、四つん這いになりますからあ！』

『そうそう、それでいい……グフフ、形の良いお尻だねえ。触り心地も、おほっ、素晴らしいな』

『そ、そんな嫌らしい触り方しないでえ……』

『もちろん、ただ触るだけで終わらないさ。何せこれはお仕置きだからね、そらあ！』

『あぐう!? そんな思い切り叩かなきゃアン！』

★

パンツパンツパンツ！

調教部屋とはいえ作りそのものは高級ホテルの一室なので、音響設備もまたハイクラス。『京子調教物語』の中でプリンツとしたお尻をこれでもかとスパニングされている音が、高音質で部屋中に響きわたっている。

(母さんのお尻が……)

アスナはみるみるうちに赤くなっていく母の尻を見て、自分が京藤マサヤにスパニングされているときのことを思い浮かべた。

(わたしのお尻も、あんなふうに真っ赤なのかな……)

パンツパンツパーン！

母が悲鳴を上げているが、その声音の変化にアスナは気付いた。だが彼女は自分の無意識の行動には気付いていなかった。

調教部屋に、映像の音声とは別に、生の音声がひっそりと奏でられていた。

くちゅ、くちゅくちゅ……。

アスナの右手が、自分の局部へと延び、クリトリスを刺激し始めていた。

★

『あ、あの、学長……私は初めてなので、そのキャツ、そんな大きいものなんて……やっぱりやめ』

『ほう！ 初物とな！ それは幸運だな私も。そこまではさすがに調

査はできんかったからなあ』

『わたしの話を聞い』

『それは挿入してから聞こう。ん……』

『やめてお願いやめあぐあああああッツツ!!』

『ふう、入った入った。いやあさすが初物、締め付けのキツイことキツイこと。それで、話というのは何かな、京子』

『あ……あ……ああ』

『グフツ、イッてしまったようだね。私のムスコは大きい過ぎるからねえ。しばしば一突きで女性をエクスタシーに導いてしまうのだよ』

『おね、が、い……もう、抜いてえ』

『おやおや、私はまだイッていないよ？ 性奴隷はザーメンタンクとして役に立ってこそ価値が生まれるんじゃないか』

『ぎ、ザーメンタンクって……そんなまさか!』

『さあ、私の子種汁を存分に味わうといい』

『いやあああッ!』

★

(母さん分かってないよ。精子を出されたときの気持ちよさを)

映像の中の母は、ガラステーブルの上に寝かされ、脚をM字に開脚させられ、太いチンポを挿入されていた。

初めてだったようで、おまんこからは血液が垂れてテーブルの上を汚している。

そんな母の姿をアスナは見ながらオナニーに耽っていた。自分でも知らないうちに。

(この男の人の責め方……もしかして)

極太の肉棒でもって、まず最初の一突きでイカせる責め方に、アスナは既視感を覚えた。

(たしか母さん、京藤学長って……京藤……あつ)

母を正常位で責めている男。彼がアスナを調教した京藤マサヤの父であることを、アスナは理解した。

マサヤは以前言っていた。アスナの母は自分の父親が調教した、と。



(それがこの映像……京子調教物語っ)

アスナがその事実気付いたとき、映像の中では母がマサヤの父に中出しをされた。母は放心状態のまま、瞳から涙を流し、局部からは精子と血液が混じった桃色の液体を垂れ流していた。

画面が黒一色となったかと思ったら、中央に『一ヶ月後』というテロップが示され、直後に画面が切り替わって屋敷の玄関ホールのような場所になった。

そこで母が仁王立ちするマサヤの父の前で、膝折りの状態でズボンを下ろしている映像が始まった。

アスナの母の調教はまだ続いていくようだ。



『おちんぽ、すぐに洗って差し上げますね、失礼します……』

『うむ、しっかりと洗うんだぞ、京子。何せ今日は外を出歩いて汗をかいてしまったからな。ムスコもさぞや汚れていることだろう』

『かしこまりました……ああむっ、ちゆる、ちろっ』

『グフフ、すっかりフェラへの抵抗がなくなったな。即尺もお手の物といったところか』

『ふああい……ちゅぽっ、とても美味しいです、京藤学長』

『そうかそうか、だが無駄話はほどほどにな。ほれっ』

『あうぐッ?! んぐッ、ふぐうッ、んぐうう!』

『イマラチオされて苦しいだろう。だがな京子、女は下の口だけではなく、上の口からアナルまでがおまんことして使用されるよう出来ているんだ、分かるね』

『んッ、んうっ、んふうッ……!』

『そうそう、その苦しそうな顔。だらしなく涎を垂らし涙目になるその歪んだ表情! 私は女性のそういう顔が好きなんだ』

『んううううッッ! んふうううッッ……ぶはあ! ……はあ、はあ、はあ……』

『休んでいる場合ではないだろ。性奴隷としての仕事はここからが本番だろうに。さっさと下着を脱がんか』

『もっ、申し訳ございません……しよ、シヨーツはどうなさないま

すか』

『そうだな、ムスコが君の唾液でベツタリだから、そのショーツで拭いてくれないか』

『かしこりました、京藤学長』

★

母が自分の白いショーツで京藤学長のチンポを包み込み、ゆっくりとしごくように拭いていく。大きすぎる肉棒は母のショーツではカバーすることはかなわず、ショーツの股間の部分が学長のチンポで盛り上がっている。

チンポを拭ったショーツは、どこからともなく現れた男に手渡された。

オークションにでも出されるのかもしれない

映像は切り替わり、母が壁に手をつけて立ちバックの姿勢を取った。お尻の割れ目はもちろん、アソコの割れ目もパツクリと割れて、女の大切な部分が外界に晒されている。

本来ならそう易々とは見せない、大切な人の前でしか開かない脚を、母は命令されるままに大きく開いている。

(母さんはもう、完全に調教済みなのね……)

今のわたしみたいに、とアスナは心の中で付け加え、すぐに首を振る。

(わたしはまだ完全にじゃないもんつ、キリトくんが……いるん、だから……)

「あんつ……」

アスナは右手の人差し指でクリトリスを撫で、思わず甘い声音を漏らした。

頭の中に浮かんだキリトのイメージが霧散していく。

画面の中では、母が今まさに種付けセックスをされていて、娘と同じように甘美な悲鳴で鳴いている。パンパンパンツと響き渡る卑猥な音色は、汗でしっとり濡れる母と学長の体にとっても似合いのBG Mとなっていた。

★

『ほひいひいひいッッんう!!』

『はっはっは、そんな獣みたいな声をあげて、そんなに気持ちいいの  
か、種付けセックスが』

『気持ちいいのおツ、生ハメ最高おうっ!』

『すっかり雌豚として仕上がったな。1ヶ月間ハメまくった甲斐が  
あったというものだな。快樂が体に染み込んで離れんだろお、ほれえ  
!』

『あうううんっつっ! 奥に届いてるよおツツ!! 子宮とおちんち  
んがキスしちやつてるうううう!!』

『私の性奴隷になってよかったろう、京子』

『はひいひい……ッ、よかったですううう、性どれえになってしやいこ  
うれしゅううう!!』

『そうかそうか、んっ、そろそろ出すぞ』

『いちゆでもどうじょううう! 京子のおまんこザーメンタンクにた  
くさん出してくらしやいひいんうっつっ!』

『んううう、イクぞ!』

『はああああんっつっ!!! おまんこの中でチンポがピュッピュしてる  
よおおおツツツ!!! わたしもイツちやうううう!!!』

★

『イクううううツツツ!』

ビクビクビクツツ!!

アスナは母と同じタイミングで果てた。オナニーでイクなんて初  
めての体験だった。

映像の中の母は種付けしてもらったが、おまんこおちんちんは結  
合されたまま、さらにピストン運動が続いている。このまま2回戦目を  
するつもりらしい。

そんな母の痴態を、アスナは指をくわえて眺めていた。

自分の指をマサヤのチンポだと想像しながら、彼女は指の先端をチ  
ロチロと舌を這わせる。

我慢汗の一滴も漏らさない自分の指に、アスナは物足りなさを感じ  
ていた。

アスナがベッドの上でハアハアハアと息を荒くして果てている間に、京子調教物語は、また場面を変えていた。

★

『私のせがれのマサヤだ。ほら、マサヤ、これがお前の身の回りの世話をする雌奴隷の京子だ。なんでも言うことを聞いてくれるからな』  
『なんでも?』

『ああ、なんでもだ。トイレに行きたくなったら口を便器代わりに使うといい。おしっこを全部飲んでくれるぞ』

『すげえ!』

『チンポが固くなってしまったときも言うといい。どうにかしてくれるから』

『どうにか?』

『そうだ。なあ、京子くん?』

『はい、わたしにお任せくださいませ。わたしの肉便器で気持ちよくしてさしあげます』

『だそうだ、では私は二週間ほどアメリカに出張してくる。留守の間マサヤの世話を頼んだぞ』

『かしこまりました、ご主人様』

『では行ってくるぞ、マサヤ。しっかりと大人にしてもらえ』

『よく分かんないけど、はい』

★

(あれが、マサヤ様の子供の頃!)

アスナは画面に映る少年を見て驚愕した。髪の毛はサラサラとして艶やかで、いかにもお坊ちやまいった風体だった。まだ性的な知識を何も仕入れていない、無垢な少年……。

京子はというと、完全に奴隷化しており、フリルのついた白くて可愛いブラとショーツを着ているのだが、ブラは布面積が乳輪の周辺ぐらいまでしかなく、ショーツはTバックで股間のところにはチャックがついていつでもおまんこを解放できる仕掛けが施されている。

床に四つん這いの格好でいて、その首には赤い首輪が装着されており、そこからつながるリードは少年マサヤの手にあった。

マサヤが「ほら行くぞ、京子」と言ってリードを引つ張った。京子は「あんっ」と甘い声をあげて四足歩行でついていく。

そして場面が切り替わり、少年マサヤは京子を相手に腰を振っていた。

★

『これがおまんこ……！　すげえ、チンコがズブズブ中に入っていくよー！』

『ウソ……ッ、どうして子供のおちんちんがこんなに大きあふうううんッッ！』

『あ、京子さん、今僕のこと子供って言ったね。僕ねえ、子供って言われるの超嫌いなんだあ。あと生意気な女も超嫌い、この雌豚が！』

『あうっ』

『お尻叩かれて気持ち良くなっちゃうって本当なんだねえ。お父さんが言ってた通りだ』

『なんて、親子、なの……っ』

『京子さんが僕の初めての相手かあ。雌豚が初めてつてちよつと微妙かも。お尻とかもどうせもうユルユルなんでしょ』

『ああ、ダメっ、おまんこしながらお尻に指なんて入れちゃああ……っ』

『奴隷が逆らうなよ。京子さんのおまんこもお尻の穴も、今は全部僕のモノなんだよ。お仕置きにお尻の穴に指三本入れちゃおっと』

『さ、三本なんて無理ですっ、絶対に入らなアアアアアアアアアアアアっ！』

『入っちゃったし……うわっ、お尻に指入れまくったらおまんこの締め付けが急に強く……京子さん、僕もうダメっ、なにか……何か出ちやいそうだよっ！』

『出してえ！　マサヤ坊ちやまの白いおしっこ、京子のザーメン専用トイレにいつぱいちょうだいいいいいッッ！』

『で、る……！』

『ああ……出てりゅ……出てりゅよお、子供の精子でわたし種付けされちゃってるぅ……』

★

(マサヤさんの初めてが、母さんだったなんて……)

アスナは不思議な心持ちだった。母と同じチンポを共有したと思うと、胸の内がなぜか暖かく、そして徐々にそれは熱さになっていく。愛おしい。

母と、そして母に収まっていた肉棒が。

画面の中では、母の膣に収まっていたチンポが引き抜かれ、ぬるーんと精子と愛液がまじった液体が糸を引いているところだった。

その後、少年マサヤは京子の口を便器代わりにして用を済ませた。今とやっていることが変わらず、アスナはクスツと笑みを浮かべた。だがその直後、映像が急にきれいになり、母の姿が現在の、アスナが知っている京子の姿となり、アスナは目を見張った。

それだけではない。

京子以外にも男が二人いた。アスナは二人とも知っていた。

ひとりにはアスナが通う学校の教師、もう一人は校長。三人とも下半身だけを露わにし、京子が教師と学長のペニスを交互にしゃぶっている。

行為はどんどん先へと進み、校長が後ろから、教師が上の口をチンポで塞ぎ、腰を振っている。

その大人たちの行為は、アスナの中でこれまで当たり前だった世界を崩壊させるのに十分だった。

(あはは、みんな、エッチなんだ……変態なんだあ……)

二人の男が母に射精をし、母もまた体を痙攣させる。

そして娘のアスナは、チンポが欲しくてたまらなくなり、調教部屋の中にあるバイブを手にとったのだった。



……女王の間にて。

俺はリズに二発出してやった後に、リーファがまさかのおねだりをしてきたので、パイズリを教えてやった後に顔射をキメ、さらに騎乗位で中出しをしてあげた。

リーファのおまんこは最初こそキツかったが、ハメまくっているうちに良い具合にほぐれてきた。チンポを暖かく迎え入れる絶妙の締

め付け具合だ。まあ、何年かしたら緩くなつて使い物にならなくなるだろうけどな。そしたら適当なソープにでも売却すればいいや。

リズもリーファも、二人とも今は満足そうにおまんこ丸出しで脚をおつ広げてベッドでぐったりしている。

俺はというと、ふたりを置いて女王の間を出た。『京子調教物語』を鑑賞しているアスナの様子を見に行くためだ。

アスナちゃん調教部屋（と言ってもそこらのラブホなんかよりはるかに豪華だがな）に着くと、アスナがベッドで大股を開き、自ら極太バイブをおまんこに出し入れし、アへ顔を晒していた。

ずちゅぶちゅちゅつ！

「ああんっ……この震えがたまんないのおおおおっつ。チンポおお、ちんぽお欲しいよおおおっつ!!」

盛り上がっているよう何より。

自分の母親の痴態を見て興奮したらしいな。画面上では先日の、京子さんと校長、教師による教育者3Pの模様が繰り広げられていた。しかし日本の教育現場は頭ん中が桃色だな。どこもそうなの？

俺が眺めている中で、アスナはひとり果てた。

ベッドの上でぐったりしているアスナを見下ろし、俺は言う。

「アスナ、お前には明後日、ちよつとした仕事をしてもらう。とある男に一泊二日限定の奴隷として、その体を差し出すんだ。いいな」

「は、い……あ、あの……」

「なんだ」

「マサヤ様の……おちんちん、欲しいんですけど」

「雌豚の分際でおねだりしてんじゃねえよ。お仕置きが必要だな」

「あつ、申し訳ござ……きやあー!」

俺はアスナを全裸にし、注連縄で亀甲縛りにした。上手い具合にバイブをおまんこに挿入したまま縄で固定させ、

「スイッチ、オンっつと」

アスナの局部に刺さったバイブがブウウウウと低音を響かせうごめき出した。

「うほうツツ!?!」

ギユインギユインと膾の中を蹂躪する極太バイブ。まるでアスナのおまんこから黒いチンポが生えたかのような光景だった。写真に撮ってオークションで売るか。パシヤツとね。

「あああああんっツ！ きもじいいいよおおおっつ！」

「その状態で明後日までいるんだぞ、いいな」

写真を何枚か撮影し、俺はアスナに宣言した。

「あしやって!? ムリですむりでしゅうううむりいいいんふう!!」

プシヤアアアア！ とおまんこから潮が吹き出した。

無理だと叫びながらもアスナの顔はトロけていて、期待に胸を膨らませている様子がありありと分かった。

四六時中バイブでグチャグチャにされた未来を、彼女は無意識のうちに味わってみたいと思っているのだろう。

「言っておくけどアスナ、京子さんは俺がガキの頃に一週間もバイブを入れっぱなしにして過ごしたぞ」

「母さんが……!?!」

「そうだ。だから大丈夫だアスナ。お前にだって淫乱雌豚の血が流れているんだからな。ちゃんと水分補給と食事は与えるから心配することないぞ。バイブは刺したままだけだな。じゃ、またな」

「ああああんっ！ マサヤさまマサヤさまああッツ、バイブじゃなくておちんちんをおおおッツツ!!」

おいおい、バイブを抜いてくれって頼むんじゃないのかよ。

すっかりチンポの魅力にハマったな、アスナ。雌奴隷として良い具合に調教されてる。

これなら誰のチンポだつてしゃぶって下の口に迎え入れるだろう。たとえそれが、仲間の肉棒だったとしてもな。くくくっ。

アスナの雌奴隷的な鳴き声を背中に受けながら、俺は調教部屋を後にした。



## 第11話 バンダナ男、奴隷の母に主導権を握られ出世を誓う

壺井遼太郎は住まいのアパートで途方に暮れていた。

「マジかよ……」

ひとりごちて、テーブルの上に置いてある一通の封書を眺め、苦悶していた。封書の封はすでに切られていて、中身を確認した形跡が窺える。

「ひひひっ」

だが苦悶しているようでいてなぜか彼の口元には笑みがのぞいている。かと思えば頭を抱えだし「キリトよお……」とこぼしている。

おもむろに封書に手を伸ばし、封筒の中から二枚の紙を取り出す。

一枚は紙幣ほどの大きさで『特別招待券』とあった。

もう一枚はA4サイズほどの用紙で、壺井遼太郎が京藤ホテルの裏オークションで1万人目の客だったことへの感謝が綴られていた。さらにそのお礼として、一泊二日で京藤ホテルへの宿泊と、滞在中の奴隷レンタルを無料で提供する旨が綴られていた。ホテルへ出向き、『特別招待券』を示せばいいとのこと。

それらのメッセージの下には、奴隷の写真が写っていた。ベッドの上で大股を開き、下着をずらして極太の黒いバイブを自身の局部へ挿入し自慰に耽っている過激な写真だった。

目元は黒い線で隠されているが、間違いなく壺井遼太郎……プレイヤーネーム、クラインがSAO時代から知っている彼女に違いなかった。

「アスナがなんだって奴隷に……」

クラインの脳裏に先日のアスナの痴態が蘇る。

オークション会場に現れたアスナは、便器代わりの男に放尿し、数百人の男たちにクンニをされ続け、そして幾度となくエクスタシーを迎えていた。

クラインもクンニをしたが、アスナの味は今でもはつきりと思い出

せる。ほんのり塩気があるが爽やかな風味で、舐め取る傍からトロトロの蜜を溢れさせた。

「特別招待状、かあ……。なんだってよりもよって俺が……」

このことをキリトに話そうかと迷いもしたが、クンニをしたこともあつて後ろめたくなり、結局言い出せずにいる。

そこへ来て今朝、ポストの中を見てみたらこの『特別招待券』が投函されていたのだ。しかもこの招待券、本日限り有効となっている。出来事の奇っ怪さに加え性急な判断も求められ、クラインはパニック寸前である。

タイミングの良いことに今日は土曜日。今日から明日まで丸々空いているクラインだった。

「キリトは何も知らねえみてえだな……」

昨夜、ALOにログインしたときにキリトと会い、アスナのことを訊ねたら

『アスナならニューヨークに行ってるよ』

という答が返ってきた。なんでも親戚の具合が悪くてとかなんとか。

なぜかは分からないがキリトには真実を伏せられ、そしてアスナは京藤ホテルで奴隷として調教されている、という状況が出来上がっていた。

そのことに対し疑問に思うも、それよりもクラインの頭の中は、アスナのおまんこのデイトールで埋まっていた。

細く控えめに生えた陰毛は、まるで羽のように柔らかかった。

クリトリスはピコツと勃起してはいるものの、豆のように小さく、舌で突つづくたびに「あふんっ」と喘ぎ声をあげていた。

ビラビラは黒ずんでなどいかなかったし、おまんこそれ自体もまだ新品同様のピンク色をしていた。

指で広げて膣口も確認したクラインだったが、キリトはもしかしてろくにヤッていないのではないのか？　と思わずにはいられないほどに新鮮な風に見えた。

「アスナを、俺の好きなようにして……いいのか」

ゴクリ、と唾を飲むクライン。

そこから彼の行動は早かった。まず部屋着からスーツに着替えた。行く先のホテルは、裏側はともかく世間的には高級ホテルで通っている。だらしな性格好で行くわけにはいかない。

「とはいえ……」

クラインは洗面台の鏡の前で赤いバンダナを頭に巻き、自分の姿を見やる。スーツとは盛大にミスマッチだが、

「これがねえと俺って感じがしねえからな」

それから財布とスマホを手にし、一人暮らしのアパートの部屋を出る。興奮で息を荒くし、頭がカツカと熱くなっている。

「ヤれるんだ、アスナと……あの閃光アスナと！」

S A O時代から憧れ、キリトと交際してからは自分には縁のない女だったなー、などと諦めていた美少女を好きにしている。

そんな権利を与えられれば、誰だって狂う。無論、クラインもだ。

仲間のことなど今はもう彼の頭の中には欠片もない。

あるのは、下半身で膨れ上がって固くなった欲望の固まりを、アスナの中でしごいて精液を吐き出す自分の姿しかない。

「今行くぞ、アスナ」

「あらあら、興奮しているようですね。そんな様子では事故に遭われますよ」

「うおおっ!?!」

アパートの敷地を出たところで、クラインは突然声をかけられ仰天した。

声をかけてきたのは知らない女性だった。年の頃は四十代、いや三十代後半かもしれない。とてもきれいな顔立ちだから若く見えるだけかもしれないが。

黒い艶やかな髪で耳と頬を隠し、細身の体つきだった。赤いスーツに身を包んだその姿は、敏腕キャリアウーマンとでも言いたくなる容貌だった。

女性の背後には黒塗りの高級車が控えている。

「あ、あのお、どちらさんでっ……」

クラインが目を丸くしながら訊ねると、女性は姿勢を正し、一礼する。

「初めまして、壺井様。わたくしは結城京子と申します。これから京藤ホテルに向かうのかと思ひまして、こうしてお迎えにあがりました」

「マジすかつ!? さっすが京藤ホテルう!」

意気揚々とクラインは促されるままに車に乗り込む。

クラインの隣には京子が乗り、車は京藤ホテルを目指して緩やかに発進した。



クラインは興奮のあまり気付いていなかった。

結城京子の『結城』という名字がアスナのリアルネームと同じであることを。

なぜ、自分が京藤ホテルに行くタイミングが知られていたのかを。けれど彼を責めるのは酷と言うもの。

まさか実の母親が娘の調教を依頼するだなんて普通は考えもしない。

また、普通に生きている人間は、自分の仲間の中に裏切り者がいたり、まさか自分が四六時中監視され、あまつさえ部屋に隠しカメラから盗聴器まで設置されているなど、考えもしないだろうから。

去りゆく黒塗りの車を少し遠くにある電信柱の影から見送るリズベットは、そんなことを考えながら、フッフ、と小さく微笑んだ。

リズベットの隣にはリーファが立っているが、どういうわけか彼女は脚を内股気味にし、小刻みに震えている。

「いやあ、まさかマサヤさんがアスナを調教済みだったとはねえ。最初聞いたときはビックリしたよねえ、リーファ。マサヤさんさすがだわあ」

「そ、そうです、ね……。尊敬っんっ……。あッ、し、ます」

「だよねえ。クラインの奴、鼻の下延ばしちやってさあ。でもま、アスナのことめっちゃくちやにして欲しいし、今だけは応援してあげよっかな」

「あああのリズさあん……ッ」

「んぐ、なあにい？」

「も、もうイキそう……なんですけど」

「もう？ まだ半分の振動なただけだ。フルパワーにしてみよっか。ほら」

リズベットは手に握っていた小さなりモコンを操作する。

途端、リーファは脚をガクガクと振るわせ、股間からシヨボシヨボと失禁してしまった。

「ああああッ！」

「まったく、こんな住宅街の中で声出さないでよ」

「だってリズさんがあ……」

「これも調教の一環よ。飛びつ子をアソコの中に入れて散歩もできないようじゃ、奴隷失格だからね」

「しよんなあ……」

「もう、仕方ないわねえ。クラインちの鍵ならあるから、ちよつと休憩させてもらおつか」

「きゅ、休憩？」

「お仕置きの時間ってことよ、フッフ」

「リズさあん」

そうして、女王様とその雌奴隷は、クラインの住むアパートへと消えたのだった。



「ちろ、んちゅつ、ちゆるる……ペろっ」

「んぐー」

自分の股間に頭をうずめ、そそり勃った肉棒に舌を這わせる京子の後頭部を見下ろしながら、クラインは興奮を押しさえきれずにいた。

車に乗り込み発進したかと思ったら、隣に座った京子という女が「ご挨拶代わりに……」などと前置きをしてから、クラインのズボンとトランクスを脚の半ばまで下ろし、フェラチオを始めたのである。

「あ、あああのう！ 見ず知らずの方にそんなことされちゃあ俺……」  
「んぶつ、ペろペろっ……そんなこと仰ってる割には私と会ったとき

からすでに勃起してたじゃないですか」

「げっ、気づいてたんすか!」

「ズボンの上からでも分かるぐらいに勃起してましたよ?」

「マジかあ……うお!」

京子の口の中に肉棒がずると入っていき、ついには根本までくわえ込まれてしまった。京子の口内は唾液でヌメヌメとしていて、舌がペロペロとペニスに絡みついてくる。

快感がクラインを支配し、いよいよ射精しようかというときになって、京子が口から「じゅるりっ」と卑猥な音を立てて肉棒から口を離した。

「あ、もうちよつとでイクとこだったんすけど」

「んふ、知っていますよ。でもあくまでもこれはご挨拶です。お楽しみはホテルに着いてからですよ、壺井様」

「おっ、お楽しみっすか……!」

「はい。想像を絶するお楽しみが貴方を待っていますよ」

「想像を……ッ!」

「あらあら、おちんちんがさらに固くなってますよ。間違っても想像だけでイツたりしないでくださいね。これから雌奴隷をたくさんハメていただくのですから、無駄弾は一発たりとも撃てませんよ。ね?」

「ぐはっ!」

京子がクラインの肉棒の手元をギュッと握り、迫っていた射精を無理矢理押さえた。クラインはたまらず悲鳴をあげてしまう。

「ところで、本日はどのようなプレイをお望みですか」

「ど、どのような、ッスか?」

「ええ、私どもの奴隷はお客様のあらゆるニーズにお応えできるよう調教されていますので、お客様が何も仰られなくても素晴らしいおもてなしができますわ。即尺、即挿れはもちろん、飲尿も当たり前になせませす。ですが、やはりお客様によってお好みは違います。壺井様には壺井様のご希望があるのではないかと」

「俺の、好み……」

「フフツ、その反応から察しますに、何かご希望があるのですね」

京子の妖艶な雰囲気にあてられて、クラインは頭の中が真っ白になりそうだった。ペニスは未だ京子の掌の中にあり、時折しごかれてはギユツと握られるというのを繰り返され、完全に射精感をコントロールされていた。

「俺、は、アスナに……」

「アスナにい？」

自分の希望をぽつりぽつりと語り出すクライン。最初こそ遠慮気味に小さな声だったが、徐々に自分の欲望に素直になり、アスナを相手にしてみたいことを暴露していた。

「……てな感じっスね」

「なるほど」

京子の瞳がスウツと細くなるのを見て、クラインはゾツとした。

(やべえ、話しすぎたか！ しまったなあ……今俺が話したことって、どう考えても変態の所行じゃねーかよっ。いくら奴隷相手つつたつて、そんなことをアスナがやるわけねえし……)

だがクラインの心配は杞憂に終わる。

京子がにこりと微笑んだ。

「かしこまりました、壺井様のご要望、たしかに承りました。性奴隷アスナのほうに伝え、準備させますので」

「マジっスか！」

「もちろんです。殿方の欲望に全て応えるのが、性奴隷の喜びでもありますから。……まだホテルの到着まで少し時間がありますね」

京子がおもむろにクラインの上にまたがった。その動きにクラインが仰天したのは語るまでもない。

「な、何をう……!?!」

「ホテルに着くまでの間、お客様におちんちんを勃起させたままでは失礼ですからね。到着までの間、わたくしの膣の中で暖めて差し上げますわ」

「そんなことしちまったら俺イッチまうからあ！」

「ご安心を。イカせませんので、んふっ」

京子は言い終えると、腰を下ろし、クラインの肉棒をおまんこの中に挿入したのだった。

ズチュ、ずちゆり、ジユブブツツ……ヌプウ……。

イク寸前でおまんこから抜き、それからまた膣の中に迎え挿れる。寸止めの連続に、クラインは発狂寸前だった。

★

「壺井様、ホテルに到着いたしました」

「んはあ……」

「フッフ、気持ちよかったようで何よりです……ん」

ぬぷう……と音を立てながら、京子のおまんこに納まっていた肉棒が糸を引きながら露わとなる。

京子にトランクスとズボンはかせてもらい、

「それでは参りましょう、壺井様」

「はあ……」

ぼーっとした頭で応え、クラインは車から降りた。

豪華な佇まいのホテルを拝めるのかと思いきや、意外にもそこは広大な地下駐車場だった。薄暗いそこには、高級車の数々がずらりと停められている。

「京藤ホテルの裏エリアへの入り口は地下からでございます。正面玄関から入っていきなり性奴隷たちがリードで引かれて四つん這いで歩いていては、さすがに不味いですからね」

クラインの疑問を読みとった京子が答えた。

「あれ、でも俺、この前来たときは表玄関から入って専用のエレベーターだかで地下に……」

「それは裏エリアへの入場を許可された一般客用でございます。本日の壺井様はVIP待遇です」

「ヴィツ……」

息を呑むクライン。駐車場に並ぶ高級車が視界を埋める。自分の収入ではとてもではないが手が出ない車ばかり。そんな車に乗る者たちと同等の扱いを受けるということが、クラインを緊張させる。

「お、俺……場違いじゃないっすかね……」



「そんなことございませぬわ。だつて……」

京子がクラインの股間をさわさわと撫でる。

「こんなに立派で固いモノをお持ちの殿方なのですから」



クラインは京子と共に地下駐車場のエレベーターで上の階へ上がる。扉が開いた瞬間、淫乱な世界が広がる。

パツと見では豪華な作りのロビーではあるが、そこにいる女性全てが裸ないし下着姿だった。おそらく性奴隷たちだろう。

京子の言っていた通り、全裸で四つん這いになり、喉元に首輪をつけられ散歩させられる女や、待合いの席でソファにふんぞり返って新聞を読む男の一物をしゃぶっていたりなど、見ているだけで目の回る光景だった。

ロビーとはいえここは裏側。表側とは一線を描き、選ばれた者以外は目にするには叶わない特別な世界だ。

「(こちらでございませぬ)」

京子に促され、クラインはロビーの一面に設けられた待合いスペースへ。そして、言葉を失う。

「……………ッ」

「くっクライン!? それに母さんもッ!」

そこにはクラインと同じように目を丸くしているアスナの姿があった。

ただし、クラインが知るいつものアスナの姿ではない。

犬のように四つん這いになり、そして全裸。

さらには注連縄で亀甲縛りにされていて、股間ではブウウウンブウウウンとバイブが挿入され振動音を響かせている。

(ていうか母さんって、この人、アスナのお袋さんかよ!)

隣に立っている京子を横目で見て、クラインは驚愕する。とても母親とは思えないほどにきれいな面差し of 女性だ。

「ど、どうしてあなたが……キャアッ」

アスナが尻に鞭を打たれた。打ったのはアスナの首輪から垂れるリードを掴んでいる男だった。二十代後半ぐらいのその男は、アスナ

にさらに二度鞭を叩き込む。

「アスナ、お客様になんて口を聞くんた。申し訳ございません、壺井様。まだこの奴隷は新人でして、お客様のお相手をするのは壺井様が初めてなんですよ」

「お、俺が、初めて……」

「はい、ですがご安心を。調教は行き届いておりますので、きっとご満足いただけるかと。特別招待券の提示をよろしいでしょうか」

「あ、ああ……」

クラインは慌てて懐から特別招待券を取り出した。

「はい、たしかに」

男が落ち着いた様子で招待券を受け取る。

「いいことアスナ。壺井様に失礼の内容にするのよ」

京子がアスナを見下ろし、冷たく言い放った。

「……は、はい」

アスナは顔をうつむかせ、静かに頷く。

「マサヤ様、壺井様の……ご希望ですが……」

京子がマサヤと呼ばれた男の耳元でヒソヒソと伝える。自分の欲望にまみれた要望が、また別の他人へと流れていくのを、クラインは恥ずかしく思い目を逸らす。

だが逸らした先には性奴隷アスナがちよこんと四つん這いの状態でクラインを見上げ、いたたまれなくなる。

どうして助けてくれないの？

アスナの目がそう訴えているように思えてならない。

でも、その割には下の口でバイブを根本までくわえこみ、時折「あふっ」「あんっ」などと喘ぎ声を漏らしてもいる。

（ええいつ、細かいことは考えるな俺！ 今日から一泊二日は、アスナは俺の奴隷なんだ！）

クラインは頭を振って、余計な考えを追い出した。

「ふむ、なるほど」

マサヤがクラインの要望を聞き終えたらしく、顎に手を当てて何事かを思案している。

「壺井様、ご要望にお応え致しますには、少々準備にお時間を頂きますがよろしいでしょうか」

「はっ……はいいー」

上擦った声で返事をするクライン。それから性奴隷アスナを見下ろす。

(マジであんなことアスナがやってくれんのかよ……ッ)

クラインの驚愕をよそに、準備のためにアスナはマサヤにリードで引っ張られ一旦その場を離れた。

「クライン様も準備をしましょう。どうぞこちらへ」

「は、はいい!？」

クラインは驚きのあまり素っ頓狂な声を漏らした。それもそのはず。

いつのまにかズボンのチャックが下ろされ、勃起した一物が露わになっていた。それを京子がまるで手を引くようにして掴んで歩き始めたのだ。

股間から前のめりになるような奇妙な姿勢で、クラインは京子の後についていく。

案内された先は更衣室だった。だが、

「男と女で分かれてないのかよ……っ」

「当然でございます。殿方の着替えを女性がお手伝いしなければなりませんからね。女性の着替えを生でご覧になりたい殿方も多くいらっしやいますし、大事なご息がカスで汚れたりしたら舐めとってお掃除しなくてはいいけませんから」

「……………」

絶句しつつも、クラインは心の中で喝采をあげていた。

更衣室の中に入ると、京子の手によってクラインはあつという間に全裸にされる。その間、サワサワと全身をフェザータッチされ、唇までもふさげる。

「んちゅう、んっ、ちゅっ……ぷはあ。ンッフ……もうおちんちんがピンビンですね。水着、入るかしら」

京子に水着を穿かせてもらうクライン。

彼に用意された水着は赤いトランクス型の水着なので、着用には支障はなかったものの、こんもりと盛り上がった股間は隠しようもなかった。

「元氣いっぱいですね」

「あ、あのお、本当に娘さんとヤツちやつてもいいんすか？」

「もちろんです。存分に楽しんでくださいませ。アスナの口も、肛門も、そして膣も、今は貴方のモノですよ、壺井様。好きなだけ味わい、使っていたいただいて構いませんわ。母親として、とても誇らしいです」

「そんじゃあ、遠慮なく……それと」

「はい、何か」

「京子さんとも……またヤれますか？」

クラインがそう訊ねると、京子は目を丸くした。思わぬ質問だったようだ。彼女は少し思案する様子を見せた後、口元を緩めて微笑んだ。

「フッフ、そうですね。それは、これからの壺井様次第ですね」

「これからの、俺？」

「出世、してくださいね」

「……俺、頑張るっス」

クラインの脳裏に地下駐車場に並ぶ高級車が思い浮かぶ。

（俺もいつかあんな車に乗れるぐらいに稼いで、京子さんとやりまくるんだ……ッ。でもって今日はアスナで思いつきり楽しんでやる！）。

そう固く決意する。

京子に手を引かれ、彼は案内される。

更衣室の扉を開けると、そこは屋外のプールだった。

日差しが燦々と降り注ぎ、広大なプールに溜まった水は常夏の島のそれのように透き通ったブルー。日光を反射して水面がキラキラと輝いている。

プールサイドにはデツキチェアとパラソルが並んでいる。

まさにリゾート地そのもの。

高級ホテルのプールの情景が、そこには広がっていた。

「本日は壺井様の貸し切りとさせて頂きました。そのデツキチエアにかけてもう少々お待ちください。間もなく、アスナがお飲物を持って参りますので」

京子が一礼し、その場を後にする。

残されたクラインは、言われたとおりデツキチエアに腰を下ろして寝そべるも、心臓の鼓動がやかましくてちつとも落ち着けなかった。実際は三分程度だったが、クラインには数時間も待たされたような心地だった。

永遠とも感じられる待ち時間を経て、クラインの元へアスナがやってきた。

「……お待たせ、しました、壺井遼太郎様。こ、このたびは、おまんこのご利用、誠にありがとうございます……ご、ございます。本日から、壺井様の性奴隷を務めさせて頂きます……アスナ、です」

そこには、クラインの容貌通りの格好をしたアスナの姿があった。

## 第12話 バンダナ男、夢のトロピカル浣腸を実現

クラインはやって来たアスナの姿を頭からつま先まで舐めるように眺める。

アスナはウェイトレスのように片手に銀盆を持ち、ビキニ姿だった。ブラは白い生地には赤いラインが一本入った柄で、パンツは白と赤のボーダー柄。クラインの希望通りの水着である。

ブラに納まる二つの丘陵地帯はクラインの想像以上に大きく、パンツから延びる脚は白くすらりとしている。

そんな美しい二本の脚をスタスタと動かし、アスナがクラインに近づく。彼女は銀盆の上に載せられたトロピカルジュースをサイドテーブルに載せる。

「そ、その水着、ALOでアスナが着てたろ？ 初めて見たときからいいなあって思ってたんだよなあ、あはは……」

「そ、そうなの……ですか」

アスナがぎこちなく答えた。

反応の薄さにクラインは焦った。やっぱりこの状況はどう考えても異常だよなあ……と思い始める。

が、

アスナがトロピカルジュースをストローで口に含み、デッキチエアに寝そべっているクラインに多い被さる。アスナの栗色の髪がクラインの頬にまで垂れ、少しくすぐりたい。

「……………んう」

クラインの唇に自分のそれを重ね、トロピカルジュースを口移しで飲ませた。これもクラインの要望である。

爽やかな味わいに混じり、雌の香りがクラインの鼻腔をくすぐる。

「じゅるるる……じゅるっ」

アスナの口元から卑猥な音色が奏でられている。

口の中のジュースを全て飲み干すと、今度はアスナの舌がクラインの口内へと侵入してきた。

彼女が探していたのはクラインの舌。

舌と舌が接触した瞬間、獲物を見つけたといわんばかりにアスナの舌がクラインのそれに絡みついてきた。

互いの唾液が混じり合う。

ジュースの残り香が雌の香りを引き立てる。

いつの間にか瞑っていた目を開けてみると、アスナが瞳を閉じて一心不乱にディープキスをしている表情が眼前に展開した。

「んふっ、ちゅっ、ちゅびっ……ちゅうっ」

頬を上気させ、うっとりとした表情を浮かべ、アスナが恋人のように口付けを続けている。

アスナの鼻息が自分の顔に当たる。

(ほ、本当にアスナが、俺の性奴隷やってやがる……ッ)

そう思った瞬間、クラインの理性は呆気なく砕け散った。

★

「あんっ、ちよっ……落ち着いてっアツ、クライン……わたしはずっと貴方の傍にいるのよ……いますからっ」

「んなこと言っただって一泊二日だろうがよっ。だったらやれることヤンねえと損だぜ！」

クラインはデツキチエアにアスナを寝かせ、その上から多い被さってアスナの胸を乱暴に揉んでいた。まだ水着は脱がしてはいない。

水着の上からまずは胸の柔らかさを楽しんでいる。アスナのおっぱいは揉んでも揉んでも飽きなかった。

「へへへ、いいないいなこの水着っ。俺あずっところして間近で見たかったんだよお。ぎひひッ」

「そ、そうですか……ひあっ！」

クラインの手が水着の内側に及び、アスナの乳首を捕らえた。指先がわずかに触れただけなのに、アスナの体に電流が流れたかのような快感がほとばしる。

「感じやすいんだなあ、アスナ。調教された結果か？」

「ちよ、調教なんてされて……ない、です」

「嘘つけ、俺あアスナがオークション会場でおしっこしてるところからクンニされるとこまでしっっかり見てたんだぜ」

「えっ、そうなのっ!？」

驚きのあまり敬語を完全に忘れてしまうアスナ。

「俺もクンニしたしな。ヒヒヒ」

「うう……恥ずかしいよお」

「恥ずかしがるこたあねーよ。今日から一泊二日は俺の性奴隷なんだから？ アスナのおまんこからアナルまで、使いまくってやるからな」

「……は、はいい」

クラインは水着のブラを上にはずらし、いよいよ生のアスナおっぱいと対面する。その魅惑の丘陵地帯に、彼は言葉を失った。

「……………」

「……クライン?」

次の瞬間、クラインはアスナの右の胸の乳首を口に含み、バキュームし始めた。凄まじい吸引力に、アスナは喘ぎ声を漏らさずにはいられない。

「ジュルルルルウううツツツ!」

「んあああああツツ!」

まるで赤ん坊に戻ってしまったかのように、クラインはアスナの乳首を夢中で吸い続ける。ピンク色の乳首にピンク色の乳輪。乳首は男の一物のように勃っていて、男の欲望に火を付けるのに十分な魅力たたえていた。クラインが狂ったように乳首をしゃぶるのも無理からぬ話である。

だが狂乱しているようでいて、クラインは雄の本能に忠実だった。彼の右手はアスナの股間へと延び、水着の上から局部を触っている。アスナは右手の動きに反応せずにはいられない。

「んふう! あっ、あんうツ……んひっ!」

「ハアハアハア、ようし次はおまんこだ」

息を荒くしながら、クラインは顔をアスナの下半身へと持って行き、水着をずらし、

「おお……」

露わになったアスナのおまんこを見て、感嘆の息をこぼした。

オークシヨンのときとそのままの、桃色の膣口がそこにはあった。



クリトリスは感じていることを拳手してアピールしているかのよう  
に勃起し、ピラピラを始め肉壁全体がテカテカと淫猥な輝きを放つて  
いる。

「エッチに光ってるおまんこだなあアスナああ。こりやあ閃光アスナ  
じゃなくて淫光アスナだな。いや淫行アスナかあゲへへッ」

んじゃあいただきですか、という言葉を合図に、クラインによるお  
まんこのご賞味タイムが始まった。

「あひあああああん!?!」

じゅぶぶぶじゅるるじゅぶる……ッッ!

異常なまでのすすり具合に、アスナは獣のように鳴いた。

舐めるたびにアスナの膺から魅惑の汁が湧き出てきて、クラインは  
それをすするごとに興奮を増していく。

「あ、アスナあ……はあはあ、俺もう我慢できねえよ。俺の希望は聞か  
されてんだろ?」

「……はい、承知しています。ご要望のデツキチエアでの騎乗位です  
ね」

「そうそれ!」

アスナが一旦デツキチエアから離れ、そこにクラインが仰向けに  
なって寝そべる。

「失礼、します……」

アスナがクラインの水着を脱がせた。彼のチンポが外気に晒され  
る。アスナはそれを見て一瞬目を伏せるも、結局は我慢できずに両手  
で愛おしそうに握っていた。

「はあ、ちんぽお……」

瞳を潤ませて、まるで恋をする少女のようにアスナはチンポを見つ  
めている。

「なんだよアスナ、調教でチンポなんて挿れまくってるんじゃねえの  
か?」

「最近はずっとバイブで我慢させられて……」

「久々ってわけか。そりやあいいや」

「挿れます、ね……」

いそいそとアスナは水着のパンツ部分を横にずらし、おまんこだけをのぞかせる。これもクラインの希望で、プールでのプレイはクラインが脱がせない限りアスナは水着を着たままなのだ。

アスナが肉棒を握り、おまんこにあてがう。

カリがアスナの膣口に触れる。

ゴムなんて無粋なモノは付けていない。

正真正銘の生ハメ。

それをアスナに……。

「んうふう……」

アスナが吐息をもらす。

まずカリが膣の中へと埋まる。それだけで肉壁のツブツブの感触がカリへと伝わって快感が押し寄せてくる。

少しずつ、少しずつ、アスナは腰を落としていく。

(ま、マジで俺のチンポがアスナん中に入っていく……っ！)

興奮の面持ちでクラインは、自分の肉棒がアスナの膣に喰われていくのを見守る。

ずぶ

ずぶ

ずぶ

ブチュツツツ!!

「うほっ!!」

アスナが呻いた。

卑猥な音を立てて、最後は勢いよくアスナは腰を下ろしてクラインのチンポを根本まで飲み込んだ。

今や彼のチンポはアスナと完全に合体状態にある。繋がったチンポとおまんこを見て、クラインは感動のあまり声を出せずにいた。

「動き、ますっ……」

アスナがクラインの上で上下運動を開始、根本まで飲み込まれたチンポが一旦抜かれたかと思うと、また、

「あひあッー」

ズブリツと根本までくわえこまれる。

ずちゅ、ぶちゅるっ、ぶちゅりりッッ。

股間と股間の接合部ではアスナのおまんこが喜びの涙を流すように愛液を溢れさせて卑猥な音色を奏でる。

パンッパンッパンパンパン！

アスナの尻がクラインの体にぶつかるたびに、スパンキングのような音が響き渡る。

「あっあっあ……ッあっああううん……ッ！」

アスナの喘ぎ声がクラインの耳朶を心地よく震わせる。

視界にはアスナが腰を振っておっぱいをプルプルと震わせる光景が広がっている。

(信じ……られねえ……)

つい先日まで、アスナとクラインの関係は、キリトを介したただの仲間レベルだった。もしキリトがいなければ、間違いなくクラインが一方的にアスナのことを知っていただけなのは語るまでもない。

それが今はどうだ。

プールサイドでデツキチエアに寝そべり。

アスナはビキニ姿で自分にまたがり腰を振っている。

喉が乾いたらトロピカルジュースを口に含んで飲ませて、くれるだろうか。

「あ、アスナあ、喉乾いちまったなあ……なんて」

クラインが恐る恐るそう言ってみると、

「んふっ、かしこまりました、クライン様」

アスナは妖艶な笑顔を見せ、トロピカルジュースを口に含んで口移しで飲ませてくれた。

「んっ……んふう、ん」

チンポはおまんこでくわえ込んだまま、アスナはクラインにもたれかかり、口移しをしてくれる。

(なんでも言うこと聞いてくれる……っ)

「最高だぜえー！」

「く、クライン様!? あうッ!」

クラインはアスナの腰をガシツと掴み、下から腰を幾度となく突き

上げた。

「もう我慢できねえよアスナあ！俺は出すぞッ。生で出しちゃうぞお!!」

「出してえー！クライン様の精子い、わたしのおみゃんに飲みやせてあげてえええつつ!!」

「イクううううう!!」

ビュプツピュルル!!

クラインは盛大に射精をした。これまで経験したことのない壮絶な射精感が彼を襲う。こんなに長い間射精しているのは初めての体験だった。

かなりの量の精子が、アスナの膣内を泳いでいることだろう。

「出てるりゆうううツツ！暖かい精子がおまんこの中でピュツピュ暴れてりゆうよお!!」

はふう……という甘い吐息を最後に、アスナはクラインに抱かれる形で倒れた。

クラインは胸板でムニユムニユと潰されるアスナのおっぱいの感触を楽しむ。

「はあはあはあ……で、では、おちんちんをお掃除致しますね。精子とわたしの愛液で汚れてしまいましたから……んふう」

ぬふう、とアスナが腰を上げてチンポを抜く。

チンポが糸を引いておまんこから姿を表す。その直後、コポウとおまんこから行き場を無くした精子が溢れ、垂れてきた。

「アスナ、仁王立ちで頼むわ」

「かしこまりました、クライン様」

アスナの声で発せられる『クライン様』という響きがたまらなく彼を喜ばせた。いつの間にか『客』と『性奴隷』という互いの立ち位置にも慣れて、やり取りがスムーズになっている。

クラインはデッキキエアから立ち上がり、アスナは彼の股間を前に膝立ちとなる。アスナの頭頂部がクラインの視界に入る。

「失礼します……ちゅっ」

未だ勃起している一物に、アスナの唇がキスをする。そして、

「ああむっ」

くわえこんだ。

おまんこに挿入したときとは別種の感動がクラインを包み込む。おまんここと違い、口と舌は普段、物を食べたり飲んだりする器官であつて、男の肉棒をくわえこむために存在するのではない。

ましてやアスナのような美少女が自分の汚らしいチンポを従順にくわえる姿を、仁王立ちという高見から見物できるなど、クラインの思考の埒外の姿だ。そんなわけだからクラインの興奮もひとしおである。

「じゅぼぼぼっ……じゅぼっじゅぼっじゅぼっ……」

アスナが上目遣いでクラインを見つめながら、彼の肉棒を頬張っている。口元をすぼめ、両の手を竿に控えめに触れ、チュウチュウと愛撫している。

その姿に、クラインは我を忘れた。

(これが興奮せずにはいられっかよ！)

「じゅぶっ、じゅるるっ……んぐう!？」

アスナが苦しげに呻いた。それもそのはず。

クラインがアスナの頭を抱え込み、まるでセックスをするように腰を振っているからだ。

喉を容赦なく突つつかれるアスナ。

クラインの陰毛にアスナの顔がうずまる。汗と精液の混じった臭いが彼女を襲っているであろうことは想像に難くない。

その眺めを見て、クラインはニタアと口角を吊り上げる。

「気持ち良いぜえアスナの口まんこよお……んぐっ、そろそろイクぜッ」

「んふうッ！ んふほおおッッ！」

アスナがクラインの尻を抱え込み、サワサワと尻肉をフェザータッチを繰り返す。

前のフェラと後ろのフェザータッチ。

二方向から挟み撃ちにされるが如き愛撫にクラインはたまらず、  
「んぐあッ！」

ドピユルルツツ!!

アスナの口内で果てた。

「んふう……ツ、んぐ、んぐう……」

コクコク、とアスナが喉を鳴らす。クラインが放出した精液は、全てアスナが飲み込んだのだった。

「はふう……けぷっ」

肉棒を口から出して、アスナが一息つく。

「アスナ、まだまだこれからだぜツ」

クラインの興奮は全く覚めてはいなかった。

★

その後もクラインは前もって出しておいた希望通りのプレイを次々とアスナを使って行った。

「しよ、しよんなのむりいい……ツツ」

アスナがプールサイドで悲痛な叫びをあげる。水着のパンツを横にずらされ、おまんこがアナルが晒されている。どちらの穴もヒクヒクとうごめき、何かをくわえたがっているように見えた。

ピタア……。

「ひいー」

アスナのアナルに、ガラス製の浣腸器の先端が触れた。浣腸器の中には青い液体で満たされている。

「ヒヒヒ、行くぜアスナあ。トロピカル浣腸だぜっ!」

そう。青い液体の正体は、先ほどアスナが口移しでクラインに飲ませていたトロピカルジュースの残りだ。それを使って浣腸をするのも、クラインの希望だった。

さすがにこれは無理だろなあ……と、ここに来る前は思っていたクラインだが、今ではアスナにできないことはないときえ思っている。ぶちゆううううう……。

浣腸器のピストンを押し込むクライン。ピストンの圧力によって浣腸器内部のトロピカルジュースが押し出され、アスナの肛門との接続部に集中、そして注入されていく。

「あはう! 入って来てるううううお尻にジュース入ってきてるよお

おおお……」

プルツとした尻肉を小刻みに震わせ、アスナが浣腸されていく。その様子は初めてのことに不安を感じているというより、未知の体験を楽しんでいるように思えた。

唇の端から涎を垂らし「あはあ……」と快感に染まった笑みを浮かべているほど。

「ようし、これでトロピカルジュースはアスナの尻んに全部入れたぞ」

きゅぽっ。

「あうっ」

浣腸器を抜いた途端、アスナが甘い悲鳴をあげた。そして、

「ああ……クライン様……お願いしますっ、浣腸器を挿入したままにして……おいて、くだ……さ、い……ううう！」

ぎゅるるる……ッ。

アスナの腹部からくぐもった音が漏れた。クラインはそれを聞いてニヤリと不敵に笑う。

「ひひひっ、そいつあできねえよ。アスナ、浣腸の意味分かってないだろ。浣腸ってのはな、中のもんを出すためにやるんだぜ」

「しよんにゃあ……あああッダメえ!!」

ぷしゅっ。

僅かだが、アスナの肛門から青い液体が漏れ出た。肛門をキュツとすぼめようとするアスナだが、それよりも腸の中のトロピカルジュースが外に出ようとする力の方が上回っているようだ。

「アスナあ、遠慮することあねえぜ。派手に出しちゃいな」

クラインがアスナの尻をなでながら耳元でささやいた。恥ずかしそうに瞳を閉じるアスナ。

四つん這いで脚をジタバタとさせつつ内股にしている。

「ひゃあ……あひゃ……んううう……あッ、もう……もう出ぢやううよおお……ッッ」

瞳から涙をポロポロとこぼしながら必死に便意に耐える様子を、クラインは楽しげに眺めている。

「我慢は体によくないぜアスナあ。腹がこんなにタプタプしてさあ、孕んじまったみてえだなオイ」

トリピカル浣腸で膨れたアスナの腹部を、クラインが手でタプタプと押しした。

「ひゃあんツ!? おしやないでえ! おなか押さにやいでえ……ツ。あッ」

ぶりりっ……

ぶしやあああああああああツツツツ!!!

「いやああああああんツツツ!!!」

アスナの肛門が決壊、空色の洪水が弧を描き、バシヤバシヤとプールサイドへ放出された。

アナルから噴射されるトロピカルジュースに日差しが落ち、光の加減で夏を彩るように虹がかかった。

美少女のおまんこは満開の桜のようにパツクリと開き、アナルは喜びを表現するかのようには卑猥な鳴き声をあげ続ける。

ぶちやあああツツ、

ぶしゆうううツツ、

ぶちゆるるるう!

アスナが肛門をすぼめるたびに音色が変化する。

「いい音出すじゃねえかアスナ。ぎひひっ」

「あああッ、あうううツツ、音聞いちやいやあああツツ!」

などと叫びつつも、アスナは口元に笑みをたたえていた。

だらしなく、淫乱に。

肛門に異物を浣腸をされ、あまつさえ噴射させてしまうなど、どう考えても羞恥の極み。

女としてのプライドをズタズタにされているこの状況。

だが……

「あふうううう……」

クラインには、アスナが悦んでいるようにしか思えなかった。瞳はとろんとし、口は半開きにして涎が垂れるのも構わない。

(アスナは完全に雌豚に堕ちたんだな)



そう思いながら、クラインはアスナ主演のトロピカル浣腸ショーを  
楽しむ。

ぷしゅっぷしゅ……ぶぶう。

「あああん……」

放屁をしながらもアスナはアへ顔を晒している。アナルからはま  
るで中出しをされた直後のように、トロピカルジュースをたらりと垂  
らしている。

「浣腸も気持ちよさそうだったな、アスナ」

「はいいいい……とつても気持ち良かったです……あ、あの、クライ  
ン様っ、わた、し……」

「ど、どうしたアスナッ」

様子のおかしいアスナにクラインは動揺する。トロピカルジュ  
ースを出し切ったというのに、アスナが再び下半身を震わせているの  
だ。

(やべえ、やっぱジュースで浣腸とか不味かったか……!?)

焦るクラインだったが、彼の心配は杞憂に終わる。

ちよろっ……

「えっ……」

よく見ると、アスナのおまんこから僅かに、何かがこぼれた。アス  
ナはというと、赤面してうつむいている。

「あ、も、もうっ……我慢できましえん……ッ。ごめんにやしやああい  
いいいんツ!!」

じよおおおおおおおおおツツ!!

アスナのおまんこが黄金色の聖水を溢れさせた。まるでずつと溜  
め込んでいたかのように、とめどなく放尿するアスナ。

「うおっ、勿体ねえっ!」

クラインが四つん這いのアスナの太股と太股の間、おまんこの直下  
に顔をスライドインさせ、アスナの聖水を口で受け止めた。

「ああダメツ、止まらないよお……っ……っ!」

その後もしばらく、クラインは便器となってアスナの股間から湧き  
出る恵みの水を飲み続けたのだった。



「はははっ、クラインの奴、楽しそうなことしてるな」

俺はスイートルームでベッドに横になりながら、巨大スクリーンに映し出されているアスナとクラインのプレイを眺めていた。もちろんこの映像はしっかりと録画もされている。

「見た？ 京子さん。アスナの奴、トロピカルジュースで浣腸なんかされてたよ」

「ちゅびっ、じゅぼっじゅぼっじゅぼっじゅぼっ……ぷはあ、はい、娘も悦んでいると思います」

京子さんが俺の肉棒から口を離し、映像を横目で見ながら答えた。彼女は全裸になり、ベッドで寝そべる俺にご奉仕の真っ最中だ。

いや、クラインとアスナのプレイ見てるだけじゃ退屈そうだから、京子さんの相手でもしてあげようかと思ってね。

京子さんもクラインの『お出迎え』で中途半端にエッチして体が火照って持て余してたみたいだし。俺って本当に奴隷思いの調教師だなあ。

「うあっ、アスナの奴、お漏らしまで……プッ、クライン自分から便器になりに行つてやがる」

「あんな雌豚のおしっこが飲みたいなんて、変わった男ですね」

「京子さんも雌豚でしょ。無駄口叩いてないでしゃぶろうな」

「んぐふううッ！」

京子さんの口にペニスをねじ込んだ。

俺が京子さんの口マンコを堪能し、そろそろハメてやるかなと思つたりしている間、アスナはというとおしっこを漏らした後にブリリリッと脱糞してしまい、大泣きしつつもアへるという爆笑必至の変態ショーを演じ、俺と京子さんを沸かせてくれた。

## 第13話 良い日朝勃ち

「どうぞ…、クライン様」

「おう」

クラインは手にしていたグラスを差し出す。アスナがドンペリを注ぐ。

ホテルの一室でソファにふんぞり返ったクラインは、これまでの人生の中で最高の幸せを噛みしめていた。

鼻息を鳴らし、クラインは部屋の中を見渡す。

裏側とはいえ超一流のホテルだけある。スイートルームかと思うほどに広大な部屋と高級そうな調度の数々。

そしてベッドはキングサイズでしかも天蓋付きだ。この後あのベッドでアスナを朝まで使い倒せるのかと思うと、それだけで股間が熱を持って固くなる。

そして嬉しいことに酒も食事も飲み放題で食べ放題だった。しかもメニューの制限など無粋なものはない。クラインは迷わずドンペリを注文し、こうしてアスナに注がせては飲んでいくわけである。

さらにアスナの服装も自由にチェンジさせることができるということから驚きだ。水着のままでもよかつたのだが、アスナが脱糞して汚してしまったのでそれは諦め、今はメイド姿で奉仕させている。

とはいえ下半身にスカートもパンツは身につけておらず、尻を丸出しにしている。前側はかろうじて白いメイドエプロンによって隠されているが、ヒラヒラとして動き次第では局部が見えてしまう。

「ふはあッ、うめー」

クラインはドンペリを堪能する。

アスナはというと、

「ちゅっ…ちゅちゅっ、んっんっれるお……」

ドンペリを注ぎ終えた後はクラインの股間に顔をうずめ、フェラに勤しんでいる。彼の息子はアスナの舌でもてなされ、喜びを露わにするかのように我慢汗を先端から滲ませ続けている。

「ずずうっ、じゅぶるるっ……」

アスナが我慢汁をすする。ここ数時間の彼女の水分補給は、クラインの我慢汁と尿によってまかなわれている。

ドンペリの入ったグラスを優雅に揺らしながら、眼下で頭を上下させチンポをしゃぶるアスナを眺めるクラインの顔は、この上なく品が無く鼻が伸びきっている。

時刻は夜の九時を回った。現在に至るまで、クラインはこのソファでずっとアスナを堪能していた。

アスナに酌をさせ、料理を食べさせてもらい、舌鼓を打ちながら彼女のフェラを楽しむ。肉棒が元気になったところでソファに座ったままの状態のアスナが上からまたがり、挿入。

グチュグチュツとアスナマンコの鳴き声に耳を傾けているうちに快感が頂点に達し、クラインは遠慮も躊躇もなくアスナの膣の中へ精子を泳がせていく。

行為が終わるとまた酒と食事をしつつフェラをさせ、勃起したらまた挿入、あるいはそのまま口内射精してアスナに精子を飲ませてあげる。

そのサイクルを延々と繰り返していた。

「ここは天国だぜ……」

煙草に火をつけ、紫煙をくゆらせながらクラインはひとりごちた。アスナの頭を撫でてやると、

「うふうん……」

と可愛い声音で答えながら、上目遣いでクラインを見やってきた。うるんだ瞳。

チンポを頬張ることですぼめられた口元。

ほ乳瓶を持つ赤ん坊のようにチンポに添えられた両の手。

それらが渾然一体となってクラインの感覚を刺激し、ペニスを一気に固くさせた。

「よし、そろそろだな」

灰皿の上で煙草の灰を落とし、クラインはアスナの口からチンポを離させる。

「アスナ、そろそろだ」

ん、と顎をしゃくって肉棒の勃起ぶりを示した。

「んふっ、かしこまりました、クライン様」

アスナはサツと自分用のグラスを用意し、クラインの肉棒の先端をグラスにあてがう。そして、

「んっ、出るぞッ」

ぴゅぴゅっ！

精子がグラスの中に放出されていく。アスナが牛の乳搾りのように肉棒をしごき、チンポミルクをグラスで受け取る。

白濁とした液体がグラスの底に溜まっていく。

「はあはあ、雌奴隷にとっちゃご馳走だろ。最後の一滴までしっかり飲めよ」

「もちろんです。殿方のチンポミルクだ〜いすきですっ。いただきますす……」

精子の入ったグラスを唇にあて、アスナはグラスを傾けた。ドロドロとした精子がグラスからアスナの口の中へと流れていく。

「ごく、んく、ごく……んっ、んう……くふうん、ごくりっ、ぷは」

飲んだ証とばかりに、アスナが口を開けて口内に精子が残っていないことを示した。

「よしよし、よく飲めたぞアスナ」

「とんでもないです。貴重な精子を飲ませていただき、ありがとうございます。……まだ勃起してますね、わたしの膣で暖めます」

「親子だなあ」

「え？」

「いや、京子さんも同じこと言っただけのチンポを挿れてたなあっつ」

「そ、そうなんですか。……く、クライン様、母さんともその……したんですね」

「おう、車の中でおもてなしって感じだな。っつてことはアレかあ。俺は親子丼したっつてことになるのかあ？」

「お、親子……っつ」

赤面するアスナ。そして本日何回戦目になるか分からない本番行為に臨むべく、クラインにまたがる。

「んう……っ」

肉棒に手を添え、おまんこの割れ目にカ리를こすりつける。

「ん、んう……んっんっ……」

クリトリスとカ리를キスさせて自分も気持ち良くなっているアスナ。それから臍にクラインの息子を迎え挿れる。

「んっふううんッ！」

ぶちゆるるるうッツ！

すでに愛液で満たされていたアスナのおまんこ。クラインの肉棒を挿入した途端に派手な音を響かせている。

「あんっあん……ッんうっ……んっんっあっあっああん!!」

目の前でアスナが腰を振り、胸がプルンプルンと縦揺れを繰り返す。

むにゅむにゅ……。

クラインはまるで片手間であるかのように右側の胸を揉みながら、煙草を吸って、灰皿でそれを押しつぶした。

「よっしや、そろそろあのベッドを使うか、アスナ」

「は、はいいい……」

「んじやあこのまま……っつと」

「えっ、きや!?!」

クラインはアスナの太股を抱え、立ち上がった。駅弁ファックだ。

「や、えっ……このまま移動するの!?! ……ですか?」

アスナが戸惑ってつい素を出してしまった様子にクラインは思わず笑う。

「ははは、アスナは駅弁ファック初めてなのか?」

「はい……まだ、教えてもらってません」

「そっかそっか。普通にベッドに移動するだけのつもりだったけど、ちよつと楽しんでからにすっつか!」

「楽しむ? ……ああんッ!?!」

クラインは腰を振りながら広い部屋を回った。

重なり合った股間と股間はぶつかり合う度に、ばちゅんばちゅん、パンパンツと小気味良い音色を響かせる。

アスナとクラインが駅弁ファックで部屋を舞う姿は、まるで舞踏会のようにすらあった。もつとも、それはとても卑猥な舞踏会だが。

ずんっずんっずん……！

下方から天を突くかのような連続ファックに、アスナは息も絶え絶えだ。

「あっ……はっはっはッ……これえッ、スゴっ……あううッ……んはっ、うほっ！」

「アスナ」

「んっ、んふうう……」

駅弁ファックを舞いながら、クラインとアスナは唇を重ねる。舌と舌を絡ませ、ふたりの唾液が混じり合う。

不思議な甘みのある味がクラインの口内に広がっていく。

（これがアスナの味かあ。くう、たまんねえ！）

プールでもキスはしたが、そのときはトロピカルジュースの味のほうが強かった。けれど今はアスナ本来の味が楽しめる。

「こんなに幸せでいいのかよお俺」

「あんっ……今のわたしはアンツ、クライン様の性奴隷です。いっばいおまんこを楽しんでくださいねっ」

んふっ、とアスナが妖艶な笑みを向けてきた。

（まさかあのアスナがこんなエロい顔するなんて……ッ）

クラインの興奮はさらに増した。

「そんな顔されちゃあ張り切らないわけにはいかないよなあオイッ！」

「ああああああん！」

一際激しく突きつつ、クラインはベッドにアスナを押し倒した。



ベッドにアスナを押し倒したクラインは、一旦肉棒をアスナから引き抜き、彼女のメイド服を脱がせた。

もつとも、アスナの下半身は元から何も身につけていなかったの  
で、上半身だけを脱がせるだけで済んだのだが。

あっという間にブラまではぎ取られ、白いニーハイだけとなったア

スナは恥ずかしそうに胸元を隠していた。

「おいおい、今更おっぱい隠してどうすんだよ」

「やんっ……」

クラインは強引にアスナの腕を広げる。ぷるんつとした形の良い大きめの胸が露わとなる。

「これならパイズリも余裕でいけるな」

そう口にして、クラインはアスナの上に馬乗りになり、自らの分身をアスナのおっぱいの間に挟む。おっぱいとおっぱいの隙間は、膣の中とはまた違う、人肌と柔らかさによる暖かみがあった。

「しごき、ますね……」

自分の胸に手を添え、クラインの一物をしっかりと挟み込んで上下におっぱいを動かし始めるアスナ。

「お、さすが調教が行き届いてるなあ。男がこういう態勢を取ったらどのような行動するかを分かってんじゃねえか」

「んっんっふッ……気持ち、いいですか？」

「へへへ、最高だぜえ」

今さっきまでアスナの愛液の海となっている膣内に納まっていたチンポだ。当然の帰結としてカリから竿、根本まで愛液でベツトリと塗れていてテカテカと光っているほど。

それが潤滑油となり、アスナのおっぱいの間をヌチヨヌチヨと卑猥な音を立てながら滑っている。

ぬちゅっ、ぬちよっ、ちゅぶッ。

おっぱいの暖かさと柔らかさがチンポにダイレクトに伝わってくる感覚に、クラインは酔いしれ、そして……。

「出るぞッ」

「はいっ、いっぱい元気な精子くださいっ！」

びゅるるッ！

「ひあんッ!?!」

アスナの胸元から顎にまで、クラインの白濁液が飛び散った。アスナはそれを愛おしそうに指先で救い、舌でペロリと舐めとる。

「はあん……暖かくて美味しいよお」



「キリトのよりもか？」

「うっ……」

うっとりした顔から一転、アスナの顔が引き締まった。クラインとしては、こんな状況になってキリトのことはどう考えているんだろう、という好奇心だった。ほかにも聞きたいことは色々ある。

だが、助けてやりたいとは欠片も思うことはなかった。

クラインはもうアスナの体を味わい過ぎていて、その呪縛から逃れることはできなくなっている。キリトに今の状況を知らせれば、間違いなく彼は助けに来るだろう。

そう易々と助けられるものでもないと思うが、ALOに囚われていたアスナを救い出したという過去もあるキリトだ。不可能を可能にしてしまう恐れだつてある。

恐れ、と認識している自分の異常さに、クラインは気付いていない。

「きつ……キリトくんに、こんなことしたことないもん……」

プイツとそっぽを向き、アスナはぶつきらぼうに答えた。

この時ばかりはアスナは完全に素に戻っても訂正することはなかった。

「じゃ、じゃあ、なんだつて性奴隷なんかやってんだ？」

「それは……その、母さんがマサヤ様にわたしの調教を……」

「ふうん、まあ細かいことはいいや」

「やあんっー」

面倒くさくなつてクラインはアスナのおっぱいにむさぼりついた。

アスナが奴隷になった理由は気になるが、今は一分一秒が惜しい。

何せアスナを性奴隷として扱えるのは一泊二日なんだ。

横目で部屋の壁にかかっている時計を見やると、すでに十時近くになつていた。ついさつき九時だったような気がするのにな、あつという間に一時間も経っている。

焦燥感にかられたクラインは、アスナの全身を舐めまくる。

「あああッ、あつ、うふんっ、あひあ!? しよ、しよんなどころもう!?!」  
アスナが喘ぎ声を漏らしながら驚いた。

クラインの舌がアスナの体を蹂躪する。

唇はもちろん、額から頬、耳の穴から耳たぶ、脇の下まで。

首筋に吸い付いたかと思えば顎の舌をペロペロと舐め回す。

おっぱいは右側を揉みしだきつつ、左側は乳輪に舌をはわす。乳首を避けるように舐めているとアスナが、

「ああん、乳首が切ないですう……」

と、甘い声音でおねだりしてきた。アスナの乳首はしつかりと固くなり、男にしゃぶってもらう準備は整っている。

「おねだりとは、アスナは淫乱だなあ」

クラインはグヒヒと下品な笑いを漏らしながら、桃色の乳首に吸い付いた。顔をおっぱいにうずめながらの乳首舐めは、まるで赤ん坊に戻ったかのような心地良さもあって、いやらしい気持ちだけではない、不思議な安心感がある。

(できれば京子さんのおっぱいをチューチューしたかったなあ)

アスナの母親のおっぱいを妄想しながら、娘のおっぱいをしゃぶるクライン。

おっぱいを堪能するとクンニへと移行……と思いきや、クラインはアスナの太股を持ち上げ、まんぐり返しの態勢を取らせた。

「ああんツ!? はっ……恥ずかしいですう、こんな格好……」

「性奴隷はどんなことでもしてくれんだろ。おうおう、おまんことアナルが丸見えだぜえ。おまんこがパツクリ開いちやってるじゃねえかよアスナ」

「だつてえ、おちんちんが……恋しくてえ」

「可愛いぜえアスナ。でも悪いな。今の俺はおまんこじゃなくて、こっちが目当てなんだなー、じゆるるっ」

「ひゃあん!?!」

クラインがアスナの肛門を舐め始めた。アスナが未知の快感に歓喜の鳴き声をあげる。

「あひやうツ……あつあつふうツ……んはっ! なにこりえ気持ちいいよお……」

うっとりとした表情を浮かべるアスナ。

じゅるじゅるとクラインの舌がアスナの肛門を舐め回し、舌を突き挿れてくる。アナルファックとはまた違う、もつと優しく滑らかな快感がアスナをとろけさせている。

「あふううん……お尻いしやいこう……」

「へへへ、気持ち良いだろ。……うは！ アスナのアナル、開いちやつてヒクヒクしてるぜ」

「やあん、恥ずかしいよお……見ないでえ」

「へへっ、まあアナルファックは明日に回すとして……」

クラインはウーンと延びをした。

「あ、そろそろ就寝なさいますか？」

「ああ、さすがにハメまくって疲れたしな。寝支度頼むわ」

「かしこまりました」

アスナと入れ替わり、今度はクラインがベッドに仰向けになって横になる。さすがは高級ホテルだけあって、ベッドの質はかなり良い物だった。横になった途端に、背中から体を包むように柔らかさが伝わってくる。

「失礼します、クラインさまあんツ……んほっ！」

ずぶりッ。

アスナが騎乗位でクラインの肉棒を挿入した。根本までずっぽりと飲み込まれ、おまんこことチンポの接続部の様子がはつきりと窺える。

ペニスをくわえたことにより、アスナのおまんこから愛液が漏れ、竿を伝ってクラインの股間を湿らせていく。

「はあああうん……こんなアツ……か、格好で……本当に？」

「ああ、それが俺の要望だからな。朝はしっかりと頼むぞ。俺より遅く起きたら、あのマサヤって人にこっぴどく叱ってもらうからな」

「承知しております……それでは」

アスナが体を倒し、クラインにもたれかかる。アスナの顔が胸板の辺りに乗っかかり、長い栗色の髪の毛が布団の役目を果たしている。

「おやすみなさい、クライン様。ちゅっ」

アスナがクラインの乳首にキスをして、瞳を閉じた。

「ああ」

クラインも寝るために目を閉じた。彼の要望とは「騎乗位で挿入したまま眠りにつく」というものだった。

アスナの肌のぬくもり、何より胸の柔らかさと暖かさがクラインをこの上なく幸せにさせている。

幾度となくピストンを繰り返し腰を振ったから、彼の体力はもう限界だった。酔いも手伝い、今は肉棒に感じられるアスナの膣のツブツブの感触さえも、子守歌のような心地よさをクラインに与えている。そしてふたりは寝入ったのだった。

おまんこと肉棒は、繋がったまま。



翌日早朝。

「んちゅっ、んふっ、ふっんツ……れろっチロお……」

下半身にジワジワと広がっていく快感と軽く麻痺していくような感覚で、クラインは目覚めた。

快感の出所を見やると、そこでは、

「れろっ……ちゅっ、ちゅぷう……ちろっ……んふうん……あっ、おはようございます、クライン様」

アスナが朝の挨拶を寄越してきた。

肉棒を舌で転がしながら。

「おう、おはよう、アスナ」

クラインが鷹揚な態度を装って答える。

内心では歓喜の雄叫びをあげているが。

(くううううー！　これが憧れのモーニングフェラかあ！)

おまんこと繋がったまま寝る、という要望よりも、むしろモーニングフェラのほうがクラインにとっては重要なオーダーだった。

エロゲーやAVではよく見るシチュエーションだが、これを実際にするのは一生無理だろなあ、などと諦めていたクライン。

だが性奴隷となったアスナなら、なんでも言うことを聞いてくれる。自分が先に目覚めてしまったらどうしようかと心配していたク

ラインだが、思いの外クラインは深い眠りについていたので、アスナが三十分ほど前に目覚め、おまんこからチンポを引き抜いたときにも眠ったままだった。

「クラインしやまあ、お目覚めのフェラはどうれふかあ？」

「れるれろと竿に舌をはわせながらアスナが問うた。

「めつちや最高だぜっ」

「うふっ、嬉しっ」

チンポに頬ずりしながら、アスナが微笑んだ。

カーテンの隙間から入る細い日差しがアスナを照らし、チンポに頬を寄せる姿を一際輝かせ、そして美少女たらしめる。

卑猥な姿なのに美しさすらも感じさせるアスナの美貌に、クラインの肉棒がより堅さを増していく。

「すごい、クライン様のおちんちん、どんどん固くなっていきますよお」

「朝勃ち、かな……」

「そんなあ、わたしのフェラで固くなったんですよう、ちゆっ」

「んおっ」

妖艶な面差しを向けてフェラをしてくるアスナに、クラインの理性はあつという間に瓦解する。

「アスナ、ベランダ出るぞっ！」

「えっ!? で、でも誰かに見られキヤー！」

クラインはアスナの手を引きベランダへと躍り出る。二人とも裸で。

高層階の部屋なので、景色は絶景だった。すでに朝日は上り始めていて、周囲の高層ビルも照明を落としていた。

朝焼けの空が広がり、心地よい風がクラインのアスナの裸体を撫でる。

胸元を抱くようにして胸を隠していたアスナだったが、クラインに両腕を引っ張られ盛大におっぱいを晒すことになった。

「ああッ、ダメダメ……！ 誰かに見られちゃうっ！」

「大丈夫だって。今日は日曜だし、それにこんな朝早くじゃまだ働い

てる奴なんかいねえ。遠くのビルの奴らにはこつちなんか見えねえさ。それより青空ファック楽しもうぜ」

アスナをベランダの手すりに手をつかせ、足を広げて尻を突き出させる。局部の縦の割れ目は、すでにキラキラと愛液で光っていた。

割れ目の間からは、勃起したクリトリスが発芽するように存在をアピールしている。

「なんだよアスナ、準備できてんじゃねえか。クリなんかチンコみてえに勃ってるし」

クラインの手がクリトリスを挟み、上下に動く。

「あつあ！ クリトリスしこしこ気持ち良いよおっつ！」

おまんこがみるみるうちに湿り気を帯びていき、ついにはポタポタと愛液を垂らすまでになった。

クラインはマン肉をプニプニとさせながら、その様子を堪能する。

「んじゃあ、朝イチファックといきますか」

「どうぞ、わたしの膣ザーメンタンク、ご自由にお使いくださいませ……」

「膣じゃなくて腸の中に出すぜ」

「アナルセックスですね。かしこまりました。どうぞ……」

アスナはそう言うと、自らアナルを広げる。

彼女の尻を両手で押さえ、挿入の態勢に入るクライン。

ふと彼は顔を上げ、ベランダからの景色に視線を移す。

朝日に照らされる都市のビル群。

遠くではヘリが飛んでいる。

遙か下にある地上では、蠅よりも小さく見える車や人が窺える。

今日は日曜だが、それでも労働に勤しむ者は数多い。

地上も、空も、人がいて、誰かに、何かに、使われている。

再びアスナのアナルに目をやる。

白い桃のような尻の縦線の上に、薄茶色の小さく可愛らしい穴がピクピクと肉棒をしごく準備をしている。

アスナのアナルはこれから、クラインによって使われる。

それ以前に、アスナの存在そのものが、性奴隷として今はクライン

に使われている。

あくまでも『今は』だが。

(みんな、あくせく働いてんだろなあ)

(俺も、明日にやああの中か……)

アスナの桃尻を見ているクラインの脳裏によぎるのは、京子が腰を振っている姿だった。

いつかそのうち京子さんと……などと考えていたものの、それはいったいいつの話になるのだろうか。

そんな日はもしかしたら来ないのでは……。

(冗談じゃねえ！)

クラインは嫌な想像を振り払い、勢い良くアスナの肛門にチンポを突き刺した。

ズブズブツツ!!

「くはああはああ!!」

アスナの感じる声が早朝の空に向かって放たれた。

そんなことは些事だと言わんばかりにクラインは狂ったように腰を激しく振る。

パンツパンツパンツ!

「あつあーッ! んはっ、激ししゆぎてお尻の穴がめくれちやつてりゆよおおツツ!」

肉棒を引き抜くたびにアスナのアナルはめくれあがり、チンポを包み込んでいる。チンポに吸い付いて離さないといわんばかりである。

「くそつくそつクソツ! 俺はぜってえ『使う側』になるんだッ! この穴もおまんこも、京子さんも、全部俺が使つてやる!!」

「ああんっ、使つて! いっぱい使つてえくだしやあい♪」

「ああ使つてやるぜ! メツチャクチャにしてやるぜっ!」

ビュルルツビュルツどぶっ!

「んはああああ! クライン様の子種汁がお尻の中にいっっぱいでしゅううツツ!!」

根本までチンポを挿入した状態で、クラインは射精感を味わった。気持ち良かった。

おまんこよりも締め付けが強く、竿に伝わってくる熱も膣とは違った質感だったように思う。

「ふう」

「あああ……」

ぬぷり……。

チンポを引き抜くと、アスナの肛門はぽっかりと穴が空いていた。空気を含んでしまったせいも、プスプスと恥ずかしい音を立てている。

「あつ……出ちや、うツ！」

ブピュツ！

ブぷぶぷうう！！

「いやあああんツ！」

アスナのアナルから勢いよく精子が飛び出してきた。まるでアスナが射精しているようだった。美少女からは想像もできないほどの下品極まりない音まで立てている。

ぷふつ、ぶりりい……ぶりゆ……。

「あひいい……」

ようやくアナルから精子を出し尽くしたようだが、アスナの肛門は未だにだらしなく穴が空いたままだった。おまんこも興奮で目覚めたかのように開き、膣の中のツブツブの壁面が窺えるほど。

使われてくたくたになったアスナを見て、クラインは不適に笑う。

「ぜってえ俺も……」

★

想定外の状況に、俺はどう反応しているのやら分からず、しばしの間ぼかんとしていた。

俺の足下ではクラインが土下座をしている。

簡単に状況を説明するとだな、一泊二日の宿泊期間を終えてチエツクアウトしたクラインを、俺は応接室に案内した。

俺の方からクラインにちょっととした提案をしたかったからだ。そもそもクラインに特別招待券くれやった目的が、その提案をしたいがためなのだ。



応接室にクラインを迎え入れると、俺はソファを勧めようとしたが、

奴はいきなり「お願いがございます！」などと大きな声をあげて土下座をしてきたのだ。そして現在に至る。

いや、土下座は想定内だったんだよ。宿泊期間を延長してくれって頼んでくるだろうなってさ。

何せアスナはあの通り美少女で、そんな女が何でも言うこと聞いてくれて前の穴も後ろの穴も好きに使って良いなんて、そんな上手い話は俺のホテルでしか有り得ない（高くつくけどな）。

クラインの奴、アスナにすっかりハマリやがったな。

内心でほくそ笑み、そこにつけ込んで提案を持ちかけようと思ったら……

「お願いしますっ！俺を、マサヤさんのところで働かせてください!!」  
「えっ……」

予想外すぎるだろ。

どういう思考経路を辿ったらそんな結論に至るんだ……。

「ええっと、それはいったい……」

「俺も、マサヤさんみたいに女を『使う側』になりたいっす！京子さんとまたやりたいんすよ!!」

「きよ、京子さん？」

また思わぬ答が返ってきたぞ。

使う側については納得だけど。

たしかに京子さんはよく騷られた雌豚だ。だがよもやアスナをあれだけ使っておいて京子さんに惹かれるとは……。人の好みはそれぞれだなあ。

顎に手を当て、俺は思案する。

クライン、か……。

当初の予定ではこちらの提案（というか要求）を承諾させ、捨て駒として使う予定だった。

でも。

「おなじやあすー！」

クラインが顔を上げ、俺を見上げてきた。その目を俺はじっと見やる。

……嫌いになれねえなあ、コイツ。

女が欲しいから頑張る。

稼ぐ。

儲ける。

魅力的な雌を欲し、己の支配下として使うために努力する。

実にシンプルな動機だ。

それがクラインの目から感じられ、俺は捨て駒にすることができなくなつた。

あんな熟し切つた雌豚にそこまで夢中になれる気持ちは分からんけど、のし上がっていくという気概はたしかに受け取つたぜ、クライン。

「壺井……いや、俺もクラインと呼ぶぞ」

「え、それって……」

「言つておくが、稼げるが甘い世界じゃない」

「覚悟してますっ!」

悪くない目してるなあ、クライン。

欲望と性欲でギラギラしてるよ。

「それと京子さんなんだが……」

「は、はい……っ」

クラインが緊張の面もちで俺の返事を待っている。

雇つてすぐに甘やかすのはいかなものかと思うが……。

「……京子さんは、お前の好きにしていいて」

「え」

まるで瞬間冷凍されたかのように、クラインが固まった。

お、おい、息してんのかコイツ……微動だにしないんだが……。

「だ、大丈夫かクラ……」

「マジすかあああああああああああああ!!!」

フリーズ状態から一転、クラインは喝采をあげる。

拳を突き上げ、喜びを露わにしている。

ここまで喜んでくれると、俺としては気まずい……。

京子さんの最近の性欲が強すぎて持て余してから、誰か相手してくれねえかなあ……なんて思っていたとは口が裂けても言えない。

京子さん、俺とヤツたのをきっかけにおまんこが目覚めじやったんだろうな。完全に発情期入ってるんだよね。

「俺、マサヤさんに一生付いていきますよ!!」

「お、おう」

いや一生はいいよ……。

まあ、最初に京子さんという餌を与えたのは正解だったようだ。クラインはどんな命令だろうと従うだろう。

いやあ低コストの餌で助かった。これがアスナだったら断つていただろうけどな。あの女はしばらくは俺がまだ使うからね。

「クライン、最初の命令を伝える」

「うっすー」

そして俺は伝えようと思っていた提案をクラインに示した。提案ではなく命令になったのが予想外ではあったが。

俺の命令を聞き終えたクラインは、思うところあったのかやや思案顔だった。

「どうした、やっぱ仲間を裏切るのは嫌か？ それじゃあ京子さんは取り上げ……」

「や、やりますっ！ やらせてくださいー！」

クラインは慌てて首を縦に振った。京子さんの使い古したおまんこは、クラインにとっては仲間以上に大切な物になったようだ。

フフフ、それでいい。

これで計画に必要な役者は全て揃った。クラインは当初の計画には入っていなかったが、コイツが入ったことによってより面白くなりそうだ。

だが油断は禁物。

計画は最終フェーズに入ったと言っても過言ではないが、リズとリーファが最初に上手く立ち回らないと何も始まらないのだ。

もし失敗したらあの二人、壁に穴開けて尻だけ出させて公衆便所と

してどっかに設置してやる。

……と、俺のスマホが着信、相手はリズからだった。

『もしもしマサヤさん、今キリトんちなんだけど』

「首尾はどうだ」

『余裕よ。キリトは今ぐつつすり眠ってるわ』

「よくやった。すぐそっちに向かう。起きそうになったら追加で薬を  
使え」

## 第14話 プロ調教師、敵の本拠地へ突入

車でキリトの家に向かうと、家の前で黒髪に前髪がパツツンの少女が待っていた。リーファだ。

内股になつてモジモジとしているところを見るに、とびつ子で気持ちよくされているのだろう。幸せな雌豚になったもんだ。

短パンに赤いジャージの上着というラフな格好だが、白くきれいな太股が見られるし、何よりおっぱいがピツタリとしたジャージのおかげで強調されていて、なかなか悪くない。

「いらっしやいませ、マサヤさん……さん」

「おう。気持ち良くなつてるとこ悪いな」

「うっ……バレちゃいました?」

「バレバレだ。短パンの内側から汁が垂れてるぞ」

「ええッ」

リーファは慌てて太股に垂れている愛液を拭おうとするも、

「おほう!」

股間を押さえてしゃがみこんでしまった。リズがとびつ子の振動を強くしたのだろう。

アヘツているリーファをどうにか立たせ、家の中へと案内させる。道中、リーファの肩を抱き、尻を撫でたり豊満な胸を揉んで遊んだりしたのは語るまでもないだろう。

本当に良い体つきしてるぜ。

「あ、あふっ……だ、ダメですよおマサヤさん……部屋に着く前におちんちん欲しくなっちゃいましたゆう」

「じゃあハメながら部屋に行くか」

「ほええ?」

階段で二階の廊下にあがったところで、俺はリーファを四つん這いにさせる。短パンとパンツを一気に脱がせ、おまんこことアナルがお目見え。

アナルは薄茶色でヒクヒクとうごめき、おまんこにはとびつ子が挿入されていた。

リーファのおまんこは、陰毛が割と濃い目に生え揃っているのが特徴だ。決して剛毛でむき苦しくはなく、きれいに生えているので顔をうずめて感触を楽しむのも悪くはない。

俺はまずとびっ子を引き抜き、

ぬぷう。

「きやうー！」

それを今度はアナルに入れてやる。

ずむむむう……。

「ああああ……今度はお尻に入ってくるよお……ッ」

で、俺がリーファのおまんこを使う、と。

ヌプッ！

「ああんっー！」

リーファが盛大によがった。締め付け具合はかなりキツ目で、ツブツブが俺の肉棒に密着し、シゴいて精液を搾り取ろうとしている意志が伝わってくる。

「じゃあこのままキリトがいる部屋まで案内しろ」

「こ、このままお兄ちゃんの部屋にい!? 恥ずかしいですよお！」

「いいから早くいけ」

ピシィー！

「きやんっ!? 行きますっ、行きますからお尻叩かないでえ……っ」

リーファは犬のように四つん這いのまま前へ前へと腕と脚を動かして、よちよちと移動する。俺も挿入しながら移動する。

なんとも間抜けな絵だなと思いつつながらキリトの部屋へと入った。

「あー、やっぱりエッチしてたあ。リーファの喘ぎ声が聞こえたからもしかしてって思ったんだよねえ」

リズが呆れたような顔で言った。

右手にスマホ、左手にはとびっ子のリモコンという素敵な装備であつた。

キリトの部屋は、PCやら液晶画面が複数台、そしてアミユスフィアが机の置いてあつた。いかにもゲーマーって感じの部屋だな。

そして当のキリトはというと、ベッドの上で仰向けの状態で、荒縄

で腕と脚を拘束された状態にされていた。服は着ている。

彼は俺たちのほうを信じられない物を見る目を向けている。そりやそうだな。

「す、スグ……おまえ、なに、やって……」

「んふつ、お兄ちゃん目え覚めちやったのああん！」

俺が後ろから突いてリーファを気持ち良くさせる。

「おいつ、誰だよおまえ！ スグから離れろっ！」

キリトが声を荒げた。

「おー怖い怖い。おいリズ、寝かせておけつて言っただろう」

「ごつめーん。やっぱ目開けてもらったほうが面白いかなあつて思つて薬の量を控え目にしておいたの。てへっ♪」

リズがウインクしてみた。この女は全く……。

ただリズを驚かそうと思つてこうしてバツク状態で挿入したまま部屋に来たというのに、キリトに見せつけることになっちまったじゃないか。

しかも予定では眠っているキリトをホテルまで運ぶつもりだったというのに。

まあいい。臨機応変にいくか。

このシチュエーションも悪くはない。むしろ楽しめる。

「キリトくん、妹さんのおまんこ借りてるよ。くくくっ」

俺はキリトを見下ろし、嘲笑した。

キリトは目を見開いている。

「フザけるな！ 妹に手を出すな！」

「お兄ちゃん、わたしはお兄ちゃんのものじゃないんだけど」

「す、スグ……？」

リーファの冷ややかな声音に、キリトは押し黙ってしまった。

素晴らしい返しだぞリーファ。

「だつてそうでしょ。お兄ちゃんの所有物はアスナさんだけじゃん。あたしが誰とエッチしようとするんなのお兄ちゃんには関係ないし。ねえマサヤさん、もっとハメハメしてえ」

リーファがおねだりしてくる。

キリトに見せつけているのは、コイツなりに思うところ、そして狙いがあるのだろう。

俺はお望み通り、パンパンツと派手に音を立ててフアックする。膣の中のツブツブが肉棒にまとわりついて気持ち良すぎる。

「あんあんあんっ、おまんこ気持ち良いよおおお！」

「くくくっ、キリトくん、宝の持ち腐れだよ。こんな素晴らしいおまんこを食べずにいるなんてな。妹さんのおまんこ、締まりが良いよ。おっぱいなんてこんなに大きくて柔らかいし」

腕を伸ばし、リーファの大きな胸を鷲掴みにして揉みしだいた。ぷにゅぷにゅぷにゅ。

ただ柔らかいだけでなく弾力もあり、乳首はコリコリと興奮していることを示していた。男に揉まれるためにあるようなものだろコレ。

「そんな……スグが……どういことだよ、これ……」

茫然自失とするキリトに、さらにリズが追い打ちをかける。

「マサヤさあん、次はあたしにおまんこして〜」

そう口にする、リズは服を脱いで全裸となる。

「リズ!? なんでお前までっ!? あ、ごめ、その……」

キリトが慌てて全裸のリズから視線を逸らす。

「ん〜、見たかったら見てもいいよおキリト。あたしもこれからマサヤさんにハメハメしてもらおうから、AV見てるみたいな感じで楽しいよきつと」

「ん、じゃありズに交代するか」

俺はリーファのおまんこからチンポを引き抜く。

「リズ、キリトに多い被さる感じで四つん這いになれ」

「了解♪」

リズが俺の指示通りの態勢を取る。

くくくっ、素晴らしい絵だなこりゃ。

リズがキリトを見下ろす形で四つん這いとなっている。

これから俺がリズにハメれば、キリトはよがりまくるリズを目の前で直視することになるだろう。

「お、おい……ウソだろリズ……変だよおまえ、スグも……なんなんだ



よ！ やめろよそんなこと！」

「やめろよって言われても、ねえ？」

リズはそう言いながら、自らおまんこを開く。膣口はすでにテカテカと光っていて、いつでも俺のチンポを悦ばせる準備が整っているようだ。

「あたしもキリトの持ち物じゃないしい。誰とやろうとあたしの勝手だと思っただけだなあ」

「ち、違う……これはそういう感じじゃないっ。おかしいだろ！」

「おかしいのはキリトのほうじゃない？ あたしやリーファの気持ちはずっと分かってたのに、アスナのベツタリでさ」

「それ、は……それはもう終わって……」

キリトの声が風船が萎むように小さくなっていく。

「終わってない」

リズがピシヤリと言い、キリトを黙らせた。

「あたしは、キリトのことが好き」

「あたしも、お兄ちゃんのことを好きだよ」

二人同時に告白され、キリトは目が泳いでいた。

相当混乱しているようだ。当たり前か。

俺は勃起した分身をリズのおまんこ手前でスタンバイさせながら高みの見物を決め込む。

「もしキリトがアスナと別れてあたしたちとエッチするっていうなら、あたしもリーファももうマサヤさんとはセックスしないわ」

「アスナと別れ……っ、待てよどうしてそんな話に……！」

「なるでしょ。だってあたしはキリトのこと好きなんだから」

「だからって……」

「どうする、キリト？」

「………だって、俺、アスナが」

「ふうん」

リズが俺の肉棒をつかみ、自分からおまんこにあてがう。

「挿れて、マサヤさん」

「リズやめろ！」

やめませーん。

ズブリッ!

「おほおうツツツ!!」

気持ちよさそうに吠えるリズ。彼女の膣口は俺の肉棒によって思い切り開くことを余儀なくされ、ピツタリとくわえこんでいる。

「キリトくん、悪いね。リズのおまんこも借りてるよ。暖かくて気持ちが良いぞー」

「貴様あ!!」

「おうおう怖い怖い。でもリズも言ったとおり、君がアスナと別れてリズとリーファとエッチするのなら、今すぐチンポを抜いてやるにやぶさかではないが?」

パンパンパンツ。

「あつあつあつ! 奥にチンポ当たるう! 子宮ズンズンされてりゅよおおおツツツ!!」

「くくくつ、どうだいキリトくん、リズの喘いでいる顔は。幸せそうな面構えだろう」

「くつ……」

キリトが悔しそうに歯噛みしている。否定できないらしい。

しかも奴は時折、リズの揺れるおっぱいに目が行っては逸らしているというのを繰り返している。悲しい男の性だねえ。

「アンアンっ……ちよつとリーファ、ぼーつとしてないでマサヤさんのアナルを舐めてあげなさいよっ」

「す、すいませんっ」

「スグっ、やめろ! そんなところ舐めるんじゃない!」

「お兄ちゃんがアスナさんと別れるならやめるけど?」

リーファが挑戦的な口調で言った。

「す、スグ……」

キリトが呆然としている間に、俺の尻の方でヌメツとした感触が走った。

「んっ、んふう、ちろちろ、ちゅっ。れるおん……」

暖かく、それでいて湿り気のある質感が尻を行ったり来たりして、

俺の快感を増幅させている。

チンポとアナルを同時に奉仕させる俺を、キリトが充血した目で睨みつけている。

「いやあキリトくん悪いね、妹さんにアナル舐めなんてしてもらっちゃって。妹さんの舌が肛門をペロペロしてきてたまんないよ」

「うううううおおおおお!!」

キリト、ついに発狂か。シタバタと手足をバタつかせるも、縄で拘束されているのでどうにもならず。

「はははっ、元気がいいねえキリトくん。でも元気なのは下半身も同様みたいだぞ?」

「ハッ!」

焦ったようにキリトがピタリと動きを止める。そこを逃さなかったのがリズだ。

「ええ、どれどれ」

バックでハメられつつも腕を延ばし、キリトのナニを探り当てるリズ。

「あはっ、本当だあ。いやだキリトお、あたしがハメられてるの見ておちんちん勃てちゃったのお?」

「ちが……これは、その」

違うわけがない。キリトの股間はデニム生地の上からでもハッキリ認識できるほどにこんもりと山を作っている。

「いいよ、キリトだって男の子だもんねえ?」

リズが股間にできた山を撫でてやると、

「あううッ」

キリトがうめいた。

……野郎のあんな声なんて聞きたくないんだよな。

一気に追いつめるか。

「おいリズ、どうでもいいが俺はそろそろ出そうだぞ」

「だってさキリト。どうする? マサヤさん、あとちよつとであたしのおまんこで中出ししちゃうみたいだけど?」

「……………や、やめ」

不甲斐ない自分に嫌気でもさしたのか、キリトがついに涙を流し始めた。もう一押しだな。

「あー出そうだっ。リズに出したら次はリーファのマンコに精子泳がせるかな。妊娠するまで何度も種付けするぞ俺は。くくくっ」

「ああんっ、種付けセックスしてえマサヤさあん。ちゆるじゆるる……っ」

リーファの舌がアナル舐めの速度を加速させ、ドリルのような動きに変化した。

俺の追加の一言、そしてリーファのおねだりが利いたようだ。

キリトが震える声でつぶやく。

「……やめ、てくれ」

「それはつまり、アスナとはもう別れて、リズとリーファを選ぶということかな、キリトくん」

「……………そうだよ！ アスナとはもう別れるっ！ だから頼むう！

リズにもリーファにもこれ以上ひどいことをしないでくれえ！」

「賢明だな」

俺はリズのおまんこから息子を引き抜く。

「あっ……………」

リズが名残惜しそうな声音で鳴いていた。



キリトが屈服してから二時間ほど建った頃、アスナは調教部屋のベッドの上で果てたところだった。調教師の男がアスナの膣から肉棒を引き抜く。

「はふう……………」

肉棒が挿入されていないおまんこは、今のアスナにとっては心にぽっかりと穴が空いたような心地にさせる。

(この穴を埋めてほしいよお)

クチュクチュと自分の指を膣に出し入れしていると、調教師の男が言う。

「あと二十分ほどでマサヤ様がお前を調教しに来てくださると連絡があった。それまでにシャワーを浴びて体をきれいにしておけ」

「はい、かしこまりました」

「よし」

アスナの返事を満足そうに聞いた調教師は服に着る。

着替えている途中、調教師がズボンのポケットから何かを落としたのをアスナは見たが、調教師には伝えなかった。

否、本当は伝えようとした。

だが、思わず押し黙ってしまった。

なぜならそれは、

「しっかりと体を洗っておくんだぞ」

「は、はい……」

チラチラと床に落ちた『それ』に目がいきつつも、アスナは頷いた。

調教師が部屋を出て行く。

ガチャツ、とドアが外から施錠される音が冷たく響いた。

アスナはそれを見届け、ホッと胸をなで下ろした。

それから床に落ちたままの『それ』を拾う。

「これって……」

手のひらに乗せた『それ』が、アスナには希望に思えてならなかった。

それは、鍵だった。

ドアのところまで駆け寄り、アスナはそうつとドアの鍵穴に鍵を差し込んでみる。

「……お願いっ！」

鍵は刺さった。

「やっぱり、ここの鍵なんだわ……っ！」

調教師屋として使われているこの部屋は、当然の事ながら中にいる人間を閉じこめておくことも大事な機能として求められている。

ある程度調教の進んだ雌豚は拘束を解かれるが、脱走の危険がないわけでもない。過去には調教されたフリをした雌もいたほどである。

そのため、ドアは内側に鍵穴があり、施錠と開錠を行っている。こうしておく、鍵がなければ外には出られない。

「これさえあれば、ここから……」

急に射し込んできた希望の光に、アスナの心は躍りつつも、迷った。  
(何を迷ってんのよ、わたし……)

だが、迷いの原因は分かっている。

未だ開ききった自分の局部に、アスナは手を伸ばす。クリトリスはまるでチンポのように勃起し、すこし撫でてやるだけで電気が走るように快感が体中を駆けめぐる。

おちんちんが欲しい。

そう思ってしまう自分がいる。

(もう、前のわたしの体じゃない……でも)

ふと、キリトの顔が思い浮かんだ。

彼ならきつと、許してくれる。

今の自分も、受け入れてくれる。

救ってくれる。

「そうよ、信じなきゃ！ キリトくんを！」

藁にもすがる思いでアスナは鍵を握りしめ、部屋のドアを、その向こう側を見据えたのだった。

キリトに思いを馳せてばかりのアスナは興奮し、簡単なことに気づきすらしなかった。

鍵を落とした調教師は、どうやって部屋を出たのか。

## 第15話 プロ調教師、雌奴隷のために感動（笑）の 再会を演出する

アスナは鍵を使って調教部屋のドアを僅かに開けて顔だけ出し、廊下の状況を窺う。左右を確認してみたが、運の良いことに誰もいなかった。

赤い絨毯が敷かれた廊下が、遠くまで続いている。広大な規模のホテルに目眩を覚えるアスナだが、このチャンスを見逃す手はない。（どうにかして外に逃げないと……）

調教の際に何度か散歩に連れ出されているから、廊下を左に曲がって真っ直ぐ行けば、突き当たりにエレベーターがあることは把握している。

「……よし」

ドアを開けて外に躍り出るアスナ。足音を立てないように、けれどもできるだけ素早く移動する。早いところ外に出て、キリトのところへ向かわないと。

（よかったあ、制服があつて）

アスナは自身の格好を確認しホッと胸をなで下ろす。

これもまた運が良いことに、調教部屋のクローゼットを開けてみたら、メイド服やナース服などのたくさんの衣装に混じり、アスナが通う学校の制服がハンガーにかかって保管されていたのだ。

大きなクローゼットの中の中央に、まるで予め用意しておいたかのように分かりやすく保管されていて助かった。何十着という数のコスチュームが保管されていて、いちいち確認してたらもつと時間がかかっていただろう。

焦る気持ちを抑え、アスナは慎重に足を運び、ようやくエレベーターの扉の前までついた。

エレベーター前は開けた空間になっていて、身を隠す場所もない。アスナは生きた心地のしないまま、エレベーターの下降ボタンを押す。

落ち着かない気持ちで振り返り、追っ手がいないことを確認する。廊下はしんと静まっており、宿泊客や調教師も出歩いていない。アスナの考えはこうだ。

エレベーターに乗り、四階まで降りる。その後は非常階段を探しだし、そこから脱出するのだ。

この階にももちろん非常階段はあるのだが、生憎とかなりの高所でもでもないが階段で降りていたら時間がかかりすぎる上に、今のアスナはついさっきまで行為に及んでいて体力があまり残っていない。

かと言って1階まで降りてしまえばエントランス。そこには調教師がうようよいて、あつという間に拘束されてしまうだろう。

二階から三階はイベントホールやバーなどがあるエリアで、やはり人がいる可能性が高い。これについては調教の散歩のときに確認済みである。

四階からは宿泊部屋となっているため、人通りする確率はぐんと減る。

(上手く隠れながら非常階段まで行けばこつちのものよ……)

ぽんっ

という、小気味良い音でエレベーターが到着を告げた。両開きのドアが開いていく。

アスナは息を呑む。

「あ、アスナー！」

エレベーターにはクラインが乗っていた。

★

「あ、アスナー！」

「クライン!?!」

咄嗟に踵を返し逃げようとするアスナ。どうにかクラインを振り切って、非常階段から逃げるしかない。

だが、クラインに腕を掴まれてしまうしまう。

「やめて離して！」

「落ち着けアスナっ。俺は味方だつて！ お前をこのホテルから連れ



だそうとしてるんだってばっ！」

「え……っ」

改めてクラインのほうを見やると、彼は真剣な顔つきのまま低頭する。

「すまなかった！ あんな酷いことしちまつて！」

「え、あの……クライン？」

「分かってる。アスナが俺のこと恨んでるってことぐらいは……。でも、信じてくれっ。俺、自分が間違ってたことに気づいたんだ。やっぱりアスナは、キリトといっしょにいるべきなんだよ！」

「クライン……」

「アスナ、俺といっしょに、このホテルから逃げよう」

「……ありがとう、クライン」

「ゆ、許して、くれるのか……？」

恐る恐るといった体でクラインが下げた頭をあげる。

アスナはそれに笑顔で応じた。

「ええ、許すわよ。だってわたしたち、仲間でしょ」

「アスナ……」

クラインの顔に笑みが広がる。彼はアスナの腕を引き、エレベーターに引き寄せた。

「こんなところ調教師の奴らに見られたら大変だぜ。さっさとズラからうや」

「そ、そうね」

まさかクラインとの行為の数々を自分も楽しんでた、なんて口が裂けても言えないアスナだった。

マサヤほどではないが、クラインのペニスもなかなかの大きさと固さで気持ち良かったのだ。

クラインにした奉仕の数々を思いだし、アスナはひとり赤面する。アソコがじんわりと濡れていくのが分かる。

エレベーターのドアが閉じ、アスナは迷わず四階のボタンを押す。

そのとき、アスナはふと違和感を覚えた。

散歩されたときのエレベーターと、今のエレベーターでは何かが違

うような気がするのだ。

(そうだ、エレベーターガールがいないんだわ)

以前、散歩したときにエレベーターに乗ったときには、アスナのよ  
うに調教された性奴隷がエレベーターガールとしてスタンバイして  
いて、エレベーターに乗った客に奉仕していた。

それが今はいないのである。

(なんか……変ね……)

「どうしたアスナ」

キョロキョロしていたアスナを怪訝に思ったのか、クラインが声を  
かけてきた。

「な、なんでもないわ」

アスナは首を横に振る。

(考え過ぎよね……。いつもいつも性奴隷がいるエレベーターなんて  
あるわけがないわ)

下がっていく回数表示を注視しながら、アスナは「大丈夫、大丈夫  
……」と自分に言い聞かせるのだった。

★

四階に着いてエレベーターが開いた途端、アスナはクラインに手を  
引かれ、すぐに近くの部屋に引き込まれた。

クラインはすぐさまドアを閉め、施錠する。

「いきなりどうしたのよクラインっ」

「調教師がいた……」

「えっ……」

「エレベーターのドアが開いてすぐにチラツと見えたんだ」

「いたかしら。わたしには見えなかったけど」

「一瞬通り過ぎただけだったからな。けどいつこつちに向かって戻っ  
てくるかわからねえ。しばらくここに隠れて様子を見るぞ」

「それはいいけど、勝手に入っていいの？　ここ」

「問題ねえ。ここは俺が宿泊してる部屋だからな」

「そうなんだ」

安心したら急に疲れが押し寄せてきた。

アスナはベッドに倒れ込む。一般客用の客室にしてはかなりの広さを誇る部屋だった。ベッドはキングサイズで、調度も高級感がある。

変わっているのが、部屋の西側の壁面の鏡だ。

というか、西側の壁面全てが鏡になっている。

けれどアスナは驚きもしなかった。ここは京藤ホテルの裏側で、これまで数々の卑猥な出来事を体験した。今更鏡張りの部屋を見たところで何も感じない。

大方、調教中の自分の姿を性奴隷自身に見せようという趣旨か、あるいは男が自分が奉仕されている姿を見て楽しむかのいずれかだ。

(その両方かな……)

アスナは内心でそう思った。

ベッドが急に沈み込んだので何かと思えば、クラインがベッドの上に腰掛けていた。

「ふう、疲れたな」

「そうね」

「……………」

「……………」

沈黙が落ちる。

アスナには直感的に分かった。

クラインがこの前のアスナとの一泊二日のことを思い出していることを。

なぜならアスナもまた、クラインに奉仕した時のことを思い出していたからだ。

ベッドとは不思議なもので、男と女で共有すると否応なしに卑猥な妄想をしてしまう。

ましてやそれが、過去にセックスまでした相手同士だとなおさら……。

「な、なあ、アスナ……………」

「……………なあに、クライン」

「そのー、なんだ……………」

ガシガシと頭をかいて、クラインはもどかしそうにしている。言いたいことがあるのに、なかなか口にすることができないようだ。

「……お、俺、さあ、この前の、アスナとの……アレがさ、忘れられなくて……」

「うん……」

アスナは身を起こし、居住まいを正してクラインと向き合う。

「……今だけ、もう一度……しても、いいか。今だけ、今だけだからっ！」

ガシツと肩をつかまれ、クラインがアスナを見つめてきた。

ふと股間のほうを見やると、すでにクラインのズボンはテントを張っている。

(でも、わたしだって……)

アスナもまた、自身の局部がすでに濡れていることを自覚していた。

そう、彼女もまた、クラインと同様に思っていたのだ。エッチがしたいと。

したくしてたくてたまらないのだと。

アソコがうずいて仕方がない。

今すぐなんでもいいから挿入してかき混ぜて欲しい。

でもできれば、太くて固い……

「おちんぽ……ください、クラインさまあ……」

ついにアスナは我慢できず、クラインの股間に飛び込むように近づき、ズボンを脱がし始めた。

性奴隷に戻ってしまっていることは彼女だって分かっている。

でも……

(止められないのお！ おちんちん欲しすぎて体がダメになっちゃいそうなのおおツツ!!)

ズボンとトランクスを脱がした途端、クラインのチンポがピンツとそそり勃つ。亀頭からはすでに我慢汁が漏れていた。

「ああ……おちんちん様あん！」

うつとりとした表情でアスナはチンポを見つめ、まずは頬ずりをする。肉棒の熱さが頬に感じられて気持ちが良いので、アスナはこの行為がお気に入りなのだ。

それからアスナは舌を延ばし、カリの部分で輝く我慢汁を……

「れろくん……ん」

きれいに舐めとり、口の中でしつかりと味わった。

独特のしょっぱさが口内に広がり、その味がアスナを魅了する。

「ああむっ」

そしてパツクリとカリをくわえこむアスナ。あまりの幸福感に、おまんこからプシュツと軽くお漏らしをしてしまうほどだった。

チンポをくわえながらクラインを見やると、彼はニヤリと口角をつり上げていた。

その表情に、不穏なものを感じるアスナ。

だがもう、全てが遅かった。

「わりいなアスナ。お前の進路は性奴隷で決定だぜ」

「く、クライン……？」

そのとき、

ういいいん。

突如響きわたる何かの作動音。

部屋を小刻みに揺らす振動。

「な、なんなの……っ!？」

アスナは目を見開く。

それまで鏡張りだった壁面が、まるで自動ドアが開くように左右にスライドして開いていく。

その先にあっただのは……

「うそ……」

アスナは自分の視界に映る事象全てを否定したかった。

「うそよ……っ」

だが、見れば見るほどそれは、自分の大切にしている仲間ふたり……りズベツトとリーファであり、

「何かの間違いよっ!」

そして、キリトだった。

「あす、な……」

キリトは悲しそうに目を伏せたが、

「うああ……っ」

と短く悲鳴を……否、喘ぎ声を漏らした。

キリトは、リズベットとリーファにフェラをされていた。

クラインの肉棒を握ったまま、アスナは呆然とその様子を眺めるしかなかった。

★

「くくくっ、笑えるねえ」

「ええ、本当に」

俺と京子さんはキリトとアスナと仲間達の感動の再会を見物しながら笑い合っていた。

京子さんに至っては嬉しくて仕方がないのか、珍しくクスクスと笑いを抑えきれずにいるほどだ。

何せアスナが京子さんに反抗的な態度を取り始めたのも、キリトと付き合っていることが原因だと言えるからな。キリトさえいなければ、大人しくSAOサイバーたちが通う学校など京子さんの命じるとおり退学して、より偏差値の高い学園へ転入してただろう。

京子さんにとってキリトは、邪魔な存在でしかないのである。

「アスナのやつ、ショックのあまり俺と京子さんの存在に気付いてないっぽいよ」

「フッフ、みたいですね。恋人が友人たちと浮気してる現場に釘付けだわ、あの子」

俺と京子さんは、キリトたちがいる側の部屋にあるソファに座って事態を見守っているのだが、アスナは俺たちのことなど視界に入っていないといわんばかりに、ベッドの上のキリトとリズ、リーファの3Pを凝視している。

とはいえ、アスナはアスナでクラインのチンポを握っているがな。くくくっ。

そろそろネタバレといきますか。

俺はソファから立ち上がる。

「ようアスナ。自由時間も味わえて、キリトとも再会できたし、最高の気分だろ。なあ？」

「……ま、マサヤ、様ツ。母さんも!？」

アスナはようやく俺と京子さんがいることに気付いた。

「これは……どういうことですか……」

「くくくつ、全部こっちで仕組んだことだったんだよ」

「仕組んだ……?」

「そう。おかしいと思わなかったのかよ。部屋の鍵無しでどうやって調教師は部屋を出たんだよ。あの部屋はオートロックで、ドアを閉じたら閉まるんだぞ? どうやったって部屋を出るには鍵が必要なんだ」

「あ……」

ガクガクと体を震わせるアスナ。俺は続ける。

「アスナが拾ったのはスペアキーだ。調教師にはわざと落とさせたんだ。その後も都合が良いことばつかだったろ。都合良く制服が見つけやすい位置に保管されていたり、廊下に誰もいなかったりさ。エレベーターの中に常駐させてる雌豚もいなかったろ? あれだつてお前の逃亡を助けるために下がらせたんだぞ」

「そ、そんな……待って……まさか!？」

アスナがハツとした様子でクラインに目をやる。

クラインはニタアとゲスな笑みを浮かべた。

「へへへ、悪いなアスナ。俺、マサヤさんの側なんだわ」

「うそ……」

アスナが口元を押さえ、瞳からポロポロと涙がこぼれ落ちる。

おいおい、アスナが濡らしているのは股間だけだぞ。誰だよ泣かせたヤツは。俺か。くくくつ。

希望を抱かせておいて一気に砕く。

全てを失ったときに見せる女の表情ほど美しいものはない。

アスナは今まさにそんな悲壮感で染まった顔をしているよ。

実にきれいだ。もちろんこの模様は隠しカメラで録画してある。

悲しみに暮れるアスナに追い打ちをかけるように俺は言葉を重ねる。

「あとついでに言っておくとな、今そこにあつた壁、アスナのほうから見ると鏡だったと思うんだけどさ、実はマジックミラーなんだわ」  
「へっ?」

瞳の色を完全に失った様子で、アスナが首を傾げる。

あー、これはもう理性崩壊寸前かもな。

「つまりはさ、こっち側からはアスナとクラインの様子のはつきり見えたワケ。お前らが部屋に入ってきたときから、アスナが我慢できなくなつてクラインのチンポにしゃぶりつくところまでさ。キリトくんもすっかり見届けていたよ」

「頬ずりまでして……まったく、嫌らしい女になつたわね、アスナ」

京子さんがトドメを刺すかのように言い放つた。

「うそよ……うそよおおおおおおおおおおツツツ!!」

アスナ、ベッドにひれ伏して号泣する。

肩を震わせるアスナに、今度は仲間たち……否、元仲間たちが声をかける。

「やほー、ア・ス・ナ♪」

元仲間で最初に口火を切つたのはリズだった。

彼女は生まれたままの姿で、四つん這いの姿勢でキリトのチンポに奉仕している。

「ごめんねえ、キリトのチンポはあたしらでもらっちゃったから。えへっ」

「な、何言つてんのよりズ……」

「だつてえ、そういうことなんでもーん。れろっ」

リズがキリトのチンポを根本からカリまで舐めあげる。キリトが「ううう」と情けない声をあげた。しっかし小さいナニだなあオイ。

あ、ちなみにキリトはすっぱんぽんにしてあるよ。

「アスナさんは十分お兄ちゃんを味わったから、別にもういいですよ  
ね」

冷めた声を発したのはリーファだった。



彼女もすでに全裸で、キリトの睾丸をサワサワとマツサージしている。

「リーファちゃんまで！ どうしちやったのよ皆……もしかして」  
そこでアスナが俺のほうに視線を移した。俺はニヤリと笑ってアスナの疑問に答えてやった。

するとアスナは何もかも諦めたのか、悲しそうに顔を伏せた。俺に陥落させられた自分の身を考えたら納得するしかないだろうね。

「ぶはっ、じゃあキリトのおちんちん、頂いちゃおっかな」

フェエラを中断し、リズが騎乗位の体勢に移る。

キリトのチンポを握り、自分のおまんこにあてがう。

「んーっと、こゝこゝかな」

「やめてリズ！ お願いだからやめてよ！」

死に顔だったアスナが急に顔を上げて叫んだ。やはりいざ自分の恋人が寝取られてしまうととなると、抵抗があるようだ。

「はあ？」

リズの冷ややかな視線がアスナを射抜いたようだ。

アスナはリズの迫力に気圧されるように「り、リズ……？」と怯んでしまった。

「アンタはキリトとたくさん良い思いしたじゃん。あたしらが横でどんな気持ちでいたかもしんないでさあ。ねーリーファ」

「はい」

リーファが即答する

「……………」

アスナは何も言い返せず、ただ肩を震わせているだけだった。

「アスナ……すまん」

なんかキリトが謝ってる。

やれやれ、チンコびんびんに勃起させて何を謝ってるんだか。勃起してることでそのものを謝罪しているのか？

「ではまずあたし、リズベットがいきま〜す♪」

いいねえ、リズのフザてた態度、アスナを嘲笑する感じ。

アスナはというと、ただただ始まろうとするリズとキリトのセック

スを、ベッドの上から見ているしかない。

「ああ……ああ……うわあ……」

なにやらキリトがうめき声を漏らし始めている。まだリズがチンポを握って膣口やクリにすり付けているだけで挿入してないぞ。

「じゃあ挿れるよ、キリト……」

リズはそう言うと、キリトのチンポをおまんこに導くべく、腰を落とそうとする。

が、

ぴゅるっ。

「え」

リズが動きを止め、腰を浮かせてキリトのチンポの様子を窺う。

……やべえ、笑える。

いや、あんなに楽しそうにしてたりズの顔がみるみるうちに平板な表情になっていくからさ。

「うわ、キリト……ウソでしょ」

「お兄ちゃん……それはないよ」

リズと、さらには妹のリーファからも溜息混じりの非難がキリトに向けられる。

それもそのはず。

キリトはリズに挿入する直前にイッてしまったのだ。

ヤツの肉棒には白濁とした汁がベツトリと付着している。

そのキリトはと言うと……

「あああ……その、俺え……」

シヨックと情けなさで、目に涙さえ浮かべている。  
しーん。

その場に白けた空気が流れる。

居たたまれないのだろう。キリトはリズとリーファの顔をキョロキョロと窺っている。

アスナはというと、この事態は予測していなかったのか、戸惑った様子でいる。ちなみにクラインは爆笑しそうになっているのを必死に押さえているようだ。安心しろクライン、俺もだ。

しかし本当に爆笑した者がひとりだけいた。

「あーはっはっはっはっは!!」

京子さんだ。

人格が変貌してしまったのかと思うほどに彼女は声をあげて笑っている。

「見なさいアスナ! この情けない男の姿をつ! 貴女がこれまでお相手した殿方に、挿入前に射精されたことがある?」

「……ないです」

「でしよう!? これが貴女が選んだ男の姿よ。たかが小娘二人を相手に怯んで、あまつさえ挿入前に果てちゃうなんて……あらあ、もうすっかり萎えちやってるじゃないの。勃起してるときとあまりサイズが変わらないようだけど。ふっ」

京子さんは鼻で笑うと、ツカツカとヒールの音を響かせてキリトに近づく。

「ちよつと退きなさい」

「え、あ……」

さすがのリズも京子さんには逆らえずに場所を譲る。

京子さんはキリトのチンポを見下ろし、

「べっ」

唾を吐きかける。

「うわあっ」

キリトのペニスがピクピクツツと反応し、ムクムクと起きあがってくる。

「こいつ、Mなのかもな。」

「唾液を吐きかけられて勃起しちゃうなんてねえ。どれどれえ」

京子さんがキリトにチンポの先端を指先でつまみ、フリフリとさせて遊ぶ。

「ねえアスナ、こんな粗末なモノを挿れて満足してたの?」

「やめてよ母さん……」

アスナが震える声と涙で訴えるも、そんな態度はこの場では燃料を投下しているようなものだ。ここにアスナの味方はいない。

京子さんがニヤアと口角を吊り上げる。

「まだこの男の情けなさが分かってないみたいね。いいわ、母さんがこの粗チンを五秒でイカさせてみせるわ」

そう言うや否や、京子さんの手が高速で上下に動き始める。

「うわあああああ！ やつ、やめてくださいっ……イッたばつかで敏感に……！」

びゆる。

「あ……っ」

キリトがビクビクツと体を痙攣させた。

はい、五秒どころか二秒でイッたキリトくんでしたー。

……って、マジか。

いや、京子さんのテクの凄さは分かっている。それよりもキリトのシヨボさのほうに驚愕だ。

だが俺は驚くのが早かった。

のこり三秒で京子さんがさらなる成果を上げる。彼女は射精して若干萎えているチンポをさらにしごきあげる。

シコシコシコッ！

プシヤアアッ！

「うわあー!?!」

はい、キリトくん男の潮吹き披露してくれましたー。

カリの先端からシヤアアッと潮をお漏らししちゃっているよ彼。

「京子さん、その辺にしときなよ。それでも彼、ここにいる女の子たちの憧れの的なんだ。情けない姿見せちゃ可愛そうだろー」

おいおい誰だよ棒読み口調で心にもないこと言ってるヤツは。俺か。

「失礼しましたマサヤ様。ついカツとなってます。……アスナ、これで分かったでしょう。もうこんな男との交際はやめて、進学校に転校するのよ」

「うう……」

グスグスと鼻をすするアスナ。

頬に涙が伝い、ベッドに一滴、また一滴と垂れている。

そんな彼女を慰めているつもりなのか、クラインがアスナの頬をベローンと舐め上げた。慰めてるワケないか。

クラインの息子はリズやリーファの裸も登場したせいとか、より固く勃起しているように窺える。アスナのフェラが中途半端なところで中断してしまったこともあり、ムラムラして堪らないのだろう。

「クライン、アスナに挿れていいぞ」

俺がそう言っていると、クラインにパアッと笑顔が広がる。

「マジすかつ。あざーす！」

「クラインお前えッ！」

キリトが声を荒げると、さすがにクラインは笑みを消した。

「……すまねえな、キリト。だけどよ、俺もう決めたんだわ。我慢しねえって。『使われる側』じゃなくて『使う側』になるんだってな」

「俺にはクラインが何を言っているのかわからない！」

そりやハーレム状態だったヤツに分かるはずもない。

キリトと違い、クラインはこれまで女にろくに縁がなかった。仲間の中に女が多くいようとも、そいつらは揃いも揃ってキリトに目がいってるといいうじゃないか。

やってられねえよな、クライン。

いいぜ、俺の下で働いて、女どもを使い倒そうぜ。

飽きたら公衆便所として無料開放すればいい。

それもまた見物だぞ。

「あら、ちよつと見ない間に随分とたくましい殿方になりましたね、あの方」

京子さんが感心している。

「言っておくけど京子さん、これからはあいつが京子さんの飼い主になるんだからな」

「まあっ。ではこれからは坪井様ではなくご主人様とお呼びした方がいいかしら」

「それは全部終わってからクラインに訊け」

「そうですね、……全部終わってから」

うふっ、と京子さんが雌の笑いをこぼす。

クラインはアスナを四つん這いにさせ、チンポを彼女のおまんこにあてがう。

キリトはギャーギャー騒いでいたが、リーファが彼にキスをして黙らせた。

リズはなぜかエネマグラを用意している。

そしてアスナは嫌々と首を振りながらも、尻を突き上げてクラインが挿入しやすいような体勢を取っている。

奴隷根性染み着いてるねえ。

え？

俺は何をしているかって？

ようやくキリトとアスナの対面が実現して、感動のあまり涙しているところだよ。

笑いすぎてるだけだけど。くくくつ。

## 第16話 プロ調教師、笑いを堪えるのに必死になる

(ああ……だめえ、キリトくんが見ている前なのに腰が勝手に……)

くいつと腰をやや上向かせ尻を突き出す自分を、アスナは恥じていた。けれど、恥じれば恥じるほどアソコが熱と汗気を帯びていくのが自分でも分かっていく。

そしてまた恥じる。

また熱くなる、濡れる。

淫乱のスパイラルに陥っていく自分を、止めることができない。

クラインがアスナの制服のスカートをめくり、白いパンツを横にずらす。

アナルとおまんこが空気に触れ、清々しい気分になってしまう。

(ああ、わたし……これからキリトくんの前で他の男の人とエッチしちゃうんだ……)

「いくぜえ、アスナ」

ぴと……クラインの肉棒の先端がアスナの膣口に接触、アスナはその先にある快感を想像しないわけにはいかなかった。

「あつ……」

まだ挿入していないというのに、ただカリを感じるだけで気持ちが高揚するアスナ。

ふとキリトのほうを見やると、

「やめろクラインッ！ やめろよおお……!!」

涙を流しながら叫んでいた。

だが彼の肉棒は母の京子が握ったままだ。リズベットに挿入前にイッた挙げ句、母に手コキでもう一度イキ、さらには潮まで吹いていた。

あのとときのキリトの情けなさど気持ちよさが入り交じった表情は、アスナの中の「キリト」という株の価値を下げていた。

一言で言ってしまったえば、ショボい。

そう思ってしまったのだ、自分の恋人だというのに。

今も母に萎えたチンポをフニフニといじられているキリトは、もう

アスナが知っているキリトではないように思えてならなかった。

そんなことを思っているうちに……

ズブリッ!!

「あへあああああッツ!!」

盛大に喘ぎ声を発するアスナ。

(おまんこがおちんちんしゃぶってるうううッツ!!)

バックの体勢でクラインが腰を振るたびに、パンパンパンツという猥褻な音が響きわたる。

(ああ……みんなが、みんながこっち見てるよお……)

気持ち良さと恥ずかしさ、そして悲しみがなймаぜになり、アスナは混乱の極みに達している。

リズベツトは「アハハハッ」とこちらを指さして笑っている。

リーファはクスクスとほくそ笑む。

母の京子はキリトの萎えたチンポを指先で汚い物でも扱うように指先でつまんだり弾いたりして弄んでいる。

そしてキリトは母に股間をイジメられながらも、アスナとクラインのセックスに目が釘付けだった。

「お願いキリトくんっ！ 見ないでえアンツ!？」

パシイ!!

クラインがアスナの尻をスパンキング、アスナは思わず感じてしまい、甘い声音で反応を示してしまった。

「アスナ……」

キリトが悲しそうな目をやってくる。

「あっあっあっ……! ご、めんね……キリトくうんっ! あふんっ! でもね、気持ち良いの止められないのおお!!」

股間から太股を伝って愛液が垂れてきた。

肉棒を出し入れされている傍から溢れてくる。

ペニスの熱がとても心地良い。

快感がおまんこを支配し、支配されたおまんこがアスナの意識を支配していく。

快楽の渦に飲み込まれ、アスナは意識を保てそうになくなる。だが



歯を食いしばり、ギリギリのところまで彼女は耐えている。

(何があっても、キリトくんとは別れない……っ！)

自分とキリトは固い絆で結ばれている。

どれだけの愛情を育んできたか、ここにいる人たちは誰も知らない。

裏切った仲間たちなんてもうどうでもいい。

キリトさえいれば、それで。

(キリトくんだって何があってもわたしと別れるわけが)

『アスナとはもう別れるっ！』

「えっ……」

突如耳に入ったその言葉に、アスナは頭を殴られたかのような衝撃を受ける。

今のは間違いなくキリトの声だった。

『アスナとはもう別れるっ！』『アスナとはもう別れるっ！』『アスナとはもう別れるっ！』『アスナとはもう別れるっ！』『アスナとはもう別れるっ！』『アスナとはもう別れるっ！』……

それは録音されたキリトの声だった。

部屋のスピーカーから大音量でリピートされ続けている。

「くくくっ、どうだアスナ、キリトはお前と別れるってさ」

マサヤがアスナをあざ笑っている。

「ちっ、違うんだアスナ……！ 一部の声だけ抜き取って前後はカットされて」

キリトが慌てて弁明するも……

「うううう……」

悲しみに沈むアスナに、キリトの声は届いてはいなかった。



いやあやつぱり映像と音声は残しておくもんだね！

キリトの別れる宣言をリピート再生させまくった俺は、目の前で展開する心躍るバッドエンドにとても満足していた。

キリトは「ち、違うんだアスナっ！」と喚いている。

アスナは悲しみに泣き崩れながらもクラインにおまんこされてア

ンアンと感じずにはいられないでいるところが笑える。

「アスナっ、頼む！ 俺の話を聞いてくれ！ これは言わされただけで」

「えー、言わされたんじゃないやなくてキリトの本心でしょう？ キリトはアスナと別れてあたしたちとエッチしてくれるって約束したじゃん」  
リズベットがキリトを遮って言った。良い仕事だぞリズ。

「そうだよお兄ちゃん。アスナさん見てみなよ。クラインさんにセックスしてもらってあんなに喜んでるんだよ？ あんな人とまだ付き合いたいのか？」

リーファが辛辣な口調でアスナを批判した。

「あ、アスナだってやらされてるだけ……」

キリトの声が徐々に弱々しくなる。

それも無理のない話で、アスナは涙を流しているも、同時に涎も垂らし、アへ顔さらし「アアンツ、うほおう……!! あふ……っ」と快楽を貪っているのだからな。

よし、じゃあ次はアスナに言い訳してもらおうか。くくくっ。

俺は部屋の設備を一括管理しているリモコンを操作する。巨大なスクリーンが天井からスルスルと降りてきた。

そして、再生ボタンを押す。

『本当は、マサヤ様のおちんちんが欲しいんですう！ おまんこがうずいて仕方がないんですっ！ お願いしますっ、いっぱいセックスしてくださいいい！ このままじゃ変になっちやうよおおお……ぐす』

一同の視線がスクリーンに集まった。

スクリーンには俺がアスナを調教した末に、ついにアスナからチンポを求めた瞬間が映し出されている。

さて、アスナはどんな反応かな？

「やめてえええええ!! 見ないでキリトくうううううん!!」

はい、絶叫いただきましたー。

泣き叫んで頭振り乱して大変なことになってるな、アスナ。

キリトはどうかな。

「……………」

はい、絶句してましたー。

とはいえ言葉を使いながらも映像からは目が離せないでいる。悲しい男の性だねえ。

『キリトのことは忘れるか?』

これは俺の言葉だ。

ここでもちよつと一時停止。そしてちよい巻き戻し。

さて、アスナのはどんな感じかな?

「やめてお願いこれ以上は流さないで何でもします! 何でもしますからああああツツツ!!」

アスナがバツクでおまんこされながら土下座のように頭を何度も下げて泣いていた。美少女の土下座フアツクは実に絵になる。

「……分かったアスナ。いくらなんでも俺がやりすぎだよ」

俺は神妙な顔つきで答えた。

「マサヤ様……」

アスナの顔に安堵が広がる。嬉しさで笑みさえこぼれていた。自分の最低な答をキリトに聞かれずにホツとしているようだ。

俺は再生ボタンを押した。

『キリトのことは忘れるか?』

『はい』

「いやあああああああツツツ!!!」

アスナの絶叫が反響した。あまりの声の大きさに俺は思わず耳を押さえた。

「いやああ! いやいやいや!! いやああああ!!!」

もはや金切り声の域に達している。  
だが、

「いやああああんっ!? ああっダメエツ、クリちゃんシゴかないでええ!!」

クラインがクリトリスをいじってやると、途端に声音を甘くするアスナ。今やアスナの体は快楽に支配され、敏感に感じ取るように躡られている。

悲しみと羞恥にに勝てるほどに。

ちなみにこの映像、実際にはアスナはかなり沈黙した末に「はい」と言っていたんだけど、沈黙部分は編集でカットしておいた。

これであたかも俺の質問にアスナが即答しているように見えるだろう。文明は俺に都合良く進化してくれているね。

さて、キリトはどんな様子かな？

「……………あ、あす、な……………」

愕然とした面構えでいる。

うわ、目が死んでるなあいつ。

映像の中ではアスナが俺に挿入されてアンアン喘ぎまくった挙げ句、

『はひいんツ、おまんこ種付けお願いしますすう！』

と中出しをおねだりしたところだった。

キリトは沈黙。そして、

「アスナ……………これはどういうことだよ」

低い声を発した。

「えっ……………」

アスナはファックされつつもキリトの様子がおかしいことに気付いて反応を示した。

「……………なんだよ俺のこと忘れるって！ しかもあんな男と……………っ！」

そしてこちらを指さしてきた。

おいおい誰だよあんな男って。俺か。

「きつ、キリトくんだったってわたしと別れるって言ってたじゃないの！」

「いやだからそれは言わされたって言うてるだろ！」

「そんなふうには聞こえなかったわ！」

「アスナこそ本気で感じてるじゃないかっ！」

「そ、そんなことないアアンツ!?」

「ほら今も感じてるじゃないかっ！」

まさかのキリトとアスナによる喧嘩が勃発していた。これはちよつと予想外の展開である。笑える。

キリトの粗チンをいじめることに飽きたのか、京子さんが俺が座るソファの横に腰を下ろした。

「どう？ この展開は。京子さんの依頼通りになったと思うけど」  
「はい、とても満足です」

京子さんが嬉しそうな顔で笑みを浮かべていた。



「はいはい、喧嘩はほどほどにね。どうせもうアスナはキリトから振られてんだから」

アスナとキリトの喧嘩に割って入ったのはリズだった。彼女の手にはエネマグラがある。

ちなみにエネマグラとは、男のアナルに挿入し前立腺を刺激し気持ちよくなるアイテムである。これによってドライオーガズムという域に達し、男でも「女のようにイク感覚」が味わえるという。

また、前立腺による刺激はあまりにも激しすぎるため、ペニスを半ば強制的に勃起させるほどでもあるという。

まあ俺は体験したことないんで分からないし、使う予定もないけど。俺は中出しで十分満足だから。

「キリト、ちよつとお尻持ち上げるねっ……と」

「うわっ……っ、おいリズ何を……」

「えいつ」

ズブズブツ。

「んがあッ!?!」

キリトが奇怪な声をあげた。

それもそのはず。リズがエネマグラを一気にキリトのアナルに挿入したからだ。結構太いんだがエネマグラ……。すると、

「すごくいつ、フニャフニャだったキリトちんぽがすぐに勃つたよー！嬉しそうにはしゃぐリズベツト。」

俺はエネマグラの威力に目を見張った。俺の場合あんなものに頼らずとも勃起するから必要はないが。

「……………ぐうッ」

キリトは苦しそうに呻いている。

その苦悶の表情を見て、俺は絶対に自分には使わないし誰にも使わせないと心に誓った。

「んじやあ挿れるねっ」

キリトのチンポをつまみ、リズがまたがる。

「やめてリズっ！ やめてよおおおお……」

アスナが号泣しながら懇願する。

「クラインにバックで突かれながら何言っちゃってんのアスナ」

「うっ……あっあっあんっ！」

リズに指摘されている傍から気持ちよくなっているアスナだった。

たしかに何言っちゃってんだろね、この雌豚は。

「そんじやいきまーす♪」

つぶう……。

「うっ!!」

キリトが体をビクビクと震わせた。

リズのおまんこがキリトのチンポを飲み込んだ。

アスナとクライン、そしてリズとキリト。

互いのカップルが互いのセックスを見せ合う形となり、いよいよ乱

交の様相を呈してきた。

……と、思われたが。

「あああんっ……ダメツ、クライン!! これ以上おまんこされたらわ

たしダメになりゆううう!!」

これはアスナの快樂狂いのリアクション。これは予想通り。

問題は、

「んっ、んっ……んう？」

リズが腰を振りながらも首を傾げている。

いや、俺には分かっているけどね。リズが何に……否、ナニに疑問

を持つていることを。

「……ねえ、リーファ。キリトのチンポ、あたしの中に入ってる？」

リズに訊ねられたリーファが、リズの局部を確認する。

「入ってますよ、根本まで」

「嘘……あ、でも……そうだね、たしかに入ってる感じはする、かな

……」

続くリズの言葉が、キリトの男としてのプライドを粉碎した。

「キリトのおちんちん、小さい……」

「す、すまん……」

「う、ううんっ、キリトが悪いんじゃないだよ！ 本当だよっ！」

謝罪するキリトに、リズが慌ててフォローするも、フォローされればされるほど情け無い思いにかられているのだろう。

キリトの表情がもはや死に顔である。

「じゃ、じゃあ、リーファに交代しよっか……」

ぬぽっ、とキリトの粗チンを抜くりズベット。あまりの交代の早さに爆笑必至である。

つまり「もういいや」ってことだろ？

「もうっ、リズさん何てこと言うんですか。お兄ちゃんのおちんちんなんですよ」

女王様相手とはいえ、兄のチンポを悪く言われたリーファは立腹している。

「ごめんごめん……って、アレ……」

「どうしたんですか、リズさん」

「あたしのおまんこ……ほんのちよつとだけなんだけど精子が付いてる……」

「ええ!？」

リーファが目丸くし、キリトのチンポを見やった。

彼の肉棒は先端にとても薄い精液がわずかに付着していた。

「お、お兄ちゃん、いつの間にイッたの……?」

「……………」

妹の問いに、兄が押し黙っている。

仕方ない、俺が答えてやるか。

「キリトくんは、リズに挿入した瞬間にイッたんだ」

「はあ!？」

「嘘っ!!」

リズとリーファが驚きつつも、引いているのが分かった。

俺はすぐに見抜いたけどね。

キリトがリズに騎乗位されたときの身の痙攣。あれは絶頂を迎え

た反応以外にあるまい。

ただ、リーファはともかく、中出しされたリズがキリトの射精に気づけなかったのは意外だったが、それも考えてみれば自ずと結論は出る。

ヤツがすでに数回イッているからだろう。

俺はともかく、キリトのようなモヤシが複数回射精すれば、精子は薄くなり、その量も減っていく。

受け止める側のリズにすら認識できないほどの微量の精子しか、キリトは射精できなかったのだろう。

まあ何にせよ、シヨボい。

「だ、大丈夫だよお兄ちゃんっ！ 今度はあたしがお兄ちゃんをじっくり気持ちよくしてあげるから……っ」

今度はリーファの番らしい。再び萎えてしまったキリトのチンポを、挿入したまんまのエネマグラを「えいえいっ」と前後に動かし強制勃起させ（キリトは苦しそうだった）、そしてまたがった。

「挿れるよ、お兄ちゃん……」

「す、スグ……」

「あたしね、お兄ちゃんとうこうするの、ずっと夢見てたんだ……」

恍惚な表情を浮かべ、リーファは静かに腰を落とした。

そして次の瞬間、夢から覚めたようだ。

「……………」

リーファ、沈黙。

彼女の顔色が恍惚から一転、みるみるうちに困惑に変容していくのを、俺は笑いをこらえて眺めていた。

今爆笑したらダメだ。でないところの微妙でシラケた空気が台無しになってしまうからな。

「……………あつ、あー、気持ち良いよー、お兄ちゃん」

作業的に腰を振り、リズがとてもはつきりした意識の元で言った。

「あつ、スグ……俺もう……っ」

「え、もうイキそうなの!?!」

「……………イッた」



「ええ!？」

リーファが驚きのあまり素っ頓狂な声をあげた。おおよそセックス中に発せられる声音ではないな。

ちなみに俺は必死に自分の太股をつねっていた。笑いをこらえるためにな。くくくつ。

「本当だあ……」

リーファが腰を上げてチンポを引き抜くと、僅かだが彼女の膣口から限りなく透明に近い液体が垂れてきた。愛液と間違えそうだが、どうやら精子らしい。

「……………」

「……………」

「……………」

キリト、リズ、リーファの三者が沈黙。

アスナの喘ぎ声が場違いに響き渡っている。

口火を切ったのはリズだった。

「……キリト、ごめん。あたし、マサヤさんのところに行くよ」

「リズ……っ!」

「だってキリトのおちんちん……ダメダメなんだもん」

「あたしも……お兄ちゃんには悪いけど……やっぱりおチンポのサイズが足りなくてエッチしてる感じがしないっていうか……」

「スグまで……」

それからスツと立ち上がってキリトから離れるリズとリーファ。

どこに行くかと思えば……

「マサヤさん、あたしのおまんこで遊ばない?」

「マサヤ様あ……あたしもおまんこしてほしいですう」

ふたりとも俺の股間の前で正座していた。

こうなるだろうと思った。

俺のナニでセックスした女が、今更あんな粗チンで満足できるワケがない。リズとリーファのおまんこは、完全に俺の肉棒のサイズにフィットするよう、専用に仕込まれたも同然なのだ。

それはアスナも同様だ。

あの雌豚、今もアンアンと感じているが、クラインとのセックスで絶頂を迎えたのはただの一度もない。それは見ていれば分かる。

アスナのイク瞬間の体の痙攣ぶりは、一人で大地震の揺れを感知しているのかよとツツコミを入れたくなるほどに激しい。

その痙攣が、クラインとのセックスでは一度も見られていないのだ。

イッているときにアスナのおまんこの締め付け具合は半端ではない。あの気持ち良さを知ったら、クラインも京子さんに夢中になることなどなかったかもな。

俺はリズとリーファを見下ろす。

彼女らは物欲しそうな顔で俺の顔と股間を見やっている。

完全に俺の支配下に堕ちたな、このふたり。

これまではキリトを手に入れるために奮闘してきたリズとリーファだが、俺にしてみればキリトは障害でしかなかった。

だが今や、その障害は彼女たち自ら取り払ってくれた。

「いいぜ、二人とも」

俺はリズとリーファの頭を撫でてやった。

「やったあ♪」

「ありがとうございますっ」

俺とのセックスの許可を与えられると、リズとリーファが満面の笑みで喜んだ。

一方、キリトはというと、

「ううっ……ううっ……すぐう……りずう」

あーなんか泣いてるね。

仕方ないなー。

追いつめ……じゃなかった。慰めてやるか。

「アスナ、キリトくとセックスしてやれ」

## 第17話 プロ調教師、トドメをさす

マサヤにキリトとセックスしろと命令され、アスナは戸惑った。

「え……いい、いいんですか？」

「もちろんだ。彼を慰めてあげろ」

「はいー」

アスナは喜色満面の顔で返事をする。

一方、アスナのおまんこをバックから制圧中のクラインは不平を漏らす。

「そりやないですよマサヤさくん……めっちゃいいところなんですよお？」

「安心しろクライン。京子さん、アンタの飼い主はクラインに代わった。あらゆる世話をしてやれ」

「かしこまりました、マサヤ様」

京子さんがソファから静かに立ち上がった。

「え、か……飼い主って……お、俺が!？」

クラインは自分を指さし、信じられないといわんばかりに目を見開いている。喜んでいるようで何よりだが、「京子さんが性欲旺盛過ぎなんでとりあえずオマエに任せたわw」なんて裏事情は絶対に言えない空気だなこれは……。

「アスナ、退きなさい」

パシイイイ!!

「あんっ!？」

京子さんに思い切り尻を平手打ちされるアスナ。それでも感じているようだが。

アスナがハイハイで前進し、おまんこでくわえ込んでいたチンポを引き抜いた。

娘に代わってクラインの相手をする京子さんがベッドの上にあがる。

クラインは目をパチクリとさせている。

「あ、あの、おお俺え……」

「本日からクライン様が私の飼い主です。よろしくお願いしますね」  
ベッドの上で京子さんが三つ指をつけて低頭する。

「よよよよろしくおなしゃああす!!」

クラインまで低頭していた。お前は飼い主だろうが。

それから二人は抱き合い、舌を絡め始めた。まあクラインのことは京子さんに任せておけばいいだろう。

一方、アスナはというと、キリトがいるベッドの上上がり、すでに彼のチンポをフェラしていた。

「さつきはごめんねキリトくん……わたし、言い過ぎた」

「いいんだアスナ……」

ふうむ、和解しているようだが、それもまあ今のうちだろう。事が始まればアスナも思い知る。というかすでに思い知っているのかもな。

アスナのフェラをする姿がどうにもぎこちないのだ。

それもそのはずで、舌を根本から這わせればあつという間に舐め終わってしまうし、くわえ込んでみても口いっぱい頬張るまでもなく、まるでキュウリでもくわえているような具合なのだ。

彼女が物足りなく思っているのは手に取るように分かる。

ちなみに俺の股間はリズとリーファが絶賛フェラチオ中である。

くちゅ、ぷちゅ、れろ……。

二枚の舌が俺のチンポを瞬く間に唾液まみれにしている。

「んふう……マサヤさんのおちんちん、とつてもおつきい……」

うつとりとした表情でリズがつぶやいた。キリトの粗チンを味わった後ではなおのこと俺のが大きく感じられるのだろう。

「もう挿れてもいいですかあ?」

リーファが自分のアソコを指でクチュクチュとさせながらおねだりしてきた。

「まだだ。フェエラを続けろ」

そう、まだリーファとリズに挿入するのは早い。

俺はベッドの上のアスナとキリトに目を向ける。

ようやくキリトのナニが回復したらしい。

いよいよアスナがまたがり、騎乗位で挿入しようとしていた。

雌豚が。さっさとすればいいものを。

エネマグラが刺さったままなんだから、それをグイグイやれば勃起するだろうに。

俺はまだかまだかとタイミングを計っていた。

★

「じゃ、じゃあ、挿れるね……キリトくん」

「あ、ああ……」

「ん」

騎乗位の体勢になって、アスナがキリトのナニをつまみ、自分のおまんこにあてがう。

つぶん。

呆気なく挿入された。

若干位置がズレているようにも見えたが、アスナの膣口が広がり、半ば無理矢理チンポをくわえこんだ。

まあ、俺のでアスナの穴は前も後ろも拡張させてあるからな。キリト程度の極細チンポなら余裕で飲み込むように仕上がっている。

「あつ、アスナあ！ 気持ちいいよアスナああ!!」

「わ、わたしもよ……キリトくん」

キリトが大声でうめき、アスナは冷静な声音で反応している。

ふたりの温度差は俺だけでなく、リズとリーファにも伝わっているらしく、

「そりや気使うよねえ」とリズ。

「アスナさん、腰の振りがゆつくりですね……無理もないですけど」とリーファ。

あれだけ恨み辛みがあつた二人だが、今やアスナに同情すらしている。

それにしてもリーファは鋭い。

「ん、ん、んっ……」

腰を振るアスナだが、そのペースはとても遅い。というより、あえて遅くしている。

もし腰振りのスピードを速めればキリトはあつという間にイッてしまうというのをアスナは知っているからだ。

そりやまあ、恋人だからね。

おそらくアスナは、キリトとのセックスしか知らないときは「セックスとはすぐに終わるもの」と認識していたのだろう。

だが俺に調教され、百人以上の経験人数を誇るようになった今は、そんなこと微塵も思つてはいまい。

キリトは早濡。

それだけの話だ。

「ま、今となつちやどうでもいいけど」

「え、何がどうでもいいんですかマサヤさあんっ♪」

「何でもない。ていうか勝手に挿れようとしてんじゃねえよりズ」

「だつてえ、アスナとキリトがエッチしてるとこなんて見てもつままないだもん」

リズがぶくうつと頬を膨れさせた。

「もうすぐ面白くしてやるさ、俺が」

アスナとキリトのセックスは依然としてキリトがマグロ状態で展開していた。

アスナが細心の注意をはらい、腰をゆっくり動かし、時に止まってはキリトの射精をギリギリのところまでコントロールしている。

コントロールしているのは射精だけでなく、おまんこの締め付け具合も同様だろう。

アスナが挿入したチンポの数は百本はくだらない。

それだけ相手をすれば、膣の具合をコントロールすることだってもはや自然と体がマスターしているだろう。

「あ、あ、あつ……き、気持ちいいよ、キリトくん！」

アスナが笑みを浮かべて言った。

本当に感じていたら笑う余裕なんてないだろ。

だがおめでたいことに、キリトはそんなことにも気づかない。

「俺もだよアスナ！　これからアスナを気持ちよくしてあげるからな  
！」

ぶふっ！

何言っちゃってるんだいキリトくん！

頼むからこれ以上俺を笑わせないでくれよ！

「う、うん」

アスナは笑顔で頷いた。エッチしてるときに作り笑いを浮かべて  
男の自信を取り戻させるなんて、アスナも健気だねえ。

さて。

キリトが調子に乗り始めたので、そろそろ動くとするか。

ゲームと現実が違うってことを、見せてやる。

俺はソファから立ち上がり、アスナとキリトが交尾中のベッドへと  
足を向けた。



アスナは落ち着きを取り戻し、完全に素に戻りつつある自分に戸  
惑っていた。

(どうしちゃったのよわたし……っ。キリトくんとうこうして結ばれる  
ことが出来たっていうのに……)

キリトのペニスが自分の膣に挿入されている。

それだけで興奮してしかるべきはずなのに、体のほうはまるで快感  
を生み出さない。

否。

体だけではない。

感情の面でも何の感動も生み出していない。

「あつ、アスナっ、気持ちいいよー」

キリトの声にハツとするアスナ。

自分は気持ち良い顔を作っていただろうかと焦る。

(焦る……?)

何を焦っているのだろうと疑問に思いつつ、アスナは感じているときの自分を思い出しながら表情を作る。

口をやや半開きにし、目を少し細めてみた。

「わ、わたしもよ、キリトく……うほおおおおおん!!」

演技で感じていたアスナだったが、突如アナル内部が極太のナニかで貫かれるのを感じ、叫ばずにはいられなかった。

「アスナ!？」

「あ、アナルが……わたしの、アナルがあああんツツ!!」

様子が急変したアスナにキリトは驚愕するが、そんなキリトにアスナは気づきもしない。

肛門がくわえ込んでいるモノの正体を、アスナはもう分かっている。

(これは、マサヤ様のおちんぽおお……)

この熱。

この太さ。

この長さ。

そして何より、奥で感じられる力強さ。

挿入された瞬間に有無を言わせず穴を拡張させ、奥に潜むGスポーツを遠慮も躊躇も容赦もなく突いてくる。

あらゆる面でキリトのそれとは比較にならないペニス。

幾度となく口で、おまんこで、アナルでくわえたプロ調教師マサヤのチンポを、アスナが間違えるはずもない。

「どうだアスナ、気持ち良いか、俺のチンポは」

背後からマサヤが声をかけてきた。同時に、

パンパンパンパンツ!!

「んはああああ!!」



怒濤の勢いでアスナの腸内をチンポで突いてきた。

「お、奥にいー！ 奥に当たるううううツツツ!!」

「あ、アスナあ!？」

キリトがアスナのアへっっている様子に驚きを隠せないでいる。

(だ、ダメ……ッ、キリトくんの前でマサヤ様のチンポで感じるなんてダメ!)

アスナは肛門から意識を逸らし、キリトのチンポを納めている膣に集中しようとするも……

ぬぷう……

「あつ……」

マサヤがアナルからチンポを先端まで引き抜いた。

今や挿入されているのはカリの部分のみ。

肛門がめくれ上がり、マサヤのいちもつをくわえようとパクパクとうごめいているのが自分でも分かるアスナ。

いや、アスナ自身がそのように肛門を動かしているのだ。

(来る……マサヤ様がこの動きをする時はいつも一気に奥まで……)

ぬぷつ

「ええっ!？」

予想外の事態にアスナは素っ頓狂な声をあげてしまった。

マサヤがまだ射精してもいないのにチンポを抜いてしまったからだ。普段の彼ならあそこから一気に奥まで一突きし、アスナをイカせてしまうというのに。

「あ、あの……マサヤ様……どう、して……」

「どうして? おいおい、アスナはキリトくんとお楽しみ中じゃないか。あまりにも楽しそうだから俺も混ぜてもらったけど、やはり邪魔しちや悪いと思っただけ」

「あ、ああ……」

ヒクヒクとアナルが口を閉じたり開いたりするのを認識するアスナ。

(ダメ……ダメなのにい)

アスナはうぐめくアナルを止められない。

このまま腰を振ったところでキリトをイカせることはできても、自分はいくことができない。

そんなことはもう、アスナには分かっちゃまっている。

キリトのペニスを挿れる前から。

今この瞬間にもアスナのおまんこはキリトのペニスをくわえ込んでいる。けれど、それだけだ。

奥に当たるとは長さの関係上不可能。

くわえ込もうにも細すぎて物足りない。

あまつさえキリトはすぐにイッてしまうから腰を思い切り振るとすら叶わない。

感覚は冴え渡り、冷静に思考することすら可能。

本当に気持ちの良いセックスは、冷静になるところか頭の中が真っ白になるというのに。

例えばそう、マサヤとのセックスがそれだ。

(キリトくんがわたしをイカせるのは……ムリだわ。でもマサヤ様なら……)

その思いに行き着いてしまった途端、アスナの中で何かが壊れた。

「……………マサヤ様、お願いしますっ！ わたしの……わたしのおまんこにッ、マサヤ様のおちんちんを挿れてくださいッッッ!!」

「アスナあああ!!」

キリトが絶叫する。

アスナはキリトから目を逸らし、小さくつぶやいた。

「ごめんなさい……」

アスナは腰を浮かせ、キリトのチンポを膣から抜いた。抜いたときの感触すら、小さいモノだからろくに感じることもなかった。

本当に挿れていたのかと疑問に思うほどだった。

「……わたしはもう、マサヤ様のおチンポ様無しじゃ生きていけない体になっちゃったの」

それからアスナは尻を高くあげて、マサヤが挿入しやすいように肛門とおまんこを晒した。

どちらに挿入されてもいいように。

ふわりと空気が流れて、アスナのアナルとおまんこを撫でる。

その感覚だけで、アスナは感じてしまった。

「マサヤ様あ……お願いします、挿れてください……」

「もうキリトとは別れるか？」

「別れますっ！ 別れますからわたしのアナルもおまんこもいっぱい使ってくださいっ!!」

アスナは声の限りに叫んだ。

自分でも何を言っているのか分かってる。

キリトを傷つけるなんてことは百も承知だ。

でも、アスナはこうも思っている。

「女の子を気持ち良くできないおちんちんに、存在価値なんてありません！ マサヤ様のおちんちん様がわたしは欲しいんです!!」

「あ、す……な……」

目の前でキリトが涙している。

けれどももう、アスナはそれを見ても何も感じない。

逆に憤怒すら覚える。

(どうしてこの人はわたしを気持ち良くできなかつたくせに泣いてるのよ。被害者面とか意味が分からないわ……あっ)

ピトッ。

膣口にマサヤのチンポの先端が接触した。

「ああ、おまんこに挿れてくださるのですね……」

感動のあまりアスナは瞳をうるませた。

「もちろんだ。マンコが挿れたかがってるんだよな？ アスナ」

「はひい……わたしおまんこ極太チンポ挿れたがってるんです……」

「くくくつ、良い答えだ。お前はたしかに雌奴隷だが、」

ズブズブブウ……。

「あ、あ……入って、く、る……」

ズブリツツツ!!

「うほおおうううツツツ!!」

アスナはもだえた。

キリトのモノとは比べものにならないサイズのペニスが、アスナの膣を満たしている。

それだけではない。

たったの一突きで子宮にまで到達、アスナをイカせてしまったのだ。

「と、とりよけりゆう……」

脳味噌がとろけてしまうような感覚に、アスナは身をゆだねる。

マサヤが彼女の耳元でささやく。

「今日は真の雌奴隷としてアスナが生まれ変わった記念日だ。褒美としてお前の好きなモノをあげよう」

「しゅきな、もの……」

「そうだ、何がいい」

その問いに、アスナは何の迷いもなく即答する。

「ずっと粗末なチンポを入れていたおまんこが、欲しがって欲しがって仕方がないモノ。」

それは……

「もちろん、マサヤ様のチンポミルクが欲しいですううう!!」

「よく言った。くくくつ」



「あつ！ あうつ！ あふんツツ!!」

アスナの尻を撫でながら、俺はバックから彼女のおまんこを突いて突いて突きまくった。

ドラムもかくやというほどにパンパンパンツと尻を打ちつける音と、アスナの甘い喘ぎ声が響きわたる。

制服姿でパンツをずらしただけの姿も悪くはなかったが、やはり全裸のほうが俺は好きなので素っ裸にしてやった。

四つん這いのアスナの体のラインを背後から眺められる。

これだけで金を積むヤツが出てきてもおかしくない。それほどまでにアスナは極上の体を持っているのだ。

チンポを奥までピストンさせるたびに、その振動で揺れるアスナの尻肉が実に美味そうだ。

肛門は俺の腰の動きに連動して開いたり閉じたりを繰り返し、これもまた鑑賞していて飽きないな。

「んちゅ……むちゅうう、レロレロ……あふつ」

俺の唇を塞いでいるのはリズだ。

リズの舌は俺の舌と絡み合い、唾液が混じり合って甘い味が口内に広がる。

早く自分にも挿れろとせがんでいるのだが、生憎と俺のチンポは一本。可愛がつてやりたいところだが、順番待ちである。

「ちゅるっ、ぴちゅ……ちゅ」

俺の乳首を舌で愛撫しているのはリーファだ。

「ましやや様あ……まだですかあ?」

「悪いなリーファ。もうちよつとアスナのマンコを楽しませてくれ」

「お兄ちゃんと違ってマサヤ様のおちんちんは女の子を長い時間気持

ちよくしてくれませぬ」

「そんなこと言ったらキリトくんに失礼だろう」

心にもないことを言ってみた。

で、そのキリトはというと、ついさっきまでアスナの下にいたのだが、リーファとリズがドタドタとベッド上がって俺に群がってきたため、邪魔者扱いされた末に今はちんまりと部屋の隅で体育座りをしている。

虚ろな目でハーレム状態の俺を眺めている。

ちなみにクラインと京子さんはというと、隣の部屋のベッドで絶賛お楽しみ中だった。

京子さんも今や全裸になって、クラインの上にまたがって腰をテクニカルに振っている。

尻がこちらに向いていて京子さんのアナルと結合部が丸見えで、素晴らしい景色だった。

「んっあっあっあっー!! どうですかクラインさまあ! 気持ちいいですかああ!!」

「ぐっうっ…うあああああ!!」

クラインの答が絶叫だったことに笑いそうになった。相当気持ち良いらしいな。

さて、話は戻ってキリトだ。

アスナを寝取っておいてなんだが、さすがの俺も無様な体育座りを見せつけられては居心地が悪い。

どうしたもんかな…おっ。

良い物があるじゃないか。

「キリトくん、見ているだけではつまらないだろう。これを使うといよ」

そう言つて、俺はひょいっとそれをキリトに放った。

アスナがさつきまで穿いていたパンツだ。

淡いピンク色で、制服の下に着用するにしては布面積があまりにも少ないショーツである。

愛液が染み込んでいるのは語るまでもないだろう。

床に落ちたパンツを、キリトは呆然とした面持ちで見やっている。

「君の元恋人のパンツだよ。本来なら高値で売りたいところだが今日は特別だ。無料で君に進呈しよう。使い方は君次第だ」

俺ってば本当に親切だよなあ。うん。

「あ、アスナの……」

キリトは恐る恐る手を伸ばし、アスナのパンツを手を取った。

それからの彼の行動は、アスナを幻滅させるのに十分な破壊力があつた。

「すんすんっ、すんすんっ、すううう……!」

鼻にパンツの股間部分を持っていき深呼吸、さらに匂いをかぎながらオナニー始めましたとき。

「き、キリト……くん……」

アスナはキリトを白い目で見ていた。

元彼の惨めな姿は、アスナに決定的な決別を決意させたようだな。くくくっ。

「うわキリト……そこまでする普通?」

「お兄ちゃん、もう話しかけてこないでね」

リズとリーファは辛辣だった。

だがキリトはお構いなしにオナニーを続け、

「あっっ」

びゅ

あつという間にイッてましたとき。

一分も持っていないんじゃないのか?

「一人でもイクの早いのねキリトくん……あへえ!」

後ろから俺が思い切りピストンしてやると、アスナがたまらないといわんばかりにアヘッてみせた。

「俺もそろそろイクぞアスナ」

「ああんっ! くだしやあい! 熱いおちんぽミルクいっぱいおまんこに飲ませてあげてくりやしやあいっ♪」

ずちゅぶちゅつずちゅ！

淫乱な水音がアスナの局部から木霊している。

アスナが愛液を垂らし続けるものだから、シーツは失禁でもしたかのようにびっしりと濡れている。

アスナの膣の中はこれまでのセックスの中で、最高の締め付け具合だった。キリトという枷が外された効果だな。

もう誰に遠慮することもない。

ただおまんこが欲しがるとままだに、チンポをむさぼることができる。いわば俺は「キリト」という呪縛から、アスナを解放したのだ。

女が味わえる最高の快感を教えてやったわけだ。

これってもう善行だな、うん。

「そんなに俺のチンポがいいのか、キリトのよりも」

「はひい！ マサヤ様のおちんちんは大しゅきいッツ！！ いっぱい気持ち良くしてくれりゅかりやああんっ！ キリトきゅんのは無いのといっしょなお！ アッあんっ♪ うほう！！」

「そうかそうか。じゃあお望み通り、熱いやつを出してやる！」

パンッパンパンツ！！

さらに腰の動きを加速させ、アスナの膣を蹂躪する。

グチュグチュと卑猥な音を立て、勃起したクリトリスはまるでチンポのような有様になっていた。

クリトリスをつまんでシゴいてやると面白いぐらいに潮を吹きやがった。それをきっかけにさらに締まりがよくなるアスナマンコ。

さすがに限界だ。

ドピユルルルルウウウ！！

「あああああゝゝゝんうッツツ！！ 出てりゅう！ 熱いおちんぽミルクいっぱい出てりゅよおお！！」



ドピユツドピユルルツ……ピユルルツ……ピユルルツ、ドプウ……

「あへええ……まだ出てる……しゅごいよおマサヤ様のおちんちん様あん……………」

口を半開きにし、だらしく舌を出しながらアスナが白目を剥いてダウンした。もう完全にイッてしまったようだ。

チンポを抜いてやると、

ピユルルツ!!

「あんっ!？」

意識を失っていたアスナが驚きのあまりすぐに覚醒した。自分の股間から射精するかのように精液が噴き出たのだから無理もない。

だがそれでもアスナの膣の中には多くの精液が残っているだろう。

「ほらアスナ、キリトくんに出してもらったことを報告してこい。リズとリーファは体が冷えている彼を暖めてやれ」

「かりこまりました、マサヤ様」

「はい♪」

「お兄ちゃんを暖めてあげればいいんですね？」

各々が返事をし、体育座りをして虚脱しきっているキリトの前に立った。

まずはアスナだ。

彼女は体育座りをしているキリトの目の前に立ち、ガニ股になって自らおまんこを開いてみせた。

「ほらあ、キリトくん見てえ……マサヤ様にいくつぱい中出ししてもらったよお♪」

ゴプツ。

ドプっ、とぷう……。

精液が膣口から溢れ、床に垂れていく。

白濁とした精液がアスナのおまんこから糸を引き、床と繋がっている光景が猥褻極まりなかった。

「そん、な……アスナあ……」

キリトは涙を流しながらも、未だにアスナのパンツを大切に持っていた。

さてと、トドメいきますか。

「アスナ、リズ、リーファ、暖めてやるんだぞ？　どういうことか分かっているな？」

俺の問いに、三人はニタアと妖艶な笑みを浮かべた。

良い顔をするようになったな。

アスナを真ん中に、両サイドにリズとリーファがガニ股で立った。

三人ともおまんこをキリトに向かって開いている。

「やれ」

「「はあいつ♪」」

プシャアアアアアアアアアアア!!

アスナたちのおまんこが一齐に放尿を開始。

キリトの頭から顔面に向かって容赦なくジヨボジヨボとブツかけている。

「う、うあああ!?!」

キリトが悲鳴をあげた。

おいおい、そこは嬉しいがるところだろうに。

美少女たちの聖水を浴びてるんだぞ？

「んふっ、どうキリトくん、暖まったでしょ」

「ううう……アスナあ……」

キリトが手を伸ばすも、アスナはそれを無視して俺のほうにやって来た。

「マサヤさまあ、もう1回お願いできますかあ？　アソコが挿れたがってるんですう」

「あ、ずるいアスナ。次はあたしがエッチしてもらうんだからねっ」

「そうですよアスナさんっ。アスナさんはお兄ちゃんとしてればいいじゃないですか。誰も使ってないんですし」

「ええ、イヤだよ……だって全然入ってる気しないんだもん」

三人がギャアギャアと騒ぎ始めた。

やれやれ、雌豚どもが。

「分かった分かった、三人とも相手にしてやるから。まずは順番待ちしてたりズからな」

そうして俺は、アスナたちとの乱交を楽しんだ。

尻を三つ並べてのバックからの眺めは絶景だったよ。どのマンコもグチュグチュに濡れていて、アナルもパクパクしておねだりしてやがった。

三人が俺のチンポを舌で奪い合いながらのフェラなど、気持ち良さのあまりさすがの俺も暴発しそうになった。

この三人、もう元の生活には戻れないだろうねえ。

いやあエロく騒た甲斐があつたよ。

え？

キリト？

一人じやさすがに可愛そうだから、男大好きな客に無料で進呈しておいた。たまにいるんだよ、そういう特殊なお客さん。

一応うちのホテルはあらゆるニーズに応えられるようになってるから対応できる男はいるけど、今回はキリトに任せておいた。

ギヤラはさつきあげたアスナのパンツで間に合うな。うむ。

上の階が通称「男たちの部屋」なんだけど、

『あんぎやああああ!!』

なんてキリトの悲鳴が天井から聞こえてくるんだよね。

初貫通されたのかな。いやあめでたいめでたい。

じゃあ俺も貫通させますかな。

もう何度も貫通させたけど。くくくつ。

「アスナ、挿れるぞ」

「お願いしましゅう……」

俺とアスナたちの膣肉の宴は、翌日の朝まで続いたのだった。

## エピソード1

「キリトさん、入りますね」

部屋のドアをノックしたが返事がないので、仕方なくシリカとシノンは応答を聞くことなく部屋に入ることにした。

部屋はカーテンで閉じられ電気も点いていないから暗かった。心なしか思い空気が立ちこめている。

「キリト、具合はどう？」

「……………」

シノンの問いかけにキリトは無言だった。

シリカはそんなキリトの様子を見て胸を締め付けられる思いだった。

ここ数週間の間におかしなことがたくさん起こった。

アスナは海外の親戚の元へ行ったまま帰らずに転校してしまった。今はどこにいるのかも分からない。

さらにキリトとアスナは別れたという。

その情報を教えてくれたリーファも様子がおかしく、兄のキリトのことをまるで心配している様子が見られなかった。

リズベットは学校を退学しアスナ同様どこにいるのかも不明。彼女のスマホに連絡してみても繋がらない。

クラインとも連絡が取れなくなっている。

そしてキリトは……………。

「キリトさん、どうしちゃったんですか……………」

シリカはベッドで横になっているキリトに話しかけるが、彼は色のない瞳で天井を見やったままでも何も答えてくれない。

「キリトだけじゃないわ。みんながおかしくなってるのよ」

シノンが重々しい声で言った。

幸い、シノンはこれまで通りで何の変化もなかった。けれど、冷静なシノンでも現状は理解しがたいものらしい。

「眉根を寄せて頭を悩ませている。

「まったく、誰とも連絡が取れないなんて……。せめてALOにログインしてくれればいいんだけど」

「最近誰も入ってこないですよね……」

「キリトもこんな状態だしね……」

キリトが引きこもり状態に陥ってしまったのはここ二週間のことだ。

誰もALOにログインしなくなり連絡も取れなくなったことを異常に思ったシノンが調べ回ってくれなければ、シリカはキリトのこの酷い有様も知ることはできなかつただろう。

「何があつたんですか、キリトさん……」

「……………」

無言のキリト。

シリカも彼からの返事に期待したわけではない。ただ、何かを言わないと落ち着けないのだ。

完全にふさぎ込んでしまったキリトは、誰に対しても口を開いてくれなくなっている。もうこれで三度目の訪問になるが、今のところキリトが声を発したことは一回もない。

シリカは小さくため息をついた。

「せめてアスナさんがいてくれたら……」

何気なくつぶやいた一言だった。

が、

「あ……………」

「キリトさん!？」

「キリトッー!」

シリカとシノンがキリトの顔をのぞき込んだ。シリカは息を呑む。

「キリ、ト……………」

キリトの表情がみるみるうちに険しくなっていく。

目から流れた涙は幾筋にも分岐し頬を伝う。



シリカはイヤイヤと首を横に振る。自分の初めての相手がキリトだというのは白状すると嬉しい。

けれど、今のキリトはシリカの知っているキリトではない。もっと別の人間。

いや、人間ですらないように見える。

「あしゆなあしゆなあしゆなああああ!!」

「いやああああ!!」

シリカの悲鳴が木霊する。

今にもキリトのペニスが挿入されようとしたそのとき……

ゴスツ!!

「んぐああ!?!」

奇怪な悲鳴をあげてキリトが倒れた。

シノンがキリトの脳天に踵落としを決めたのだ。

「シリカ! 大丈夫?!」

「は、はい」

「よかった……待ってて。すぐに警察に通報するから。シリカはその変態を見張ってて。気絶してるけど油断しないでね」

「わわわ分かりました……っ」

シノンが警察に電話をかけている間、シリカは言われたとおりにキリトを見張ることにするが……

「キャツ!?!」

キリトはちんぐり返しの状態で気を失っていた。キリトの死ぬほど情けない姿にシリカは思わず視線を逸らした。

だが見張れと言われた以上仕方ない。シリカは我慢して大事なところが丸出しのキリトを汚物を見るような目で見張る。

その間、シリカはある事実気づいた。

気づいてしまった。

キリトに犯されるかと思ったが、そんな心配は杞憂だったのだ。

なぜなら彼のペニスはフニャフニャで勃起していなかったからだ。



いったいどうやって犯そうとしたのだろう。  
不思議に思うシリカだった。



(本当に……?)

超高層の高級ホテルを見上げ、レコンは自分が場違いな存在であることを思い知った。

玄関口からはいかにも富裕層といわんばかりの人々が出入りしているのが見て取れる。

ここは京藤ホテル。超が付いてもまだ足りないほどの高級ホテルである。国内の政財界はもちろん、海外の要人もここを訪れるという。

(でもリーファちゃんはここに来てってメールしてきたしなあ……)

リーファからメールが来たのは今朝のことだ。

『突然でごめんね。大事な話があるから来てくれない？ 行けば分かるようにしておくから』

という簡素なメッセージと共に、京藤ホテルの住所が記されていたのだ。

大事な話……。

その言葉だけでレコンは浮き足立った。しかも今日は土曜日だ。もし大事な話とやらがレコンの想像通りの物なら、次の日を気にせず朝まで……なんてことも。素晴らしい週末になる。

(よしっ)

明るい未来を想像し、レコンは思い切って玄関口からホテルの中へ足を踏み入れた。すると、

「レコン様ですね？」

「わわっ」

突然声をかけられレコンは上擦った声をあげてしまった。

ホテルの従業員とおぼしき女性が声をかけてきたのだ。年の頃は二十代前半ぐらいだろうか。黒髪のショートカットに大きな瞳、そして胸元も大きい。

(将来のリーファちゃんはこんな感じかなあ)

などと鼻の下を延ばすレコンだったが、すぐに表情を引き締める。

「あ、あの、どうして僕の名前を……」

「リーファ様よりお話は伺っております。レコン様がいらっしゃったから案内するよう仰せつかっておりますので」

「そ、そうなんですか」

内心でホッと胸をなで下ろすレコン。こんな高級ホテルではフロントで物を訊ねるのも躊躇われる。

「どうぞこちらへ」

女性従業員の後についていく。

案内されたのはホテルのエントランスに併設された喫茶スペースだった。革張りのソファ席に促され腰を下ろす。

「少々お待ちくださいませ」

従業員はそう言っただけで一旦離れるが、すぐにコーヒーを盆に載せて戻ってきた。

「どうぞお召し上がりください。リーファ様からです」

湯気を立ち上らせたホットコーヒーの入ったカップがテーブルの上に置かれる。

「ど、どうも」

「もうすぐリーファ様がいらっしゃるので、もう少々お待ちください」  
そう告げると、今度こそ従業員は下がっていく。

レコンにはもう何がなんだか分からなかった。なんだったってリーファはこんな高級なホテルで自分に告白などしようとするのだろうか、と。

(ていうか、告白かどうかも分からないけど……)

落ち着かない気持ちを静めるように、レコンは出されたコーヒーをゴクゴクと喉に流し込む。

レコンの意識はそこで途絶えた。



「あっあっああんうううツツ！」

(んう?)

気のせいだろうか。レコンはリーファの声を聞いた気がした。

でもそんなはずはない。リーファがあんなAV女優が立てるような派手な喘ぎ声をあげるなんてあり得ない。

(きつと夢だ)

「んあああああんっ、あんっあんっあふううツ」

(……夢じゃない!?)

カツと目を見開くレコン。途端、彼は目の前の光景に目が釘付けになる。

リーファが脚を大きく広げ、極太のバイブでオナニーをしていた。

「り、リーファ……ちゃん？」

ベッドの上のリーファのあられない姿にレコンは釘付けになった。

彼女は裸だった。

今まで服を着た状態でしか挿めなかった豊満なおっぱいを露わにし、一生見ることなど叶わないと思いきんでいた局部さえもさらしている。

リーファのおまんこの陰毛が思いの外濃いことに、レコンは興奮を覚えずにはいられない。

(つて、僕は何を考えているんだっ)

興奮を覚えた自分を恥じる。それから動こうとするレコンだったが、そこで身動きが取れないことに気づいた。椅子に座らされ、手足が椅子に縛られている。

しかもなぜか全裸で。

「ひああああ……おまんこ気持ちいいよおお……」

うつとりとした表情でリーファは言った。

リーファは極太の黒いバイブを使い自らのおまんこをジユブジユブと音を立てて刺激している。

物凄く太いバイブだというのに、彼女の膣口はそのサイズに合わせて広がり、しっかりとくわえ込んでいた。

愛液はバイブの出し入れによって泡立ち溢れ、床を湿らせている。

部屋の内装からホテルの一室であることは分かるけれど、どうしても自分がこんなところにいるのか判然としない。

混乱の極みに達しながらも、レコンは叫ぶ。

「リーファちゃんっ、どうしちゃったんだよ!」

「ああんっ、レコン目え覚ましたんだねえ」

「何してるんだよっ、そんなことやめなよ!」

「やめなよ? ビンビンに勃起しといてなーに言ってるんだか」

別の女の声が背後から聞こえてきた。聞いたことのない声だった。

「ふうん、君がレコンかあ。リーファのことが好きでしつこくつきまどってるんだってねえ」

「……………」

知らない女の手が背後から延びてくる。それはレコンのペニスに触れた。

「あっ!」

「ふふふっ、『あっ!』だって。女の子みたいな声出すのね。情けない」  
それから知らない女の手はレコンのいちもつを握り、しごき始める。

目の前にリーファというオカズがあるものだから、あっという間に気持ちよくなってしまいうレコン。

そんな自分をレコンは恥ずかしく思うも、気持ちよさにはあらがえない。

「ぐっ、やめてくらしやい……………」

「そうねえ、たしかにまだリーファの本番までいってないのに射精し

ちやつたらつまらないわよねえ」

そこで知らない女の手は止まった。女がレコンの前に回り込む。

「はあはあはあ……あなたは？」

自分を見下ろす女に、レコンは心当たりがなかった。

年の頃は高校生ぐらいだろうか。栗色のシヨートの髪型、鼻の周りのそばかすが特徴的だった。

彼女は黒いブラとパンツだけの姿で、レコンは思わず目を逸らす。

「あたし？ あたしはリズベット。リーファの飼い主よ」

「飼い主って……リーファちゃん人間ですよ」

「アレが人間？ 面白いこと言うねえ君。あんなアンアン喘いでるだけの生き物、ただの雌豚だと思わない？ ま、あたしが調教したんだけどね」

「ちよ、調教って……」

「あと、君にここに来るようメールを送ったのもあたし」

「え……ッ」

レコンは言葉を失った。

告白かもしれないしそうでないかもしれない。どちらにせよリーファに会えるからと楽しみにして来た。

それがまさか、今日初めて会った人間が送ってきたメールだったなんて……。

「どうして、そんなことを……」

「リーファから頼まれたのよ。『しつこくつきまとってくる男子がいるからどうにかしてください』ってね」

「その男子が、僕？」

「そうよ、自覚なかったの？ うざいうざいっていつも愚痴言ってたよリーファ」

「……………」

たしかに少ししつこいかな、とは思ったこともあったけど、そこまです嫌われているなんて思わなかった。

打ちひしがれるレコンに、リズベットが追い打ちをかける。

「あらあ、落ち込んじゃってるわねえ。その割におちんちんはビン

ビンのままなのが笑えるけど」

「うわっ」

リズベットにカリをつままれ、レコンは情けない声をあげる。

「言っておくけど落ち込むのはこれからよ。リーファの雌豚っぷりをもっと見せてあげるわ。いいわ、入ってきて」

リズベットがそう言うのと、部屋に男が三人入ってきた。三人とも屈強な体つきで筋肉が膨れ上がっていた。

そして全裸で、ペニスは全員が勃起していた。その大きさも尋常ではなかった。

「な、何を……」

「決まってるでしょ。あの男たちがリーファを気持ちよくしてあげるのよ」

「そんなっ！ 逃げてリーファちゃんっ!!」

「ぷっ」

リズベットが吹き出す。その反応はレコンには理解できないものだった。

「何笑ってるんですか!」

「怒らないでよく。レコン君があんまりにも場違いなこと言ったからおかしくてさあ」

「場違い?」

「そうよ。見なよアレ」

リズの視線の先を追う。

そこには、自ら男たちにフェラをし始めるリーファの姿があった。

「ちゅっ……んむっ、ああむっ……ちゅぷちゅび」

リーファが口いっぱい黒くて太いチンポを頬張っている。恍惚とした表情で。

それは誰が見ても幸せを感じている顔としか思えなかった。もちろん、レコンにも。

「れろっちゅび……んうううぷはっ。ああむっ」

ある程度舐めたら別のチンポに移る。残りの空いた二本のペニスは手でシコシコとしげく。

「んっんっんううんむっ……」

首を前後に振り、太くて長いチンポを喉の奥までくわえこむ。首の動きに連動してリーファの大きな乳房がプルプルと揺れている。

乳首は遠目でも分かるほどに勃起していて、まるで男につままれるのを待っているかのようだ。

「そんな……リーファちゃん……」

「んふふ、泣いてるけど君、勃起してるからね」

「うっ……」

リズベットに指摘され、レコンは股間を隠そうとする。だが腕が縛られているから、ただもがくだけに終わった。

「ほら見て、いよいよ本番みたいよ」

リズベットの言うとおり、リーファがいよいよ性行為を行おうとしている。

(ダメだ……見ちゃダメだ!)

けれど意志とは裏腹にレコンはリーファの痴態から目を離せないでいる。

「んああああああんツツツ!!」

リーファが自ら騎乗位でひとりの男のペニスを挿入した。

それだけでレコンにとってはショックだったがさらに、

「んほっううう!?!」

後ろからリーファのアナルが貫かれる。

極太のチンポだというのに、リーファの肛門は口を大きく開いてそのいちもつを受け入れている。

さらに、

「んっんっん!!」

最後のひとりがリーファの口にペニスをねじ込んだ。

リーファは頭部をガシツとつかまれ、前後に無理矢理動かされている。まるでオナホールのように扱われているリーファ。

「んぶっんっんぼあー あがあ!!」

喘ぎ声と悲鳴が入り交じったリーファの声音が部屋に響きわたる。

ベッドの上で行われる乱交は終わる気配を見せない。

「ああ、あああ……」

「んふふっ、好きな女の子が犯されまくってシヨックよねえ。おちんちんは『自分もやりたいよお』って勃起しちやつてるけど」

「そ、そんなんじゃ……」

「いいわ、あたしが君を慰めてあげる」

「えっ……」

レコンは目を見張った。

椅子に座っているレコンの上に、リズベットがまたがる。それから彼女はパンツを横にずらし、おまんこを露わにした。

うっすらと毛が生えた陰部がレコンの勃起したいちもつの先端に触れる。

「やめてくださいっ、僕はその、あの……」

「んふっ、その様子だと童貞くんだね？ なあに、初めてはリーファで決めてた？」

「うう……」

凶星だった。

レコンはいつも妄想をたくましくしていた。

リーファとふたりでベッドに入り、

リーファの服を一枚、また一枚とゆっくり脱がせ、

リーファの体を丹念に愛撫していく。

おっぱいを揉んで乳首をしゃぶり、それからアソコをたっぷりと舐めて挿入する。

それで自分は童貞を卒業するのだ、と。

けれど現実は……。

「フフフッ、ぎーンねん。君の初めては今日会ったばかりのあたしで



したあ♪」

ズブツ。

「あううツツ！」

(これが、女の子の中……)

想像を絶する気持ち良さに、レコンは我を忘れた。

チンポを包む暖かさ。

刺激を送り続けてやまないツブツブの具合。

さらにリズベットの腰の上下運動。

それらが渾然一体となってレコンの理性を浸食していく。チンポどころか腰回り全体が気持ちよさで浮いてしまっているような気分だった。

「あはっ、変な声出さないでよお。笑っちゃうじゃないのー。ほーら、いくよお……」

ずぶ、ずちゅ、ずちゆるるっ！

「ぐっ、あっ、うううツ」

「んふふ、どう？ 女の子のおまんこは気持ちいいでしょう？」

「んうはううんっ！」

「あははっ、喋れないぐらい気持ち良いんだあ。よかったよかった。でもそろそろ限界みたいだね。リーファもそろそろ搾り取るみたいだし、あたしもさっさと済ませちゃおっと♪」

リズベットの腰の動き、さらに膣の締め具合が変化する。

腰は上下運動に加えて前後の振りも加わり、彼女自身もクリトリスを刺激して気持ちよくなろうとしているようだ。

さらに膣の締めまりが急激に強くなった。まだ本気を出していないといわんばかりにキュウキュウと締まってペニスを締め上げていく。

そして、

「で、出ちやいますっ、中で出ちやいますよお!!」

「あ、マジで。レコンくんの精子はいらないや」

ぬぷっ。

リズベツトが腰を浮かせてチンポを引き抜いた。

だがレコンの射精感はもはや絶頂寸前。止められる状況ではなかった。

「うううツツ!!」

レコンは俯き、迫り来る射精に耐えている。

(リーファちゃんの前でイッてるってこんなんで見せられ……)

だがそこで無情にもリズベツトがレコンのペニスをしごき始める。

「うわあ!?!」

「ほら何我慢してんのよ。さっさと出しなさい。リーファの中出しおまんことアナルが目の前にあるんだからそれをオカズにするのよ」

「え……」

顔を上げてみると、ベッドの上ではすでに行為が終わっていた。

リーファは四つん這いになって尻をこちらに向けている。

ぱっくりと割れた尻の間にあるアナルとおまんこは、どちらもくぱあつと穴を大きく穿たれ、だらしなく開ききつている。

そして、

ぐごぶっ

ぶびゅっごびゆるっ

くぼお……

大量の白濁とした液体があふれ出てきた。

おまんこからも、アナルからも。

「う、うそだ……こんなの、こんなのって……」

レコンはうめく。彼の股間の気持ち良さはもう最高潮だ。

リーファがこちらを向く。

彼女の顔は精液にまみれていた。頬についた精子を指ですくい、  
「ぺろっ……んう、おいしっ♪」

満面の笑みでそう言った。

その瞬間、レコンは絶叫する。

「うそだあああああああ!!」

どびゅびゅっ

絶叫と同時に彼は果てた。

リーファがそんな彼に言う。

「うわあ、お兄ちゃんほどじゃないけどレコンのも小さいね。こんな  
のであたとやれると思ってたの?」

「そこまで言ったら可愛そうだよリーファ。レコン君のおちんちん、  
まあまあ気持ちよかったよ」

「리즈さん、お世辞が棒読みです」

「あはっ、バレた?」

そのやりとりがレコンのトラウマとなり、彼のいちもつは金輪際勃  
たなくなつたのだった。

## エピソード2

京藤ホテルのスイートルームのベッドは、客に最高の寝心地を提供することを約束している。

最高の寝心地には二つの意味が込められている。

ひとつは文字通り体に安らぎを与える寝心地。あのフカフカの寝心地を味わったが最後、もう普通の布団には戻れまい。

そしてもうひとつは、ベッドの上で最高の女によるもてなしが受けられる、という意味。

「れろっ……んちゅ、ぴちゅ」

アスナがカ리를丹念に舐めあげ、

「んふっ……ああむっ、んぱっ……」

京子さんが竿を横からくわえて味わう。

結城親子によるダブルフェラは、仁王立ちする俺の下半身をとろけさせるのに十分な威力だった。並の男じゃ耐えきれずすぐにベッドに横になるレベル。

京子さんは言わずもがなテクニシャンだし、アスナのフェラテクも多くのチンポをしゃぶってきただけあってかなり上達している。舌使いの加減をよく心得てるよ。

二人とも全裸で、アスナには赤い首輪を、京子さんには黒い首輪をつけている。首輪から延びている二本のリードは、もちろん俺の手中にある。

俺はかれこれ二十分はダブルフェラに耐えている。

これがキリトだったら五秒と持つまい。

「どうれふか、まふあやしやまあ……」

アスナがチンポの先端をレロレロと舐めながら訊いてきた。

俺はアスナの頭を撫でてやる。

「ああ、最高だ」

甘いとは思ったが、俺は素直に褒めることにした。

京藤ホテルのスイートルームの担当にしても、今のアスナなら務まるだろう。

たとえ相手がむさ苦しいオッサン相手だったとしても、チンポからアナルまでふやけさせるほどに舐めますことだろうな。くくくつ。

「マサヤ様、あまりアスナを甘やかさないでください」

京子さんが俺の睾丸をさすりながら苦言をこぼした。

「まあそう言うな。京子さんの望みどおりアスナは進学校に編入したんだしき」

「それはそうですけど」

「それより、クラインのところへは行かなくていいのか？」

「行くとは考えてますが、今のところは未定です。クライン様は新店舗の準備で毎日たくさんの女性を吟味しているようですし」

クラインには京藤グループでオープンさせるソープの店長を任せ  
てある。

のし上がりたいたなら色々経験を積ませたほうがいいからな。それに美味しい思いだってできる。

ヤツは毎日のように面接と称してたくさんの女を抱きまくっているのだ。だが決して遊びではない。

下手な女を採用してしまったら京藤グループの名に傷が付く。うちのソープは格安や大衆向けではない。超高級なのだから。

「たくさんの女ってことは、採用の調子は芳しくないのか？」

「そのようです。従順な雌になれる器が来ないとか」

「まだまだだな、クライン」

ルックスが良くてヤツた感じが良ければとりあえず採用しておけばいいんだ。従順にしたけりゃ調教すればいいんだから。

それでも芽が出なかつたら公衆便所として無料開放でもしとけばいい。

「マサヤ様は新店についてはあまりタッチされてないのですか？」

「ああ。クラインに一任してある。採用が進まないようだったら俺も手伝うかもしれんがな」

ちなみにクラインが忙しいせいで京子さんはこうしてまた俺のところに戻ってきている。京子さんの性欲、半端ないんだよなあ。

まあこうして親子丼を実現できそうだからいいけど。

「アスナ、交代しなさい」

「はい」

母親の命令でカ리를味わっていたアスナが玉袋の愛撫へ移行、代わって京子さんがカリから竿をしゃぶり始めた。

「ああむっ」

ジユボジユボブチュルルウツ！

京子さんの激しいディープスロートが俺のチンポを快感へと導く。たっぷりの唾液がチンポ全体を温め、少しザラついた舌が根本からカリまで這い回る。

俺はベツドの上に仁王立ちの状態にいるのだが、腰から下がとろけそうの良い意味で辛い。

そしてアスナはというと、玉袋の愛撫をしていると京子さんのフェラの邪魔に判断したらしい。

俺の背後へと回り込み、

「後ろから失礼しますっ♪」

と言って、アスナが俺の肛門を舐め始めた。

「れろおお……」

アスナの舌がアナルを一度縦断する。さらに、

「んっんっ……んふうん」

舌先でアナルをツンツンとするアスナ。わずかに肛門に触れる舌の感触がたまらない。

「んうううじゆるるぶちゆるううっつ!!」

アスナのアナル舐めが急激に勢いを増した。舌先を肛門に突き入れるドリル舐め、肛門全体を吸い上げるように刺激をくわえてきたりなど、テクニツクの限りを尽くしてくる。

前は京子さんのフェラ。

後ろはアスナのアナル舐め。

二枚の舌が同時に下半身を責め立てる。

完全に堕ちた雌奴隷二匹が首輪をつけて言いなりになる様は、男の

支配欲を十分に満足させられる。

このスイートルームはこの二人による親子丼を売りにしてもいいかもな。

え？

アスナの学業はどうするのかって？

ふっ、進学校に入学しようともうアスナは肉欲の虜だ。放っていても俺の股間の元へ来るさ。

今日だってまさにそうだしな。別に俺は来いとは言っていない。アスナが自分から俺を訪ねてきたのだ。笑えるね。

コイツの進路は京藤ホテルの雌奴隷で決まりだな。使い倒してガバガバになって壊れたらキリトに返品すればいいかな。くくくっ。

京子さんも今やアスナの学業よりも自分の性欲を満たすことしか頭にないみたいだし。

まったく、とんだ雌豚親子だ。

「よし二人とも。重なってベッドに横になれ。親子丼の時間だ」

「かしこまりました」

声をそろえて返事をする雌豚親子。

京子さんが仰向けに寝てアスナがその上で尻を突き上げて四つん這いになった。

二つのおまんこが俺に差し出された。

くばあ……

やれやれだ。

俺はまだおまんこを愛撫してやってなどいないのに、すでにどちらのマンコもだらしなく口を開けて涎を垂らしてるよ。

「マサヤさまあ、わたしのおまんこから味見してくださいあい♪」  
フリフリ、と尻を振るアスナ。

「アスナ、母親を差し置いて何言ってるの。マサヤ様、まずは私の膣から味わってください。たっぷりと搾り取って差し上げますから」  
自らビラビラを引っ張っておまんこを全開にする京子さん。

さて、どつちにチンポをくれてやろうか。

まあどつちにしろ両方に挿れることになるんだが。

俺が母と娘のどちらをヒイヒイ言わせるか悩んでいると、サイドボードに置いてあるスマホが着信を知らせた。誰だよこんなときに。

「はい、もしもし……はあ？ キリトくんが？ 何やってんだアイツは。ヤケクソになりすぎだろ。それで今キリトくんはどうしてる……なるほど、わかった。……いや、問題ない。警察のお偉いさんたちもうちの常連だからな。丁度調教が終わった雌豚がいるから、そいつらを無料であてがってやるよ。その代わり京藤ホテルのことはもみ消してもらおう。それで万事解決だ。……おう、状況が変わったらまた報せろ」

俺は電話を切った。

「キリトくんがどうかしたんですか？」

アスナが訊いてきた。

キリトという名前に反応したのかとも思ったが、付き合っていた頃のような真に迫った感じは微塵もない。声音が平板だ。

「部下から連絡が入った。キリトが友達をレイプしようとして逮捕されたらしい」

「え、キリトくんが!? あんなに小さいのに……」

注目するところがナニのサイズかよアスナ。笑えるぜ。いやたしかにキリトのはミニマムだがな。

「詳しい状況は俺にもまだ分からんが、キリトがヤケを起こして犯行に至ったことは間違いないだろうな。取り調べでヤツがこれまでのことを暴露でもしたらちよつと面倒なことになる。俺の立場もな」

「そんな！ マサヤ様は何もしてないじゃないですか。キリトくんが情けないだけでどうしてマサヤ様が悪くなっちゃうんですか!？」

アスナが本気で憤っていた。

俺が何もしてない、か。くくくつ。

そんなに俺を笑わせないでくれよ、アスナ。

「そう怒るなアスナ。立場が変われば物事の見方は変わるものだ」

なーんて分かったようなこと言ってみただけ、もちろんキリトの思



い通りになんてさせない。

「アスナ、この後すぐに客の相手だ」

「お客様、ですか？」

「ああ。相手は警察関係者だ。丁重に出迎えてやれ」

俺がそう言うのと、アスナはニタアつと不敵な笑みを浮かべた。すべてを察したらしい。

「かしこまりました、マサヤ様♪」

まったく、嫌らしい面構えを見せるようになったもんだな。

「だが時間はまだある。警察の犬どもよりもまず俺を満足させろ」

じゅぶりっ！

「んはあああああゝんツツツ!!」

アスナが甘い叫び声を響かせた。

まずはアスナのおまんこからいただくことにした。挿入した途端に汗気たつぷりの感触が俺のいちもつを包み込む。

「マサヤ様、なぜアスナからなのですか？」

京子さんがムツとした様子で言った。

「アスナはこれから警察のお偉いさんのご機嫌取りに行かせなきゃいけないからな。時間がないんだ」

「そ、それはそうですね……」

モジモジとしながら京子さんはオナニーを始めた。固くなったクリトリスをコリコリとさせてよがっている。

「んっ……んふっあふう……」

欲求不満そうな顔でこっちを見てくるが、気にせずアスナをハメ倒す。

ズツズツズツ！

パンパンパンツ!!

「あっあっあっあうう！ 子宮がマサヤ様のおちんちんとチュウしてりゅよおおお!!」

アスナが髪を振り乱して感じている。

尻を突き出しアナルをヒクつかせ、おまんこはキュウキュウと締め  
てチンポをくわえて離さない。

どこに出しても恥ずかしくない雌豚に仕上がったな、アスナ。

パアンツツ!!

あまり褒めすぎて調子に乗られるのも困るので尻を思い切り叩い  
ておいた。だが、

「ああんっ！ お尻叩き気持ちいいですう!!」

こんな具合にスパンキングでも感じちやうからお仕置きにならな  
い。くくくっ。

「マサヤ様っマサヤ様……ッ、お願いですから私にもおチンポを！  
おチンポをくださいいい!!」

京子さんのおねだりが最高潮に達したようだ。今や彼女のオナ  
ニーは指二本をズボズボ出し入れしている始末である。

まあ頃合いかな。これぐらいじらさないとチンポのありがたみが  
分からないからね。

「分かった、じゃあ次は京子さんのマンコを使ってあげるよ」

ぬぽっ。

アスナの膺からチンポを引き抜いた。先っぽから根本までアスナ  
の愛液にまみれてテカテカと光っている。

「あん……おちんぽお……」

アスナが切なそうに鳴いた。

「おまえはしばらくお預けだ」

「そんなあ」

「アスナ、散々マサヤ様のおちんちんを味わっというてアアアアンツ  
!？」

ゴチャゴチャと説教垂れた始めた京子さんがうるさかったのでチ  
ンポで下の口を塞いだ。すると、

「んっんっあふっあんっ！」

説教ではなく喘ぎ声でうるさくなった。

雌豚はこうでなくてはな。くくくっ。

京子さんのおまんこもアスナに負けず劣らずぐっしより濡れていて、まるでチンポだけ温泉に浸かっているかのような心地だ。

並の男のチンポ（クラインとか）なら京子さんが主導権を握って膣をコントロールして締めたりするんだらうけど、

「ああんっあっああああああんううツツ!!」

今挿入しているのは俺の極太チンポだ。京子さんは奥の感じる部分を突かれまくって主導権を握るところではない。

「マサヤ様っ、わたしにもおちんちんをくださいよお……」

アスナが猫なで声で言いながら尻をフリフリとさせた。おまんこは今さっきまで俺のチンポが挿入されていたもんだから大きく穴が穿たれている。

そこから垂れる愛液が糸を引いて京子さんの腹のあたりに垂れていた。

「まつ……マサヤ様あん！ アスナのおねだりなんて無視して私に集中してええ……アンアンツ！」

「母さんもういいでしょ。そろそろ交代してよっ」

「ダメよっ。アスナはこれから警察のぐ機嫌取りに行くんでしようが」

「そっちもこなしてみせるわ！」

ぶふっ！

チンポをめぐって親子喧嘩かよ。

キリトも笑わせてくれたけど、結城親子も俺の笑いのツボを突いてくるねえ。くくくっ。

「分かった分かった。じゃあアスナと京子さんで勝負といこうじゃないか。もしアスナが勝ったら俺のチンポはアスナに挿れてやる。もちろん精子もたっぷり子宮に注いでやるぞ。京子さんが勝った場合

はアスナがお預けで京子さんに生挿れ中出し。これでどうだ」  
「それは構いませんが、私とアスナでどのような勝負をすれば……」  
「くくくつ。クラインのプレイを参考にしよう」



「んっんっぴちゅっ……アツ……で、出……んツ」

「んくつ……い。あむっ……んはっ！ やあ……もう、わたし……」

一見すると俺は今、アスナと京子さんからただダブルフェラをしてもらっているようにしか映らないだろう。

場所もスイートルームのベッドの上のままだし、時間軸が戻ったかのように思われても仕方がない。

だが、状況はさつきとはまるで違う。

アスナと京子さんの尻に注目しようか。

ふたりともモジモジと落ち着きがなく、時折ビクツ！ と尻を持ち上げてフェラを中断させている。

それも無理のない話で、ふたりには浣腸を受けてもらったのだ。

しかも、以前クラインがやっていたトロピカル浣腸である。トリピカルジュースを浣腸器に入れ、それをアナルに差してチュウウウつと注入。

あとはアスナと京子さん、どっちが先に脱糞しちゃうかをフェラさせながら観戦するってわけだ。

先に脱糞したほうが負け。

後に脱糞したほうが勝ち。

どっちにしる脱糞するじゃないかって？

くくくつ、それがいいんじゃないか。

「おいアスナ、もつとしつかりしやぶれよ」

「で、でもお……あっー！」

ブピッ……

おつ、なにやら素晴らしい音が聞こえたぞ。アスナのケツの辺りから。

「んふっ、下品な音ねアスナ」

「わっ、わたしじゃないわよっ。母さんでしょ！」

「フザけないでっ。誰がそんな品のない音を立てて……んくっ！」

プー……

おつと今度は京子さんの尻の穴が緩んじまったか？

「母さんこそ今……」

「ちっ違いわ！ 私じゃなくてアスナのお尻から聞こえたわよっ！」

「嘘言わないでよ……んあっ!!」

「あっ……いやあ……!!」

ぶぶぶぶっ。

ぶりっ……ぶりり……。

あらあらあ、二人のアナルから聞こえたな。

いやあ笑わせてくれるねえ、この雌豚親子は。

「どれ、ちよつとアナルのチェックをしてやろう」

「あ、マサヤ様ダメです……見ないでっ」

「そうですよっ、私とアスナでマサヤ様を気持ちよくして差し上げますからあ……っ」

エロ豚どもが何か喚いているがもちろん無視。俺は二人を四つん這いにさせてアナルを観察する。

「おいおい、二人ともトロピカルジュースが少し垂れてるじゃないか。しっかり肛門を締めないとダメだろ」

「うう……」

「そんなこと言われましてもお……」

ぶりりっ。

ぶりゅっ！

「あうっ!？」

「んほあ!？」

俺の目の前で二人の肛門が悲鳴をあげた。アスナの肛門からたらりと青い液体が一筋流れマンコへと落ちていく。

京子さんはかなり危機的状况なのか、全身をプルプルと震わせて必死にアナルをすぼめている。だがトロピカルジュースの一部が「ぷしゅっ」と吹き出してしまった。

だが勝敗はまだこれでは決まらない。

先に派手にブチまけたほうが負けなのだ。

「二人とも頑張るねえ」

「母さんの緩くなつたお尻になんて負けないもんっ」

「言ってくれるわね……私もあなたみたいなお娘なんかには負けるつもりはないわ」

そんなやり取りを交わしながらアナルをキュツとすぼめる結城親子。

俺はふたりの尻肉を撫でながら「バカな親子だなあw」と内心で爆笑していた。

けれど五分も経過するとさすがにちよつと飽きてきた。

アスナも京子さんもまだ頑張ってるよ。そろそろ何か変化が欲しいなあと思ったそのとき、

「マサヤきーん、いるー?。」

リズが部屋に入ってきた。彼女はリードを持っていて、繋がれた先にいたのは四つん這いのリーファだった。

リズは黒いブラとショーツ、リーファは首輪だけであとは素っ裸だった。ここまでの散歩状態で平気な顔して来るとは、二人とも女王様と奴隷として進歩したもんだなあ。リズなんて学校辞めてウチで働いてるぐらいだしな。

「ようリズ、リーファ。なんか用事があつて部屋使つてたらしいけど、もう用は済んだのか？」

「うんっ。サクツと済ませてきた♪ レコン君しょっぱかったなあ」  
どんな用事なのか知らないが、コイツらがついさつきまでエッチを  
していたのは間違いないな。匂いと雰囲気に分かるよ。

「そうか。まあ丁度いいところに来てくれた。お前ら、アスナと京子  
さんにトロピカル浣腸をやってくれ」

俺の言葉を聞いてアスナと京子さんの尻がビクビクツと震えた。  
なんだその反応笑えるんですけど。

「そんなこれ以上はムリですよ……」

「ま、マサヤ様……アスナだけにして私は……」

雌奴隷親子が何か言っているが気にしない。

リズとリーファも気にしていないらしい。

「何それ超面白そう！ わっかりましたー！」

「浣腸をしてあげればいいんですね、了解です」

二人とも楽しげにトロピカルジュースが満タンに入った極太のガ  
ラス製浣腸器を手にし、アスナと京子さんの尻に突き差そうとする。

「やほーアスナ。浣腸の時間だよお」

「り、リズツ、わたしもうお腹の中にジュースが入つてアンツ!？」

ブスリ。

リズが容赦なくアスナの肛門に極太浣腸器の先を差す。それから  
ピストンをゆつくりと押し込んだ。

ぶちゅううううう……。

「あああああうう……お尻から冷たいのが流れこんでりゅよおお  
……」

爽やかな色合いの青いトロピカルジュースが、浣腸器の中から減つ  
ていき、アスナの尻へ注入されていく。

「あはっ、全部入っちゃった♪」

「お腹がパンパンだよお……」

くくくつ、アスナの浣腸は完了つと。京子さんとリーファはどんな感じかな？

「京子さん、一気にいきますよ」

「まっ、待ちなさい、まだ心の準備がはううう!!」

ぶちゆるるるるっ！

リーファは浣腸器を突き刺し一気にピストンを押し切った。凄まじい勢いでトロピカルジュースが京子さんの中へと流れ込んでいく。

「んああああくツツ!! ダメダメ漏れちゃううう!!」

京子さんの悲鳴が響き渡るも、俺とリズとリーファはニヤニヤと笑っているだけだった。さらに……

「ねえマサヤ様あ。あともう三回ぐらいは浣腸できそうだとあたしは思うんですけどお♪」

リズがまさかの爆弾発言。

案の定、アスナと京子さんは絶叫する。

「ムリムリムリいい!! もう限界のウンチいっぱい出ちやいそうなののおくツツツ!!」

アスナやばそうだなあ。

限界のウンチって何だよな。

日本語も危うくなつちゃうぐらいヤバイってことか。くくくつ。

「私だって無理よっ！ まっ、マサヤ様!! やりませんよね!!? そんな小娘の言うことなんて聞きませんよねえ!!?」

京子さんがこんな焦るなんてよっほど余裕ないんだな。そういえばこの女、奴隷歴は長いけど浣腸経験ってあんまないな。

よし、良い機会だ。

親子ともども浣腸調教してやる。

「良い案だなリズ。じゃああと三回たっぷり注入してやれ」

「はあこっ」



「マサヤ様あん!」

声をそろえて叫ぶ結城親子。爆笑もんだなこりや。

しっかりとカメラは回してあるから、今度キリトに送ってあげよう。元恋人の脱糞シーンはさぞやオカズになるだろう。

あ、そういやアイツ逮捕されたんだっけか。警察のお偉いさんのご機嫌取れば、このまま娑婆に出られなくなるだろうしなー。いやあ残念だ。誰だよキリトをここまで追いつめちゃう酷いやツは。俺か。

キリトを思い出してほくそ笑みつつ、俺はリズとリーファがキヤツキヤ言いながら楽しげに浣腸しているのを眺めていた。

もちろんアスナと京子さんは……

「んほおうううう!? もうダメエー! しょれいじようはあ! しょれいじよう浣腸つちやうとお尻おかしくなつちやうのおおお!!」

アスナさん大絶叫。

「やめなしゃああいいいいんツツ!! うほうツツツ!! いっぱいジューズ入ってくるううう!! ……も……もうお願いやめてえ……お願いしましゅうう……ツツツ!!」

京子さんなんてリーファに懇願しちやう始末だ。

いやあ楽しいね!

そして、用意したすべてのトロピカルジューズを浣腸し終えた。

俺が浣腸した一本を合わせ、計五回ずつアスナと京子さんに浣腸してあげたことになる。

「うう……うっ……あっああん」

「んぐあ……ふあああん………ツ」

アスナも京子さんも妊婦のように膨れた腹を抱えてうめいている。時折、肛門から「ぷぷつ」と放屁の音が発せられるが、ふたりともそんなことを気にする余裕はないようだ。

ただただ必死に耐えている。

俺のチンポを勝ち取るためにな。くくくつ。

「二人とももう限界だろ。さっさと出して楽になったらどうだ?」

「んふううう……」

「ふううあああ……」

ダメだ。二人とも絶対に負けたくないといわんばかりにアナルをすぼめやがった。仕方ない。

「リズ、リーファ。ふたりの尻をフェザータッチだ。優しくくすぐつてやれ」

「分かりましたあ♪」

声をそろえて良い返事をするリズとリーファ。

四つん這い中のアスナと京子さんの上に乗っかり、尻肉を指先でサワサアとフェザータッチしていく。

触れるか触れないかの絶妙な指使いを前に、結城親子は為すすべもない。

プルプルと体全体を震わせ、ついにはビクンビクンと痙攣を始めてしまう雌豚親子。

もう時間の問題だな。

「あ……ああ……も、もうりやめええ……出ちやうよおお……」

ぶぶっ。

肛門から小気味良い音を鳴らし口を半開きにさせ、とろんとした瞳でアスナが言った。

「んうう……私ももう……んあっ！」

ぷりゆりっ。

京子さんもアナルからトロピカルジュースをわずかに垂らしながら狂ったようにシーツを握りしめている。

リズとリーファによる尻肉フェザータッチは続く。

トドメさすかー。

「おら雌豚ども、さっさとブチまけろ」



「しよんなああああああああまだ出るううう!!」

ブリリリリリリリリリッイイイッイ!!

京子さんのアナルがこれでもかかっていうぐらいに大きく開き絶賛放水中。

アスナも負けてはいないぞ。

「んひひひひひひひひッッ!! もうムリイイイッッ! もうウンチなのおおおっつっつ!!!」

ブポツツ!!

ブピーッ!

ブリリイイイ!!

ブプススウウ!!

ぶぱっ!

ぶぼ!

ついにアスナさんがアナルから茶色くてデカイ弾丸を発砲なさりました。それも何発も。すごい勢いだなおい。

雌豚に堕ちたとはいえ、見た目は未だ清楚な美少女だ。

そんな美少女が四つん這いになってマンコとアナル丸出しで脱糞してる姿は芸術の域に達しているね。

男の支配欲を存分に癒してくれるぜ。

「ああああもうりやめイッぢやうよおおお!!」

ぷすすすつぷすツブリリリリイ!! ブリッ!

青い液体と茶色い弾丸を噴射させながらアスナがアへったかと思えば、

ブリッ!

ブポツ!!

「んはああああんツ！ うんちいい！！ 浣腸がこんにやにきもちいいにやんてええええ!!」

京子さんまでもが茶色い蛇をうによと出し始めた。しかも浣腸に目覚めちやってるし。

こいつら浣腸でイクね。やれやれだ。

ブリリイリイリイリイリイイイイイゝツツツ!!

「イクううううううんツツツ!!!」

一際下品で大きな音をアナルから響かせながら、結城親子は果てた。

プシャアアアアア……。

ビクンビクンと体を震わせたふたりは、ドバドバと放尿しながら完全に意識を失っている。

「あーあ、アスナも京子さんも意識飛んじやってますよ」

リズがケラケラと笑いながら結城親子を指さしている。

「どうするんですか？ シーツも凄い状態なんですけど……」

リーファがベッドの惨状に引いている。

まあ、派手にやったからな。

いつそキリトにこのベッドをプレゼントするというのはどうだろう。愛するアスナから生成されたモノがベツトリ付いてるし喜んでくれると思うのだが。

あ、そういやキリトは逮捕されたんだったなー。ベッド送りようがないなー。いやあ残念残念。警察のお偉いさんのご機嫌取ってキリトはしばらく幽閉状態になっちやうだろうし。誰だよキリトをここまで追いつめる外道は。俺か。

「とりあえず部屋の掃除は適当なヤツに任せよう。あとリズとリーファに頼みがあるんだが、その雌豚二匹にシャワーを浴びさせてく

れ。親子丼したいんだがその状態じゃさすがにムリだわ。萎える」

「いいですけど、二人とも気失ってますよ」

「無理矢理引っ張ってプールにでも沈めれば問題ないさ。勝手に溺れてサッパリした体で出てくるだろ」

「そうですね♪」

リーファとリズが結城親子を無理矢理リードを引っ張って連行していく。

四つん這いになってハイハイしていくアスナと京子さんは、歩きながらも「ぶびっ」なんて具合に肛門からトロピカル噴射させていた。そんな尻二つをリズが容赦なくスパンキングしている。

部屋に誰もいなくなってから、俺は爆笑した。



くばあ……。

キングサイズのベッドの上で結城親子が素っ裸でおまんこをおっ広げている。

京子さんが下で仰向けに、アスナは京子さんの上で四つん這いでいる。

さっきの浣腸プレイの気持ち良さがまだ抜け切れていないらしく、

「はふう……」

「んはあうん……」

アスナも京子さんもトロソとした具合である。

体は風呂だかプールに沈められてキレイにされたらしく、すでに汚れはない。リズとリーファには世話かけちまったな。あとでチンポを挿れてやろう。

ちなみに部屋は変えてある。さっきまで使ってたスイートはもう結城親子のトロピカルライブで酷い有様になっちまったからな。くくくつ。

さて。

「さっきのトロピカル浣腸勝負なんだが、同時に脱糞したから引き分

けだ。よって……」

俺はアスナのおまんこ、京子さんのおまんこ。

その間に自分のいちもつを挟んだ。

それからアスナの尻を下に押し込み、俺のチンポはマンコとマンコの間を押しつぶされる。

汁気たっぷりのおまんこ同士が与えてくる快樂が、チンポ全体に行き渡る。これぞ親子丼の醍醐味だ。

「こういう形にさせてもらう」

「んふっ、素股ですね。マサヤ様にしては意外な選択ですね」

「あ、あの……スマタって？」

京子さんは心得ているがアスナは困惑している。

「そうか。アスナは生挿れ中出しばっかで素股は一度もやってないのか」

盲点だったな。客の中には本番よりも素股のほうがいいなんて輩もいるつてのに教えていなかったとは。

まあ俺も親子丼でもなければ思いつきもしなかったが。

「簡単だ。マンコでチンコをこするんだ」

「それだけですか？ 挿れないで気持ち良くなれるんでしょうか……」

「くくくっ、素股も気持ちいいんだぞ。今日は特別に俺が動いてやる。感謝しろよっ！」

そう言うや否や俺は腰を振った。

チンポが高速にアスナマンコと京子マンコの間を滑る。

ずちゅずちゅじゅるるるッッ！

「んあッ!？」

アスナが虚を突かれたかのような声をあげ、

「あはああああん!!」

京子さんは喘ぎ声を盛大に響かせた。

「なにこれしゅごい気持ち良いよおお……! クリちゃんがおちん

ちん様にコリコリされてるううう!!」

アスナはすでに自分も腰を振って快楽をむさぼり始めていた。

くっ、なんて気持ち良さだ。

極上のおまんこに挟まれているとはいえ、この気持ち良さは尋常じゃない。

チンポを動かすたびにアスナと京子さんの勃起したクリトリスがカリから竿にかけて引っかけり、それがまた良い刺激になって俺の体に快感として返ってくる。

「あっあん……ッ! マサヤ様のおちんぽ最高ですう!!」

京子さんが歓喜している。悪いなクライイン、お前のチンポじゃ京子さんをここまで気持ちよくはできないんだ。もちろんクリトのクリトリスがちよつとデカくなったようなチンポよりはずっとマシだな。くくくっ。

そうこうしているうちに俺の射精感が高まってきた。

気持ちよさもさることながら、視覚的な興奮も凄まじいからな。

アスナはアナルを半開きにして浣腸待ちみたいな状態だし、俺のチンポは上下のマンコのビラビラがチンポ全体を包み込んでるみたいになっている。

最高の眺めだな。

見るだけでキリトなら即発射して場を白けさせるね。くくくっ。

「さて、そろそろ俺はイクつもりなんだが……」

このまま射精するのはつまらないな。

素股始めておいてなんだが、外出しとか俺の流儀に反する。貴重な精子なんだ。やはりザーメンタンク（子宮）にくれてやるのが男だ。

この雌豚二匹の存在価値もそこにあるわけだしな。

さて、どっちのマンコに出すか。

浣腸勝負は引き分けだったし、ここは宣言せずに不意打ちといくか。

「あっあっあああああふうんッッ!」

アスナの声が急に裏返った。



それもそのはずで、俺がアスナのおまんこにチンポを挿れたからだ。

「あふんっ、おちんちん様挿れてもらったよおおおっつ!!」

アスナが嬉しそうに尻をフリフリとさせた。

「そんなんっ！ 引き分けだったのに！」

京子さんは悔しそうにしている。

「悪い、京子さん。アスナのおまんこのほうが良い具合に口をパツクリ開けててさ」

つて言っておいてなんだが実は嘘。

……悔しいがアスナのおまんこは極上だ。

京子さんのおまんこも高級品だが、やはり年齢のせいで多少劣化してる部分はある。

それに比べてアスナのおまんこは百本以上のペニスをくわえたとは思えないほどにきれいなピンク色をしている。

アスナのような美少女にこんなマンコ見せられたら、男は挿れたくて挿れたくて仕方なくなるよ。

しかしキリトみたいな粗チンが使っていたかと思うと腹が立つなあ。ていうかよくあんな粗チンで処女膜破れたもんだぜ。おいおいそんな酷いこと言うのは誰だよ。俺か。

アスナは尻だつてきれいで張りがあり、大きすぎず小さすぎない丁度良い肉付きだ。

尻肉撫で回しているのだが、一向に飽きる気配がない。いつまでたつて触り続けたい。また尻を触つてやるとアスナが良い声で鳴くんだよな。

「あふんっあふんっ……いやあん……あつ！」

ほらね。声だけで勃起できるよ。

鳴くだけじゃなくて膣の締め具合も良くなりやがる。

正直言うと、アスナはしばらく俺の手元で俺専属の奴隷にしようと考えている。客の相手をさせるのは余程の要人の場合のみだな。

ちなみに警察のお偉いさんにはリーファとリズに相手ををさせてある。今頃リーファあたりがオツサンのビールっ腹の上でアンアン腰振ってんじゃないかな。

あの二人ならお偉いさんも満足するだろう。どうせお偉いさんつつたつて普段は女房の三世代型落ちしちまったPCみたいなマンコ使つててうんざりしてるだろうしな。若い女なら誰でもいいはずだ。

ズツズツズツ！

パンパンパンツ！！

「そろそろ出してやるぞアスナ。しっかりそのザーメンタンクで受け止めろよ」

「はひい！ 受け止めましゅう……！！ マサヤ様の子種汁たくくさんピュッピュさせてくださいあいっ♪」

きゆうううう……。

ぐっ……アスナのヤツ、膣の締め付けを変化させやがった。ツブツブがまとわりついてもう発射寸前だぜ。

ダメだ、気持ちよすぎる。

「出すぞアスナ！！」

「はいい！ わたしのおまんこでいっぱい射精してください  
いいいいツツツ！！」

どぶっ！

ビュルルルウツツツ！！

「んはあ……出て、りゅ……おまんこの中でいっぱい精子、ぴゅっぴゅしてる……あつたかあい♪」

うっとりした様子でアスナはぐったりと崩れ落ちた。

チンポを引き抜くとアスナの膣口から、

どぶりっ

どぷっ……

精子がたつぷりと排出されていく。

その様子を見て俺は思った。

アスナは雌奴隷として堕ちたが、俺もまたアスナという快樂の奴隷になったのかもしれない、と。

なぜなら、

ずぶりっ！

「ひゃあんっ!?!」

ぐったりしていたアスナがビクツと体を跳ねさせた。

俺がチンポを挿入したからだかな。くくくっ。

「マサヤ様っ？ あっあんっ!? そんな……今出したばかりなのにあふんツ!!」

「アスナ相手だと一回戦程度じゃ満足できねえんだよ。あと五回はやるからな。朝までそのマンコ使い倒してやる。覚悟しろよ」

「そ、そんなあ……おまんこ壊れちゃいましゅよおああああんツツ!!」

「壊すつもりで使ってるからな。くくくっ」

こうして俺は、アスナの虜になってしまった。

だが言うまでもないが、最高の気分だ。くくくっ。